

茨城県教育財団文化財調査報告Ⅶ

竜ヶ崎ニュータウン内

埋蔵文化財調査報告書 5

昭和56年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告Ⅶ

竜ヶ崎ニュータウン内

埋蔵文化財調査報告書 5

前清水遺跡
大羽谷津遺跡
打越 A 遺跡
打越 C 遺跡
仲根台塚群
廻り地 B 遺跡

序

竜ヶ崎市の北部地域における竜ヶ崎ニュータウンの建設は、宅地開発公園により進められておりますが、その地域内にいくつかの埋蔵文化財包蔵地の存在することが確認されております。

地域開発と文化財保護の調和を図ることは、行政の使命の一つであります。そのため本県においては、昭和52年度に財団法人茨城県教育財団本部に調査課を設置し、宅地開発公園から埋蔵文化財発掘調査事業の委託をうけ発掘調査を行ってまいりましたが、昭和54年度は前清水遺跡ほか7遺跡の調査を実施し、多くの貴重な成果を上げることができました。

昭和55年度には、これらを整理するとともに報告書の執筆・編集に当りました。この報告書が上梓されるまで種々御協力いただいた宅地開発公園、竜ヶ崎市教育委員会、地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課等の各位に対し、心から感謝を申し上げます。

おわりに、本書が学術研究の資料としてはもとより、教育資料としても広く活用されますことを希望してやみません。

昭和56年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内 藤 男

例 言

1. 本書は、宅地開発公団と茨城県教育財団との委託契約に基づいて、主に昭和54年度に実施した亀ヶ崎市所在の前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越A遺跡・打越C遺跡・中根台塚群・廻り地B遺跡の発掘調査報告書である。昭和54年度にはこの6遺跡のほか塚下遺跡・ウツブタ遺跡の調査も行ったが、遺構が明らかでなく遺跡と判断することが出来ないため割愛した。
2. 宅地開発公団の開発地域内における前清水遺跡ほかの調査にかかわる当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	竹内 嘉 男	(茨城県知事)
副理事長	大 金 新 一	(茨城県教育長 昭和52.4~54.6)
	山 崎 晴 晴	(茨城県教育長 昭和54.7~)
常務理事	川野辺 四 郎	(昭和52.4~)
事務局 長	大 内 秀 夫	(昭和52.4~55.3)
	小 林 義 久	(昭和55.4~)
調 査 課 長	川 俣 吉 之 助	(昭和52.4~55.3)
	大 塚 博	(昭和55.4~)
企画管理班 長	坪 貴 雄	(昭和54.4~)
企画管理班	川 崎 暁 暁	(昭和52.4~54.3)
	鈴 木 三 郎	(昭和52.4~)
	栗 田 孝 志	(昭和53.4~)
調 査 第 2 班	寺 内 寛	(昭和53・54年度調査・調査 前清水・大羽谷津・塚下遺跡調査)
	佐 野 正	(昭和54年度調査 大羽谷津・打越C・中根台塚群)
	鈴 木 邦 男	(昭和54年度調査 前清水・塚下遺跡)
	渡 辺 俊 夫	(昭和53年度調査 大羽谷津・中根台塚群)
	人 見 暁 朗	(昭和54年度調査 打越A・ウツブタ・廻り地B遺跡、中根台塚群) (昭和53年度整理・執筆)
	瓦 吹 壱	(昭和54年度調査 大羽谷津・打越C遺跡、中根台塚群)

3. 本書での遺構は次のとおり、記号をもって表示することにした。

S I 住居址 S K 土塙 S D—溝状遺構 S B—獨立柱建築址 S X—竪穴状遺構

4. 土層解説および土器の色調については『標準土色帳』（農林省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色標監修）を用いた。
5. 遺構の七層断面図において、木根址を||||・掘乱址を△ △で表示した。また、焼土の遺存範囲は平面図において、・・・で表示した。

目 次

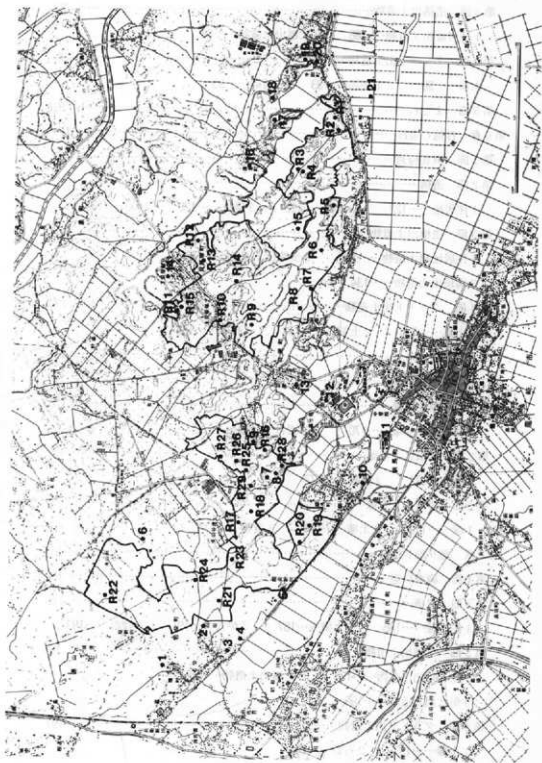
序

例 目

遺跡分布図(1)・(2)

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 前清水遺跡	3
第1節 調査経過	3
第2節 遺構・遺構出土遺物	5
1 住居址	5
2 土塋	6
3 溝址	11
4 掘立柱建築址	12
5 塚	13
6 竪穴状遺構	14
7 ビット群	15
第3節 グリッド出土遺物	16
1 縄文式土器	16
2 土師質土器	17
3 砥石	17
4 石鏃	18
5 占銭	18
第4節 まとめ	18
第4章 大羽谷津遺跡	41
第1節 調査経過	41
第2節 遺構	43
1 住居址	43
2 土塋	45
3 溝址	49
第3節 遺物	50
1 住居址出土遺物	50
2 土塋出土遺物	52
3 溝址出土遺物	53
4 石器	53
5 砥石	54
6 土製品	54
第4節 まとめ	55
第5章 打越入遺跡	77
第1節 調査経過	77
第2節 遺構	79
1 住居址	79
2 土塋	80
3 炉穴	85

第3節	遺構出土遺物	86
1	住居址出土遺物	86
2	土塙出土遺物	88
第4節	グリッド出土遺物	90
1	土器	90
2	土製品	93
3	石器	93
第5節	まとめ	94
第6章	打越C遺跡	121
第1節	調査経過	122
第2節	遺構	122
1	住居址	122
2	土塙	122
3	溝址	129
4	塚	130
第3節	遺構出土遺物	130
1	住居址出土遺物	130
2	土塙出土遺物	131
3	溝址出土遺物	134
第4節	グリッド出土遺物	134
1	土器	134
2	土製品	138
3	石器	138
第5節	まとめ	138
第7章	仲根台塚群	170
第1節	調査経過	170
1	仲根台1号塚	170
2	仲根台2号塚	170
第2節	仲根台1号塚	172
1	塚	172
2	遺物	172
第3節	仲根台2号塚	173
1	塚	173
2	土塙	174
3	遺物	174
第8章	廻り地B遺跡	183
第1節	調査経過	183
第2節	遺構	185
1	住居址	185
2	土塙	187
3	炉穴	191
4	礎群	193
第3節	遺構出土遺物	194
1	住居址出土遺物	194
2	土塙出土遺物	194
3	炉穴出土遺物	196
第4節	グリッド出土遺物	197
1	土器	197
2	石器	201
第5節	まとめ	202



第1圖 遺跡分布圖(1)

遺跡分布図(2)

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	備考
R1	長寺城跡	長寺町電ヶ井他	城跡	中世以前	
R2	長寺古墳群	長寺町電ヶ井	古墳群	古	
R3	十二層城跡	長原町十三家	城跡	伊予・中世以前	
R4	長寺町古墳跡	八代町尾坪色	古墳跡	縄文・古墳	
R5	外八代遺跡	八代町新橋橋下	集落跡・城跡跡	縄文・中世以前	昭和52・53年度調査
R6-A	近代城跡	八代町城ノ内	城跡跡	縄文・中世以前	昭和54・55年度調査
R6-B	近代城跡	八代町原	城跡跡	縄文・中世以前	
R7	新橋城古墳群	八代町原	古墳群	古	
R8	清三高遺跡	沼津町南二高	集落跡	縄文・古	
R9	クシノゾク	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R10	町田遺跡	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R11	かがみ塚	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R12	宮井城下城跡	長原町尾坪色	城跡跡	中世以前	
R13	宮井城下城跡	長原町尾坪色	集落跡・城跡跡	縄文・中世以前	昭和54年度調査
R14	堰下遺跡	長原町堰下	塚	中世以前	昭和55年度調査
R15	行徳古墳群	別所町行徳	古墳群	古	
R16	行徳古墳群	別所町行徳	古墳群	古	
R17	大相谷津遺跡	若菜町大相谷津	集落跡	古	昭和54年度調査
R18	隠9地A遺跡	朝原町隠9地	集落跡	古	昭和54・55年度調査
R19	平台遺跡	朝原町平台	集落跡	古	
R20	蔵以遺跡	朝原町蔵以	集落跡	古	昭和55年度調査
R21	蔵中遺跡	若菜町蔵中	集落跡	古	
R22	蔵中遺跡	若菜町蔵中	集落跡	古	
R23	津原遺跡	若菜町津原	集落跡	古	
R24	赤松遺跡	新長町赤松	集落跡	古	
R25	打越A遺跡	須崎町打越	集落跡	古	昭和54年度調査
R26	打越C遺跡	須崎町打越	集落跡	古	昭和54年度調査
R27	ウツタ遺跡	須崎町ウツタ	集落跡	古	昭和54年度調査
R28	仲原古墳群	新長町仲原	古墳群	古	
R29	隠9地B遺跡	須崎町隠9地	集落跡	古	昭和54年度調査
1	全遺跡	若菜町全	集落跡	古	昭和54年度調査
2	林遺跡	若菜町林	集落跡	古	
3	若菜城跡	若菜町	城跡跡	中世以前	
4	留原城跡	若菜町留原	城跡跡	古	
5	留原古墳	留原町留原	古墳	古	
6	水山西遺跡	若菜町水山西	集落跡	古	
7	仲原台遺跡	朝原町仲原	集落跡・古墳跡	古	
8	赤井川古墳群	朝原町赤井川	古墳群	古	
9	堂ノ下貝塚	別所町堂ノ下	貝塚	古	
10	朝馬城跡	朝原町山王	城跡跡	中世以前	
11	愛宕山古墳	愛宕山古墳	古墳	古	
12	赤井川古墳群	朝原町赤井川	古墳群	古	
13	赤井川古墳群	朝原町赤井川	古墳群	古	
14	只原城跡	只原町只原	城跡跡	古	
15	内井古墳群	只原町内井	古墳群	古	
16	西中遺跡	合町西中	集落跡	古	
17	島尾古墳群	合町島尾	古墳群	古	
18	新宮山古墳	牛庄町新宮	古墳	古	
19	千田遺跡	牛庄町千田	集落跡	古	
20	登坂口遺跡	牛庄町登坂	集落跡	古	
21	阿原古墳群	長持町阿原	古墳群	古	

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	備考
R1	長寺城跡	長寺町電ヶ井他	城跡	中世以前	
R2	長寺古墳群	長寺町電ヶ井	古墳群	古	
R3	十二層城跡	長原町十三家	城跡	伊予・中世以前	
R4	長寺町古墳跡	八代町尾坪色	古墳跡	縄文・古墳	
R5	外八代遺跡	八代町新橋橋下	集落跡・城跡跡	縄文・中世以前	昭和52・53年度調査
R6-A	近代城跡	八代町城ノ内	城跡跡	縄文・中世以前	昭和54・55年度調査
R6-B	近代城跡	八代町原	城跡跡	縄文・中世以前	
R7	新橋城古墳群	八代町原	古墳群	古	
R8	清三高遺跡	沼津町南二高	集落跡	縄文・古	
R9	クシノゾク	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R10	町田遺跡	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R11	かがみ塚	長原町尾坪色	塚	中世以前	
R12	宮井城下城跡	長原町尾坪色	城跡跡	中世以前	
R13	宮井城下城跡	長原町尾坪色	集落跡・城跡跡	縄文・中世以前	昭和54年度調査
R14	堰下遺跡	長原町堰下	塚	中世以前	昭和55年度調査
R15	行徳古墳群	別所町行徳	古墳群	古	
R16	行徳古墳群	別所町行徳	古墳群	古	
R17	大相谷津遺跡	若菜町大相谷津	集落跡	古	昭和54年度調査
R18	隠9地A遺跡	朝原町隠9地	集落跡	古	昭和54・55年度調査
R19	平台遺跡	朝原町平台	集落跡	古	
R20	蔵以遺跡	朝原町蔵以	集落跡	古	昭和55年度調査
R21	蔵中遺跡	若菜町蔵中	集落跡	古	
R22	蔵中遺跡	若菜町蔵中	集落跡	古	
R23	津原遺跡	若菜町津原	集落跡	古	
R24	赤松遺跡	新長町赤松	集落跡	古	

第1章 調査に致る経過

竜ヶ崎ニュータウン建設計画は、昭和46年1月に「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称し、当初日本住宅公園が計画した。しかし昭和51年4月、宅地開発公団茨城開発局の設立により引き継がれて事業を実施することになった。事業面積は671.5haで、その現況は、北竜台においては山林原野が約70%で、畑および水田等の耕地は約24%を占め、龍ヶ岡において山林原野は約50%で、畑・水田等の耕地は40%以上を占めている。

茨城県教育委員会は、地元龍ヶ崎教育委員会と昭和45年に行った埋蔵文化財の分布調査に基づき、22遺跡について、文化財保護の立場から必要な措置を講ずる協議を重ねた。その後、昭和51年7月に、再度分布調査を実施し、新たに7遺跡が追加された。その結果、北竜台15遺跡、龍ヶ岡14遺跡について関係機関で再協議を行い、29遺跡のうち26遺跡については現状保存が困難なので、記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、茨城県教育委員会の指導により、県内各地の開発事業の進展に伴う埋蔵文化財発掘調査の需要増加に対応するため、昭和52年4月、本部に調査課を新設し、「北竜台及び龍ヶ岡土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を宅地開発公団と締結した。

昭和54年度の発掘調査業務は、北竜台では前年度より継続の調査が行われていた赤松遺跡、大羽谷津遺跡、仲根台塚群、打越A遺跡、打越C遺跡、廻り地A遺跡、廻り地B遺跡、ウツブタ遺跡（以上北竜台）、前清水遺跡、塚下遺跡、屋代A遺跡（以上龍ヶ岡）の11遺跡の発掘調査を行った。このうち赤松遺跡は6月に終了し、廻り地A遺跡、屋代A遺跡については次年度継続して行うことになった。なお、調査は調査第2班6名が担当したが、赤松遺跡終了後1名が整理に当たったので、現地における発掘調査は5名で行った。

発掘調査を実施した遺跡

遺跡名	調査年度	遺跡名	調査年度
松葉遺跡	昭和52年度	打越C遺跡	昭和54年度
外八代遺跡	昭和52・53年度	ウツブタ遺跡	昭和54年度
沖餅遺跡	昭和53年度	中根台塚群	昭和54年度
赤松遺跡	昭和53・54年度	廻り地B遺跡	昭和54年度
大羽谷津遺跡	昭和53・54年度	廻り地A遺跡	昭和54・55年度
塚下遺跡	昭和54年度	屋代A遺跡	昭和54・55年度
前清水遺跡	昭和54年度	成沢遺跡	昭和55年度
打越A遺跡	昭和54年度	白蔵寺遺跡	昭和55年度

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

竜ヶ崎ニュータウン建設は竜ヶ崎市北部の台地に計画されているが、この地域は稲敷台地の南端部に位置している。稲敷台地は筑波台地より東にのび東が霞ヶ浦に面し、南は利根川低地となっている。台地は標高20～30mではほぼ平地であるが、東に高く西に低い形状を示し、小野川、花室川、乙戸川、清明川により開析されている。

遺跡の所在する竜ヶ崎市の北部台地は、女化が原の南に当る台地の縁辺部で、谷津が入り込んで樹枝状となり複雑な地形となっている。この台地は、海の幸、山の幸に恵まれて、先人の生活に適していたため、多くの遺跡が所在している。

竜ヶ崎市街を形成している利根川低地は、千葉県木下付近まで約10kmの幅を有し、穀倉地帯となっている。

第2節 歴史的環境

稲敷台地上には、明治12年日本人による最初の貝塚発掘として知られる陸平貝塚（美浦村）をはじめ、椎塚貝塚（江戸崎町）、福田貝塚（東村）、広畑貝塚（桜川村）などの貝塚が多く、茨城県内において遺跡の分布が最も顕著な地域である。

弥生時代の遺跡としては、殿内遺跡（桜川村）、尾島祭祀跡（桜川村）などが知られ、古墳時代の遺跡としては、浮島の原古墳群（桜川村）、木原古墳群（美浦村）などがある。

常陸国風土記信太郎の条に「榎の浦の津あり。便ち驛家を置けり。東海の大津にして、常陸路の頭なり」とある。この駅家がどこに置かれていたかについては竜ヶ崎市大徳付近、新利根村柴崎付近等諸説があるが、稲敷台地南端辺に置かれていたことは確かであろう。

竜ヶ崎市域においては、竜ヶ崎ニュータウン地内の発掘調査からみると、松葉遺跡は古墳時代前期の集落址であり、沖餅遺跡は先土器時代の遺物のほか縄文時代中期及び古墳時代前期の集落址があり、赤松遺跡は、縄文時代中期のフラスコ状土壌を伴う集落址であった。外八代遺跡は、弥生時代から奈良・平安時代の集落址及び中世の城館跡であり、屋代A遺跡は弥生時代から古墳時代の集落址であった。なお、廻り地A遺跡は地点貝塚を伴う縄文時代後期の遺跡である。このように、竜ヶ崎市の北部台地には、原始・古代の遺跡が多く各時代にわたって人々の生活が営まれていたことがうかがえる。

このほか、竜ヶ崎城跡、駒馬城跡、若柴城跡、屋代城跡、外八代城跡、貝原塚城跡など中世の城館跡も多い。

(大塚)

第3章 前清水遺跡

この遺跡(図2、写1-1)は、龍ヶ崎市と美浦村を結ぶ県道(木原街道)に沿った貝原塚集落の南東約500mの台地南縁辺部にある。遺跡の北側白地は小支谷が入り込んで樹枝状となり、南側はゆるやかな傾斜の谷を形成している。周辺には、白蔵寺遺跡が西側に近接する外、貝原塚城跡・屋代城跡などの遺跡がある。

第1節 調査経過

昭和54年4月19日～4月26日 調査エリアを再確認し、伐開作業と調査区の杭打ち作業を業者に委託する。本遺跡における調査区設定は、基準杭(公園1等多角点No.193を基準とし、磁北 $N-19^{\circ}21'29"-E$ の方向37.074mの点)から更に南へ80m、東へ80m移動した点を起点とし、調査区の名称は40mおきに東へ1・2・3……、南へA・B・C……とした。併せて、第1号塚(稲荷塚)調査のため修繕を行い、器材点検をした。なお、24日に地元有志による協力員会を開催して、作業員募集等を依頼した。

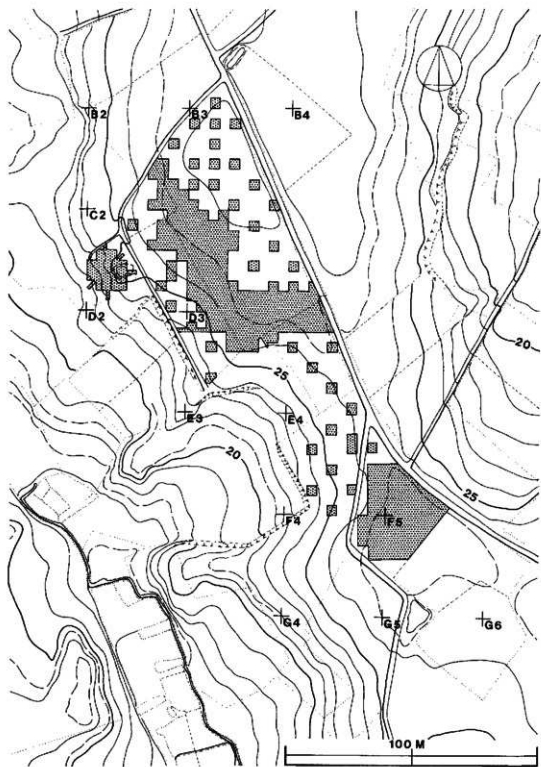
5月6日～5月9日 調査区清掃、小グリッド設定の杭打ち作業のかたわら、備品格納小屋の設置作業をする。遺跡全景写真を撮影する。

5月11日～5月25日 遺跡北側のエリア中心部のC3区より放射状に、遺構分布状況確認のための表土除去作業を開始した。作業の進展に伴い、C3区・D3区に竪穴式住居址状遺構を検出した。また、土師器片とともに縄文土器片を少量検出し、次いで塚の地形測量等を実施した。

5月28日～6月7日 遺跡北側については、遺構の分布状況をほぼ確認することができたが、なお詳細を把握するための遺構確認のための調査を続行した。南東側については、E4区を中心にこれも放射状に表土除去作業を実施し、遺構確認調査を開始した。その結果、掘立柱建築址と推測されるピット群を検出することができた。

6月11日～6月13日 遺構の確認調査と、遺構プラン追求のためのグリッド発掘拡張の結果、C3区・D3区及びF5区・F5区を中心に、各遺構の分布状況や遺構数を知ることができた。また、表土より土師質土器片・施釉陶器片・内耳土器片・燈明皿、それに中世古銭等が検出されたことから、中世の遺構群であろうことが推測された。

6月15日～6月28日 F5区の溝状遺構を第1号溝と仮称し、掘り込み調査を開始した。また、



第 2 図 前清水遺跡全体図

その西側にも平行する1条の溝状遺構を検出し、第2号溝と仮称した。西側の溝状遺構においては、掘り込み調査・精査の段階で一部に櫛列状ピットを検出した。

塚の頂部をほぼ中心にグリッドを設定し、封土の断面調査を行い、同時に、塚に周溝が廻っていることを確認した。

7月2日～7月20日 掘立柱建築址の調査を開始した。第1号から第3号の土壌の掘り込み精査実測作業と併行して、塚の周溝部分の調査を実施した結果、覆土内から土師質土器片、陶器片を検出した。また、北東部に土壇らしき部分を検出した。遺跡北側の調査をほぼ終了する。

7月23日～8月10日 第4号から第14号土壌の精査・実測をする。竪穴住居址状遺構3軒の平面プランを確認。隅丸方形2軒のうち炉を有するもの1軒のほか、不整形1軒であることが明らかとなった。

8月21日～8月27日 第1号から第3号の住居址状遺構の掘り込み・精査・実測をする。当初、北地区にはほぼ北行するものと西行する2条の溝の存在が考えられたが、D3区でコーナー一部を検出し、同系のものであったことを確認した。27日青山学院大学講師伊禮正雄氏を招聘し指導を受けた。

8月28日～8月30日 遺跡北側の残存調査・実測を終了し、南側へ集中して調査作業を開始する。第4号土壌から古銭2枚を検出した。

8月31日～9月5日 C3区第15～18号土壌等の断面実測、第2号溝の平面実測の調査を終了するだけとなり、塚下遺跡への器材・人員の移動をした。第14号土壌については、地下式墳のため土砂の落下の危険性を考慮し、調査の安全を期した。

9月6日～9月13日 当遺跡における調査はほぼ終了し、第14号土壌の精査、並びに図面の加筆を行い、13日をもって全ての調査が終了した。

第2節 遺構・遺構出土遺物

1 住居址

第1号住居址（図6、写1-1）

本址はC3f₂・C3f₃に確認した。平面形は長軸3.9m・短軸3.6mを測り、ほぼ方形を呈している。覆土は5層からなる自然堆積状である。壁は4面ともほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、遺存状態は硬くしまっていて良好なものであった。床面の深さは48cmを測り、中央より北東側床面には焼七粒子を帯びた堅い部分を有したが、一部抜根址により攪乱されていた。確認されたピットの配列は不規則で、壁際をも加えると大小合わせて16か所を数える。主柱穴と見られるもの

はP₁・P₂・P₃だけで、両側コーナー部におけるピットの確認はできなかった。西壁際のP₃・P₄は開口施設のもと推測される。覆土内及び遺構に伴った遺物は出土しなかった。

2 土壌

第1号土壌 (図7)

本址はE5j₅を主体に確認した。長径方向N-49°-Eを指す。平面形は長径3.4 m・短径2.5 mを測る不整楕円形を呈す。覆土は自然堆積を示している。出土遺物はない。

第2号土壌 (図8)

本址はC3j₁に確認し、第7号土壌と形態が類似する。平面形は楕円形を呈し、長径1.2 m・短径1.0 mを測る。長径方向はN-36°-Eを指し、深さは中央最浅部で18cm、両端最深部で52cmを測る。出土遺物はなかった。

第3号土壌 (図10、写2-1・2)

本址はF4j₁に確認され、平面形は長径3 mほどの楕円形を呈し、長径方向はN-81°-Wである。本来、円筒状の土壌が複合したものと考えられ、深さは東西ともに2.4 mである。覆土は人為的な埋め戻しの可能性を有する。図に示した遺物出土分布図のうち、3は覆土内からの黒曜石剥片・4は五輪塔空輪と思われる花崗岩塊 (写10-4)・1の墳底面西寄りの底直上からは、馬の歯牙7本・2からは緑の色を保っている笹葉 (和名アズマザサ) 5枚を出土した。なお、その他の分布地点からは、土師質土器片・施釉陶器片・施釉陶磁器片等の細片を出土した。2については、馬の埋葬の際一緒に埋めた笹葉が何らかの影響で腐らず残ったものが、井戸状遺構に投棄したものの何れかであろうと思われる。

第4号土壌 (図11、写2-3・4)

本址はD3a₁を主体に確認された。竪堀部、羨道部、主室からなる地下式墳であるが、天井部が陥没し壁が崩壊しオーバ・ハングしている。主室は、長辺3.1 m・短辺1.9 mの長方形に近く、高さ1.2 mを測る。長軸の方向はN-69°-Eを指す。なお、主室東寄りには、径55cm・深さ45cmのピットが掘られており、羨道部は主室より一段高くなっている。天井部の陥没のため竪堀部とともにその規模については不明であるが、類似する遺構に第14号土壌がある。陥没のため覆土は複雑な自然的二次堆積を呈している。遺物分布図1-5のうち、1は、施釉陶磁器底片 (図43-2) である。器面に長石釉を施し、ミズビキ整形痕を残す。底部は、糸切り後へう状工具により

格子状引きずり痕を施し、高台を貼り付けたものとみられる。長石軸が器と高台の装着部を通り、引きずり痕に付着している。色調は表がオリーブ灰色、裏が灰白色を呈し、胎土中に砂礫を少量含んでおり、焼成は良好である。中世以降の磁器とみられる。2は、小型環形土器（図43-3、写9-3）で、横ナテ整形で底部内面に沈線が残る。底部は糸切り痕を有す。口径8.1cm・底部径5.3cm・器高1.5cmを測り、残存率は90%である。口縁部内面に煤が付着していることから、燻明皿と見られる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に長石・雲母・スコリア等を含む。焼成は良好である。3は、小型環形土器片（図43-4、写9-4）で、口径26cm・器高2.4cm、残存率20%程度の燻明皿である。内外面ともに横ナテ整形痕があり、色調は橙色を呈し、胎土中に砂礫・砂粒・スコリア等を含む。焼成は良好である。4の古銭（図49-4、写11-4）は、宋代の熙寧元宝であり、5の古銭（図49-5、写11-5）は宋代の聖宋通宝である。その他の分布点は、土師質土器細片である。

第5号土壇（図13、写2-5）

本址はC2d。に確認した。平面径は径2.6mの円形で、深さは2.9mを測り、粘土層まで掘り込まれている。壇底面は径1.1mの円形で、ほぼ平坦面を呈し、開口部の中心点と壇底の中心点がほぼ一致するように掘り下げられている。壁は2.2mほどまでは垂直に立ち上がり、壁上部は比較的粗雑な掘り込み面を呈して外傾する。9層下の覆土は確認が不可能であったが、人為的埋め戻しの可能性を有していた。遺物の出土は皆無である。

第6号土壇（図14、写2-6）

本址はD3d。を主体に確認した。平面形は径2.5mの円形で、深さは2.9mを測る。壇底面は径1.0×0.8mの、北西に長軸を指す楕円形を呈して皿状に掘り込まれていた。壁の遺存は良好で、深さ1.6m程より下は粘土層を掘り込んでいる。覆土は3層に区分でき、上層は暗褐色を呈してロームブロックを少量含み、中層は黒褐色を呈してロームブロックを微量に含んでおり、下層は黒褐色を呈して砂粒を少量含んでいる。遺物に小型環型土器片（図43-5、写9-5）がある。残存率45%程度のもので、口径8.1cm・底部径6.0cm・器高2.1cmを測る。器内はナテ整形痕を有し、外面は横ナテ整形痕を残すが、一部未整形である。底部外面に糸切り痕をもつ。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に雲母・スコリア等を含み、焼成は良好である。

第7号土壇（図9、写3-1）

本址はC3j。に確認した。長径方向はN 24° - Eを指し、平面形は長径1.2m・短径1.0mの不整形楕円形を呈す。深さは最浅部で18cm・最深部で35cmを測り、壇底面は起伏する。壁はおお

むね垂直に近い立ち上がりであるが、北東壁面のみ外傾する。覆土は黒色で、堆積状態は不明であった。遺物の出土はない。

第8号土壌 (図12、写3-2)

本址はC3j₁を主体に確認し、第9号土壌・第15号土壌と重複する。各土壌との新旧関係は不明である。平面形は長軸方向N-70°-Wを指し、平面形は不整楕円形で、長径は一部不明であるが3m強、短径は1.4mである。深さは32cmで、墳底面は平坦で軟らかであった。壁はやや硬く、覆土は暗褐色の1層被覆のみである。出土遺物に、覆土内からの土師質土器細片がある。

第9号土壌 (図15、写3-2)

本址はC3j₁に確認し、第8号土壌が西に、第15号土壌が北に重複する。平面形は径約1mの円と、径0.9×0.5mを測る楕円とで構成する双円形を呈し、長軸方向はN-65°-Wを指している。遺構検出面から墳底までは双方共20cmと浅く、楕円形方には深さ20cmのピットを有している。覆土は自然堆積である。遺物の出土は無い。

第10号土壌 (図18、写3-3)

本址はD3a₁に確認した。長径方向はN-26°-Wを指し、平面形は長径2.1m・短径1.7mを測る楕円形である。深さは70.5cmと深く、墳底面は踏み固められた痕跡を有して硬く平らであった。壁は垂直に近い立ち上がりを呈するが、東側壁はテラス状の張り出し面を有し、壁は全体的に脆い状態であった。覆土は、焼土粒子とロームブロックの混入を比較的多く認められる人為的な埋め戻し状の堆積を示す。遺物の出土は無かった。

第11号土壌 (図16、写3-5)

本址はC3j₁に確認した。長軸方向はN-20°-Wを指し、平面形は長軸1.6m・短軸1.3mを測る不整長方形で、深さは37cmである。墳底面はかなり締っており、壁の形態と共に第10号土壌に類似する。覆土は人為的な埋め戻し状の堆積を呈し、ロームブロックを混入する褐色土が主体を占めた。遺物の出土は無い。

第12号土壌 (図17、写3-5)

本址はC3i₁に確認され、第13号土壌と重複する。新旧関係は本址が古い。平面形は、長軸方向N-87°-Wを指す長方形で、長軸は1.9m・短軸は1.5m、深さは30cmである。墳底面は平坦で、南東壁下に径42×33cm・深さ20cmのピットを有する。壁は締りがあり比較的硬く、覆土は人為的

埋め戻しの状態を呈している。遺物の出土は無い。

第13号土壌（図20、写3-6）

本址はC3j₄に確認され、第12号土壌と重複する。長軸方向はN 71°-Eを指し、平面形は長軸2.4m・短軸1.3mの長方形で、深さは41cmを測る。壁は硬質ローム面で遺存状態は良好であり、東壁が垂直に立ち上がる他はゆるやかに外傾する。墳底面はおおむね平坦で硬く、南北両壁下に深さ15cm程度の鉢状掘り込みを有する。覆土は3層が主体をなし、自然堆積と見られる。出土遺物に、覆土内より縄文式土器片を検出しているが、微細なため資料とはならなかった。

第14号土壌（図19、写4-1）

本址はD3a₄・D3a₃にかけ確認された地下式墳である。平面形85×70cmの長方形を呈する竪塚部は、硬質ロームを掘り下げ粘土層に達しており、深さ1.6mを測る。北側に羨道を設け、段差40cmを有して長辺2.2m・短辺0.9m・高さ1.2mを測る直方体状の主室となる。その長軸方向は、N-80°-Eを指している。竪塚部の壁は軟質であったが、羨道部・主室の壁及び人井は硬く遺存状態は良好であった。主室底面は、炭化材・炭化粒子・焼土とを少量含む黒褐色土の硬い面を呈していた。主室内部の堆積土は、ローム混入の黒褐色土で、脆い顆粒状のものであった。覆土はおおむね9層に区分できるが、竪塚部は人為的堆積、内部は自然堆積の状態を示している。遺物は、地下墳内覆土より縄文式土器片1片を出した。遺物分布図1の遺物（図44-10、写9-10）は、竹管による横位沈線を描し、口唇部にも竹管の押圧痕を有する土器片である。胎土中には砂粒・長石・スコリア等を含み、色調はにぶい褐色を呈しており、焼成は良好である。

第15号土壌（図21、写3-2）

本址はC3j₃で確認し、第8号土壌・第9号土壌と重複する。長軸方向はN-16°-Wを指し、平面形は長軸2.7m・短軸1.9mを測る長方形である。深さは30cmを測り、墳底面は平坦で比較的軟らかい状態を呈した。壁は、第16号土壌と形状が類似し、壁傾斜角がほぼ同一である。覆土は3層に区分する自然堆積の状態を示す。遺物の出土は無い。

第16号土壌（図22、写4-2）

本址はC3j₂で確認した。長軸方向N-5°-Wを指し、平面形は長軸2.1m・短軸1.3mの長方形である。墳底は軟らかな平坦面を呈し、深さは50cmを測る。壁は4面共に同傾斜角を有し、覆土は3層に区分する自然堆積の状態を示す。遺物の出土は無い。

第17号土坑 (図23、写4-3)

本址はC4jに確認した。長径方向N-41°-Wを指す不整形円形で、長径2.0m・短径1.5m深さ35cmを測る。南西壁が内側に若干縮れ、東壁に接する底面直下に径4.2cm・深さ10cmを測る皿状の掘り込みを有する。壁は硬く、おおむね急傾斜を呈して外傾する。覆土は、上層がローム粒子を少量含有する褐色土で、下層はローム粒子・ロームブロックを微量に含む褐色土である。遺物の出土は無い。

第18号土坑 (図24)

本址はC3jに確認された。長軸方向N-42°-Wを指し、長軸2.0m・短軸1.2mを測る不整形を呈し、深さは18cmと浅い。中央に径40×20cm・深さ20cmを測るビットがある。覆土は2層が主体をなす自然堆積層を示している。壁は、北側が不整形で緩傾斜を呈している。出土遺物は無い。

第19号土坑 (図25、写4-4)

本址はC3jに確認され、遺構確認面は焼土粒子を多量に含む黒褐色土が覆っていた。平面形は不整形で、長軸方向はN-38°-Wを指し、長径2.7m・短径2.5mを測る。坑底面までは21cmと浅く、覆土は極めて軟かな黒褐色土とローム混入が認められる褐色土からなり、人為的二堆積層を示す。遺物は、南東部の緩傾斜を呈した壁側に、長さ35cm・径10cmの木炭と、坑底面中央部に炭化材を検出した。壁は軟らかいが、坑底面は比較的硬く、特に炭化材の遺存した周辺は堅く締っていた。

第20号土坑 (図26)

本址はD3aに確認された。径1mを測る不整形円形で、深さは最浅面で20cm・最深面で42cmを測る。坑底面は不整形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に区分でき、上層には黒褐色土、下層には褐色を呈した顆粒状の堆積土が認められた。2層の堆積は、自然堆積である。遺物の出土は無い。

第21号土坑 (図27、写4-5)

本址はD3aを主体に確認した。長軸方向はN-53°-Eを指し、長軸2.1m・短軸0.95mを測る。坑底部は階段状を呈し、南西側の1.0×1.0m・深さ39cmの方形部が主体である。坑底部は比較的硬いが、特に有段面が非常に硬く、人骨の遺存を確認した。人骨の保存状態は悪く、頭頂骨、及び下顎骨のみの検出であった。壁は坑底部よりやや軟らかい程度で、おおむね垂直ぎみに立ち上がる。覆土は3層からなる自然堆積を実測図では示すが、掘り込み調査においては人為的

埋め戻し状の堆積であった。人骨（写11-13）の分析は、東京大学理学部助教速藤萬里氏に依頼した結果、30歳代の女性であろうとのことあり、また、埋葬年代は中世以降のものであろうとのことであった。

第22号土壌（図30）

本址はD3a。で確認した。平面形は長径1.2m・短径8.5mの楕円形で、長径方向はN 88° Wを指している。墳底面には2か所にピットがあり、その深さは15cmと37cmである。覆土は3層に区分できる自然堆積層を示した。遺物の検出は無い。

第23号土壌（図28、写4 6）

本址はF4b。で確認した。平面形は長径1.65m・短径0.95mを測る不整楕円形を呈し、長径方向はN 39° Eを指す。深さは23cmを有し、北東側の墳底面は比較的平坦である。壁は外傾して立ち上がる。覆土は2層に区分する。覆土内からの出土遺物として、馬の上顎骨の一部と歯牙6本がある。

第24号土壌（図29）

本址はF4c。に確認した。平面形は長径1.7m・短径1.35mの不整形を呈し、長径方向はN 52° Wを指している。北東壁は緩傾斜を呈し、墳底の平面形は北西に長径を示す楕円形である。墳底面は起伏が激しく、壁には爪状の窪みを有する。覆土は5層に区分でき、人為的埋め戻しの状態を示す。出土遺物は無い。

3. 溝址

第1号溝址（図31、写5 1、写8-1）

本址はE5区・D5区に位置するピット群を囲むように、北東部に開口する「コ」の字状を呈している。F5g₂より主軸方向N-32°-Eを指し、最大幅員1.8m・最底幅員0.8m・深さ35-50cmの、ほぼ「U」字形の断面を呈してF4a。まで延び、そこで主軸方向をN-52°-Wに曲折させF5d₄に至るが、途中F5c₃においては「T」字形に分岐し、主軸方向をN-37°-Eに変えて北東行する。調査した溝の全長は、F5g₂から曲折するところのF4a。までが19m、F4a。から「T」字形に分岐するF5c₃までが16.5m、分岐して北東行する距離が14m程で、全長49.5mにおよぶ。この溝は、更にF5g₂より北東方に、F5d₄においては南東方に延びるものとみられる。

なお、溝底面のレベルは不規則で、壁は不整面で起伏が多い。遺物は覆土内より、縄文式土器片

2片・内耳片1片・古銭1枚を検出している。

遺物(図43・図44、写9)について。11は、比較的厚手の土器片で、外面に縦位欄目文を有し、内面はヘラナデ整形痕を残す。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に長石等を含む。堀之内式土器の底部片と見られる。12は、微隆起線を配している。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒・石英・長石等を含む。中期後葉の土器片であろう。6は、小片で時期不明の内耳土器片である。外面が黒く焼け、内面はにぶい褐色を呈す。同系と見られる内耳土器は、隣接する塚下遺跡からも出土しており、塚下遺跡出土の時期を推定し得る形状のものと比較して、16世紀辺りに編年されるものと思われる。古銭(図49-1、写11-1)は、明代の洪武通宝である。

第2号溝址(図32、写5-1、写8-1)

本址はE5g₂より主軸方向N-34°Eを指しF4b_aに至る。規模は、幅員1.9m・深さ35~60cmを測る「U」字形状の毛抜掘りで、調査した長さは30mである。覆土は中層までが黒褐色を、下層がロームブロックを含む褐色を呈し、自然堆積の状態を示している。覆土内より土師質土器片・陶器細片のほか、底部外面に糸切り文を有した坏形土器1点を検出した。この第2号溝のF4c₁・F4c₂付近には、第1号溝との間に土塁らしき盛土が残存していたと云われるが、現在は耕作による削平のためか隠滅している。本址の第1号溝に近い内壁には、一部に棚列状ピットとみられる数本の比較的規則的な柱穴を有している。溝底面は北が硬く、南がやや軟らかい。溝底面のレベルは全体的に水平面を呈しており、その平均値は35.8cm程を測る。

遺物(図43、写9)について。7は、覆土内から出土した小形皿型土器である。口径7.2m・底部径4.8cm・器高1.7cmを測り、残存率は70%程度である。底部内面のみこみ部はナデ整形痕を残す。外面は横ナデ整形である。底部外面に糸切り文を有す。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、雲母・スコリア・長石等を含んでいる。

4. 孤立柱礎築址

第1号孤立柱礎築址(図33)

本建築址は、F5a₂・F5a₃を主体に確認された。規模は、北西面桁行が4.5m(3間)・南東面桁行が4.5m(4間)・梁行3m(1間)を測る。「コ」の字状に囲む第1号溝内にあり、主軸方向はN-54°Wで、第2号孤立柱礎築址とはほぼ同方向を向き、面積は13.5m²である。柱間寸法は、P₁~P₂間が1.5+1.5m、P₂~P₃は3m、P₃~P₄は1.5-1.0+0.9+1.1m程を測る。掘り方は、P₁・P₂・P₃が楕円形、P₂・P₃・P₄がほぼ方形を呈し、ほかは不整形である。

深さはP₁・P₂を除き均一的なものであった。遺物の検出は無い。なお、本建築址に付随する施設としてP₁₀～P₁₂が考えられる。

No	径 (cm)	深さ (cm)	備考	No	径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	92×64	43	楕円形	5	84×71	42	方形
2	100×91	43	不整形	6	66×61	30	楕円形
3	70×71	41	方形	7	48×25	20	楕円形
4	95×65	43	楕円形	8	38×30	10	方形
				9	113×112	45	不整形

第2号掘立柱建築址 (図34)

本建築址は、E5j₁・F5j₂を主体に確認した。第1号掘立柱建築址の北西に隣接する。規模は、桁行3.5m (1間)、梁行2.5m (1間)程で、面積は8.75m²の小規模な建築址である。主軸方向はN-54°-Eを向き、第1号掘立柱建築址と同方向を指す。本址は、第1号溝の南西コーナー部に構築されている。掘り方は、P₁は長方形を呈し、P₄が比較的方形に近い。P₂・P₃は楕円形である。遺物の検出は無い。

No	径 (cm)	深さ (cm)	備考	No	径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	65×38	32	長方形	3	42×50	15	不整形
2	50×43	33	楕円形	4	45×43	42	方形

5. 塚

塚 (図35、図36、写6-2、写7 1・2)

本址は、遺跡東側の、台地が沖積地に緩傾斜を呈する突端部付近に位置し、稲荷塚と呼ばれている塚である。付近には、いくつかの塚とみられる盛土がある。現在は、ほぼ円形と認められるだけで、北西裾部は掘削され、南裾部は耕作により削平されたり平穴に利用されたりしていた。

測量調査の結果は、塚に付随して北東側に極めて低い起伏を有する部分が認められた。傾斜面のために、前方部の封土を流出した前方後円墳の崩壊寸前の古墳かとも見られたが、北東部の小起伏は耕作による盛土であることが判明し、円形の塚として調査を実施するに至った。塚の形状は、径4m程を測る円形であって、その規模については、全体に南西部への封土の軽い流出と、北西裾部の浸濫等により変形しているが、塚頂部の高さは、最も高い北東部より見通した時

0.7 m、最も低い南西部より見通した場合は1.8 mである。調査は頂部を中心に4本のトレンチを設定し、以後グリッド発掘に移行しながら行われた。塚の上層断面は、旧表土にそのまま築造されたもので、北東向から南西面へ下降する基盤に比較的平行しながら盛土を行っている。しかし、頂部付近に至っては北面から南面への流出を大きくし、築造時に緩斜面上の盛土方法のバランスを考えたと思われる痕跡を認めた。トレンチ発掘の結果周溝を認め、C2j₃区グリッド設定杭に基づき、封土の一部除去と周溝確認調査を行ったところ、周溝は塚の北東裾部C2f₃から塚を囲むように、幅1.2 m・深さ0.9 mの急勾配で掘り込まれており、基盤の傾斜上、北東部がより深く、比較的溝底面は水平を保ちながら南西方に至っていたことが確認されたが、南西部が運滅していたために全体を把握することはできなかった。また、C2f₃においては、幅1.5 m程がテラス状に張り出して地続きとなり、その裾部には有段の造り出し状部分が幅1 m、傾斜角25°で3段に築かれていた。

塚からの遺物は、縄文式土器片2片と、頂部第1層より燧明皿片が出土した。また、溝覆土内より土師質土器の細片を2片と、北東裾部第1層より燧明皿1枚を出土した。

遺物(図43、図44、写9)について、13は、捺糸文を配し、薄手で色調は褐灰色である。焼成は良好で、胎土中に砂粒・長石等を含んでいる。14は、R Lの縄文を配し、色調はにぶい褐色である。焼成は良好で、胎土中に石英・長石・砂粒等を含んでいる。8は、塚頂部の第1層内で検出した残存率40%の燧明皿である。大きさは口径6.1 cm・底部径3.8 cm・器高1.0 cmで、内外共ナデ整形を施し、底部には僅かに糸切りのような文様がある。色調はにぶい橙色で、焼成は普通である。胎土中に、スコリア・雲母・砂粒等を含んでいる。9は、北東裾部の第1層内から検出した燧明皿である。大きさは口径6.4 cm・底部径3.7 cm・器高1.2 cmで、口縁内面の3か所に油と煤が付着している。整形法はナデ整形による。色調はにぶい橙色で、焼成は普通である。胎土中にスコリア・雲母・砂粒等を含んでいる。

6. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構(図37、写5-2)

長軸方向はN・33°・Wを指し、平面形は長軸4.1 m・短軸3.8 mの長方形である。深さは45 cm、柱穴・地床等々の施設は皆無である。遺物検出も無く、住居址とは認定し難い。構築時期についても不明である。なお、覆土は4層に区分でき、自然堆積状である。

第2号竪穴状遺構(図38、写6-1)

本址はC3d₂・C3d₃に確認した。平面形は、長径6.1 m・短径4.1 mを測る不整楕円形で、

長軸方向は、真北に近いN-6°-Wを示している。深さは23cmと浅く、床面には多数のビットを有する。覆土は3層に区分できる自然堆積状態で、覆土内より6点の縄文土器片が出土した。床面の状態は、第1号竪穴状遺構と同じで軟らかい褐色の平坦面を呈している。本址の構築時期等については不明である。遺物(図44、写9)について、17は、比較的厚手の繊維土器片で、表裏共に条痕文を有す。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に繊維・長石等を含んでいる。広義の茅山式に含まれる。18は、器面の摩耗が著しく、文様の識別が不可能である。薄手で色調は褐色を呈す。焼成は不良で、胎土中に砂粒・石英・長石等を含んでいる。19は、口縁部と見られる土器片で、指頭によるナデ痕があり、LRの縄文を配している。色調は明褐色で、焼成は良好である。胎土中に石英・長石等を含んでいる。20は、薄手の沈線を配す土器片で、焼成は良好で堅緻である。21は、波状沈線文を配し、色調は明褐色で焼成は良好である。胎土中に長石等をわずかに含んでいる。

7. ビット群

C3区ビット群(図39)

ビット配列は、図4の通りである。C3区に検出されたビットは、掘立柱建築址を除いて総数27本である。各ビットの径は平均値で49cmを測り、深さは浅いもので8cm・深いもので50cmであった。ビット間の間隔は不定で、配列に規則性はない。覆土は2層から3層に区分でき、C3区における覆土の堆積は自然堆積の状態を示す。出土遺物に、P₀の覆土から縄文土器片が検出された。

遺物(図44、写9)について、15は、やや内彎きみに立ち上がる楕円文をもつ土器片である。色調はにじい橙色で、胎土中に砂粒・長石・雲母・スコリアを含み、焼成は良好である。16は、LRの細い施文地にRIの太い側面片痕文を一条配している。色調は褐色で、胎土中に石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

F5区ビット群(図40-42、写8-1・2)

ビット配列は、図5の通りである。F5区に検出されたビットは、総数65基を数えた。C3区と同様ビット間の間隔は不定であり、配列等に規則性はない。本群の平面形状は、円形から楕円形を呈し、径は平均値で49cmを測る。深さは最も浅く14cm、最も深いところで56cmで、平均値は25cmである。断面形状は皿状・深鉢状に分類でき、そのほとんどの境底面は皿状に窪んでいる。覆土はC3区と同様、2層から3層で自然堆積状である。出土遺物は皆無である。

第3節 グリッド出土遺物

グリッドからの出土遺物は、量的に少なくいずれも細片であったが、縄文時代から近代にまでおよんで出土し、時期的にかなり広範囲なものであった。

1. 縄文式土器

縄文式土器の出土は希有であった。ここでは、文様の相違から4群に分類した。

- | | |
|-------|---------------------------|
| 第1群土器 | 沈線を配したもの。 |
| 第2群土器 | 沈線区画を有し、縄文を充填したもの。 |
| 第3群土器 | 微隆起線を有するものと、それに縄文を充填したもの。 |
| 第4群土器 | 縄文を配すもの。 |

第1群土器 (図45-1・5・16・17)

1は、僅かに外反する厚手の口縁部片。丸味をもつ口縁部に粗雑なスリットを配し、外面に三角文を配す。前期の土器片と見られる。5は、上位が厚い土器片で、指頭押圧による浅い横位沈線と、隆帯貼り付け部にスリットを配したものである。16は、比較的薄手の細片で、横位沈線を配している。17は、厚手の土器片で直線的な沈線を配している。色調は、1が灰褐色、5・16・17はにぶい褐色で、胎土中に、1は砂粒・長石等を含み、6・16・17は砂粒・石英・スコリア等を含んでいる。焼成は共に良好である。

第2群土器 (図45-3・4)

3は、内彎する口縁部片で、隆帯に平行沈線を配し、その区画内にR Lの斜行縄文を充填したもの。4は、直線的に外傾する薄手の口縁部片で、沈線区画内をL Rの斜行縄文で充填したものに、更に竹管文を配している。後期の土器片と見られる。色調は、3がにぶい褐色、4が褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、微砂粒・石英・長石等を含む。

第3群土器 (図45-6~10)

6~9は、微隆起線区画に縄文を充填したもの。6・8は僅かに内彎、7が外反、9は直線的に立ち上がる。10は、内彎ぎみに立ち上がる土器片で、微隆起線を配すもの。いずれも中期後葉のものである。色調はにぶい褐色で、焼成は良好である。胎土中に石英・長石・微砂粒等を含んでいる。

第4群土器 (図45-11-15)

11は、R LとL Rの縄文の幅を狭く施文している。12は、胴の縷れ部でL RとR Lの縄文を配している。15は、相反する撚りの複合部で同系の細片と見られる。いずれも輪積み痕を部分的に残し、中期か後期の粗製土器と見られるもの。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に微砂粒・石英・長石・スコリア等を含んでいる。

2. 土師質土器 (図46-18-25、写10-18-23)

土師質土器で、実測可能な破片は9点であった。これらの土師質土器片は、時期的に少なくとも国分期以降と見られるだけで、その所属する時期は明確に把握できなかった。

図版 番号	出土地区	器種	口径 法量成器 器高	器形技法			胎土	色調	備考 焼成 充有率
				内面	外面	底部外面			
18	D3 d7	環形土器	19 7.3 (cm) 3.4	横ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒 雲母 スコリア	にぶい橙	良好 20%
19	D3 d9	環形土器	— (cm) 16.0	ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒 雲母 スコリア	橙	良好 20%
20	D5 —	環形土器	— (cm) 7.4	—	—	糸切り	砂粒 雲母 スコリア	橙	良好 10%
21	D3 d5	皿形土器	7.4 5.8 (cm) 1.6	ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒 雲母 スコリア	橙	良好 95%
22	D3 d6	皿形土器	7.1 5.7 (cm) 1.6	横ナデ	横ナデ	糸切り	砂粒	にぶい 黄橙	良好 10%
23	D3 d6	皿形土器	7.3 1.7 (cm) —	横ナデ	横ナデ		砂粒 雲母	にぶい 黄橙	良好 40%

24・25は、土師質の内耳土器片である。いずれも口縁部片で、24の内耳部器肉が外側に袋状に張り出している。25は、内耳装着部の上部だけ残っている。24より器肉の張り出しは少ない。装着部は口縁に非常に近く、器形整形後に棒状粘土を彎曲させて装着したと見られる。装着部に指頭による押圧痕があり、器肉張り出し部内面には横ナデ整形痕を残している。色調は、内外面共ににぶい褐色で、焼成は良好である。胎土中に、砂粒・長石等を含んでいる。

3. 礫石 (図47-26・27、写10-26・27)

26は、C2a₀で出土した。石質は泥岩で、大きさは7.0×4.2×1.7cm・重量は78gで、金属研磨に使用されたものである。27は、D3b₁で出土した。石質は泥岩で、大きさは4.8×3.65×2.3cm・重量は62gで、金属研磨に使用されたものである。

4. 石鏃 (図48-28)

28は、無柄石鏃でF5e4で出土した。大きさは全長で2.11cm・横幅1.53cm・厚み0.4cm・重量は1.1gで、石質は石英である。

5. 古銭 (図49、写11)

グリッド出土の古銭と遺構出土の古銭を一括して記載した。

図版番号	出土地区	銭貨名	図版番号	出土地区	銭貨名	図版番号	出土地区	銭貨名
1	SD01	洪武通宝	5	SK04	聖徳通宝	9	D3b9	聖徳通宝
2	D3b4	寛永通宝	6	D3b4	寛永通宝	10	D3b9	文
3	D3b4	寛永通宝	7	D3b4	寛永通宝	11	D3b0	寛永通宝
4	SK04	聖徳通宝	8	D3b4	寛永通宝	12	E4b3	1元門宗

第4節 まとめ

本遺跡から縄文式土器片の出土がみられたが、遺構との関連性を有する遺物の出土はなかった。また古墳時代の遺構、もしくは遺物についても、明確な確認を得ることはできなかったが、古銭・青磁片・内耳土器片・土師質土器片・銅鉢片などの遺物や、溝・地下式塋などの遺構から、前清水遺跡は中・近世紀の遺跡として考えられる。

住居址については、確認された住居址はC3区の1軒だけである。出土遺物は無く、時期が不明であるが、何らかの目的を有した遺構であろうと思われる。一部攪乱されているが焼土粒子が床面に遺存していることから、炉址の存在も推測され、床面の状態から使用期間は長期間におよんだのではないと思われる。

上墳については、大別して地下式墳・墓壇・井戸とに分けられる。第4号・第14号は、墳墓・貯蔵庫の2説を主に、墓室・隠れ穴等種々様々な機能を有していると言われ、時期的に12世紀～14世紀にかけて出現するといわれる地下式墳である。第4号地下式墳では、時期不明の土師質の環形土器が出土し、覆土内には宋銭が認められたが、時期の決定資料とはなり得ない。これらの類例(註1)から(中世仏教を背景に発生した)墓地的な施設ではないかと思われる。本遺跡の周辺には、白藏寺・長昌寺・坊口・塚下・寺久保等の字名が今なお残り、第21号から人骨を出土した例からも、寺院に関連する遺跡内での遺構とみることはできないだろうか。

地下式塋の室室長軸方向とほぼ同じにする土壇に、第13号・第21号がある。第21号には人骨が遺存し、墓壇の可能性を有していた。第5号・第6号は、下層に沈澱物を検出し、掘り込みは

粘土層まで達していた。形状と、付近の湧水層レベルが一致することから、井戸跡であろうと思われる。第3号については、他に類例も無く今後の資料に期待したい。

その他の土壌は、出土遺物が第19号を除いて皆無であったが、形状が比較的類似するものとして、第10号・第11号・第15号・第16号・第19号があげられる。平面形からは長方形を呈し、長軸方向を北に向けており、地下式墳に近接して確認されている。前述の字名と関連づけるのは早計だが、墓墳の可能性を有してはいないだろうか。

溝址については、貝原塚と長峰の尾根状地形を切断する中間の地点で確認された。この貝原塚には、高井城跡と呼ばれている場所や、貝原塚城跡があり、「興国二年九月 屋代信経等 攻信太庄高井城縦火焼民舎」(註2)と高井城落城が記されている。また、貝原塚という地名については「元徳中 信太庄有上下高井 諸岡系因 木工庄南門影盛綱 親忠三年居信太高井城 相云、諸岡氏世々居貝原塚城 而其地亦古召信太東条、然則貝原塚旧名高井」や上坂原氏五代治頼(註2)の勢威を奮った天正年間「天正十一年三月四日多賀谷政経と謀し合わせたる佐竹義重は一步兵堂々龍ヶ崎に向ふ其数實に五千餘兵、歩式堂々龍ヶ崎に押寄せて貝原塚に陣を張る」(註3)とあり14世紀あるいは16世紀の貝原塚を知る手がかりを与えると共に、この地方が中世において、その攻防地となっていたことを物語る。第1号・第2号溝及び孤立柱建築址について、その規模も小さく、防備用の施設とは考えられないだろうが、尾根を切断する場所にあることから、往來をチェックする何らかの機能を有していたものと考えられなくはない。

孤立柱建築址については、不明な点を多く含むが、第1号・第2号溝跡に伴う施設であろう。溝の曲折する位置に、長軸を溝址と平行している。推測するに溝との関連を有した番屋的性格をもったものと考えられなくはない。

塚については、構築理由を明確に把握するまでには至らなかったが、形態(形状)が松葉遺跡(註4)のものと類似している。塚の構築について、鈴木道之助氏が千葉県東寺山戸張遺跡の報告でまとめられた「台地先端部等には存在せずに道路沿いに位置し、寺院との関係を示唆している」(註5)は、本址の解釈に示唆を与えてくれる。字名に寺院に関係する地があり、塚に接して古道が走っている。検出された遺物も塚の付着した埴明皿で、周溝状の溝も検出していることから、ほぼ同様の性格を有した塚と考えられるだろう。本遺跡では1基だけの調査であり、資料に乏しいが、松葉遺跡・美野里町花野井遺跡(註6)と同様、何かの供養のためのものと考えられ、時期的には中世～近世において構築されたものと思われるが、今後の研究にまつところが多い。

その他の遺構・遺物について。住居址付近で確認された竪穴状遺構については、住居址とは認め難いが、形状、床面の状態等から、それに近い性格のものと思われる。遺物等でも、縄文時代～中近世に至るものまでを出土していることから、古くから人々の生活が営まれた地であることが推察されるが、遺構の性格等の確証を得ることはできなかった。ただ、溝・塚・古道・土塀

等と兼ね合わせ、ひとつのパターンとして考えるべきかも知れず、今後、類例をまわって検討を加えていきたい。

注1 鹿島町角内遺跡 鹿島町祠町遺跡

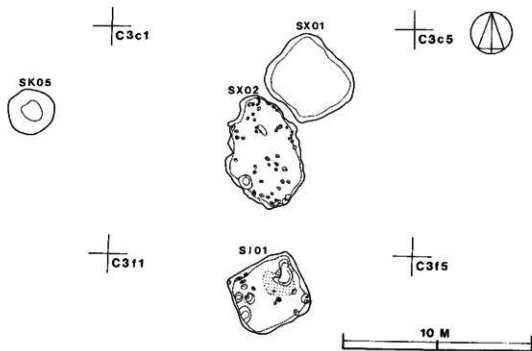
注2 宮本茶村「關城傳史」

注3 野口如月「福敷郡史」

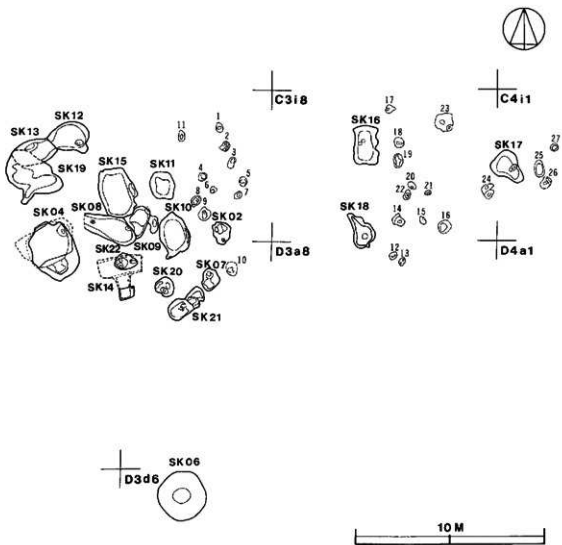
注4 財団法人茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1—松葉遺跡」昭和54年

注5 千葉県文化財センター「京葉II千葉市東寺(山戸染作遺跡)」昭和52年

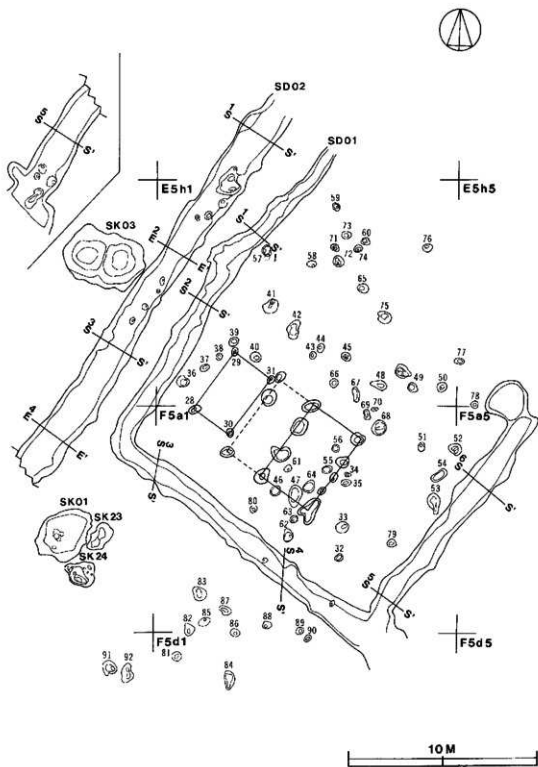
注6 美野里町教育委員会「花野井遺跡調査報告書」昭和52年



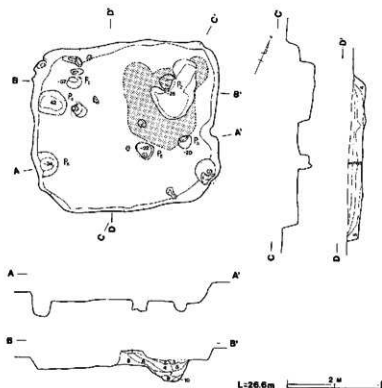
第 3 圖 遺構分布圖



第4図 遺構分布図



第5図 遺構分布図



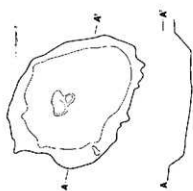
第6図 第1号住居址

S101 焼土 土層解説 B-B'

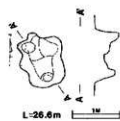
- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 明褐色(ローム粒子中量含む) | 6. 褐色(焼土粒子少量含む) |
| 2. 明褐色(硬いローム含む) | 7. 褐色(焼土粒子微量含む) |
| 3. 明褐色(非常に硬いローム含む) | 8. 褐色(焼土粒子少量含む) |
| 4. 明褐色 | 9. 褐色(小粒土ブロック中量・中焼土ブロック少量含む) |
| 5. 明褐色(やや硬いローム含む) | 10. 褐色(焼土粒子微量含む) |

土層解説 D-D'

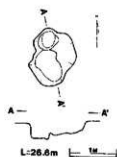
1. 明褐色(焼土粒子中量含む)
2. 明褐色(焼土粒子中量含む)
3. 明褐色(焼土粒子多量、硬い)
4. 明赤褐色(焼土粒子多量含む)
5. 明赤褐色(焼土・塊)



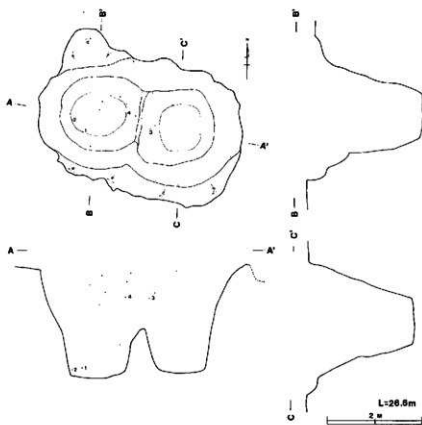
第7图 第1号土坑



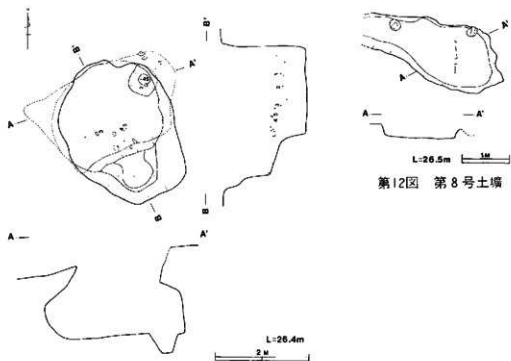
第8图 第2号土坑



第9图 第7号土坑

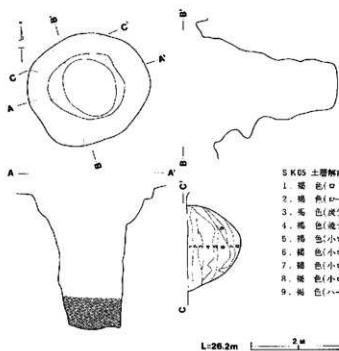


第10图 第3号土坑



第11図 第4号土墳

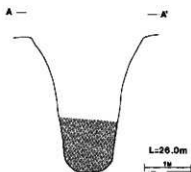
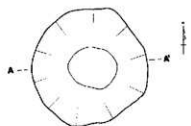
第12図 第8号土墳



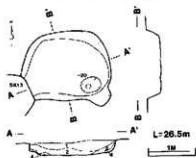
第13図 第5号土墳

SK05 土層解説 C-C'

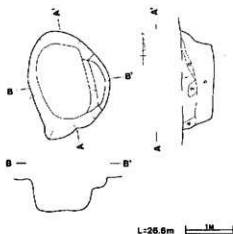
1. 褐色(ロム殻)多量含む
2. 褐色(ロム殻)少量含む
3. 褐色(炭化材)含む
4. 褐色(炭化根茎・ロム殻)少量含む
5. 褐色(小ロムブロック)含む
6. 褐色(小ロムブロック)多量含む
7. 褐色(小ロムブロック)多量・大ロムブロック少量含む
8. 褐色(小ロムブロック)多量含む
9. 褐色(ハードロムブロック)含む



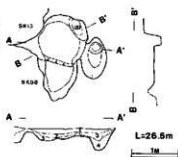
第14図 第6号土壌



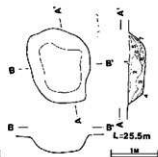
第17図 第12号土壌



第18図 第10号土壌



第15図 第9号土壌



第16図 第11号土壌

S K 09 土層解説 A-A'

1. 褐色(ローム粒子少量含む)
2. 褐色(炭化材少量含む)
3. 褐色(ローム粒子微量含む)
4. 褐色(小ロームブロック微量含む)

S K 10 土層解説 A-A'

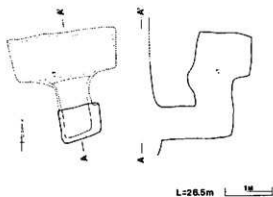
1. 褐色(中ロームブロック少量・炭土微量含む)
2. 褐色(炭化材微量含む)
3. 褐色(炭土微量・小ロームブロック少量含む)
4. 褐色(中ロームブロック少量含む)
5. 褐色(中ロームブロック少量・炭土微量・炭化材少量含む)

S K 11 土層解説 A-A'

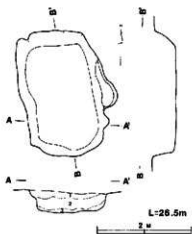
1. 褐色(ローム粒子少量含む)
2. 褐色(小ロームブロック少量含む)
3. 褐色(小ロームブロック含む)
4. 褐色
5. 褐色(ローム粒子少量含む)
6. 褐色(中ロームブロック少量含む)
7. 褐色(中ロームブロック多量含む)
8. 褐色(小ロームブロック少量含む)

S K 12 土層解説 A-A'

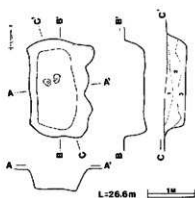
1. 褐色(小ロームブロック少量含む)
2. 褐色(小ロームブロック少量含む)
3. 褐色(小ロームブロック微量含む)
4. 褐色(ローム含む)



第19図 第14号土壌

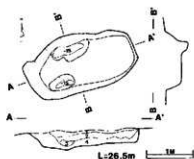


第21図 第15号土壌



第22図 第16号土壌

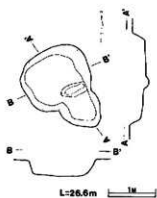
- SK16 土層解説 C-C'
1. 褐色(小ロームブロック中量含む)
 2. 褐色(中ロームブロック中量含む)
 3. 褐色(中ロームブロック中量含む)



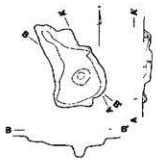
第20図 第13号土壌

- SK13 土層解説 A-A'
1. 褐色(小ロームブロック少量含む)
 2. 褐色(小ロームブロック中量含む)
 3. 褐色(小ロームブロック少量含む)
 4. 褐色(中ロームブロック中量含む)

- SK15 土層解説 A-A'
1. 褐色(ローム粒子多量含む)
 2. 褐色(中ロームブロック多量含む)
 3. 褐色(大ロームブロック多量含む)



第23図 第17号土壌



L=26.6m 1M

第24図 第18号土坑

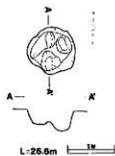
SK18 土層解説 A-A'

1. 褐色
2. 褐色(ローム粒子含む)
3. 褐色(ロームブロック状遺骸含む)



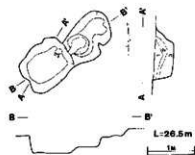
2M

第25図 第19号土坑



L=26.6m 1M

第26図 第20号土坑

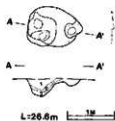


L=26.5m 1M

第27図 第21号土坑

SK21 土層解説 A-A'

1. 褐色(小ロームブロック含む)
2. 褐色(中ロームブロック含む)
3. 褐色(中ロームブロック含む)



L=26.6m 1M

第28図 第22号土坑

SK22 土層解説 A-A'

1. 褐色(小ロームブロック含む)
2. 褐色(中ロームブロック含む)
3. 褐色(ロームブロック含む)

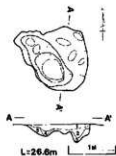


L=26.6m 1M

第29図 第23号土坑

SK23 土層解説 A-A'

1. 褐色(やわらかい)
2. 褐色(やわらかい)

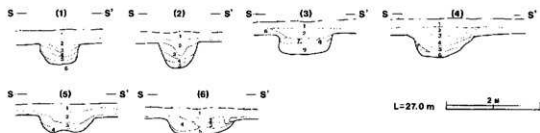


L=26.6m 1M

第30図 第24号土坑

SK24 土層解説 A-A'

1. 褐色(楕円)
2. 褐色(やわらかい)
3. 暗褐色(やわらかい)
4. 褐色(やわらかい)
5. 褐色(やわらかい)



(1) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(やや やわらかい、小ローム粒子を少量含む)
3. 褐色(やや柔らかい)
4. 褐色(ややよわっている)
5. 褐色(やや やわらかい)
6. 褐色(ハートローム)

(2) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(小ローム粒子を少量含む)
3. 褐色(やや やわらかい)
4. 褐色(中ロームブロックを含む)
5. 褐色(中ロームブロックを含む)

(3) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(ローム粒子を含む、軟らかい)
3. 褐色(小ロームブロックを含む、やや硬い)
4. 褐色(やや柔らかい、ササナラ)
5. 褐色(小ロームブロックを含む、やや やわらかい)
6. 褐色(やや硬い)

(4) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(小ロームブロック粒子含む、やや柔らかい)
3. 褐色(小ロームブロック含む)
4. 褐色(やや柔らかい、ササナラ)
5. 褐色(ローム粒子を含む、やや やわらかい)
6. 褐色(やや柔らかい)
7. 褐色(よわっている)

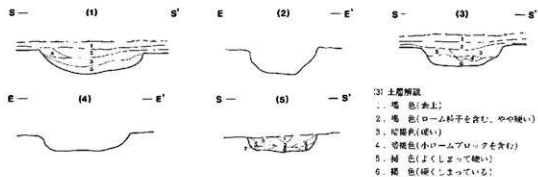
(5) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(ローム粒子を含む、やや柔らかい)
3. 褐色(やや柔らかい)
4. 褐色(やや硬い)

(6) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(ローム粒子を含む、やや柔らかい)
3. 褐色(やや硬い)
4. 褐色(やや硬い)
5. 褐色(よわって硬い)

第31図 第1号溝址土層断面図



(3) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(ローム粒子を含む、やや硬い)
3. 暗褐色(硬い)
4. 暗褐色(小ロームブロックを含む)
5. 褐色(よくよわって硬い)
6. 褐色(硬くよわっている)

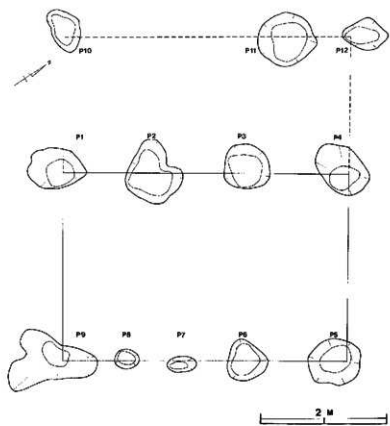
(1) 土層解説

1. 褐色(表土)
2. 褐色(ローム粒子を含む、やや硬い)
3. 褐色(小ロームブロックを少量含む、やや硬い)
4. 褐色(小ロームブロックを少量含む)
5. 褐色(ハートローム)

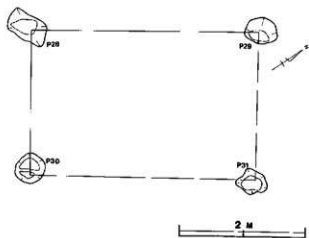
(5) 土層解説

1. 褐色(よくよわって硬い)
2. 褐色(やや柔らかい)
3. 褐色(小ロームブロックを含む)
4. 褐色(ロームブロックを含む)
5. 褐色(やや やわらかい)
6. 褐色(非常に硬い)
7. 褐色(やや硬いがササナラしている)
8. 褐色(硬くよわっている)

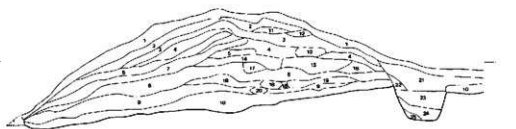
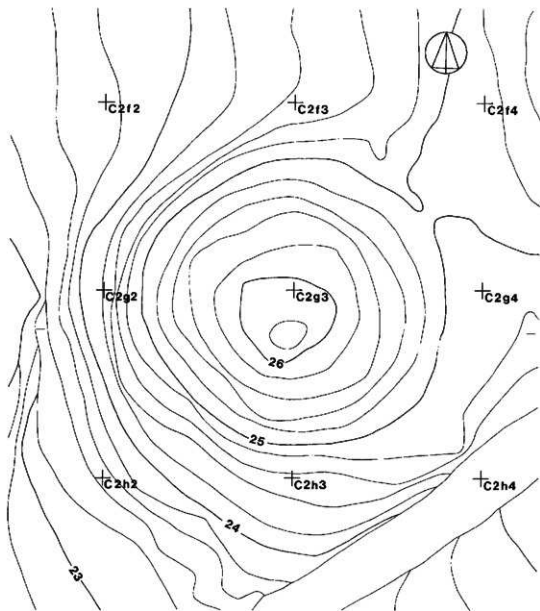
第32図 第2号溝址断面図



第33图 第1号掘立柱建筑址



第34图 第2号掘立柱建筑址

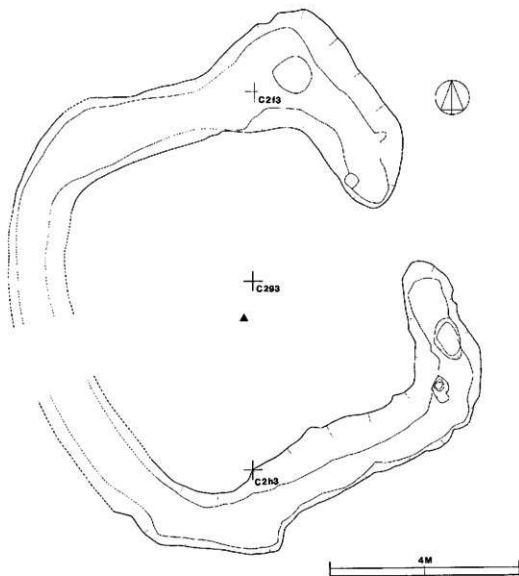


L=24.0m 2 M

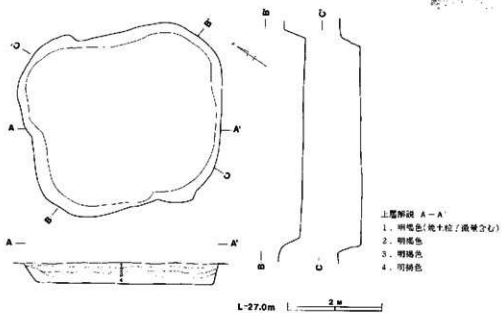
第35圖 塚

土層解説

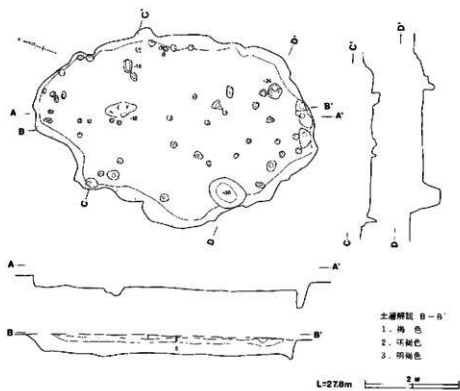
- | | |
|--------------------------------|--------------------------|
| 1. 褐色(赤土、ローム状少量含む) | 14. 褐色(褐色粘土少量含む) |
| 2. 褐色(小ロームブロック少量含む、炭化材少量含む) | 15. 褐色(粘土多量・地上小ブロック微量含む) |
| 3. 褐色 | 16. 褐色(粘土ブロック中量含む) |
| 4. 褐色(中ロームブロック少量含む) | 17. 褐色(腐植色土少量含む) |
| 5. 褐色(腐植色土中量含む、小ブロック含む) | 18. 褐色(中ロームブロック含む) |
| 6. 褐色 | 19. 褐色(均褐色土中量含む) |
| 7. 褐色(粘土少量含む) | 20. 黒褐色(粒状含む) |
| 8. 褐色(小・中ロームブロック少量含む、暗褐色土少量含む) | 21. 褐色 |
| 9. 褐色(小ブロック微量含む) | 22. 褐色(ややしろい) |
| 10. 褐色(田舎土、小ロームブロック少量含む) | 23. 褐色(小ローム粒少量含む) |
| 11. 褐色(粘土ブロック少量含む、均褐色土少量含む) | 24. 褐色(小ロームブロック少量含む) |
| 12. 褐色 | 25. 褐色(腐植褐色土中量含む) |
| 13. 褐色 | |



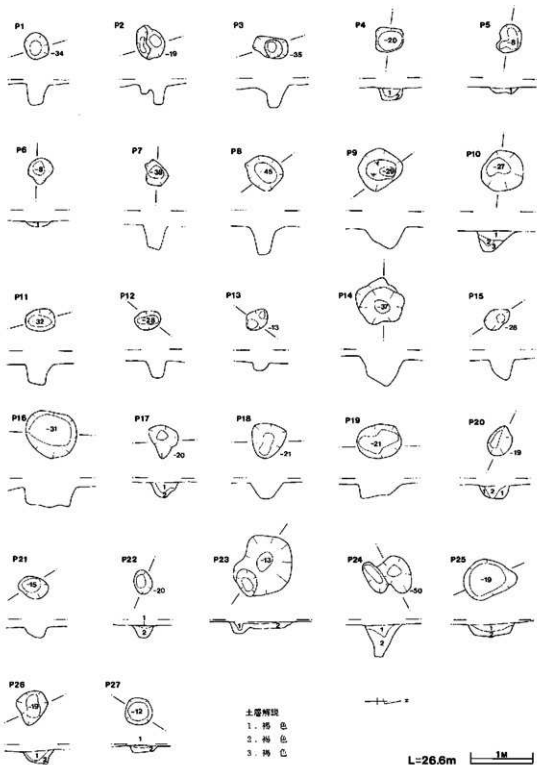
第36図 塚周溝



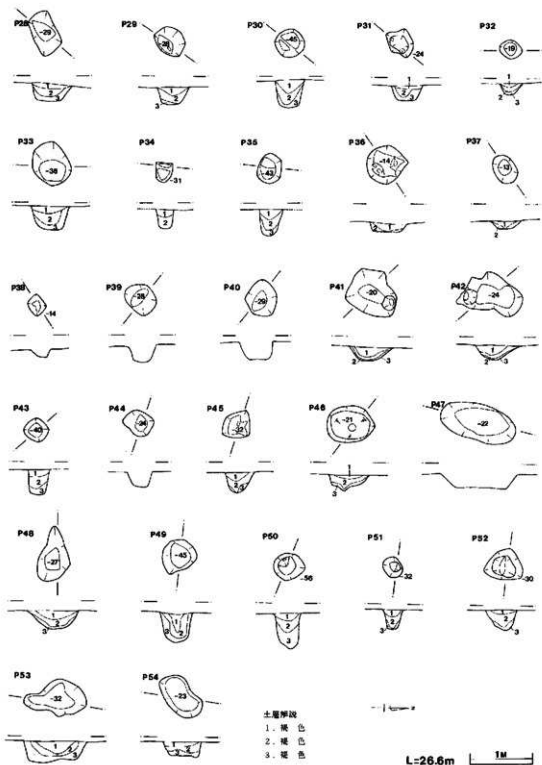
第37图 第1号竖穴状遺構



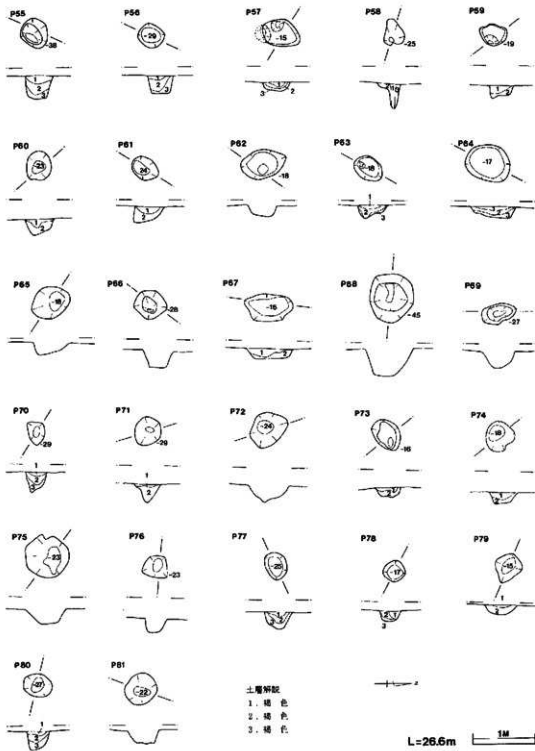
第38图 第2号竖穴状遺構



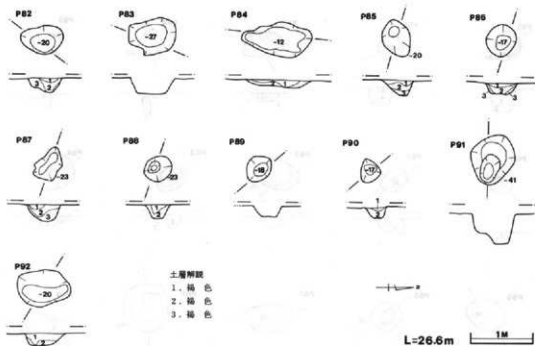
第39図 C3区ビット群



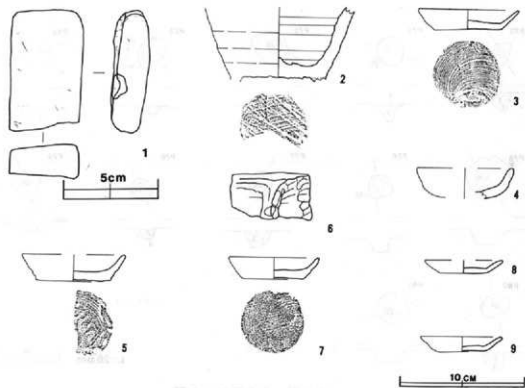
第40図 F5区ビット群



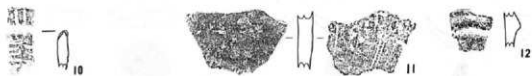
第41図 F5区ピット群



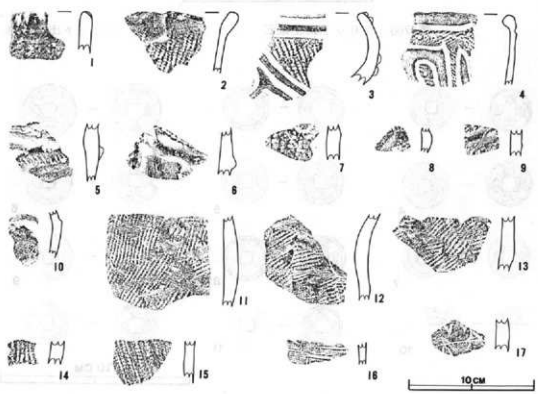
第42図 F 5区ピット群



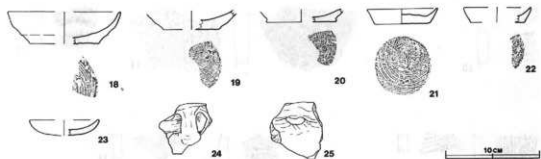
第43図 遺構出土遺物



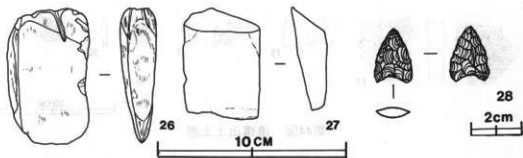
第44図 遺構出土土器



第45図 グリット出土土器

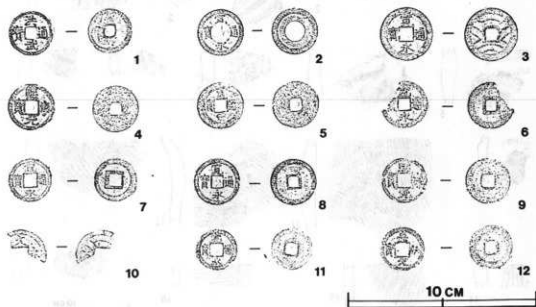


第46図 グリット出土土師質土器



第47図 グリット出土砥石

第48図 グリット出土石鏃



第49図 遺構・グリット出土 古銭

第4章 大羽谷津遺跡

この遺跡（図50、写12-1）は、若菜町大羽谷津2499の1ほかに所在し、蛇沼を水源とする幅広い支谷に南面する台地の南縁辺部に立地する。低地との比高は14～15mであり、北には小支谷が入りこみ、東には廻り地A遺跡が隣接している。現況は畑地であるが、周辺は山林および竹林となっている。

第1節 調査経過

この遺跡は、昭和53年度に一部が調査され、昭和54年度に継続調査が実施された遺跡である。調査区の設定は宅地開発公団1等多角点No21を基準に、磁北より方向角 $N-83^{\circ}16'24''-E$ を測り、距離38.947mの点を基準杭とし、松葉遺跡において設定したX軸（東西）・Y軸（南北）を磁北線に沿って平行移動した調査区の設定をした。

昭和53年1月18日～1月26日 調査開始に係る除草・調査区設定・プレハブ設置などの諸準備を行う。

2月15日～3月2日 C2区・B2区・B3区の遺構分布状況把握のために、表土除去作業を実施した。その結果、15基の土壌を検出した。同区の調査区を拡張した結果、各調査区内より縄文式土器片および土師式土器片が少量出土した。2月22日には航空写真撮影を行う。第1号～第3号土城の調査を実施する。A1区・B1区の表土除去作業の結果、住居址2軒と溝状遺構を検出した。

3月5日～3月22日 第4号～第17号土城の調査を実施し、A1区・B1区の表土除去によって、更に2軒の住居址が確認された。C2区・C3区の遺構確認調査を継続して行う。後半には器材などの移動をし、昭和53年度の調査を終了させ、残存する未調査分は昭和54年度継続の対象とした。

昭和54年4月16日～4月23日 前年度に引き続き、A1区・C2区・C3区・D3区の遺構確認調査を実施する。その結果、A1区に5軒の住居址と鍵状を呈する溝状遺構を検出した。

4月24日～5月9日 第1号～第5号住居址の調査を実施する。第1号住居址においては、床面より炭化種子が検出した。第2号住居址は出土遺物が多く、第3号住居址においては床面より焼土塊・炭化材を多量に検出し、火災の遭遇を示唆した。

5月10日～5月19日 10日に遺跡の航空写真撮影を行う。第5号住居址は調査が完了し、その他第1号～第4号住居址は遺物出土位置の計測を実施する。



第50図 大羽谷遺跡全体図

5月21日～5月29日 第1号・第3号・第4号住居址の調査完了。B1区・B2区の調査拡張とあわせて、A1i₀～i₁に先土器遺物の調査区を設定してローンを掘り下げたが、先土器時代に編年されるものは発見されなかった。

5月30日～6月6日 第18号～第22号土壌の調査を行う。第2号住居址の調査を完了する。航空写真撮影を6月10日に行い、6月6日で当遺跡の全調査を終了した。

第2節 遺構

1. 住居址

第1号住居址 (図53、写12-2、写13-1)

本址は A1e₀ を主体に確認され、当遺跡で確認された5軒の住居址中最東端に位置し、南東には A1e₀ から鍵の手に曲折して南行する溝が隣接している。平面形は北西コーナー部分が調査区外に突出しているが、長辺3.8m・短辺3.7mほどの隅丸方形とみられる。主軸方向は N-28°-E である。床面までの掘り込みは26cmほどで、壁はやや外反して立ち上がり、遺存状態は良好であった。床面はさほど硬いものではなく、コーナー部2か所より焼土が検出された。壁溝は、幅約15cm・深さ7cmで断面は「U」字形をなし、壁下を囲回している。また、壁溝内には疎な壁柱穴がみられる。南コーナー部には径65×40cm・深さ27cmの楕円形を呈する鍾鉢形の貯蔵穴がある。炉址は床面中央より北東寄りに長径72cm・短径52cmの楕円形をなし、皿状に13cmほど掘り込まれていた。床面には支柱穴4本・支柱穴2本がみられ、P₁・P₂・P₃・P₄はほぼ等間隔で位置している。覆土は3層に区分でき、自然堆積の状況を呈している。遺物は、覆土および床面に縄文式土器片・土師式土器片・円礫・砥石などが出土し、北コーナー部と貯蔵穴覆土より炭化種子が検出されている。

第2号住居址 (図55、写13-2、写14-1・2)

本址は A1e₂ を中心に確認され、第3号住居址の北側および第5号住居址の北西側に位置し、検出された5軒の住居址中最大の規模を有している。長軸6.4m・短軸5.3mほどの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向は N-17°-E である。壁下には幅約17cm・深さ13cmほどの断面「U」字形の壁溝が囲回し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面までは28cmほどを掘り、床面は平坦で中央部が硬く、南東部に焼土塊が認められた。炉址は北西コーナー部の P₄ に近接し、長径55cmほどの双円形をなしている。柱穴は支柱穴 P₁～P₄ のほか支柱穴4か所が認められ、北東コーナー部と南西コーナー部にも各1か所ずつ認められた。さらに間口施設と思われる P'₀～P'₁ のビットがあり、東壁寄りに径70×45cm・深さ19cmと、径55×44cm・深さ14cmほどの貯蔵穴が確認された。

遺物は、覆土および床面より土師式土器を主体に総計1625点が出土している。

第3号住居址（図56、写15—1・2、写16—1）

本址は A1g₂ を中心に確認され、北東4.8 mに第5号住居址・南東7 mに第4号住居址が位置する。西コーナー部が第2号住居址と同様、調査区外にあり未調査である。主軸方向はN-31°-Eで、長軸5.0 m・短軸4.6 mの隅丸方形の平面形をなす。床面までの深さは42 cmを測り、床面は平坦で炉址周辺が特に硬く良好な状態である。主柱穴4本（P₁~P₄）のほか、東西の主柱穴より外側にP'₁・P'₂がそれぞれ認められた。P'₃とP'₄は用途不明であるが、その他のピットは壁柱穴と考えられる。炉址は床面中央より北東寄りに検出され、長径73 cm・短径50 cmの不整形をなし、皿状に15 cmほど掘り込まれている。東コーナー付近には径59×47 cm・深さ27 cmの貯蔵穴が認められる。壁溝は幅15 cm・深さ8 cmほどで壁下を沿回し、北コーナー部で消滅している。床面および覆土には焼上粒子・炭化材を含み、とくに壁際に多く確認されている。壁は南コーナー部の崩壊による外方への板傾斜を除き、良好な状態で約16°の外傾角で立ち上がっている。覆土は5層に区分され、自然流入によるレンズ状堆積と認められた。

第4号住居址（図54、写16—2、写17—1・2）

本址は A1i₄ を中心に確認され、検出された住居址群中最南端に位置する。長軸4.3 m・短軸4.0 mで、南西壁は明確には把握されなかったが隅丸方形状を呈するもので、主軸方向はN-55°-Eを指す。床面までの深さは33 cmほどで、壁は外反して立ち上がっている。壁下には壁柱穴が認められる。床面は部分的に硬く、中央部より北東側に長径53 cm・短径47 cmほどの炉址を有する。炉址の掘り込みは4 cmと浅く、焼土遺存もさほど多くはなかった。主柱穴はP₁~P₄が考えられる。貯蔵穴は南コーナー部の径57×47 cm・深さ26 cmのもの、北コーナー部近くの北東壁際に、径50×45 cm・深さ22 cmの皿状のものがみられる。覆土は自然堆積の状態を示していた。遺物は、覆土および床面から土師式土器が主体をなして出土している。

第5号住居址（図57、写18—1）

本址は A1e₆ を中心に確認され、第1号・第2号・第4号の住居址のほぼ中間に位置している。平面形は、長軸3.5 m・短軸2.7 mほどの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-35°-Eである。床面までは12 cmほどで、壁は外反して立ち上がり、壁下に壁溝は認められない。床面はほぼ平坦で、炉周辺がやや軟らかいほかは壁周辺までが硬い面を呈した。柱穴は、長軸に平行する壁下に2本一組で一对（P₁-P₂・P₃-P₄）、短軸に平行する壁下中央部にそれぞれ2本一組で一对（P₅-P₆・P₇-P₈）の主柱穴を確認した。炉址はやや南よりにあり、長径66 cm・短径46 cmの楕円形を呈し、

ゆるやかに9cmほど掘り込まれている。覆土は5層に分層され、自然流入による堆積を示している。遺物は土師式土器片が少量出土している。

2. 土壌

第1号土壌 (図58、写19-1)

本址は、遺跡中央平坦部 C2c₉ のやや南西部に位置し、北約1mに第2号土壌が近接している。確認された土壌22基の中では、C3区の第21号土壌を除いて南端に位置している。平面形は主軸方向N-85°-Wを指す楕円形で、長径1.8m・短径1.1m・深さは最浅部で14.0cm・最深部で23.5cmを測る。壁は外傾して立ち上がり、横断面は北半分が緩傾斜を示し、中央に3.8×1.1cm・深さ5cmの窪みを有している。覆土は、2層からなる自然堆積を示す。出土遺物には、縄文式土器片がある。

第2号土壌 (図59、写19-2)

本址は C2b₉・C2c₉ にかけて確認され、北西3.8mに第3号土壌が近接している。平面形は主軸方向N-75°-Eを指す不整形楕円形で、長径1.8m・短径1.1mを測る。壁高は北東で42cm・南西で14cmを有し、横断面は平坦で北東に傾斜している。北壁は緩傾斜で外反し、壁直下に10×8cmのビットがある。その他の壁も外方へ傾斜している。覆土は3層に区分できる自然流入のレンズ状堆積である。出土遺物は無い。

第3号土壌 (図60、写19-3)

本址は C2b₉ の中央部にあり、第2号・第9号土壌に近接している。平面形は、長径方向N-9°-Eを指す楕円形を呈し、長径3.3m・短径1.3mを測る。深さは最深部で23.0cmであるが、北西部に削り出しを有し、その段差は0.8mを測る。床面は起伏に富み、6か所にビットを有し、その深さは中央の最深ビットで16cmである。壁は外方へ傾斜し、覆土は4層に区分される埋め戻しの堆積である。出土遺物は無い。

第4号土壌 (図61、写19-4)

本址は遺跡中央の C2b₉ で確認された。南西2.2mに第2号土壌・西に第3号土壌がある。平面形は、長径方向N-12.5°-Eを指す不整形を呈し、径1.7m程を測る。横断面は最深部で26.0cm・最浅部で11.5cmを有し、起伏に富み10か所にビットを認めた。壁高は23.5~25.0cmで、緩やかに外傾する。覆土は、4層に区分できる自然堆積である。覆土中より縄文式土器片を出土して

いる。

第5号土壌 (図62)

本址は C2a₆ で確認した。西に第9号土壌・南に第3号土壌が近接する。平面形は、長径方向 N-63°-E を指す不整円形で、長径1.0 m・短径0.7 mを測る。深さは30 cmで、壙底は硬く平坦である。壁は若干の起伏をもって外傾し、覆土は人為的な埋め戻し状堆積である。遺物の出土はなかった。

第6号土壌 (図63、写19-5)

本址は B2j₆ で確認され、西に第17号土壌がある。平面形は、長径方向 N 36°-E を指す楕円形で、長径1.1 m・短径0.8 mを測る。壙底面も楕円形を呈し、壁との境がない重状となっている。深さは14.5 cmを有し、覆土は2層からなる自然流入による堆積を示す。出土遺物は無い。

第7号土壌 (図64、写19-6)

本址は B2g₆ にあり、西5.6 mに第13号土壌がある。平面形は、長径方向 N 60°-E を指す楕円形で、長径2.3 m・短径1.6 mを測る。深さは26 cmで壙底中央部が平坦面を呈し、北西側が緩傾斜を示し、そのまま壁に連なる。覆土は、10層に区分できるが、全体にロームブロックを含み、第5号土壌と同様の埋め戻しによるものと思われる。出土遺物は無い。

第8号土壌 (図65、写20-1)

本址は C2c₇ で確認した。平面形は長径方向 N-43°-E を指す楕円形で、長径1.7 m・短径1.2 mを測る。深さは25 cmで、壙底は平坦であるが若干南西に傾斜している。壁はおおむね45°の傾斜で立ち上がり、覆土は自然流入の2層からなるレンズ状堆積を示すが、部分的に新しい埋め戻しの状態を示していた。出土遺物に、覆土内からの縄文式土器片がある。

第9号土壌 (図66、写20-2)

本址は C2a₇ で確認し、第3号土壌・第17号土壌と近接している。長径方向 N-78.5°-E を指す。平面形は長径2.6 m・短径1.4 mを測る不整楕円形を呈す。壙底は平坦であるが、北壁が緩傾斜して中央部まで張り出しているため、双円形状をなす。壁は緩やかに外傾し、壁高は17.5~25.0 cmを有す。覆土は人為的な埋め戻し状を呈し、6層に区分する。出土遺物は無い。

第10号土壌 (図67、写20-3)

本址は第11号土壌・第12号土壌の中間に位置し、B2f₂で確認した。平面形は長径2.3 m・短径1.1 mの不整楕円形で、長径方向はN-4°-Eを指している。深さは19cmで、壁高は12.5~19.0 cmを有して急傾斜で立ち上がる。墳底は東西両壁に向け若干内傾しており、南壁直下にはピットがある。覆土は2層に区分され、埋め戻し状の堆積を示す。出土遺物は無い。

第11号土壌 (図68、写20-4)

本址はB2e₂に確認した。長径方向N-16°-Eを指し、長径0.8 m・短径0.5 mの楕円形である。墳底までの深さは44cmを測り、南側に径20cm・深さ33.5cmのピットを有する楕円形を呈す。覆土は3層に区分できる自然堆積を示した。出土遺物は無い。

第12号土壌 (図69、写20-5)

本址は第10号土壌の南側に確認した。平面形は、径1 mの円形である。深さは10cmと浅く、墳底には3ヶ所の深みを有し、その深さは5 cmを測る。南東壁は垂直に立ち上がるが、他の壁は外傾している。出土遺物は無い。

第13号土壌 (図70、写20-6)

本址はB2g₂で確認した。平面形は、長径方向N-35°-Wを指し、長径2.1 m・短径1.2 mを測る不整楕円形を呈する。北東部が一部攪乱されている。深さは23cmを測り、墳底4か所に窪みを有す。墳底の断面は皿状で、垂直に10cm程立ち上がる壁に連続している。覆土は、2層からなる自然堆積状である。出土遺物は無い。

第14号土壌 (図71、写21-1)

本址はB2i₂の北東に位置し、長径方向はN-49°-Eを指す。長径1.5 m・短径1.0 mの楕円形である。深さは16cmで、縦断面形は西方へ緩やかな傾斜を示す。南西壁直下には径48×37cm・深さ20.5cmのピットがあり、北東壁付近には3か所に窪みがある。壁は墳底より緩傾斜で外傾している。覆土は3層に区分され、自然流入による堆積を示す。出土遺物は無い。

第15号土壌 (図72、写21-2)

本址はB2i₁で確認した。平面形は、長径方向N-29°-Wを指す不整楕円形で、長径1.7 m・短径0.7 m・深さ21cmを測る。墳底は、3か所の深みからなるゆるやかな波状面を示している。壁は南・西が垂直に立ち上がり、北・南壁は墳底との区画をもたず、緩やかに外傾する。覆土は

4層に区分でき、南側からの覆土流入が顕著である。出土遺物は無い。

第16号土壌 (図73、写21-3)

本址はB2j₂で確認された。平面形は径2.4mを測る円形で、深さは27cmを測る。墳底面は径45cmの円形を呈してやや西北部に位置している。壁は垂直に近い立ち上がりで、北西壁を除いて墳底との境はなく緩やかに立ち上がっている。土層は4層に区分できる自然堆積である。出土遺物は無い。

第17号土壌 (図74、写21-4)

本址は、遺跡中央のB2区・C2区に密集した土壌群の西側に、等間隔で方形を描く4基の土壌の内のB2j₂で確認された1基である。第14号土壌・第16号土壌がほぼ円形の平面形を呈するのに対し、第15号土壌と同様楕円形である。長径方向N-54°-Eを指し、長径2.0m・短径1.5m・深さ20cmを測り、墳底は平坦である。部分的に張り出した部分は伐根による攪乱址と推定され、楕円形の墳底面と異質の軟弱な黒色土がピット周辺に混入していた。壁は、おおむね60°の勾配をもって外方へ傾斜し、覆土は3層からなる自然堆積を示している。出土遺物は無い。

第18号土壌 (図75、写21-5)

本址はA1j₂を主体に確認された。東側3.4mには、A1j₂でクランク状に曲折する溝が近接する。平面形は不整形を呈し、長径方向N-6°-Eを指す。長軸は1.9m・短軸は1.4mを測り、深さは7cmと浅い。墳底は非常に硬く、平坦面を呈す。壁は北側が直線的に立ち上がり、南側は緩やかに外傾している。覆土は、遺構検出時においては焼土層が薄く被覆していただけであったが、下層では焼土粒子を多量に含む暗褐色上に変った。検出遺物は無い。

第19号土壌 (図76、写21-6)

本址はA1j₂に確認した。第20号土壌が西側4mに隣接している。平面形は楕円で、長径方向はN-24°-Eを指し、大きさは長径1.4m・短径0.9m・深さは15cmを測る。壁は墳底よりは12°45'の外傾角で立ち上がり、のち緩やかに内反する。墳底は開口部長径方向より北西に12°ずれて、平坦な不整形楕円形を呈していた。覆土は軟らかく、2層に区分される。検出遺物は無い。

第20号土壌 (図77、写22-1)

第19号土壌の東側に位置し、B2d₂に確認された。長径方向N-63°-Wを指し、長径1.4m・短径1mの不整形楕円形を呈す。深さは最浅面で15cm・最深面で25cmを測り、墳底の縦断面では東に緩傾

斜する平坦な面を示している。墳底面は、硬くほぼ楕円形を呈しているが、主軸方向は開口部長径方向より27°西へずれている。壁は、西側が緩やかに外反して立ち上がり、東側は直線的に外傾して立ち上がる。覆土は軟らかく、3層に区分できるが人為的埋め戻し状を示す。検出遺物は皆無である。

第21号土壌 (図78、写22-2)

本址は C3h₂ で確認され、遺跡最南東部に位置する。平面形は不整形円で、大きさは径1.3m・深さ20cmである。墳底はほぼ平坦で、北側に径33×30cm・深さ54cmのビットを有す。このビットは、土層から判断して後行するものである。壁は外方へ緩傾斜を呈し、覆土は軟らかな3層からなる自然堆積を示した。遺物は、要割墳底面に密着して縄文式土器片が出土した。

第22号土壌 (図79、写22-3)

本址は B1a₈ で確認され、平面形は径1.8m程の不整形円を呈し、深さは25cmを測る。墳底は平坦で僅かに硬い。壁は部分的にやや内反する以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は軟らかく、3層に区分される自然堆積である。出土遺物は無い。

3. 溝 址

第1号溝址 (図51、図52、図80、写22-5・6、写23-1)

本址は全長92.2cmの箱掘り溝で、A1f₀から幅員約46cm・深さ33cmの大きさに北西方向へ12.7m伸び、A1e₈においてほぼ直角に南西方へ曲折して16.5m伸びる。更に、A1h₈付近では滑らかに96°方向転換してA1j₈に至る。その間の長さは11.4m・幅員は約21cm・深さはA1f₀の最深面で43cm・A1i₈の最浅面で31cmである。本址は更に、A1j₈・B1b₀でクランク状に屈曲し、B1c₇付近より東に折れ、再び北西方向に伸びてB2f₂に至る。その間の長さ36.2m・幅員約49cm・深さはB1c₈で25cm・B1e₈で30cmを測る。B2区においては、B2f₂・B2d₃で再度クランク状に屈曲してB2e₄に至る。B2区での平均幅員は42cmを測り、B2f₃での深さは44cmを測る。方向は総じて、北西⇄南東・北東⇄南西を指し、曲折角度はほぼ直角である。覆土は軟らかく、層的には2層から3層に区分できる自然堆積を呈している。壁の立ち上がりは概して垂直に近く、良好な状態であった。溝底は部分的には平坦であるが、全体としては深淺の差が16.5cm前後ある波状面を示していた。出土遺物に、覆土内から縄文式土器片・土師式土器片の検出があった。

第3節 遺物

1. 住居址出土遺物

第1号住居址出土遺物

覆土内より、浮島式期に並行する粗製土器片が出土し、床面に密着して土師式土器片が出土している。しかし、これらはいずれも微細で図化不可能である。そのほか、南コーナ部に位置する貯蔵穴の覆土下層から、炭化したくろみが出土している。中央部の覆土より橋形石器(図94-1、写27-1)、P₂の南側付近の覆土内より砥石(図96-1)を検出した。

第2号住居址出土遺物(図81~87、写24、写25)

接合した土器の平面・垂直分布は、第81図~第84図の通りである。第85図・第86図・第87図・写24・写25のうち、3・4・6・7・9~13・15~18・20~24は覆土内より単体片で出土したものであり、27~47の接合土器片は細片のため、写真で掲載し解説を省いた。

図表番号	器形	法量(cm)		特徴	整形	胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高						
1	甕形土器	16.4	18.9	底部穿孔 頸部接合痕	内 ナテ 外 ハケ目	砂粒・砂礫	普通	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	輪組みの 頸部く、の字外反
2	小型甕形土器	15.0	8.5	複合口縁 刻目	内 ナテ 外 ナテ	砂粒	普通	Hue 10 YR 5/6 淡い赤褐色	頸部く、の字外反
3	甕形土器	頸部径	12.6	波状口縁 頸部接合痕	内 ナテ 外 ナテ	砂粒	不良	Hue 7.5 YR 5/6 赤褐色	煤付者 頸部く、の字外反
4	甕形土器	25.2	—	波状口縁	内 ナテ 外 ナテ	砂粒	普通	Hue 7.5 YR 5/6 赤褐色	煤付者 頸部く、の字外反
5	甕形土器	21.0	—	波状口縁	内 ナテ 外 ナテ	砂粒	普通	Hue 7.5 YR 5/6 赤褐色	煤付者・輪組みの 頸部く、の字外反
6	甕形土器	25.2	—	波状口縁	内 ナテ 外 ナテ	砂粒・石英	良好	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	輪組みの 頸部く、の字外反
7	甕形土器	20.4	—	複合口縁 刻目	内 ナテ 外 ナテ	砂粒	良好	Hue 10 YR 5/6 赤褐色	朱塗り
8	小型甕形土器	11.6	—	複合口縁 刻目	内 ナテ・外 11・横へ 外 ナテ 頸 縦ハケ目	砂粒	良好	Hue 10 YR 5/6 赤褐色	大きく外反
9	甕形土器	18.0	—	複合口縁 縄文押捺	内・横ナテ 外・11・横ナテ 縦ハケ目	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	
10	小型甕形土器	11.8	—	複合口縁	内 ナテ 外 頸・縦ハケ目・横ナテ	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	朱塗り
11	小型甕形土器	14.0	—	複合口縁 刻目	内 横ハケ目・横ナテ・外 山・横ハケ目 頸 縦ハケ目	砂粒	不良	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	縦やかに外反
12	甕形土器	19.2	—	複合口縁	内 縦ハケ目・横ナテ 外 縦ハケ目・横ナテ	砂粒・ スコリア	普通	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	輪組みの 頸部く、の字外反
13	甕形土器	14.8	—	波状口縁 頸部接合痕	内 外 横ナテ	砂粒	普通	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	煤付者 頸部く、の字外反
14	小型甕形土器	21.6	—	平縁	内 横ハケ目 外 11・横ハケ目	砂粒・ スコリア	普通	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	
15	高杯形土器	17.9	—	環部と脚部 ハメコミ	内 環部へう巻キ 外 環部へう巻キ	砂粒・砂礫	普通	Hue 5 YR 5/6 赤褐色	

図版 番号	器形	口径 (cm) 口径 器高 底部径	特 徴	整 形	胎 土	焼成	色 調	備 考
16	高環形土器	— — —		内外 放射状へうろつき 放射状へうろつき	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5YR 5/6 明赤色	脚部 横ナデ
17	高環形土器	口径 1.4		内外 横ナデ へうろつき	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5YR 5/6 黄	底部 ハケ目
18	器台形土器	口径 15.1	脚部3孔 接合部有孔	内外 横ナデ 放射状へうろつき	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5YR 5/6 にふい黄	接合部 横へうろつき 底部 横ナデ
19	器台形土器	口径 17.6	脚部3孔	内外 ナデ 放射状へうろつき	砂粒・ スコリア	普通	Hue 5YR 5/6 にふい黄	底部 横ナデ
20	土師器底部	口径 4.6		内外 ナデ ナデ	砂粒・ スコリア	不良	Hue 2.5YR 5/6 にふい赤褐色	
21	土師器底部	口径 7.2		内外 ナデ ナデ	砂粒・石英	普通	Hue 5YR 5/6 にふい黄	
22	土師器底部	口径 7.6		内外 ナデ ナデ	砂粒	良好	Hue 5YR 5/6 にふい赤褐色	
23	土師器土器	口径 6.8		内外 ナデ ナデ	砂粒・スコリア 砂石・石英	普通	Hue 10YR 5/6 赤	
24	土師器底部	口径 5.6		内外 ナデ ナデ	砂粒	不良	Hue 10YR 5/6 にふい黄褐色	
25	土師器底部	口径 8.4	底部外面に 木葉痕	内外 ナデ ナデ	砂粒・長石	普通	Hue 5YR 5/6 にふい黄	
26	小形器形土器	胴部径 18.0	上位に横文 櫛形文	内外 横ナデ ナデ	砂粒	良好	Hue 10YR 5/6 にふい黄褐色	焼成後に穿孔

48～65の出土地点は、第82図のYで表示した範囲であり、48～62は、「S」字状結節区画内に羽状縄文を施したものの。63～67は、その同一個体片と見られるものであり、薄手で胎土中に砂粒・長石等を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈す。68～70は、ハケ目を施したもので、色調は灰褐色を呈している。3は楕円形石器で、P₃の北西側壁付近で出土した。4は磨製石斧片で中央よりやや南寄りの覆土から出土した。10は無柄石鏃片で、貯蔵穴間の柱穴辺の覆土から出土した。土製品の土玉5・6は、P₃の北西側壁付近の床面に近い覆土より検出したものである。土製模造品9は、炉址より80cm南へ延びた地点の覆土下層より出土した。

第3号住居址出土遺物 (図88、図89、図97、写26、写27)

接合の土器の平面・垂直分布は、第88図の通りである。

図版 番号	器形	口径 (cm) 口径 器高 底部径	特 徴	整 形	胎 土	焼成	色 調	備 考	
1	甕形土器	18.4	—	流状口縁	内 横ナデ 外 上位横ナデ 下位横ナデ	砂粒	良好	Hue 5YR 5/6 にふい黄	口縁部片
2	器台形土器	13.6	—	底部に横文・ノコミ 脚部3孔	内外へうろつき 横ナデ 放射状へうろつき	砂粒(多量)	普通	Hue 5YR 5/6 にふい黄	接合部に横文・縦文 穿孔跡の跡がみられる

3は、横文・櫛形文の区画内に縦位の櫛形文が施文されている。薄手のもので、胎土は精緻であり、焼成は良好、色調は灰褐色を呈している。土玉(図97—7、写27 7)は、P₂付近の南側覆土内より出土している。

第4号住居址出土遺物 (図90～92、図97、写26、写27)

接合土器の平面・垂直分布は、第90図・第91図の通りである。

9～14の接合土器は、細片のため写真で掲載して解説を省いた。

図版 番号	器形	法 量 (cm) 口径 器高 底径	特 徴	整 形	胎 土	焼成	色 調	備 考
1	甕形土器	14.5 21.2 5.2		内 斜ハケ目 外 縦・横・斜ハケ目	砂礫・砂粒・ スコリア	良好	Hue10YR 5/6 赤褐色	胴部最大径が中央
2	甕形土器	18.2 - -	複合口縁	内 ハケ目横ナデ 外 縦・ 横ハケ目 横ハケ目	砂粒・長石・ スコリア	普通	Hue7.5YR 6/6 橙	口縁部片
3	甕形土器	16.0 - -	複合口縁	内 ハケ目横ナデ 外 縦・ 横ハケ目 横ハケ目	砂粒・長石・ 石英	普通	Hue5 YR 6/6 赤	口縁部片
4	甕形土器	- - 9.2		内 厚底 外 横ナデ	砂礫(多量)	良好	Hue10.5YR 6/6 明赤	底部片
5	土師器底部	- - 8.4		内 ナデ 外 ヘラ削り	砂礫	良好	Hue5 YR 6/6 赤	底部片
6	土師器底部	- - 7.6		内 ハケ目 外 直 ヘラ削り	砂礫	良好	Hue10YR 6/6 赤	底部片
7	高坏形土器	24.1 - -		内 ヘラ磨き 外 放射状ヘラ磨き	砂礫	普通	Hue10YR 6/6 赤	未検り
8	甕形土器	10.4 - -	口縁部は ほぼ垂直	内 多方向ナデ 外 横ナデ	砂粒・石英	良好	Hue10YR 6/6 赤	

土玉(図97-5、写27-5)は、P₄の北側20cmの覆土中層より出土した。

2. 土壙出土遺物

第1号土壙出土遺物 (図93)

1は、口縁部辺で薄くなるもので、僅かに外反して立ち上がる。附加条縄文がみられ、2・3は同一個体片とみられる。色調は黒褐色を呈し、胎土中に繊維・砂粒・石英・長石等を含み、焼成は良好である。黒浜式に比定される。4は、L R縄文を有するもので色調は褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、石英・長石等を含んでいる。

第4号土壙出土遺物 (図93)

5は、筐状工具による沈線がみられ、浮島式に並行する粗製土器とみられる。色調は灰褐色で、焼成は良好であり、胎土中に砂粒・石英等を含んでいる。

第8号土壙出土遺物 (図93)

6は、薄手の小片で帯描文を配すもの。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒・スコリア等を含んでいる。

第21号土壇出土遺物 (図93)

7は、縄文がみられるが器面の摩耗が著しい。8・10・11は、LR縄文を有するもので11が沈
 黙区画をもち、9は無節縄文を施している。色調は11が黒褐色で、ほかはにぶい橙色である。胎
 土中に砂粒のほか、9がスコリア、10が長石・雲母を含み、焼成は9のほかは良好である。

3. 溝址出土遺物

第1号溝址出土遺物 (図98、写26)

区画 番号	器 高	込 身 (cm)		特 徴	整 形	胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口徑	器高						
1	鉢形土器	—	—	—	輪積み状跡在 内外 ナデ	砂粒・ スコリア	良好	Hue 5YR 4/6 赤褐色	胴部片
2	鉢形土器	—	—	6.2	内外 ナデ	砂粒	普通	Hue 5YR 4/6 にぶい橙	底部片

3は薄手の土器片で、横位の楕円区画内に鋸歯状の帯描文を配しており、後期弥生式土器に
 編年される。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒等を含んでいる。5・
 8・12・13は縄文が施文され、7・9・11は縄文を地文に沈線配している。4は垂下する沈線
 に縄文を充填したものである。10は垂下する隆帯に三角列点文を密に配したものである。色調は、
 4・10が明褐色、5～8・11がにぶい橙色、9が灰褐色、12・13が褐灰色で、胎土中に砂粒等を含
 むものは7・11・13、砂粒・スコリア等を含むものは4・5・10・12、砂礫・石英・雲母等を含
 むものは6、砂粒・スコリア・長石等を含むものは8・9である。焼成は、5・7・11を除い
 て良好である。

4. 石 器 (図94、図95、写27)

1は、第1号住居址出土の楕円形石器で、石質は安山岩である。長さ9.9cm・幅7.6cm・厚さ
 4.8cmほどで、側面と裏面下位中央に打撃痕がみられる。側面から稜線にかけて研磨され、特
 に上端部・下端部が滑らかである。2は、C2a7出土の楕円形石器で、石質は安山岩である。長
 さ8.9cm・幅5.5cm・厚さ3.1cmほどで、打撃痕が両面に認められる。3は、第2号住居址出土の
 楕円形石器で、石質は安山岩であり、長さ11.8cm・幅7.7cm・厚さは4.2cmである。表面に斜行
 する研磨痕がみられ、側面も研磨がなされて滑らかに仕上げられている。上端部と下端部、および
 側面の一部に打撃痕が認められる。4は、第2号住居址出土の磨製石斧片で、石質は安山岩であ
 り、長さ6.8cm・幅8.2cm・厚さは2.7cmである。刃部の磨減が激しく、片面が欠損している。
 5はA11出土の黒曜石製細石刃石核である。残存の長さは1.6cmで、剥離面は14面に認められた。

打面に押圧剝離による潰し痕があり、剝離方向は一定である。6は、A1区の表土より検出した残核である。石質は黒曜石で、長さは2.5cmである。多方向からの打撃による剝離痕を残す。7は、B1a₂出土の黒曜石製ナイフ形石器で、長さ4.52cm・幅1.85cm・厚さは6.2cmである。8は、C4h₁出土の黒曜石製無柄石鏃の完造品で、長さ1.91cm・幅1.4cm・厚さは0.6cmを測る。9は、A1f₉出土の黒曜石製有柄石鏃の欠損品で、長さは推定で2.7cm程、柄の長さは0.6cmを測る。幅は1.85cm・厚さ0.45cmを有する。10は、第2号住居址出土の黒曜石製無柄石鏃片で、長さは推定で1.9cm程である。

5. 砥石 (図96)

1は、第1号住居址出土の粘板岩製の砥石で、2はA1j₆、3はA1h₉出土の泥岩製の砥石である。

6. 土製品 (図97、写27)

土器片鏃

番号	出土位置	長径 (cm)	短径 (cm)	質量 (g)	部位	時期	刻み目の 長さ(cm)	刻み目の数	備考
1	表 採	5.48	4.5	53	胴部	縄文中期	5.0	2	ノッチは作成仮 縦位沈線文
2	A1区	3.55	3.2	13	口縁部	縄文一	3.1	2	ノッチは作成仮 半截竹管文
3	A1j ₇	3.22	2.35	8	胴部	縄文一	2.8	2	ノッチは作成仮 無
4	C4g ₂	3.18	2.3	7	胴部	縄文一	2.9	1	外面に紐かけ痕 無

土 車

番号	出土位置	長径 (cm)	径 (cm)	質量 (g)	孔 (cm)	備考	番号	出土位置	長径 (cm)	径 (cm)	質量 (g)	孔 (cm)	備考
1	第2号住居址	2.5	2.5	15	0.6 0.5	にぶい橙 砂粒含む	3	第3号住居址	3.4	3.15	33	7.5 6.0	にぶい橙 砂粒含む
2	第2号住居址	3.8	3.65	40	0.62 0.5	にぶい橙 砂粒含む	4	第4号住居址	3.15	2.9	24	7.0 6.9	帯 器 器 器

土製模造品

5は、第2号住居址出土の土製模造品の欠損品である。径9.5cm・長さ1.95cmで、表面は皿状に張り出し、撫痕が認められる滑らかな面を呈している。表面は、中央把手が一部欠損しているが、2条の同心円と放射状の沈線文様を配しており、把手部に有孔の残存部が認められる。

第4節 まとめ

住居址について。本遺跡で検出された5軒の住居址は、ほぼ方向を同じくし各住居址間の距離を等間隔に構築されたものであり、規模は、第2号・第3号住居址が長軸5.0～6.4m×短軸4.6～5.3mの隅丸方形を呈し、他の3軒に比して大型である。第1号・第4号・第5号住居址は、長軸4.3～3.5m×短軸2.7～4.0mの比較的小型の隅丸方形で、とくに第5号住居址は、小規模である。床面までの深さは、15～33cmと浅く、床面はすべて平坦である。貯蔵穴を有するものは、第5号住居址のP₉をそれとみるならばすべてに確認され、位置は、おおむね壁際に構築されている。炉は、第1号・第3号住居址が中央より壁寄り、第2号・第4号・第5号住居址が中央よりコーナー部よりに設けられており、皿状に掘り込まれて、平面形状は不定形である。主柱穴については、各住居址とも共通してコーナー部の中央寄りに4か所有しているが、上空構造のちがいで、よるものか主柱穴には差異が認められた。また、壁溝については第4号・第5号住居址以外で検出され、壁柱穴も認められている。第4号・第5号住居址を除き他の住居址に焼土・炭化材が検出され、その最も顕著なものは第3号住居址である。第1号・第2号住居址については、火災遺物というよりは廃棄後の焼却と考えたい。出土した遺物は図版で添付したが、部分的に復元がなされたものを含めると第2号が56点、第3号が2点、第4号が10点を数えた。それらの形態は、甕形土器・壺形土器・小型壺形土器・器台形土器・高坏形土器であり、各々の器形、文様には差異が認められた。とくに、甕形土器・壺形土器については、複合口縁と波状口縁とに分類でき、複合口縁においては刻目を施文している。また、頸部のくびれが「く」の字を呈し、頸部整形痕として縦位にハケ目が多い。また、頸部に輪積み痕を残し、内面にナデ整形をしているものもある。高坏形土器では、脚部から胴部にかけての大きな広がりや内彎ぎみに広がる坏部が特徴的である。第2号の覆土から床面に遺存した土器片(Y)は、「S」字状結節区画内に羽状繩文を配したもので、弥生町式土器と同一系統(註1)を引くものである。この土器式と並んで複合口縁の破片で、頸部辺に孔を有するものが1片だけ確認された。また、欄目文の土器は、千石台式の系統を有する土器片とみられる。これらの土器の多くは第2号出土のものであるが、形状が先の隅丸方形プランの中では大型であり、土器片の投棄の遺存と、他の規則性ある住居址配列から考察して、第2号は他より先行して廃棄されたものと考えられ、その後意図的に小集団による遺物の投棄がなされ、1625点もの遺物堆積を生じさせたと考えられる。これらの観点から、プラン的には烏山遺跡(千葉)(註2)、横浜市三蔵台遺跡(神奈川)(註3)の例と、和島誠一・田中義昭の見解(註4)からして、第2号・第3号は前野町期に比定し得ると思われる。分類可能であった土器の形態からは、五領期に比定した口唇部に押捺痕のある波状口縁を有した甕の報告例は、町田市鶴川遺跡(東京)(註5)千代田村市川遺跡(註6)ぐらいで、他の類例からすると、新治群中根遺跡(註6)、筑波群面の井

遺跡(註6)、横浜市三股台遺跡、富里村日吉倉遺跡(註2)、烏山遺跡の前野町式の新しい方の形態に酷似している。後行するとみられる第1号を含めた第4号・第5号は、前野町式の新しい方の土器を有していたことになり、弥生時代終末にまでさかのぼる。そして、高坏形土器が五領式に比定されることから、五領期まで下ることが可能である。しかし、本遺跡の住居址は、第2号・第3号が弥生時代終末の前野町期の様態を具備しており、土器の形態から前野町式の新しい方に比定することが可能である。しかし、住居址の様態が五領期の傾向を示すものであり、弥生時代終末期に接触した遺跡としてとらえ、古墳文化の過渡期に、先進的文化と後進的文化を並存させていた遺跡としてみることができよう。

土壌については全基で22基確認され、B2区・C2区に集中していた。遺物を伴うものはそのうち5基であり、形態は不整形が最も多く、規則性等を明確に把握することはできなかった。出土した遺物も、時期決定の資料となりえない。

溝については、住居址5軒の東側に確認され、北西方向に走り第1号住居址の東側付近から南西に方向を変え、第4号・第5号の東側付近で再度南西に向かい鍵状を呈している。また南東・北東・南西と変化して延びているが、その曲折する角度は直角であり、幅もほぼ一定である。溝址から縄文式土器片と弥生式土器片を出しているが溝とは結びつかない。溝底は軟らかい。沈殿層が無く、底面はかなり高低差があることから、排水溝では無いとみるべきであろう。整然と一定の幅員を有し、曲折する角度・方向にもある程度の規則性がみられる。時期的には、調査区内の溝址の部分的調査のみでは明確にとらえ難く、台地の比較的平坦な部位に認められることや、遺跡北側の谷津に向かって北西に並行して走る道路の存在等も溝と何らかの関係があるのではないかと考えられる。

註1 三森俊彦・畑田正一「市原市大坂遺跡」財団法人千葉県樹産公社・千葉県都市公社 昭和49年

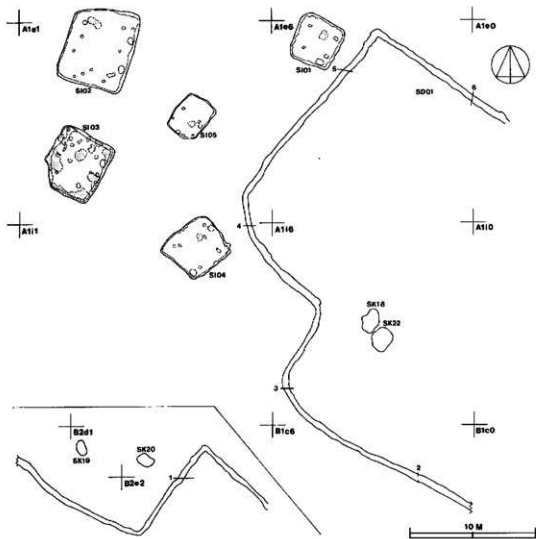
註2 藤下昌信「芝山はにわ博物館研究報告11遺跡日吉倉」千葉県印旛郡富里村日吉倉遺跡調査報告書 昭和50年

註3 和島誠一「三股台一横濱市三股台遺跡集居地発掘調査の記録」三股台遺跡調査報告書刊行会 昭和43年

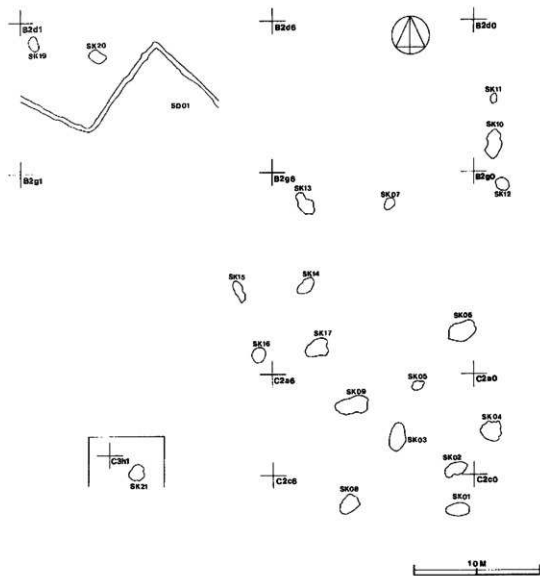
註4 和島誠一・田中義昭「日本の考古学Ⅲ 弥生時代—弥生時代の社会と生活—」河出書房 昭和41年

註5 大塚監修他「考古学調査報告 鶴川遺跡群」東京都町田市鶴川遺跡群調査団 昭和48年

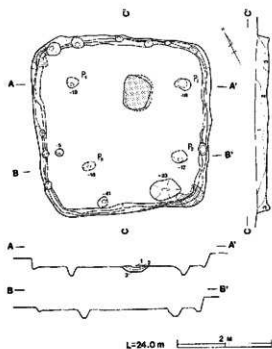
註6 表城考古学会「茨城県土器集居地 第2集」 昭和43年



第51図 遺構分布図



第52図 遺構分布図



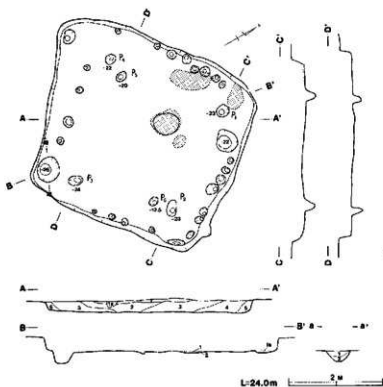
第53図 第1号住居址

S101 土層解説 C-C'

1. 暗褐色
2. 暗褐色(ローム粒子含む)
3. 暗褐色(ローム粒子多量含む)

地上土層解説 A-A'

1. 暗褐色(焼土含む)
2. 暗赤褐色(焼土含む)
3. 暗 色(焼土含む)



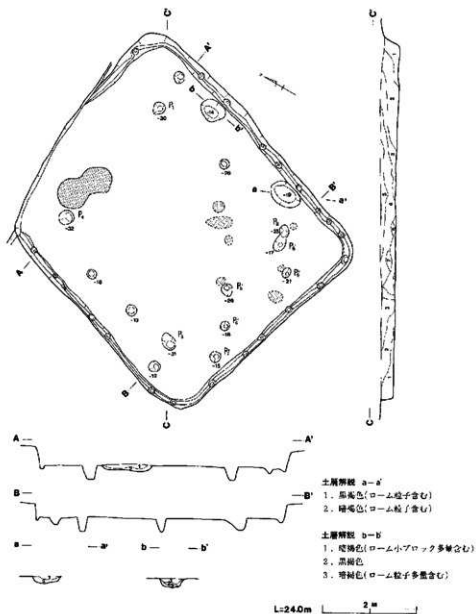
第54図 第4号住居址

S104 土層解説 A-A'

1. 黒褐色(ローム粒子含む)
- 1a 暗褐色(ローム粒子含む)
2. 黒褐色(ローム粒子含む)
3. 暗褐色(ローム粒子含む)
4. 暗褐色(ローム粒子含む)
5. 暗 色(ローム粒子多量含む)

焼土土層解説 B-B'

1. 暗赤褐色(焼土含む)
- 1a 暗赤褐色(焼土木炭粒子含む)
2. 暗 色(焼土粒子含む)



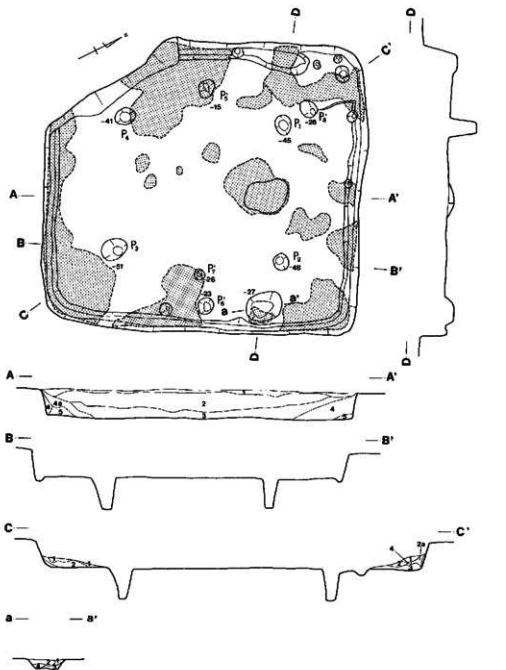
第55図 第2号住居址

S102 瓦土 土層解説 A-A'

1. 暗赤褐色(焼土含む)
2. 暗赤褐色(焼土粒子多量含む)

土層解説 C-C'

1. 暗褐色(ローム粒子少量含む)
2. 褐色(ローム粒子含む)
3. 褐色(ローム粒子多量含む)
4. 暗褐色(ローム粒子少量含む)
5. 黒褐色(ローム粒少量含む)
6. 暗赤褐色(ローム粒少量含む)
7. 暗褐色(ローム粒子含む)



L=24.0m 2 m

第56図 第3号住居址

S103 土層解説 A-A'

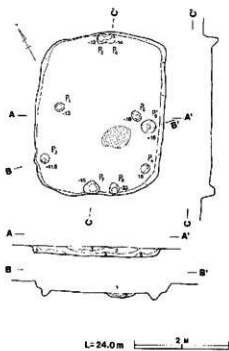
1. 黒褐色(ローム粒子少量含む)
2. 褐色(ローム粒子少量含む)
3. 暗褐色(ローム粒子・焼土粒子・木炭粒子含む)
4. 褐色(ローム粒子多量含む)
- 4 a 褐色(ローム粒子多量含む)
5. 暗赤褐色(ローム粒子含む、焼土)

泥土層解説 C-C'

1. 暗褐色(焼土粒子含む)
2. 暗赤褐色(焼土含む)
- 2 a 暗赤褐色(焼土含む)
4. 褐色(ローム粒子多量含む)

土層解説 a-a'

1. 黒褐色(ローム粒子少量含む)
2. 暗褐色(ローム粒子・炭化粒子・焼土少量含む)
3. 褐色(ローム粒子多量、炭化粒子少量含む)
4. 暗褐色(ローム粒子・焼土・炭化粒子少量含む)



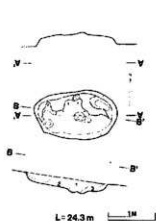
第57図 第5号住居址

S185 土層解説 A-A'

1. 黒褐色(ローム粒子を含む)
2. 黒褐色
3. 暗褐色(ローム粒子を含む)
4. 写褐色
5. 褐色(ローム粒子少量含む)

残土土層解説 B-B'

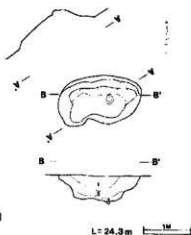
1. 暗褐色(炭土粒子含む)
2. 暗褐色(焼土粒子含む)



第58図 第1号土層

SK01 土層解説 B-B'

1. 暗褐色(ロームブロック少量含む)
2. 褐色



第59図 第2号土層

SK02 土層解説 B-B'

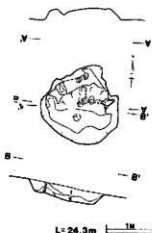
1. 暗褐色(ロームブロック少量含む)
2. 暗褐色(黒色土粒子多量、炭化粒子少量含む)
3. 褐色



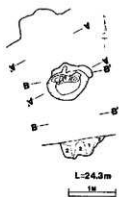
第60図 第3号土層

SK03 土層解説 B-B'

1. 暗褐色(炭少量含む)
2. 暗褐色(炭・ロームブロック少量含む)
3. 黒褐色(炭・ロームブロック少量含む)
4. 褐色(炭少量含む)



第61図 第4号土壤



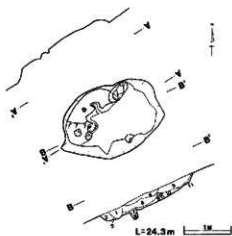
第62図 第5号土壤

S K04 土層解説 B-B'

1. 極赤褐色(灰・ロームブロック多量含む)
2. 暗褐色(灰・ロームブロック少量含む)
3. 褐色
4. 褐色

S K05 土層解説 B-B'

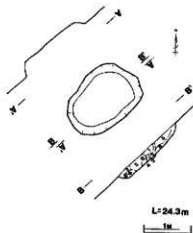
1. 暗褐色(灰少量、ロームブロック多量含む)
2. 褐色



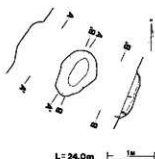
第63図 第6号土壤

S K06 土層解説 B-B'

1. 極暗褐色(ロームブロック少量含む、攪乱)
2. 黒褐色(ロームブロック少量含む、攪乱)
3. 褐色
4. 暗褐色(ロームブロック多量含む、攪乱)
5. 暗褐色(ロームブロック多量含む、攪乱)
6. 暗褐色(ロームブロック多量含む、攪乱)
7. 暗褐色(ロームブロック少量含む、攪乱)
8. 褐色(黒色土粒子少量含む)
9. 褐色
10. 褐色(黒色土少量含む)
11. 褐色



第65図 第8号土壤



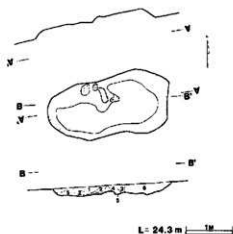
第64図 第7号土壤

S K07 土層解説 B-B'

1. 暗褐色(褐色、ロームブロック・灰少量含む)
2. 褐色(黒色土粒子少量含む、攪乱)

S K08 土層解説 B-B'

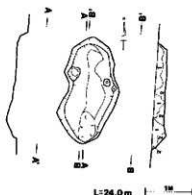
1. 黒褐色(ロームブロック多量含む、攪乱)
2. 暗褐色(ロームブロック多量含む)
3. 極暗褐色(ロームブロック多量含む)
4. 褐色
5. 褐色
6. 褐色



第66図 第9号土墳

SK09 土層解説 B-B'

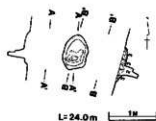
1. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
2. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
3. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
4. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
5. 褐色
6. 褐色



第67図 第10号土墳

SK10 土層解説 B-B'

1. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
2. 褐色(ロームブロック多量・灰少量含む)



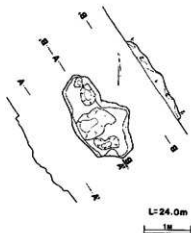
第68図 第11号土墳

SK11 土層解説 B-B'

1. 暗褐色(ロームブロック少量含む)
2. 暗褐色(ロームブロック多量含む)
3. 褐色(黒色土粒子少量含む)



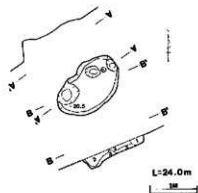
第69図 第12号土墳



第70図 第13号土墳

SK13 土層解説 B-B'

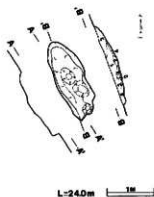
1. 暗褐色(ロームブロック・灰少量含む)
2. 褐色(黒色土粒子・灰少量含む)



第71図 第14号土壤

SK14 土層解説 B-B'

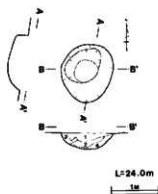
1. 暗褐色(ロームブロック・炭少量含む)
2. 暗褐色(ロームブロック多量・炭少量含む)
3. 褐色(黒色土粒子・炭少量含む)



第72図 第15号土壤

SK15 土層解説 B-B'

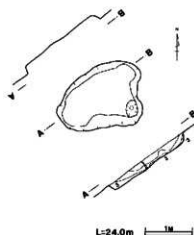
1. 暗褐色(ロームブロック多量・炭少量含む)
2. 暗褐色(ロームブロック・炭少量含む)
3. 褐色(黒色土粒子多量・炭少量含む)
4. 褐色(黒色土粒子少量含む)



第73図 第16号土壤

SK16 土層解説 B-B'

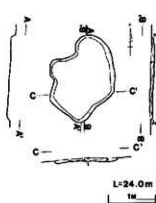
1. 暗褐色(ロームブロック・炭少量含む)
2. 褐色(黒色土粒子・炭少量含む)
3. 褐色(黒色土粒子・炭少量含む)
4. 褐色



第74図 第17号土壤

SK17 土層解説 A-B

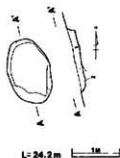
1. 暗褐色(ローム粒子多量含む)
2. 褐色(黒色土粒子含む)
3. 褐色



第75図 第18号土壤

SK18 土層解説 B-B'・C-C'

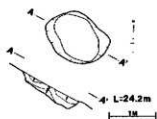
1. 暗赤褐色(焼土層)
2. 暗赤褐色(焼土粒子多量含む)



第76図 第19号土壤

SK19 土層解説 A-A'

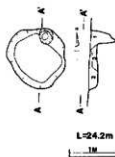
1. 褐色(ローム粒子含む、褐色土状物)
2. 褐色(ローム粒子多量含む)



第77図 第20号土坑

S K 20 土層解説 A-A'

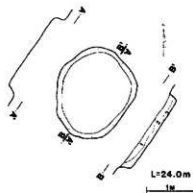
1. 黒褐色(ローム粒子含む)
2. 暗褐色(ローム小ブロック含む)



第78図 第21号土坑

S K 21 土層解説 A-A'

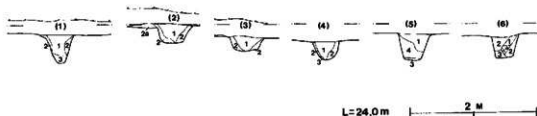
1. 黒褐色(ローム小ブロック少量含む)
2. 暗暗褐色(ローム粒子含む)
3. 暗褐色(ローム粒子含む)



第79図 第22号土坑

S K 22 土層解説 B-B'

1. 黒褐色(ローム粒子含む)
2. 暗褐色(ローム粒子含む)
3. 暗暗褐色(ローム粒子含む)



第80図 溝址土層断面図

(1) 土層解説

1. 暗褐色(やわらかい)
2. 褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
3. 黒褐色

(3) 土層解説

1. 暗褐色(やわらかい)
2. 褐色(ローム粒子含む、やわらかい)

(5) 土層解説

1. 暗褐色(やわらかい)
3. 黒褐色
4. 暗褐色(ロームブロックを含む、やや硬い)

(2) 土層解説

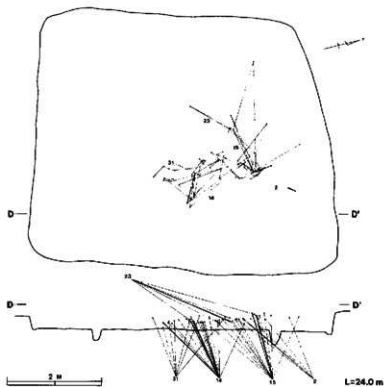
1. 暗褐色(やわらかい)
2. 褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
- 2 a. 褐色(ローム粒子含む)

(4) 土層解説

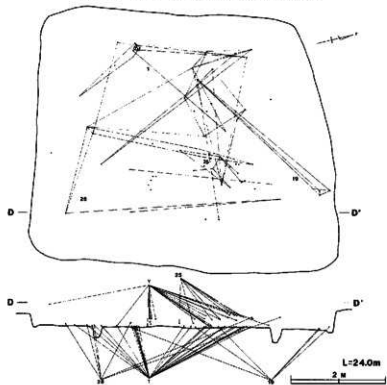
1. 暗褐色(やわらかい)
2. 褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
3. 黒褐色

(6) 土層解説

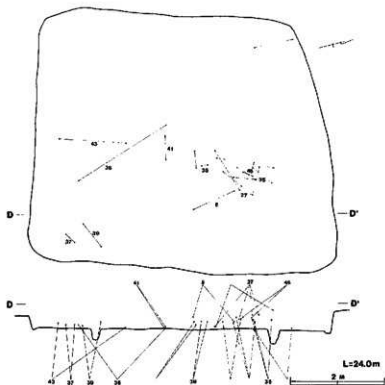
1. 暗褐色(やわらかい)
2. 褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
3. 黒褐色



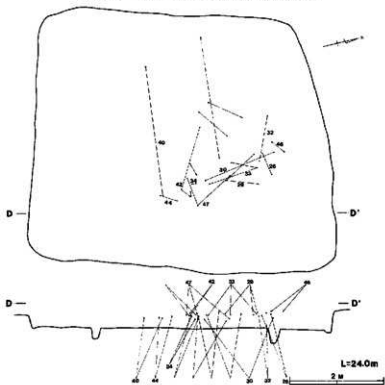
第81图 第2号住居址接合遺物分布图



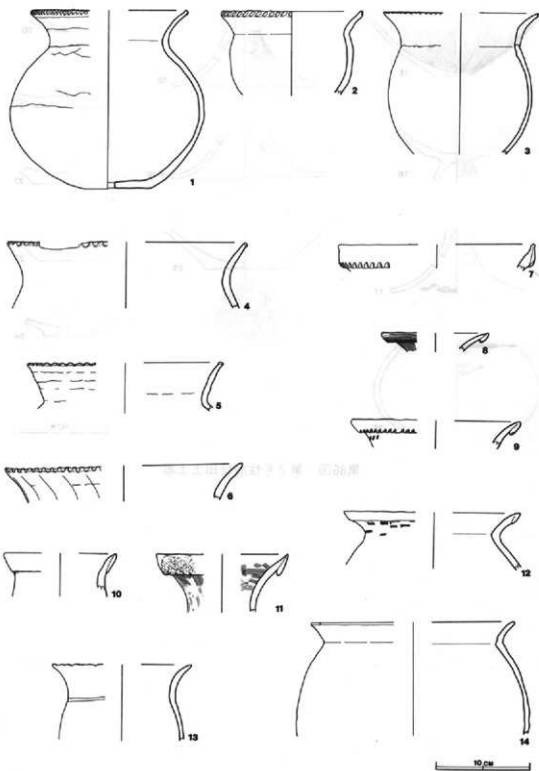
第82图 第2号住居址接合遺物分布图



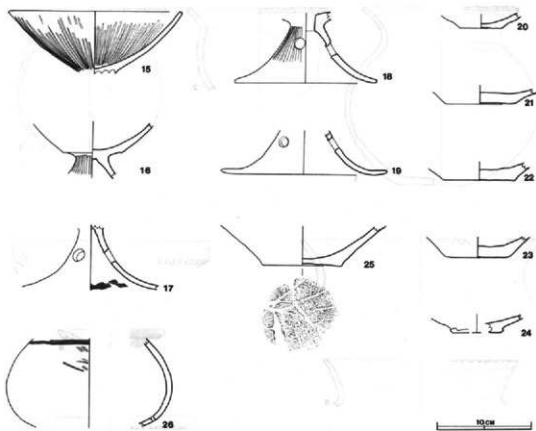
第83图 第2号住居址接合遗物分布图



第84图 第2号住居址接合遗物分布图

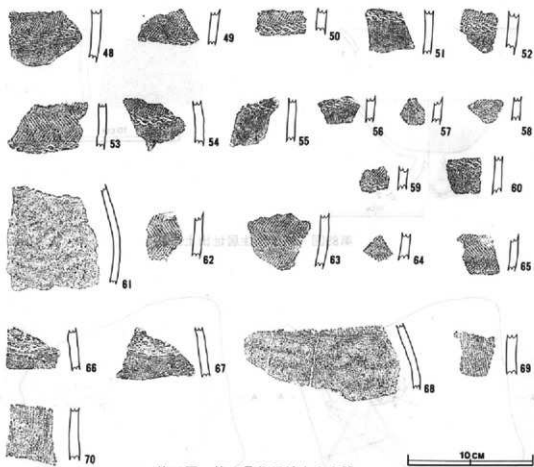


第85图 第2号住居址出土土器

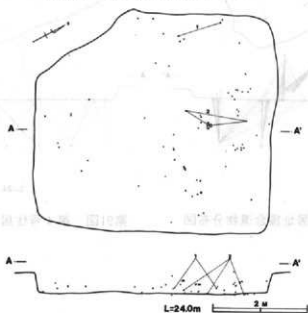


第86图 第2号住居址出土土器

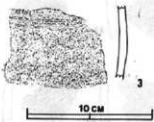
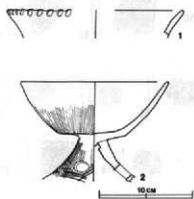
出土土器线图分册(第 86图)



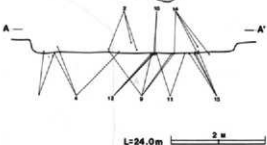
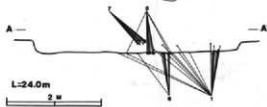
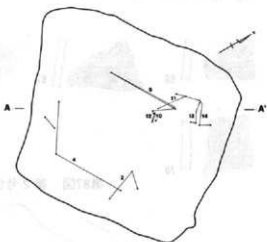
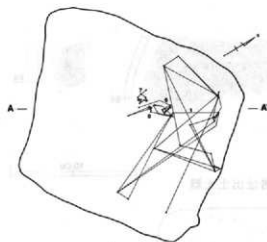
第87图 第2号住居址出土土器



第88图 第3号住居址接合遗物分布图

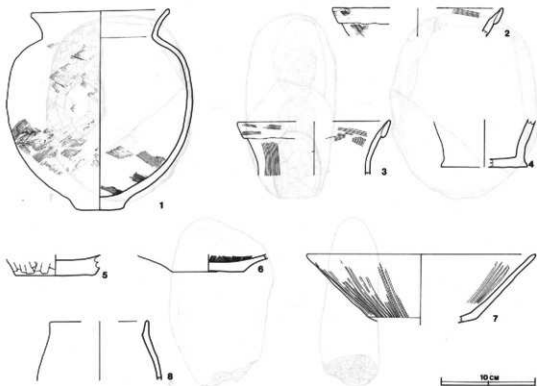


第89图 第3号住居址出土土器

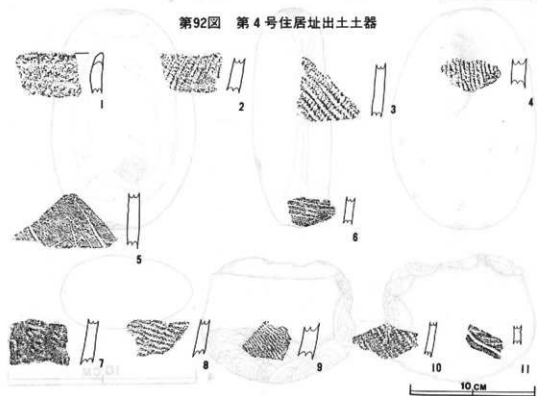


第90图 第4号住居址接合遺物分布图

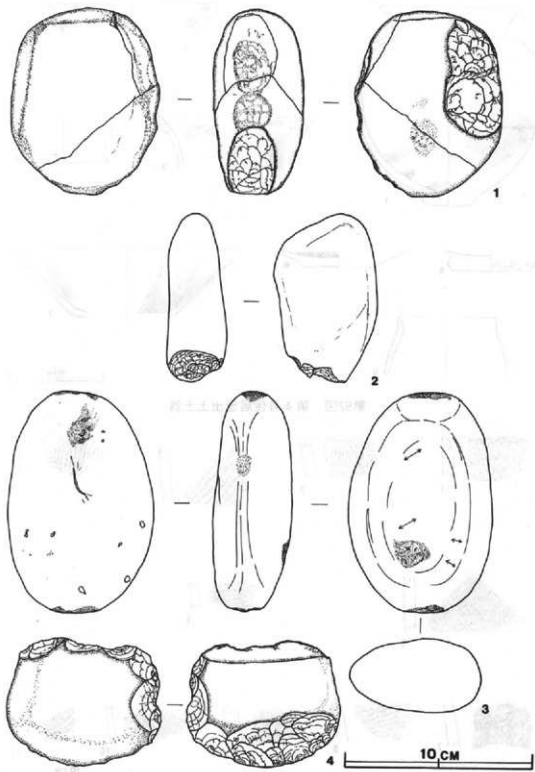
第91图 第4号住居址接合遺物分布图



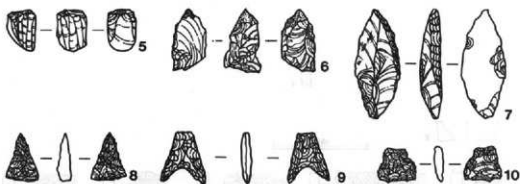
第92图 第4号住居址出土土器



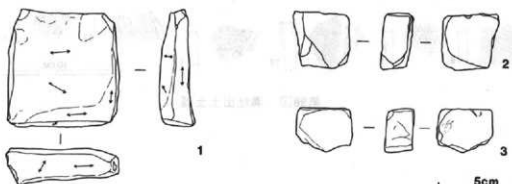
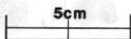
第93图 土壤出土土器



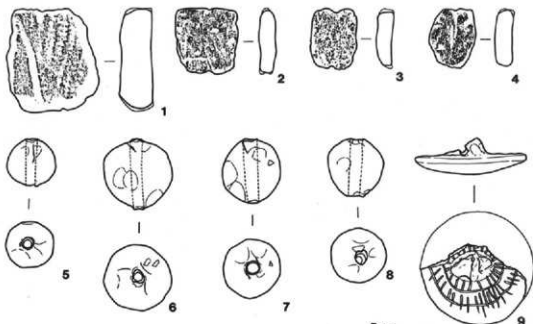
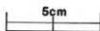
第94図 遺構・グリット出土 石器



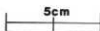
第95図 遺構・グリット出土 石器

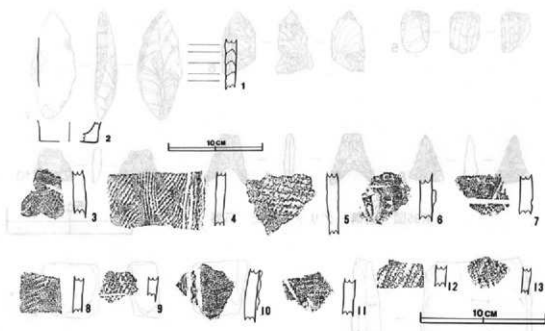


第96図 遺構・グリット出土 礫石



第97図 遺構・グリット出土 土製品





第98図 溝址出土土器



第99図 土器出土土器

第5章 打越A遺跡

この遺跡（図99、写28）は、別所集落の西側谷をへだてた舌状台地の西半分を占めており、現況は雑木林である。なお、東側には打越C遺跡がある。

第1節 調査経過

打越A遺跡の調査区設定は、宅地開発公団一等多角点No16を基準に、磁北より方向角 $N-67^{\circ}51'30''-W$ を測り、距離37,841mの点を測点とした。調査区設定の基準杭は、それより東に120m・北に80mの点を起点とし、松葉遺跡において設定したX軸（東西）・Y軸（南北）を磁北線に沿って平行移動した点とした。調査区の名称は本来同一遺跡と考えられた打越C遺跡が隣接しており、打越A遺跡の発掘開始前より発掘調査が展開されたこともあって、X軸・Y軸は打越C遺跡に倣いその延長とした。ために、打越A遺跡もX軸がアルファベット、Y軸を算用数字で表示し、北から南へ「1」・「2」・「3」…、東から西へ「A」・「B」・「C」…とし、打越C遺跡と打越A遺跡は同一基準杭を起点として調査区を設定させた。遺構検出作業後、調査区拡張、掘り込み調査・精査と移行しながら調査を実施した。

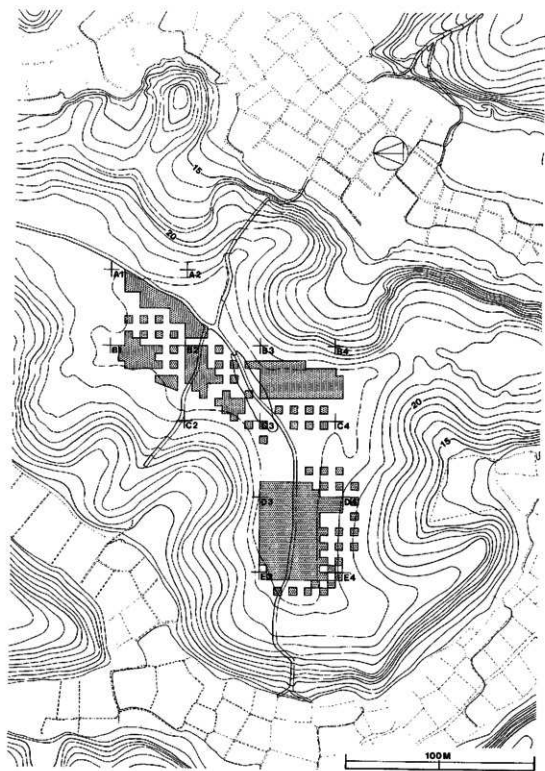
昭和54年7月23日～8月6日 遺跡内の雑木伐開。格納小屋・テント・プレハブ等の設置をする。

8月7日～8月11日 小調査区を設定後、南・北辺部のC3区・D3区・D4区から遺構分布状況把握の調査を開始する。D3jにおいて土壌状と見られる遺構を確認したが判然としないため、プラン確認面確認のテストピットをC3jに設定する。

8月20日～8月24日 南・北辺部の遺構分布状況把握の調査がほぼ終了したので、中央部の遺構確認作業を開始する。テストピットの土層観察・実測の結果、既掘グリットの遺構プランの再確認をし、土壌状遺構8基と焼土を帯びた落ち込み2基を確認した。なお、北西部の表土下第1層に、浮島式土器片・加曾利E式土器片などが出土した。

8月27日～9月7日 C3区・D3区・D4区の遺構分布状況把握の調査と遺構にかかるグリットの拡張作業をする。その結果、住居址状遺構1軒・土壌状遺構9基・焼土粒子が覆土上に遺存する土壌状遺構1基を検出する。D3b、付近の塚の計測・掘り込み調査と併行し、遺跡北部のベルト土層の実測と除去作業を実施する。

9月10日～9月17日 D3区・E3区の遺構分布状況把握の調査と遺構にかかるグリットの拡



第99図 打越A遺跡・打越C遺跡全体図

張作業を行い、第1号住居址・第1号から第5号の土壌・炉穴3基の掘り込みを開始する。また、遺跡南辺部のC3区・D3区・E3区・E4区・D4区より、新たに6基の土壌状遺構を検出した。

9月18日～9月24日 第1号住居址の炉址が土壌によって切られていることが判明、土壌精査後、住居址の調査・実測をする。D3区のグリット拡張で3基の土壌状遺構を検出し、第17号から第19号土壌の精査を行う。

9月25日～10月4日 第20号から第29号の土壌の精査を行う。当初土壌と思われた遺構が、炉址等の検出で住居址であることが明らかとなった。なお、降雨時を利用して、室内で実測図面の整理をする。

10月5日～10月9日 各遺構の継続精査と実測・遺構写真撮影を実施し、ほぼ遺跡調査終了の見通しがついたので、次の遺跡調査のための物品整理をする。なお、7日から第23号土壌・第2号住居址の精査と調査終結に係る諸作業のため、作業員10名を当遺跡に配し、他14名は廻り地B遺跡の除草作業等に従事させる。

10月11日 当遺跡の全ての調査を終了する。

第2節 遺構

1. 住居址

第1号住居址 (図101、写29-1・2)

本址は、遺跡北東部の標高約24mを測る台地上のC3j₄を主体に確認された。長軸方向N-45°-Eを指し、平面形は長径4.62m・短径4.2mを測る楕円形である。壁は部分的に硬い黒褐色のハードロームが遺存している以外は軟かな褐色ロームを呈し、床面より垂直に立ち上がっている。壁高は、最高で18cm・最低で15cmを測る。床面は攪乱を受けた炉址を中心に、焼土粒子・炭化粒子が微量に点在する黒褐色ハードローム面を呈し、北西面・南東面及び南西面は壁直下に至るまで硬く良好な面を呈した。特に南東面は踏み固められ、入口とみることができた。炉址は第26号土壌により破壊されている。柱穴は6か所にあり、うち2本は支柱穴とみられる。支柱穴壁面は硬く締まり、ブロック状である。覆土は、上層が黒色腐泥土・下層がローム粒子を含む黒色土の自然堆積を示した。

第2号住居址 (図102、写30-1・2、写31-1)

本址は、僅かに傾斜する遺跡南縁部のC3e₉を主体に確認された。長軸方向はN-86°-Eを指し、平面形は長径4.57m・短径4.42mの楕円形である。壁は北壁が最も高く48cmを測り、南壁

が最も低く32cmを測る。床面は平坦で、南東面及び北西面が硬い。炉址は、ほぼ床面中央に径78cm・深さ20cmで皿状の掘り込みを有し、その中央に縄文中期の深鉢型土器を埋設していた。皿状の掘り込み部の覆土は3層からなり、中央は炭化粒子を多量に含み、周囲に微量の焼土粒子を含有する暗褐色土が「V」字形に堆積していた。更にその外側には、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む暗褐色土が堆積している。埋設内の覆土は底部辺まで黒褐色土中に少量の焼土粒子を含む層で覆われ、以下は焼土粒子を多量に含む赤褐色ロームと化した。炉址の様態から使用期間、或いは使用頻度が高かったのではないと思われる。ヒットは、やや長径線より南寄り壁近くに5本あり、うち4本が柱穴である。覆土は4層に区分される自然堆積を呈する。遺物は埋設の他、縄文中期の土器片を主体に縄文前期の土器片も含み、その他に土製円板1点・土錘1点・窪み石片1点・磨石片1点などが出土した。

2. 土壌

第1号土壌 (図103、写31-2)

本址は遺跡南縁部のD4b₀で確認された。平面形は長径1.7m・短径1.1mの楕円形で、長軸方向N-87°-Wを指す。断面形は皿状を呈し、深さは19cmと浅い。墳底は硬く、多少起伏がある。覆土は自然堆積を呈す。出土遺物は無い。

第2号土壌 (図104、写31-3)

本址は、D3b₀に確認され、平面形は長軸方向N-49°-Eを指し、長径1.7m・短径1.1mを測る楕円形である。墳底は舟底形で最深部で21.5cm、壁はやや外傾して立ち上がる。覆土は3層に区分する自然堆積状である。出土遺物は無い。

第3号土壌 (図105、写31-4)

本址は遺跡北東部の台地縁辺部に位置し、平面形は長径1.4m・短径1.0mを測る楕円に近い形を示す。長径方向はN-19°-Eを指している。深さは19cmと浅く、墳底は部分的に硬い面が認められ、4か所に窪みを有した。窪みは最深部で14.5cm程を測る。壁は、皿状に立ち上がり外傾する。覆土は4層に区分できる自然堆積である。遺物の検出は無い。

第4号土壌 (図106、写31-5)

本址はD3a₂に位置し、形状は第3号土壌と類似する。平面形は楕円形に近く、墳底面に2か所の窪みがある。断面形は皿状で、長径方向はN-70°-Eを指す。大きさは長径1.1m・短径0.9

mである。深さは最深部で16cm・最浅部で7cmと浅い。墳底は特に北側と、窪み周辺が硬い。覆土は自然堆積である。遺物は無い。

第5号土壌（図107、写31-6）

本址は、D3a₃の第6号土壌の東に近接している。平面形は楕円形に近く、長径方向N-28°-Wを指し、長径2.4m・短径0.9mを測る。墳底までは13cmから23cmを測り、墳底面は西に緩傾斜して若干の起伏を有している。第3号土壌・第4号土壌と同様墳底面に5か所の窪みを有し、その周辺は硬く締っている。なお、径20cm・深さ26cmを測るピットが中央部にある。壁は、北側は緩やかに内傾してから外傾し、南側は直線的に外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。遺物は、墳底直上に縄文式土器の底部片が出土している。

第6号土壌（図108、写31-6）

本址は、前述の第5号土壌の西に近接して確認され、D3a₃に位置している。平面形は、長径方向N-7°-Wを指し、長径1.4m・短径1.1mを測るほぼ円形を呈する。深さは17.5cm、墳底面はほぼ平坦で、中央より西寄りに深さ43.5cmのピットを有する。壁は軟らかな墳底面から緩やかに立ち上がり、断面は皿状を呈する。覆土の堆積は自然堆積で、出土遺物は皆無である。

第7号土壌（図109、写32-1）

本址はD3b₂に確認し、第6号土壌・第9号土壌の中間に位置する。平面形は楕円形で、大きさは長径1.7m・短径1.3mであり、長径方向はN-83°-Wを指している。隣接する第8号土壌・第9号土壌とはほぼ長径方向を同じにする。断面形は浅鉢状で、深さは28cm。墳底面は平坦で、やや硬い状態を示す。壁は良好で、やや外へ急傾斜を呈している。覆土は自然堆積を呈し、3層に区分できる。出土遺物は無い。

第8号土壌（図110、写32-2）

本址は、D3c₂で第9号土壌の北1mに近接して確認した。平面形は長径方向N-63°-Wを指し、長径2.6m・短径2.3mを測るほぼ円形を呈し、検出土壌の中では大型に属する。深さは40cm、墳底面は平坦で南半分が硬い。中央に径20cm・深さ25cmのピットがある。壁は僅かに内反して外傾する。覆土は3層からなる良好な自然堆積の状態を呈していた。検出された遺物は無い。

第9号土壌（図111、写32-2）

本址はD3c₂で、第8号土壌に近接して確認した。平面形は、長径方向N-89°-Eを指し、長

径2.9m・短径1.7mの楕円形である。深さは46.5cmで、墳底面は平坦で軟らかい。壁は、東側が垂直に近い立ち上がりを示し、西面にかけて徐々に外傾する。断面形は浅鉢形である。覆土は3層からなる平行堆積に近いものであるが、自然に堆積したものと思われる。出土した遺物は無い。

第10号土墳（図112、写32-3）

本社は第9号土墳の隣、D3e₉で確認した。平面形は径75cm程のほぼ円形を呈し、深さは19.0～23.0cmを測る。墳底は軟らかい平坦面で、西に若干傾斜している。中央部に10×13cm・深さ26.0cmのピットがある。壁は僅かに外傾し、断面形は浅鉢形を呈する。覆土は自然流入による堆積と見られる。出土遺物は無い。

第11号土墳（図113、写32-4）

本社はD3e₉で確認され、平面形は径1.3mの円形状であるが、東側が一部ふくれているため長径としては1.6mを測り、その方向はN-78°-Wを指している。深さは37.0cm、壁は鋭く立ち上がり、僅かに外へ傾斜している。墳底面は北側が硬く、東端に径71×62cm・深さ22cmの掘り込みをもつ。墳底は径40cmの円形を呈し、壁は東側が底部より中段まで内傾し、上段に至って僅かに外傾している。覆土は、壁下に顕著な三角堆積を示し、4層からなる自然堆積状を呈する。出土遺物は無い。

第12号土墳（図114、写32-5）

本社は、D3e₉を主体にD3f₄にかけ確認された。平面形は径1.5m程の円形で、深さは57.0cmを測る。墳底面はほぼ平坦で、中央東寄りに僅かな窪みをもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、墳底面との境を顕著にしているため断面形は浅鉢形を呈する。覆土は、自然堆積状とみることができ、出土遺物は無い。

第13号土墳（図115、写32-6）

本社はD3f₄の南西端で、第12号土墳と隣接して確認した。平面形は、長径2.1m・短径1.6m、長軸方向N-33°-Eを指す楕円形で、深さは50cmを測る。壁・墳底共に第12号土墳と酷似するが、墳底に窪みはない。覆土は3層に区分する自然堆積状である。出土遺物は無い。

第14号土墳（図116）

本社は、遺跡北縁部中央のD3c₁に確認された。長径方向はN-64°-Wを指し、平面形は長径1.5m・短径1.1mの楕円形である。縦断面形は皿状で、最浅部で35cm・最深部で40cmを測る。

ビットが大小合わせて4か所あるが抜根柱と考えられ、それによって墳底面が壊されたと思われる。壁は西面がオーバーハングする以外は皿状に外傾する。覆土は埋め戻し状を呈す。検出遺物は無い。

第15号土壌（図119、写33-1）

本址は D3g₃・D3h₃ に確認された。長径方向N-87°-Eを指す楕円形で、大きさは長径1.2m・短径0.8mである。深さは45cm、墳底はほぼ平坦で南東壁下に径約20cm・深さ14cmのビットを有す。壁は幾分外傾し、断面形は鉢形を呈する。覆土は自然堆積と思われる。出土遺物は無い。

第16号土壌（図117、写35-6）

本址は D3f₁・D3g₁ に確認され、遺構検出面に焼土が薄く覆っていた。覆土層序より第3号炉穴と分離した。平面形は長径2.0m・短径1.5mの不整楕円形で、長径方向N-39°-Wを指す。深さは最浅部で26.5cm・最深部で50cm、褐色で硬い墳底は、径約27cm・深さ11cmのビットがある方向に緩傾斜を呈している。断面形は皿状を示している。覆土は人為的に埋め戻された状態であり、遺物の出土は無い。

第17号土壌（図118、写33-2）

本址は、検出土壌の中では大型の部に属す。平面形は、長径方向N-52°-Wを指し、長径2.8m・短径1.7mを測る楕円形である。深さは42.5~48cmで、墳底面は概して南へ傾斜する軟らかな平坦面を呈す。壁の遺存は良好で、70°程の勾配を有して外傾している。覆土は、3層に区別できる平行堆積状である。遺物は、覆土中より前期縄文式土器片を4点出土した。

第18号土壌（図120、写33-3）

本址は、遺跡北縁部西方の D3h₂ を主体に確認された。長径方向N-75°-Wを指す楕円形で、大きさは長径3.0m・短径1.3mである。深さは0.8mを測り、墳底面はおおむね平坦で、西側の南北両壁直下に浅いビットが2か所ある。壁は西側が内傾するのと、北壁の外傾角が大きい他は垂直に近い立ち上がりである。覆土は7層に区別できる埋め戻し状を呈する。遺物は、覆土内より中期縄文式土器片を検出した。

第19号土壌（図121、写33-4）

本址は、遺跡北縁部最西端の D3j₃ に確認した。平面形は、径1.8mの円形である。壁は南側が40cm・北側が56cmと高低差があり、平坦な墳底面は北に緩傾斜を呈している。壁は垂直に近い

立ち上がりを示す。覆土は自然な堆積によるものである。検出遺物に、南西壁に遺存した土製円板片と覆土内からの縄文式土器片3点がある。

第20号土壌（図122、写33-5）

本址は第21号土壌の北西0.8m程に位置し、C3g₇で確認した。長径方向はN-85°-Wを指し、平面形は長径1.3m・短径1.1mの楕円形を呈する。深さは33cmを測る。東壁が緩傾斜して外へ立ち上がるほかは、断面形で皿状を呈する如く僅かに内彎して外傾する。覆土は自然堆積を示し、3層に区分できる。出土遺物は無い。

第21号土壌（図123、写33-6）

本址は第20号土壌と近接して、遺跡南縁部の東側付近のC3j₇で確認したが、台地の縁部傾斜面からは大分離れた比較的平坦な面に位置している。長径方向は、N-12°-Eを指す。平面形は、長径1.6m・短径1.1mの、北方が開放ぎみの楕円形を呈する。深さは36cmを測り、墳底面は硬く起状に富む。中央に径20cm・深さ27cmのビットが西に傾き掘削されているほか、4か所に窪みをもつ。断面形は既して皿状で、覆土は5層に区分できる自然堆積を示した。出土遺物は無い。

第22号土壌（図124、写34-1）

本址はD3b₇で確認し、長径方向N-81°-Wを指す。平面形は長径1.7m・短径1.3mの楕円形で、深さは23cmを測る。墳底面は、抜根址による多数のビットが認められ、ハードルームブロック状のルームを多く含む明褐色面を呈した。断面形は皿状で、覆土は埋め戻し状を呈した。出土遺物は無い。

第23号土壌（図125、写34-2・3・4）

本址は、D3d₇で確認した。長径方向N-44°-Eを指し、長径1.8m・短径1.6mを測る不整形である。深さは44cmで、南側壁下に墳底面との段差5cmのテラス状の張り出し面を有す。北壁直下に径約20cm・深さ48cmのビットがある。覆土は木根の侵入による攪乱が認められたが、自然堆積の可能性が強い。出土遺物は212点を数える。石皿が直立して検出され、縄文式土器片・不明石製品等が、直径30cm程の範囲から出土した。

第24号土壌（図126、写33-5）

本址は、遺跡南縁部西方D3j₁に位置する。平面形は径1.6mの略円形で、壁は北西部でほぼ垂直に立ち上がり、南東部では僅かに外傾しているだけである。深さは49cmで、墳底面は軟らかな

平坦面に褐色ハードロームブロックを若干含んでいた。覆土は3層に区分できる自然流入による堆積を示した。覆土及び墳底面より、前期・中期縄文式土器片4点が出土した。

第25号土壌（図127、写34-6）

本址は、D3h₃を主体に確認した。平面形は、長径3.0m・短径2.1mの楕円形を呈し、長径方向はN-41°-Wを指している。深さは39-46cmを測り、墳底面は平坦で、南東側に緩傾斜を呈している。覆土は4層に区分できる平行堆積を示し、埋め戻しによるものと思われた。覆土内より中期縄文式土器片9点が出土した。

第27号土壌（図128、写35-1）

本址は、台地西縁部の僅かに緩傾斜を呈するD3b₃に確認した。平面形は、長径方向N-68°-Eを指す楕円形で、大きさは長径2.3m・短径1.6mである。深さは20.5cmで、壁はおおむね垂直に立ち上がるが、南壁は中段で外反している。覆土は3層に区分する自然堆積を示し、最下層の堆積が多く認められた。遺物は、覆土内から前期縄文式土器片を主体に、中期縄文式土器片を少量含んで出土している。

第28号土壌（図129、写35-2）

本址はD3g₃に確認され、第29号土壌に近接する。長径方向N-19°-Wを指し、平面形は長径1.8m・短径1.2mを測る不整楕円形である。深さは31.0cm、墳底面は平坦でやや縮まっている。壁は東側が垂直に近い立ち上がりを示し、西側はそれより外方へ傾斜している。覆土は3層に区分でき、中間層がレンズ状堆積を呈するほかは、平行堆積を示した。出土遺物は無い。

第29号土壌（図130、写35-3）

本址は、第28号土壌と近接してD3g₃付近で確認された。平面形は、長径方向N-47°-Wを指し、長径1.4m・短径1.1mを測る楕円形である。深さは33cmを有し、墳底面は平坦である。壁は西側が外方へ傾斜し、東側にかけ垂直に近い立ち上がりを示している。覆土は、下層に北からの流れ込みがみられ、自然堆積と考えられた。出土遺物は無い。

3. 炉穴

第1号炉穴（図131、写35-4）

本址は、D3g₃・D3g₄に確認した。平面形は径93cm±6cmの円形を呈し、断面形は皿状で、

覆土は2層に区分できる。深さは10.5～18.5cmを測る。出土遺物は無い。

第2号炉穴（図132、写35-5）

本址は、D3e₁で確認した。平面形は長径方向N-3°-Eを指し、長径1.5m・短径0.9mの不整楕円形である。断面形は皿状を呈し、覆土は3層に区分され、焼土粒子・炭化粒子の遺存は下層になるにつれて少量となるものであった。墳底北の部分に、深さ4.5cmの窪みがある。出土遺物は無い。

第3号炉穴（図117、写35-6）

本址は、第16号土壌と重複してD3f₁で確認した。当初、第16号土壌と第3号炉穴は同一と考えられたが、焼土粒子の遺存範囲が限定されること・被覆土の堆積痕に差異がある等で2分した。ために、第3号炉穴の平面形状は、焼土粒子・炭化粒子の上面被覆の遺存範囲と土層断面だけに認めるだけである。本址の平面形は、長径方向N-7°-Eを指し、南を部分的に開いた「U」字形を呈す。焼土の範囲は径50cmで、焼土粒子・炭化粒子を含む層は10cm程の深さを測る。しかし、第16号土壌と分ける土層断面から、墳底までの深さは33cmを有したものと推定される。尚、焼土の堆積は自然によるものであった。検出された遺物は無い。

第3節 遺構出土遺物

1. 住居址出土遺物

本遺跡では、住居址2軒を検出した。伴出した土器は加曾利式式の土器だけである。第1号住居址は、中央部が土壌により攪乱されていたが、全体的にみると土器片の遺存状態は比較的良好で、そのほとんどが床面出土した。また、第2号住居址においては、土器埋設炉を有し、伴出土器から時期を明確にすることができた。

遺構出土の土器分類は、グリット出土土器分類に基づいて行った。

第1号住居址出土遺物（図133）

土器（図136、図137、写37、写38） 1は、（第7群土器Ⅱ類）波状口縁部片で、内ぎみに外傾して立ち上がる頸部から、口縁部で外へ突出する。2は、（第7群土器Ⅱ類）微隆起線と縄文帯を配している口縁部。3は、（第7群土器）薄手の口縁部片で、R.L縄文の重なったもの。4～6・23は、（第7群土器Ⅰ類）沈線と縄文を施したもの。7～22は、（第7群土器Ⅱ類）隆起線区画に縄文

を施したもので、同一個体片とみられるもの。24は、(第7群土器) 縄文だけを施したもの。25～31は、(第7群土器Ⅰ類) 沈線区画を有し、磨き無文帯と縄文がある。32～34は、(第7群土器) 縄文を配すもの。

土器(図140、写43、写44) 1～2・4～15は、(第7群土器Ⅱ類) 微隆起線区画に縄文が認められる。3は、(第7群土器) 同時期の底部片。4は、(第7群土器Ⅰ類) 無文で磨きがあるもの。

上製品(図143、写41) 上製円板1は、中央攪乱土壌の西端で、覆土中から出土した。長径7.2cm・短径6.8cm、表面はRL縄文を配し、重さ58.5gを測り、外縁に研磨加工痕がある。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、長石・砂粒・スコリア等を含んでいる。縄文中期のもの。土製円板2は、北東取付付近で確認された土器群と共に出土した。長径7.5cm・短径6.5cm、表面は微隆起線区画にRL縄文を施している。重さは68gで、外縁に研磨加工痕がある。色調は、赤褐色を呈し、焼成は普通である。胎土中に、長石・石英・砂粒等を含んでいる。縄文中期のもの。

石器(図143、写41) 棒状石器11は、攪乱土壌の中央部の覆土内から出土した。径1.6cmの円筒部から先端に向け、次第に平らになる。表面に斜めの擦痕が認められるが、用途については不明である。

第2号住居址出土遺物(図134)

土器(図137～139、写38、写49) 35は、(第7群土器Ⅰ類) 口唇部に縄文を施している。36は、(第7群土器Ⅰ類) 逆「U」字形に垂下する沈線区画内にLR縄文を施しているもので、薄手な丸味をもつ口縁である。37は、(第7群土器Ⅰ類) 口縁部に指頭による浅い横位沈線を配し、そこから垂下する沈線内に縄文を施したもの。38～41は、(第7群土器Ⅱ類) 微隆起線を有し、縄文を充填した口縁部片で、比較的内彎した口縁部内面が厚いもの。42は、(第7群土器) 円形刺突文・沈線文・縄文を施したもの。43～49は、(第7群土器Ⅱ類) 微隆起線に縄文を充填したもの。50～55は、(第7群土器Ⅰ類) 半截竹管による沈線区画内に縄文を施したもの。56～66は、(第7群土器) 縄文のみではあるが、加曾利E式に比定される土器片。67～71は、(第7群土器) 疎に縄文を有するもの。72・73は、(第7群土器) 器面に磨き整形痕のみを有するもの。74～80は、(第7群土器) 輪積み痕を残し、沈線を配す。色調は灰褐色で、焼成は普通。胎土中に、石英・長石等を含み、加曾利EⅢ式に伴う粗製土器とみられる。

土器(図140、写44、写45) 16は、(第7群土器Ⅰ類) 沈線区画内に無文と縄文を配したもの。埋設炉として使用されたものである。17は、(第7群土器Ⅱ類) 上部に微隆起線が認められる。西側覆土より出土した底部片である。18は、(第7群土器) 同時期の底部片である。19・21は(第7群土器Ⅱ類) 平縁の口縁部で、縄文との区画を横位の微隆起線で区画している。20は、(第7群

土器) 半截竹管による縦位沈線を配している粗製土器である。22は、(第7群土器Ⅱ類) 渦巻文の微降起線に、縄文を施したもの。17・18・22は覆土内出土土器片である。

土製品(図143、写41) 土製円板3は、南東壁付近の覆土から出土した。長さ4.15cm・幅4.0cm・重さ17.5gで、表面に微降起線があり、外縁の研磨加工痕は精緻である。色調はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、砂粒・長石粒等を含んだ縄文中期のものである。土器片鏝3は、土製円板とはほぼ同じ位置で出土した。長さ7cm・幅5.85cm・重さ74gで、刻み目幅は6.45cmを測り、刻み目数は2か所である。口縁部を利用したもので、表面には縄文が見られ、色調は褐色、焼成は良好である。胎土中に、砂粒・長石・石英等を含んでいる。縄文中期のもと思われる。

石器(図143、写41) 唐石片13は、炉址の南側1.85mの覆土から出土した。石質は安山岩で、幅8.7cm・厚さ4.4cm・残存する長さは8.1cmである。外面に4本の滑らかな接線がある。窪み石片18は、炉址の北側1m程の覆土内で出土した。石質は安山岩で、摩滅がはげしい。

2. 土壌出土遺物

第5号土壌出土遺物

土器(図139、写39) 81は、(第7群土器Ⅰ類)半截竹管による沈線と斜行縄文を施したもの。やや中央寄りの南側壁底面より出土したものである。

土器(図142、写45) 23は、時期不明な底部片である。

第17号土壌出土遺物

土器(図139、写39) 82～85は、(第5群土器Ⅲ類)貝殻版縁による櫛痕文を配すもの。覆土内から出土したものである。

第18号土壌出土遺物

土器(図139、写39) 86は、(第7群Ⅰ類)沈線と縄文を施したもの。上位覆土内からの出土である。

第19号土壌出土遺物

土器(図139、写39) 87・88は、(第5群土器Ⅲ類)三角文を配すもの。39は、(第5群土器)条線文のあるもの。遺物の87・89は、南西壁中段より出土した。

土製品(図143、写41) 土製円板片10は、推定で径5.2cm・厚さ1cm程を測るものと思われる。右孔で、孔径は推定値2.15cm、表面に微降起線がある。色調はにぶい黄褐色で、焼成は普通であ

る。胎上中に、砂粒・石英等を含んでいる。中期縄文のものと思われる。

第23号土壌出土遺物 (図135)

土器 (図139、図140、写39) 90は、(第7群土器II類) 微隆起線と縄文を施したもの。口唇部に縄文を配している。91は、(第7群土器II類) 微隆起線に縄文を施したもの。90と同様丸味を帯びた傳手の口縁である。92は、器面の磨耗が著しく不明な土器片で、沈線を配したもの。93～97は、(第7群土器I類) 沈線と、縄文を施したもの。98は、(第7群土器) 斜行縄文のあるもの。99は、(第7群土器) 無文帯が磨かれ、縄文が施されたもので、胴部片とみられる。100は、(第7群土器) 沈線のみを有したもの。

土器 (図142、写45) 24は、(第7群土器) 無文の口縁部片である。キャリバー形を呈する土器であろう。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は普通である。胎上中に砂礫を多く含み、長石・石英・雲母等も含まれる。25～30は、(第7群土器) 同一個体片とみられるもの。

石器 (図144、図145、写41、写42) 石皿片14は、土壌中央に直立して出土した。石質は安山岩で、表面には窪みを有する。20も石皿片で、石質は安山岩である。磨石片17は、複元接合したもの。石質は安山岩で、外面に横走・斜行の使用痕がある。19・21・22は、何らかの石器を製作する途中のものと思われる。19は、石質が砂岩で、長さ3.1cm・幅7.4cm・厚さ3.1cmの定形的に割ったもの。21の石質は片岩で、製作途中の石斧と思われる。長さ9.6cm・幅4.5cm・厚さ3.6cm。側面に縦走する研磨痕がある。22の石質は砂岩で、石斧片を再利用して、何らかを製作しようとしたものと思われるもの。長さ6.2cm・幅3.1cm・厚さ1.5cmである。

第24号土壌出土遺物

土器 (図140、写39) 遺物の101・104は南側墳底面、102・103は中央墳底面直上に点在していた。101は、(第7群土器I類) 丸味をもつ内彎ぎみの口縁部片で、横位に2条の沈線があり、縄文を施したもの。102は、沈線だけがあるもの。103は、無文部は磨かれ、一部に縄文が施してある胴部片。104は、縄文のみが施されている。いずれも細片であるが、縄文中期のものと思われる。

第25号土壌出土遺物

土器 (図140、写40) いずれも覆土内よりの出土で、105は、(第7群土器II類) 微隆起線と縄文を施したもの。106～108は、(第7群土器I類) 沈線と縄文を施したもの。109～114は、(第7群土器) 縄文のみを施したもので、110～112は疎な施文、113は磨き痕、114は縄文の一部を施したものの。

第27号土壇出土遺物

上器(図140、図141、'540) いずれも覆土内よりの出土で、115・121~139は、(第7群土器) 珠に縄文帯を配すもの。140は、(第7群上器) 縄文を施したものであろう。143は、(第7群土器) 磨き痕がある。141・142は、(第7群上器1類) 沈線と縄文を施したもの。116~120・144は、(第2群土器) 表裏共に条痕文を有し、繊維を含んでいる。

第4節 グリット出土遺物

1. 土器

本遺跡の表土中から出土した土器は、天箱にして約7箱を得た。出土は主に、本遺跡の北縁部からやや中央へ寄った比較的平坦な部分と、中央より南側緩斜面に至るまでの部分とに多かった。出土土器はすべて破片であり、縄文時代の早期から後期にわたっている。

第1群土器	田戸下層式土器	第6群土器	阿玉台式土器
第2群土器	茅山式上器	第7群土器	加曾利E式土器
第3群土器	黒浜式土器	第8群土器	加曾利B式土器
第4群上器	諸磯式土器	第9群土器	後期の土器
第5群土器	浮島式土器		

第1群土器(図146-1)

早期中葉の田戸下層式に比定される土器である。1は、肥大したアナダラ科の貝による腹縁文で、横位沈線を配す。沈線間隔は広く、施文は浅い。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。胎土中に砂粒・石英・長石等を含んでいる。

第2群土器(図146-2~5)

早期後葉の広義の茅山式に比定される土器である。2・3は、表裏器面が若干剥落しているがともに条痕文をもつ。4は、厚手で斜行する条痕文を施し、内側に繊維痕を有す。5は、表裏とも条痕文を施した底部である。焼成は普通で、色調は2が赤褐色のほかにはにぶい橙色を呈し、胎土中に繊維を多く含んでいる。

第3群土器(図146-6~22)

前期前葉の黒浜式に比定される土器である。6~15は胎土中に繊維を含み、薄手で半截竹管に

より直線・曲線の平行沈線と刺突文が施してある。焼成はいずれも良好で、色調は灰褐色を呈する。胎土中に繊維・砂粒・石英・長石等を含んでいる。16は、繊維を含み、半截竹管文と縄文を施している平縁な口縁部で、LRの地文に横位の有節沈線を施している。口唇部にも半截竹管による有節沈線を施している。色調は灰褐色で、焼成は良好である。胎土中に繊維・石英・長石等を含んでいる。17は、繊維を含む薄手の胴部片で、貝殻腹縁文を施している。色調はにぶい褐色で、焼成は不良、胎土中に繊維・砂粒・石英・長石等を含んでいる。18・20は、繊維を含み、RLの斜行縄文を施した比較的厚手の土器片である。19・21・22は、LRの縄文を有する。色調は、21が赤褐色のほかはにぶい褐色である。焼成は全て不良で、胎土中に繊維を含んでいる。

第4群土器 (図146-23~37)

前期後葉の諸環式に比定される土器である。

半截竹管による施文を配すもの。23は、比較的薄手の口縁部で、横位に節の密な有節沈線を施してある。24~30は、同一個体とみられ、半截竹管による幾何学的模様が施されている。31は、薄手の直線的な器形の口縁部片で、口唇に半截竹管による刺突文、外面には微隆起線を区画として斜行沈線と刺突文を配している。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に砂粒・石英・長石・雲母等を含んでいる。

貝殻腹縁文を配するもの。32~36は、縦位に疎な貝殻腹縁文を施し、37は、貝殻腹縁文に波状の貝背擦痕を施している。色調は、35が赤褐色、37が暗褐色のほかはにぶい褐色である。焼成は良好で、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、37は石英粒を多く含んでいる。

第5群土器 (図147-38~62)

前期後葉の浮島式に比定される土器である。38は、丸味を帯びた口縁部片で、3条の横位沈線がある。41は、貝殻腹縁文の押圧地文に横位有節沈線がある。42は、横位平行沈線に角へらによる刺突文を施している。43は、貝殻腹縁の押圧地文に平行沈線を施している。61は、比較的薄手の口縁部で条線文を配している。62は、61と同一個体とみられる条線文を有する破片である。44・45は、貝殻腹縁による押圧文を施しており、施文間隔は密である。46~52は、貝殻腹縁による擦痕を有し、浮島式では比較的器厚が厚い。46は、その口縁部片で外傾角がやや大きい。53~55は、平縁な腹縁による波状貝殻腹縁文を配する比較的薄手の土器片である。40は、スリットをもつ口縁部片で、三角文を横に施している。56・57は、角へらの支点文差による三角文を施す比較的薄手の土器片である。39は、指頭押圧痕を有するもので、口唇部外壁に縦線文を施している。58~60は、指頭による整形痕がある。59は、内削ぎの口縁部片で、60は、上部の厚い胴部片である。いずれも色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良好で胎土中には砂粒を比較的多含し、長石・石英等を含んでいる。

第6群土器 (図147-63・64)

中期前葉の阿玉台式に比定される土器である。63は、たいらな口唇を持ち、縄文を地文として平行沈線間に半截竹管による爪形文を施している。64は、R L原体の圧痕文を施し、薄い口唇である。

第7群土器 (図147-65-68・図148-69-85・94-98)

中期後葉の加曾利E式の新しい方に属するものである。

沈線区画内の無文帯は磨かれ、縄文の充填を施したものの。65は、内彎する口縁部で、横位沈線下に半筒円形の沈線区画文を有し、R L縄文を施し、更に垂下する沈線下にも縄文を配している。66は、薄手の口縁部片で、2条の横位沈線区画に縄文を施している。74-77は、半截竹管による沈線区画をもち、斜行縄文を施したものの、加曾利EⅢ式の土器片。色調は、赤褐色・褐色・暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、石英・長石等を含んでいる。

微隆起線を配したものの。78-80は、微隆起線を有した破片であろう、指頭による沈線内に斜行縄文を施したものの。加曾利EⅢ式に加わる。84・85は、同類底部片で外傾角が大きい。微隆起線を有し、縄文を施したものの。67・68は、微隆起線内に斜行縄文を施したものの。69は、波状口縁部片で、指頭による沈線で僅かに微隆起線を配し、縄文を施している。73は、同類片と見られる。70-72・81-83は、口縁部片と胴部片で、厚手のものと薄手のものとに分けられる。一部では、紐状に貼り付けた粘土を指頭により浅い沈線と微隆起線に整形したものを含む。94-98は、無文の底部片で中期のものと考えられる。色調は、赤褐色・褐色・にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、石英・長石等を含んでいる。

第8群土器 (図148-86・87)

後期中葉の加曾利B式に比定される土器である。86は、丸味を帯びた口縁部片で、3条の横位沈線を配し、下位にヘラナデ痕がある。内面は、棒状工具による研磨の器面整形痕を残している。87は、スリットを有する薄手の口縁部片で、2条の横位沈線に斜行沈線を加え、下にヘラナデ痕がある。色調は、にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に、長石・石英等を含んでいる。

第9群土器 (図148-88-91・図149-92-95)

後期に比定されると見られる土器である。88は、I. R縄文を地文に、斜行沈線を配す。加曾利B式の範疇に加わると思われる。89・90は、沈線に斜行縄文を充填し、無文帯にヘラ磨き痕を有する。91-93は、外反して立ち上がる比較的厚手の胴部片で、2-3条の沈線を配し、無文部は精緻なヘラ磨きを施す。色調は、88が灰褐色を呈するほかはにぶい橙褐色を呈し、焼成は良好である。

る。胎土中に、砂粒・石英・長石・雲母を含み、89は特に石英を多含する。

2. 土製品

土製円板 (図143、写41)

番号	出土位置	径(cm)	部位	時期	備 考
4	D ₂ -	5.3	胴部	縄文中期	孔をうかがとうとしたのか、表面に1.6cmの回転削り痕を有す。
5	C ₂ -	3.9	胴部	縄文 —	孔をうかがとうとしたのか、表面の中心に錐状工具をあてがった痕跡が認められる。

土器片鏝 (図143、写41)

番号	出土位置	長径(cm)	短径(cm)	質量(g)	部位	時期	刻目の長さ(cm)	刻目の数	備 考
7	D ₂ -	5.1	3.3	24.6	胴部	縄文中期	4.0	2	刻目は作成痕 縄文
8	C ₂ -	5.0	3.5	24.5	胴部	縄文中期	3.4	2	刻目は使用痕 縄文
9	C ₂ -	5.8	3.5 (現)	31.3	胴部	縄文中期	—	1 (現)	刻目は作成痕 沈線区面尤も縄文

3. 石器

磨石15 (図144、写41) は、D3j₂、16は C3j₂ で検出した。石質は安山岩で、同一個体片である。

砥石23・24 (図144、写41) は、石質は凝灰岩で、比較的新しいものと思われる。出土位置は、23が D3b₂・24が D3d₂ である。

棒状石器12 (図144、写41) は、C3i₁ で検出された。石質は安山岩で、握りの部分に潰し痕と研磨痕が認められ、先端部に打撃痕がある。たたき石として利用されたものだろうか。

残核25・26 (図144、写41) は、チャートの石質の小礫に、直接打法で加撃して剥がした残核である。加撃方向は一定しない。出土位置は、25が E3a₂・26が E3a₂ である。

第5節 まとめ

打越A遺跡において確認された遺構は前述のごとく、住居址2軒・土壇29基・炉穴3基であり、遺物も早期縄文式土器から後期縄文式土器までが確認されている。調査前より、同一遺跡として考えられた打越C遺跡においても、ほぼ同時期にわたる遺物が確認されているが、ここでは打越A遺跡の調査によって明らかになった事実と、問題点について記述することにする。

住居址については、本遺跡北東部の平坦な台地上に確認された第1号と、南縁部の緩傾斜面に確認された第2号は、中期後葉の縄文時代に営まれた住居址である。共に長径方向は異なるが、径4.5m程の円形プランを呈し、第1号は北東方、第2号は北西方にふくらみ4か所の柱穴を有している。第2号については、中央に土器埋設炉を設け、床面は硬く踏み固められていた。埋設土器は、加曽利B式の新しい方に比定される土器で、胴部のみが埋設されて残ったが、その様態から、使用頻度が高いかゆえに口縁部辺は欠損し、次第に炉床が拡張し、掘削されていった様に見える。埋設土器内の焼土の堆積は、底部に塊状となっており、炉床面での堆積量より遙かに多かった。このことは、付近の同時期に比定される赤松遺跡(註1)のそれと差異があり、使用方法が異なったのであろうかとも思える。第1号においては、中央部が擾乱されていたので不明点を多く含むが、焼土量・土器の点在からやはり土器埋設炉を有していたものと考えられる。この第2号の位置する台地は、打越C遺跡で確認された住居址群の位置する台地からの延長部において、等高線をほぼ同じにしている。土器については、既に前節で詳述したので省くが、打越C遺跡との住居址の関連を有して、南側に開口する比較的馬蹄形の配置で形成された小集落であったのではないかと見ることが出来る。

土壇については、上壇29基のうち、遺物を伴った土壇は第5号・第17～19号・第23～25号・第27号の8基だけである。このうち遺物で土壇の時期決定の資料となり得たのは第5号・第19号・第23号で、中期縄文時代に比定される。第23号については、第2号住居址に隣接して位置し、遺物の遺存から廃物の投棄場・廃物再利用のための貯蔵穴と考えられるが、何らかの祭祠に使用された可能性も具備する。土壇の形態はおおむね円形と楕円形に分けられ、更に鉢状・皿状の断面形に分けることができる。

円形で鉢状 第8・10～12・19・24号

楕円形で鉢状 第2・7・9・13・15・17・18・25・27～29号

円形で皿状 第6・22号

楕円形で皿状 第1・3～5・14・16・20・21号

しかし、深さ・ピットの有無・覆土の堆積・確認した位置等には差異があり、規則性は認められない。ただ、D3区の比較的平坦な北縁部と南縁部の傾斜面手前で多くが確認されていることか

ら、位置的に比高12mを測る沖積地と何らかの関係があったであろうことを示唆している。

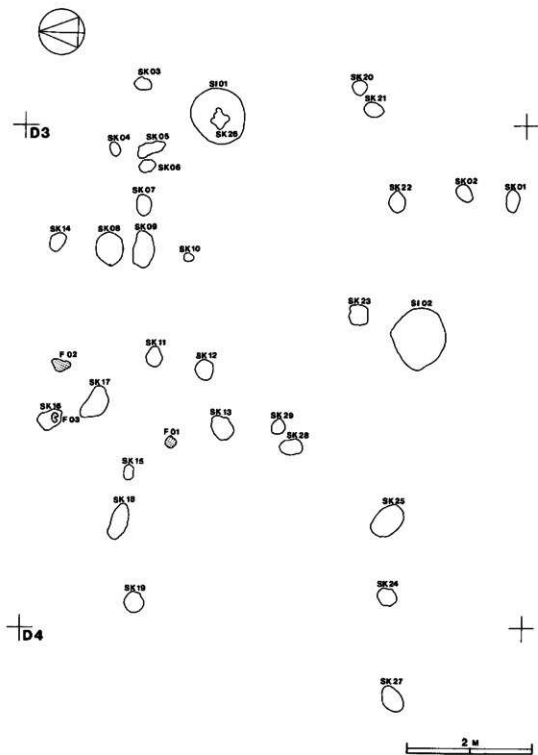
炉穴については、3基確認され、いずれも焼土粒子・炭化粒子が上面被覆していたが、下層は微薄となるものであった。D3区の北縁辺部西方に片寄り、形状は円形と楕円形で規模的には径1m内外で、塘底面の一部に窪みを有している。遺構に伴って検出された遺物は皆無であるが、第16号土壙と重複する第3号は、土壙より後行するものであり、重複部の様相から、人為的に埋め戻された後炉穴として使用され、開口部辺に焼土の自然被覆を有したのではないかと考えられる。時期的には幾基かの土壙と同一時期、若しくはそれに近い時期に使用されたと考える。位置・形状・焼土被覆の状態等は、早期縄文時代の炉穴を確認している遠下遺跡(注2)・鹿野場遺跡(注3)・廻り地B遺跡(注4)とも類似せず今後の資料を待つ他にない。

注1 「電ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告Ⅳ―赤松遺跡」財団法人茨城県教育財団 昭和55年

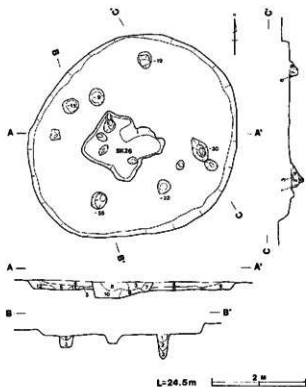
注2 日立市教育委員会「日立市遠下遺跡調査報告書」昭和50年

注3 佐藤政則「鹿野場遺跡」『茨城県史料』昭和54年

注4 財団法人 茨城県教育財団調査課により昭和54年度発掘調査された。



第100図 遺構分布図



第101図 第1号住居址・第26号土塊

S 101 土層解説 A-A'

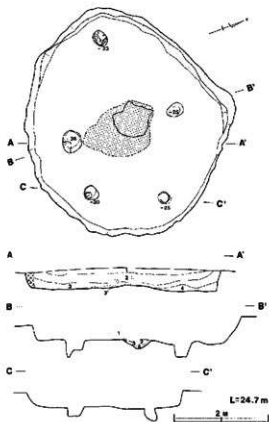
3. 暗褐色(主線址による擾乱)
4. 褐色(ハードローム中ブロック少量含む)
5. 褐色(ローム中ブロック中量含む)
6. 褐色(ハードローム大ブロック多量含む)
7. 濃い赤褐色(炭化材粒子微量、ローム粒)
子層を含む状態
8. 褐色
9. 褐色
10. 褐色(ローム中量、ローム螺旋状ブロック多量含む)
11. 褐色(ハードロームブロック多量含む)
12. 褐色

土層解説 B-B'

1. 褐色(ロームブロック多量含む)
2. 褐色(粘り気あるローム粒子を含む)
3. 褐色(ロームブロック多量含む)

土層解説 C-C'

1. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)
2. 褐色(腐敗土、ロームブロック等を含む)
3. 褐色(ロームブロック少量含む)
4. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)
5. 褐色(粘性強いロームブロック)
6. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)
7. 褐色(ローム粒子中にロームブロック少量含む)
8. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



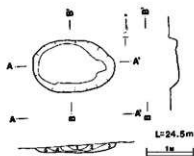
第102図 第2号住居址

S 102 土層解説 A-A'

1. 褐色
2. 褐色(焼土粒・灰殻・ハードローム小ブロック少量含む)
3. 褐色
- 3'. 褐色(焼土粒子・炭化粒少量含む)
4. 褐色(ハードロームブロック小中量含む)

土層解説 B-B'

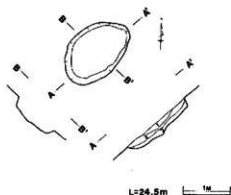
1. 暗赤褐色(炭化材粒子多量、焼土粒少量含む)
2. 暗赤褐色(焼土粒少量含む)
3. 暗赤褐色(焼土粒少量含む)
4. 褐色(ハードロームブロック含む)



第103図 第1号土層

S K01 土層解説 A-A'

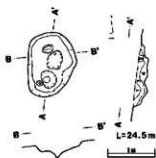
1. 褐色色(ハードローム小ブロック多量含む)
2. 明褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(ハードローム中量・ブロック中量含む)
4. 褐色
5. 褐色(ハードローム中ブロック多量含む)



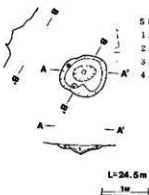
第104図 第2号土層

S K02 土層解説 A-A'

1. 褐色(灰殻)
2. 褐色(焼質・ローム顆粒状ブロック多量含む)
3. 明褐色(ソフトローム・床土のブロック化)



第105図 第3号土壤



第106図 第4号土壤

SK03 土壤解説 A-A'

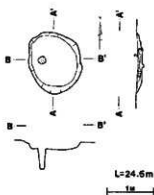
1. 棕色(ハードローム中アブロック少量含む)
2. 褐色(軟弱ロームにハードロームアブロック少量点在)
3. 褐色(ハードローム小一中アブロック中量含む)
4. 褐色(ハードローム正)

SK04 土壤解説 A-A'

1. 暗灰色(ローム粒が多量含む)
2. 褐色(ローム小アブロック)



第107図 第5号土壤



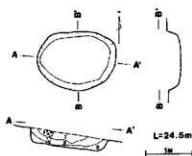
第108図 第6号土壤

SK05 土壤解説 A-A'

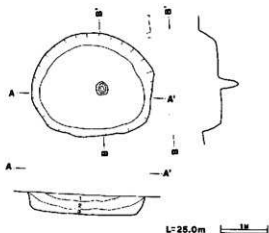
1. 褐色(ローム粒子を含む)
2. 暗褐色(ローム粒子を含む)
3. 褐色(ローム粒を含む)
4. 褐色(ローム粒子多量含む)
5. 黒褐色

SK06 土壤解説 A-A'

1. 灰白色(地上アブロックを含む)
2. 暗褐色(熟土粒子を少量含む)
3. 褐色(ローム粒子を含む)



第109図 第7号土壤



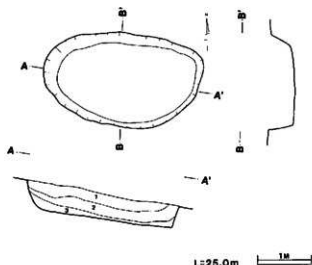
第110図 第8号土壤

SK07 土壤解説 A-A'

1. 褐色(ローム粒子を含む)
2. 暗褐色(ローム粒子少量含む)
3. 褐色(ローム粒子多量含む)

SK08 土壤解説 A-A'

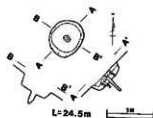
1. 褐色(暗褐色腐敗上・ロームアブロックを含む)
2. 褐色(粘性強いロームアブロック多量、腐敗上腐敗点少量含む)
3. 褐色(粘性強いロームアブロック多量含む)



第111図 第9号土壌

S K09 土層解説 A-A'

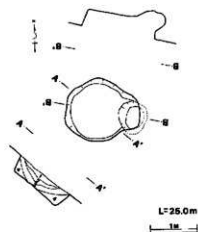
1. 褐色(暗褐色腐敗土・ロームブロックを含む)
2. 褐色(粘性強いロームブロックを含む)
3. 褐色(粘性強いローム)



第112図 第10号土壌

S K10 土層解説 A-A'

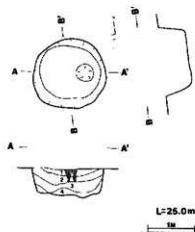
1. 褐色(腐敗土中にロームブロック少量含む)
2. 褐色(粘性強いロームブロック及び暗褐色・腐敗土少量含む)
3. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



第113図 第11号土壌

S K11 土層解説 A-A'

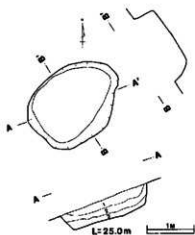
1. 褐色(暗褐色の腐敗土の斑点を多量含む)
2. 褐色(草木腐敗土・ロームブロック少量含む)
3. 褐色(ロームブロック・腐敗土が斑点状に含む)
4. 褐色(粘性強い、ロームブロック多量含む)



第114図 第12号土壌

S K12 土層解説 A-A'

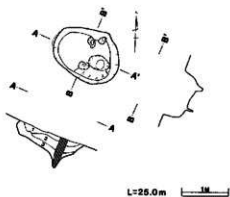
1. 褐色(ロームブロックを含む)
2. 褐色(やわらかいローム粒子中に粘性の強いロームブロック少量含む)
3. 褐色(粘性強いロームブロック多量・腐敗土少量含む)
4. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



第115図 第13号土坑

S K 13 土層解説 A-A'

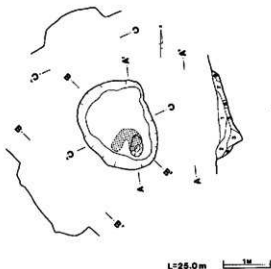
1. 褐色(ロームブロック・腐敗土含む)
2. 褐色(ローム粒子中にロームブロック中量混入)
3. 褐色(粘性強いロームブロック多量を含む)



第116図 第14号土坑

S K 14 土層解説 A-A'

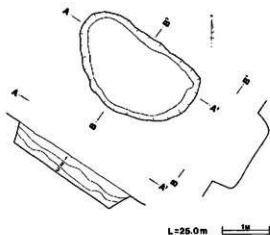
1. 褐色(ローム粒子中にロームブロック少量・腐敗土少量含む)
2. 褐色(ローム粒子中にロームブロック中量含む)
3. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



第117図 第16号土坑・第3号炉穴

S K 16 土層解説 A-A'

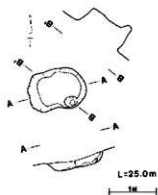
1. 褐色(腐敗土多量・ローム粒子少量・粘土量含む)
2. 褐色(粘性強いロームブロック多量・腐敗土中量含む)
3. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)
4. 褐色(ローム粒子中にロームブロック中量混入)
5. 褐色(ローム粒子中にロームブロック中量混入)
6. 不褐色(木炭)
7. 褐色(腐敗土多量・ローム粒子少量含む)
8. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



第118図 第17号土坑

S K 17 土層解説 A-A'

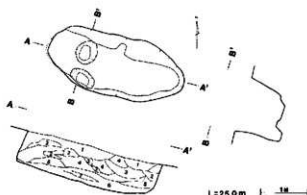
1. 褐色(ローム小ブロック中量含む)
2. 褐色
3. 褐色(ローム中一大ブロック多量含む)



第119図 第15号土坑

S K 15 土層解説 A-A'

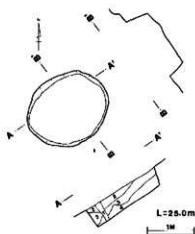
1. 暗褐色(ローム小・ハードブロック多量・黒色腐敗土中量・粘土粒子多量・炭化粒子微量含む、軟弱)
2. 褐色(ローム粒子多量含む)



第120図 第18号土坑

S K 18 土層解説 A-A'

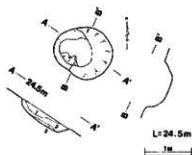
1. 暗褐色(ローム小ブロック多量含む、軟弱)
2. 暗褐色(ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(ローム小ブロック多量含む、軟弱)
4. 褐色(ローム小～中ブロック多量含む、軟弱)
5. 褐色(ローム中～大ブロック多量含む、軟弱)
6. 褐色(ハードローム大ブロック少量含む)
7. 褐色(ハードローム)



第121図 第19号土坑

S K 19 土層解説 A-A'

1. 暗赤褐色(水浸れによる浸漬)
2. 褐色(ローム小ブロック中量含む、軟弱)
2. 褐色(ローム小ブロック中量含む、硬い)
4. 褐色(ローム小ブロック少量含む)



第122図 第20号土坑

S K 20 土層解説 A-A'

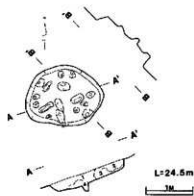
1. 褐色
2. 褐色(黒色斑文少量点在、ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(ハードローム小～中ブロック中量含む)



第123図 第21号土壌

S K 21 土層解説 A-A'

1. 褐色(ハードローム中ブロック少量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック多量・ローム殻多量含む)
3. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
4. 褐色(ハードロームブロック)
5. 褐色(ハードロームブロック少量含む)



第124図 第22号土壌

S K 22 土層解説 A-A'

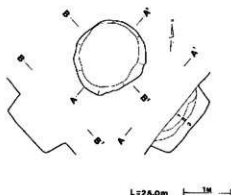
1. 褐色(ハードローム顆粒状ブロック少量含む)
2. 褐色
3. 褐色(ハードローム小ブロック多量含む)
4. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)



第125図 第23号土壌

S K 23 土層解説 A-A'

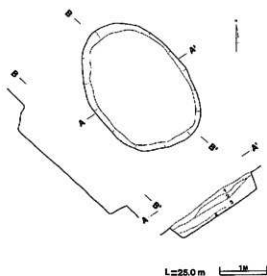
1. 褐色(主根柱による擾乱・褐色ハード中ブロックを中量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック中量含む)
3. 褐色(ハードローム小中ブロック少量含む)
4. 褐色(粘着性有す)
5. 褐色(ハードローム中ブロック少量含む)



第126図 第24号土壌

S K 24 土層解説 A-A'

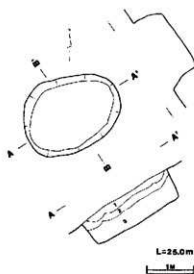
1. 褐色(ハードローム小ブロック中量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(硬い)



第127図 第25号土壌

S K 25 土層解説 A-A'

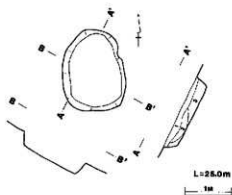
1. 暗褐色(黒色斑文を含む)
2. 褐色(ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色
4. 褐色(粘石性を有す)



第128図 第27号土壌

S K 27 土層解説 A-A'

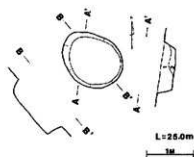
1. 暗褐色(黒色斑が多量含む)
2. 褐色(黒色斑が少量・ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色



第129図 第28号土壌

S K 28 土層解説 A-A'

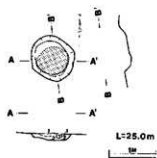
1. 褐色(しまりあり硬い)
2. 褐色(ローム中ブロック少量含む)
3. 褐色(ハードローム小ブロック中量含む)



第130図 第29号土壌

S K 29 土層解説 A-A'

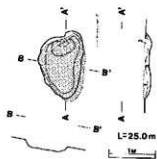
1. 褐色
2. 褐色(ローム小ブロック中量含む、粘石性強)



第131図 第1号炉穴

F01 土層解説 A-A'

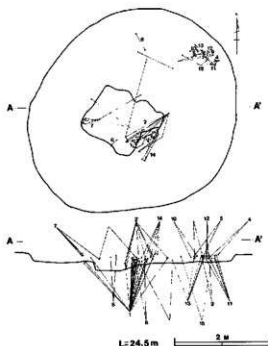
1. 赤褐色(焼土)
2. 褐色(ローム粒子多量・焼土多量・黒色アモック微量含む)
3. 褐色(腐植土中量・焼土微量含む)



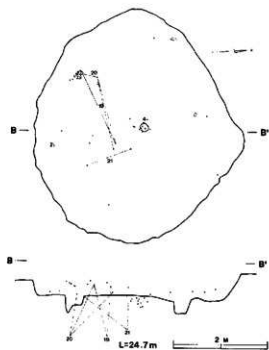
第132図 第2号炉穴

F02 土層解説 A-A'

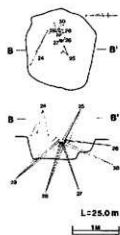
1. 赤褐色(焼土粒子多量・炭化粒少量含む)
2. 赤褐色(焼土粒子少量・炭化粒微量含む)
3. 黒褐色(焼土粒子微量・炭化粒微量含む)



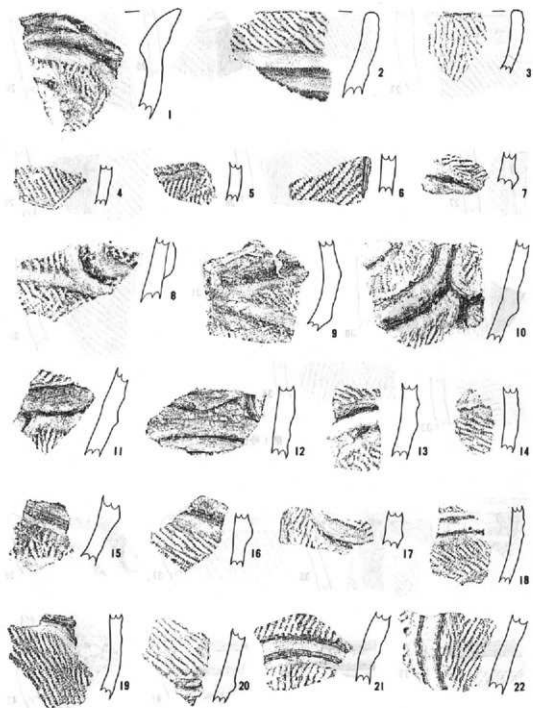
第133図 第1号住居址・第26号土壤接合遺物分布図



第134图 第2号住居址接合遺物分布图



第135图 第23号土壤接合遺物分布图



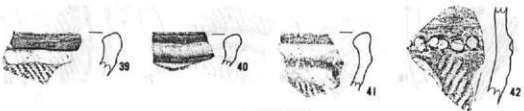
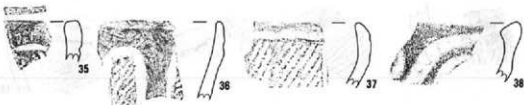
第1号住居址



第136图 遺構出土土器



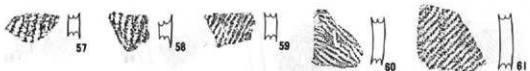
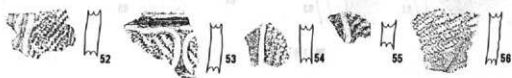
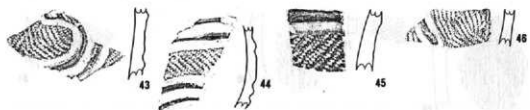
第1号住居址



第2号住居址



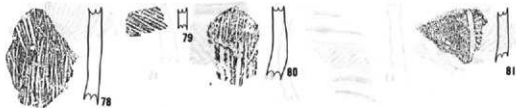
第137回 遺構出土土器



第2号住居址

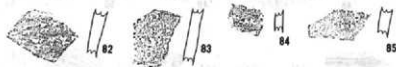
第138图 遺構出土土器





第2号住居址

第5号土境



第17号土境

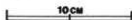


第18号土境

第19号土境



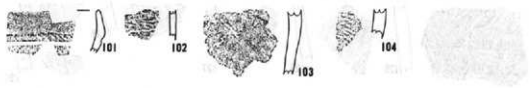
第23号土境



第139回 遺構出土土器



第23号土壤



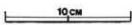
第24号土壤



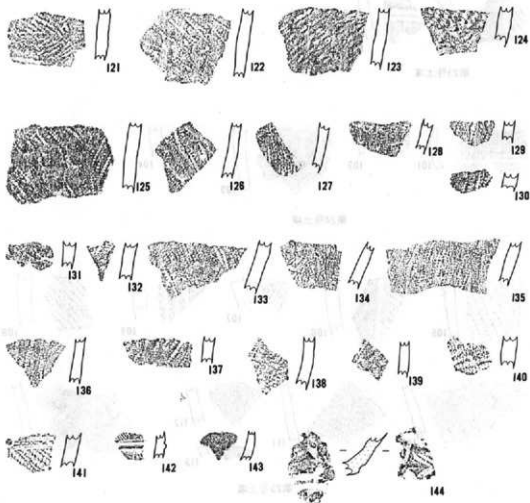
第25号土壤



第27号土壤

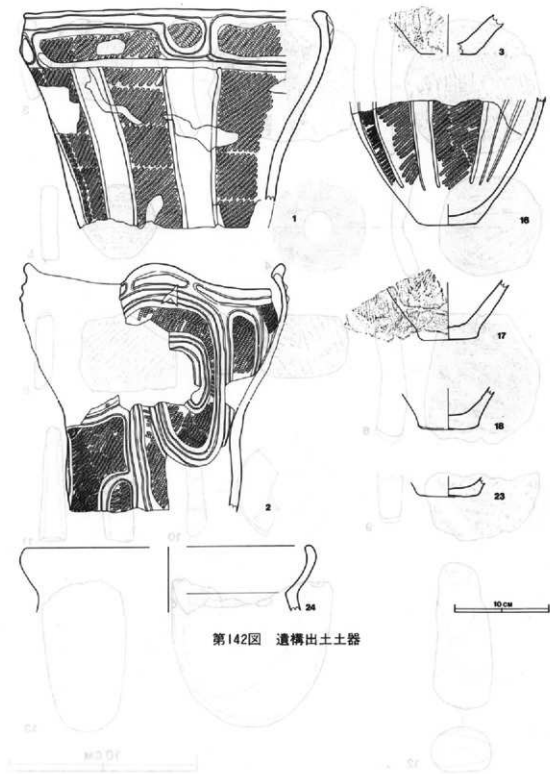


第140图 遺構出土土器



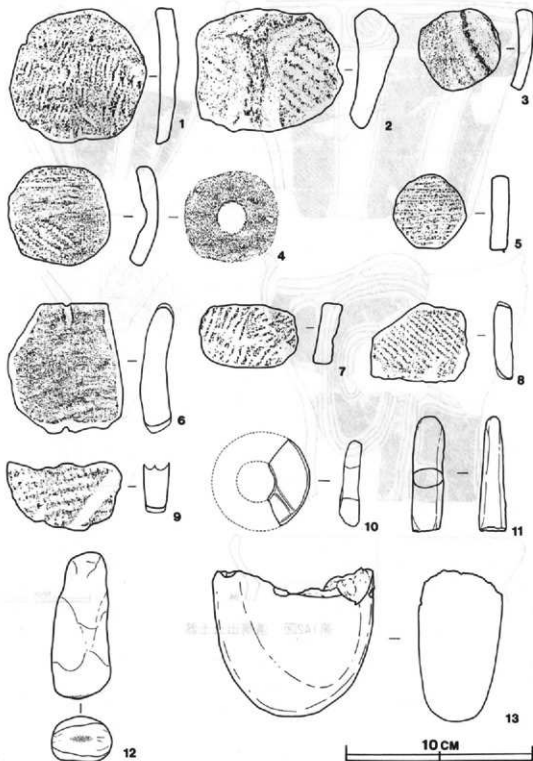
第27号土坑

第141图 遺構出土土器

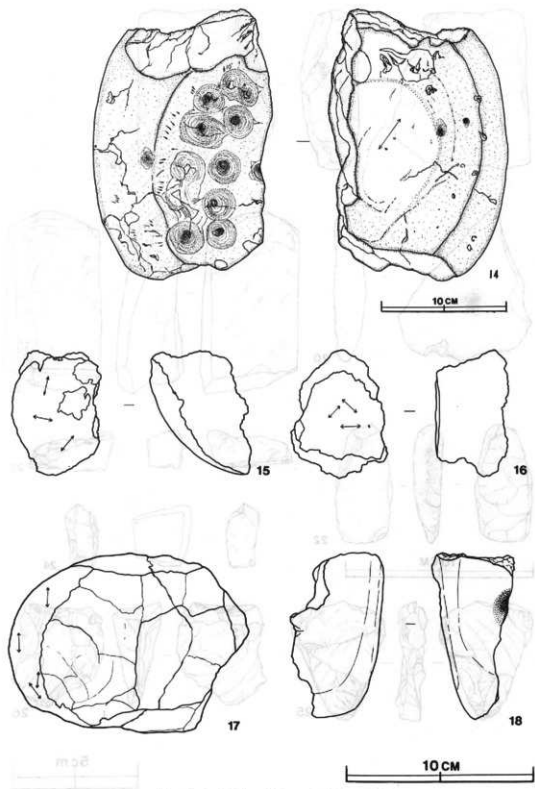


第142図 遺構出土土器

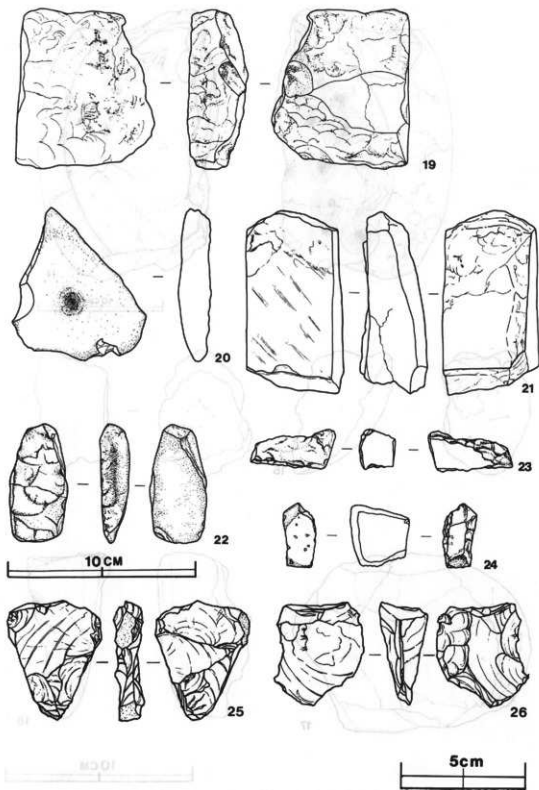
藤子、高城土、土山土、伊奈、野丸、田代町



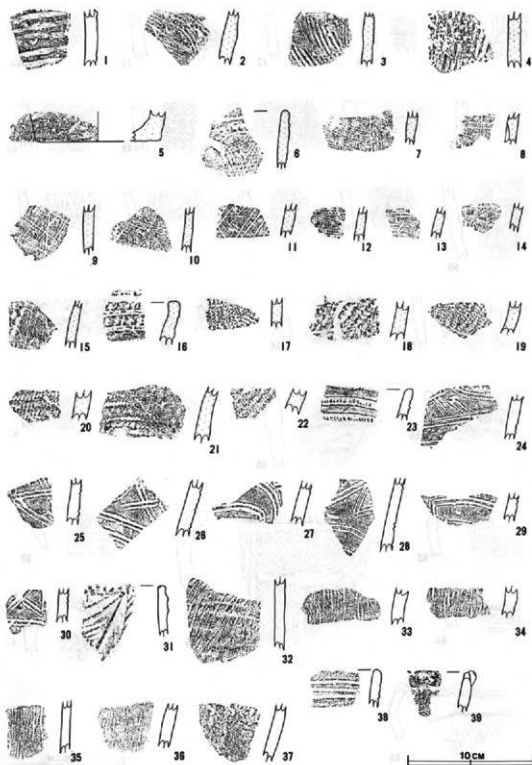
第143図 遺構・グリット出土 土製品・石器



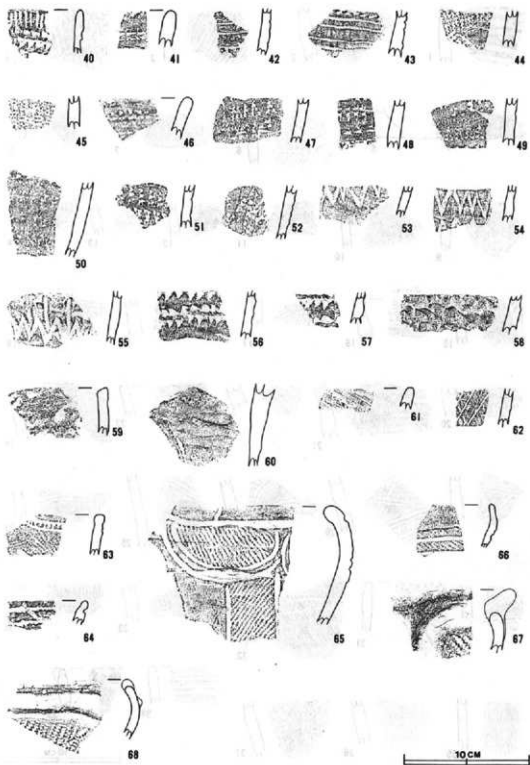
第145図 遺構・グリット出土 石器



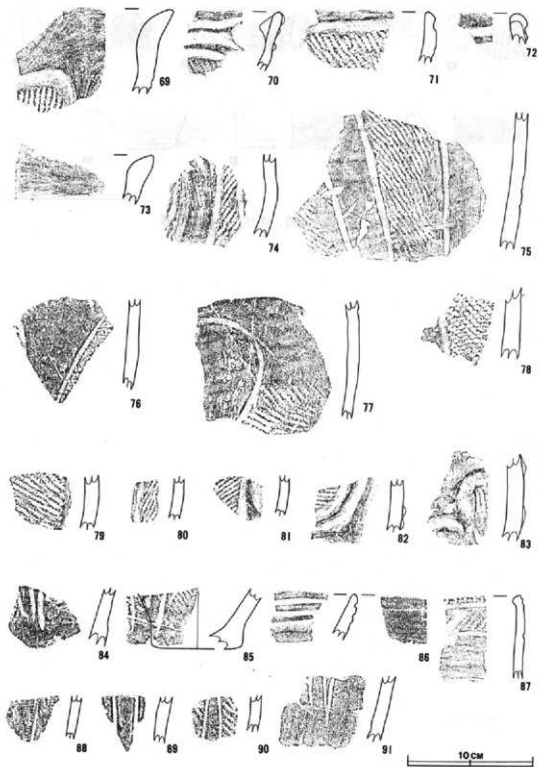
第145図 遺構・グリット出土 石器



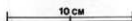
第146図 グリット出土土器



第147図 グリット出土土器



第148図 グリット出土土器



第149図 グリット出土土器

出土土器のスケッチ 1954年

第6章 打越C遺跡

この遺跡（図99、写46）は、別所集落の西側谷をへだてた舌状台地の東側に存在し、現況は山林である。なお、西側には打越A遺跡がある。

第1節 調査経過

昭和54年6月26日～7月4日 遺跡エリア内除草・調査区杭打ち作業・プレハブ移転・器材搬入等、発掘調査の諸準備を完了する。

7月5日～7月17日 A1区・A2区・B1区・B2区の遺構確認調査を実施するが、山林伐開地のため木根が多く検出作業が停滞する。表土除去において、条痕文系土器片・前期縄文式土器片・土師器片を少量ながら検出し、B2区に遺構が集中していることが判明する。

7月18日～7月24日 降雨を利用し、大羽谷津遺跡の岡面整理・当該遺跡の今後の計画等を協議。B3区の遺構検出作業も行う。B3区より前期～後期縄文式土器片を出土し、遺構状落ち込みを多数検出する。

7月25日～7月29日 A1区において溝1条、B1区において土壇状遺構4基と不明プラン2基を検出。B2区に位置する塚の調査を開始すると共に、第1号住居址・第1号から第4号土壇の調査を開始する。A1区・B1区・B2区の遺構状落ち込み部のグリット拡張とベルト除去作業をし、併せてC3区の遺構検出作業を開始した。

7月30日～8月9日 第1号溝・第1号から第3号土壇の調査終了。B2区の土壇4基の他3基の重複土壇を含め、第4号から第11号土壇までの調査を開始。B2区・B3区の遺構検出作業がほぼ終了のため、遺構状落ち込みが密集しているB3区東側のグリット拡張作業を実施した。結果、住居址遺構3軒・小径の遺構状落ち込みを含め18基の土壇状遺構を検出した。当遺跡における遺構の分布は、遺跡中央の比較的平坦な部分に多く、遺物の検出は北方に早期～前期縄文式土器片、南方に中期縄文式土器片を主体に伴出した。なお、A2区・B3区での遺構の確認は無く、出土遺物も無かった。

8月9日～8月19日 第1号住居址調査、B3区で検出された坩上面の清掃と遺物の配置図を作成する。第12号土壇の調査と、B4区の遺構検出作業を開始した。

8月20日～8月26日 B3区の調査区拡張部の清掃を行い、ベルト土層実測・除去作業を実施。第2号から第4号住居址の調査を開始する。

8月27日～9月2日 第13号から第30号土壇の調査を開始する。遺構検出面からの深さは20～

40cm程と浅く、出土遺物は早期縄文片が微量ながら出土した。以前より継続している住居址については、遺物・焼土・炭化物等が床面より浮いていた。遺物としては前期から後期の縄文片が出土している。これらは遺構検出作業と調査区拡張作業との併行で実施した。

9月3日～9月6日 4基の土壌と、第2号・第4号住居址の床面の精査及び焼土遺存部の調査を開始した。

9月7日～9月12日 住居址の床面が判然としなため、床面に十字のトレンチを設定し精査を実施する。調査の完掘状況写真を撮影し、図面等の確認を行い調査を終了した。

第2節 遺 構

1. 住居址

第1号住居址（図155、写47）

本址は遺跡北部のB2e₂を主体に確認し、東側には第7号～第9号土壌が隣接する。平面形は西に張ったほぼ円形に近いプランで、長径5.8m・短径5.3mの大きさである。壁は外傾しているが、南東壁のみは皿状の立ち上りを示している。床面までの深さは30cm程であるが、全体に南西方への僅かな傾斜がみられ、最深面は37cmを測る。床面は明褐色を呈して軟らかく、西壁下に長径1m・短径95cm・深さ80cmを測る不整形な土壌がある。主柱穴とみられるピットが5か所にある。覆土は、人為的埋め戻し状の堆積である。遺物は、覆土内から前期・中期縄文式土器片を出土した。

第2号住居址（図156、写48）

本址は、以下第4号までの住居址と同様、遺跡南側のほぼ平坦な台地上に確認され、北東に面して並ぶ3軒の住居址のなかでは南東に位置している。平面形は径約6.5m程の円形で、深さは約20cm程である。壁は概ね外傾しているが、東壁のみが垂直に立ち上がっている。床面は平坦であるが幾分東に傾斜し、壁周辺は軟らかく、中央部だけが僅かに踏み固められている。ピットは14か所に検出したが、規則性は無く柱穴の可能性は薄い。中央部に焼土が認められたが検出面で確認されたもので、土層実測図に示す通り埋め戻しによるものであった。覆土は14層に区分したが2層を基調としている。検出した遺物は、覆土内からの前期・中期縄文式土器片、片面礫器1点と第3号住居址出土の土製円板片に接合可能な土器片1点を検出し、床面より中期縄文式土器片10点を出土した。

第3号住居址(図157、写49)

本址はB3d₀を主体に確認され、第2号住居址・第4号住居址の中間に位置する。北東に張る円形に近い平面形を呈し、長径方向N-66°-Eを示し、長径5.1m・短径4.7mを測る大きさである。本址は検出面において、おびただしい焼土・炭化物を確認し精査に至ったが、上面のみ被覆しただけで中層においてはその点をも認められなかった。床面は全体が軟らかいソフトローム面で、部分的な色調の変化すら認められなかった。ピットは8か所にあったが、支柱穴とみられるのはP₁~P₄で、長径方向より5°程南にずれて設けられていた。支柱穴は、中央東寄りにP₃があるほか、P₁・P₂・P₄に隣接して3か所に有していた。壁高は23cmで若干外傾し、遺存状態は良好であった。なお、壁溝はない。覆土は全体に自然流入による堆積を呈したが、中央に擾乱址を認めた。遺物は、覆土層からの出土が殆んどで、土製円板1点・同小片1点を含み、中期・後期縄文式土器片73点を出土した。

第4号住居址(図158、写50-1・2)

本址はB3e₀を主体に出土したもので、第3号住居址の北東に近接している。長径方向はN-31°-Wを指し、大きさは長径6.1m・短径5.5mを測り、東にやや膨らむ円形に近い平面形である。遺構検出面において中央部に焼土・炭化物を確認したが、覆土中層においては焼土粒子を含む赤褐色ロームブロックに変化、下層に至ると径70cm程の範囲に縮小し、焼土・炭化物を少量に含む褐色ソフトロームになった。覆土は3層を基盤に2層が自然流入しており、本址の床面は焼土の断面分布等も加味して、3層上面にあった可能性が強い。床面中央には、径70cm・深さ8cmの掘り込みがあり、壁寄りに4か所の支柱穴を有する。P₂・P₄に隣接して2か所の不明ピットが存す。壁は部分的に僅かな遺存を認めただけで不良であったが、全体に外傾して立ち上がり、壁高17~23cmを測る。遺物は3層に点在するものが多く、中期・後期縄文式土器片を出土した。また、第2号・第3号住居址に検出されたものと同一の土製円板1点と黒曜石剥片1点を出土している。

2. 土壌

第1号土壌(図151、写51-1)

本址は、遺跡の位置する台地が、北方に緩やかに傾斜を呈する北縁辺部付近のB1a₄で確認し、第4号土壌が西に隣接する。平面形は、長径方向N-53°-Eを指し、長径1.3m・短径1.1mの不整形円形を呈する。深さは72cmを測り、墳底は比較的平坦で、縦断面形は西壁が東壁より外傾する立ち上がりを示す。西壁下に径約40cm・深さ45cmのピットが「V」字形に掘り込まれている。

覆土は、2層に区分する自然堆積状である。出土遺物に、前期縄文式土器片・磨石片等2点があるが、いずれも覆土からの出土である。

第2号土壌 (図152、写51-2)

本址は第3号土壌と複合し、B1e₃で確認した。第3号土壌との新旧関係は、本址が古い。南面を切られているが、平面形は不整形であったと推測できる。長径方向はN-39°-Wを指し、大きさは長径2.8m・短径2.1mである。壙底は平坦で切り合い部に微量の炭化物を確認した。壁は、北がほぼ垂直に立ち上がり、全体にハードブロック状を呈している。覆土は、ハードロームブロックを含む3層からなっている。自然堆積か否かは不明であった。出土遺物は無い。

第3号土壌 (図159、写51-2)

本址は第2号土壌と重複して確認された。平面形は不整形を呈し、大きさは長径2.1m・短径1.9mで長径方向N-38°-Wを指している。深さは1m程で、壙底面は楕円形を呈し、長径を北東に向いている。ピットは径20cm・深さ53cmのほか、径15cm内外・深さ13~21cmのピットが3か所にある。東西の両側は垂直に近い立ち上がりだが、南東壁は緩やかに外傾している。覆土は自然堆積状で、覆土内に細石刃石核を1点出土した。また、第2号土壌との切り合い部に微量の炭化粒子を確認した。

第4号土壌 (図163、写51-3)

本址はB1a₄で確認したもので、長径1.8m・短径1.5mの不整形楕円形を呈し、長径方向N-29°-Eを指している。南西壁中段にテラス状張り出し面を有した土壌で、深さは1.1mを測る。覆土は第2号・第3号土壌と同様、ロームブロックを多量に含む人為的埋め戻し状である。出土遺物が無い。

第5号土壌(A) (図160、写51-5)

本址は、遺跡中央の比較的平坦な台地のB2b₂で確認した。第1号住居址の北東1.6mに位置し、第5号土壌(B)と第6号土壌に切られている。長径方向N-70°-Wを指す。短径2.6m・長径は推定で3.6m程の楕円形の土壌である。深さは16cmで、断面形状は皿状を呈し、壙底中央に径約35cm・深さ43cmのピットを有する。覆土は2層に区分できる。覆土内から前期縄文式土器片1点が出土した。

第5号土壌(B) (図161、写51-5)

本址の長径方向は、第5号土壌(A)の長径方向と直角に近い方向のN-26°-Eを指す。平面形

は、長径3.4m・短径1.5mの不整形である。(A)を切って掘られており、深さは48cmである。墳底面は比較的平坦で、壁はやや外傾している。覆土はロームブロックを多量に含む軟らかい層で、自然堆積を示していた。遺物は、覆土内で中期縄文式土器片を2点出土している。

第6号土壌(図162、写51-5)

本址は第5号土壌(A)と重複している。長径方向N-5°-Eを指し、長径2.6m・短径1.7mの不整形円形である。墳底までは28-36cmを測り、東にやや緩やかに傾斜する平坦な墳底面を呈する。覆土は中央部が墳底面まで攪乱を受けていたが、本址の覆土は自然流入による堆積であった。壁は東西壁の落ち込み部が崩壊しているが、全体に外傾している。遺物は、覆土内からの前期縄文式土器片2点がある。

第7号土壌(図164、写51-6)

本址は第1号住居址の北東付近に位置し、B2d₁に確認した。平面形は不整形楕円形を呈し、長径3.0m・短径2.2mを測り、長径方向N-31°-Wを指している。深さは46cmで、墳底北西部に落差20cmの掘り込みがある。壁は北東面が緩傾斜をなすほかは垂直である。覆土は、自然流入による堆積を示している。遺物は、覆土内及び床面からの前期縄文式土器片16点と、覆土内からの石器の残核・縦長剥片等計28点の出土があった。

第8号土壌(図165、写52-1)

本址も第1号住居址の北東部に近接してB2d₃に確認し、第9号土壌と隣接する。長径1.8m・短径1.2mの楕円形を呈する平面形で、長径方向N-87°-Wを指す。墳底まで37cmを有し、墳底面は平坦で、壁は比較的明瞭に境を有して垂直に近い立ち上がりを示す。覆土は、3層に区分できるレンズ状堆積を呈していた。遺物は、覆土内より前期縄文式土器片を含み3点を出土した。

第9号土壌(図166、写52-2)

本址も第1号住居址に隣接する土壌であり、前述の第8号土壌と近接する。長径方向N-38°-Eを指し、長径1.9m・短径1.4mを測る不整形楕円の平面形を呈する。墳底まで最深部で45cm・最浅部で41cmを有し、壁は垂直に近い立ち上がりを示す南西壁を除いて、僅かに墳底より外傾している。覆土は7層に区分する自然堆積層を呈す。遺物は、覆土下層より風化摩耗した窪み石片1点・中期縄文式土器片3点を出土した。

第10号土壌 (図167、写52-3)

本址は、第1号塚の北東部裾辺 B2h_oで確認された。平面形は楕円形を呈し、長径3.0m・短径1.6m・深さ25cmを測り、長径方向はN-30°-Wを指している。壁は長辺側がほぼ垂直に立ち上がり、短辺側は墳底面との境を有さず緩やかに外傾している。なお、北西壁に径57cm・深さ50cm程のピットがあり、墳底は軟らかい。遺物は、覆土内より中期縄文式土器片を出土した。

第11号土壌 (図168、写52-4)

本址も第10号土壌と同じく第1号塚の調査時に確認し、B2i_oに位置する。平面形は、長径方向N-27°-Wを指し、長径1.2m・短径1.0mの不整形を呈する。深さは15cm程を測り、墳底面は起伏に富み硬いブロック状を呈し、径約12cm・深さ25cm程のピットを3か所に有する。断面形は皿状で、東西の壁下にも径20cm・深さ45cmのピットを認めた。第1号塚との新旧関係では本址が先行するが、時期的には塚構築時と近いものと考えられる。遺物出土は無い。

第12号土壌 (図169、写52-5)

本址は第1号住居址の南東5m、第9号土壌に近接するB2d_oに位置する。平面形は、長径方向N-86°-Wを指し、長径1.9m・短径0.9mの楕円形である。南側の壁中段に、「U」字形を呈してテラス状に張り出す部分を設けており、その面までは15cm、墳底までの深さは25cmを測る。断面形は、壁が僅かに内反して外傾する皿状を呈し、覆土は自然堆積を呈する。出土遺物は無い。

第13号土壌 (図170、写52-6)

本址は、遺跡南端部に位置する第2号住居址付近のB3d_o・B4d_oに確認された。長径方向N-6°-Eを指し、長径2.2m・短径2.0mの円形に近い楕円形を呈する。深さは18.5cm、墳底面中央より北東側に径25cm・深さ49cmのピットを設け、その周辺部は硬い。覆土は自然堆積と認められるもので、3層に区分できる。遺物は、覆土内に早期縄文式土器片1点を出土した。

第14号土壌 (図171、写53-1)

本址は、第2号住居址の南に近接して確認され、B3e_oに位置する。平面形は径2.5m程の円形を呈し、深さは15cmを測る。墳底は平坦で、壁は皿状に立ち上がっている。遺物は、覆土より縄文式土器片2点を出土した。

第15号土壌 (図172、写53-2)

本址も第2号住居址に近接し、B3e_oで確認した。第13号土壌と規模に差はあるが、形態は類

似している。平面形は、長径84cm・短径76cmの円形に近い楕円形を呈し、深さ22cmを測る。西壁下に径15cm程度・深さ29.5cmのピットがあり、墳底はほぼ平坦で壁が外傾して立ち上がる。出土遺物は無い。

第16号土壌（図173、写53-3）

本址は、B3区に位置する住居址3軒の北東部に確認した土壌群に含まれる。B3b₇に位置し、第17号土壌に近接する。長径方向はN-5°-Eを指し、長径1.05m・短径1.2mの不整楕円の平面形を呈する。深さは24cm程を測り、起伏のある墳底には小径のピットがある。覆土は自然流入による堆積である。出土遺物は無い。

第17号土壌（図174、写53-4）

本址はB3c₁に確認した。平面形は径1.5m程の不整形を呈し、深さは24cmを測る。断面形は、墳底面が平坦で東西の壁は僅かに外反し、南北壁は直線的に外傾している。覆土は、3層に区分する自然堆積を示した。遺物は、覆土2層より早期縄文式土器片を出土した。

第18号土壌（図175、写53-5）

本址はB3b₁に確認され、第17号土壌の南側1.8mに位置する。平面形は径1.3m程の不整形で、深さは15cmを測る。墳底は2本の抜根址に一部攪乱されているが、比較的硬い平坦な面で、断面形は皿状を呈した。覆土は人為的埋め戻しによるものである。出土遺物は無い。

第19号土壌（図176、写53-6）

本址はB3b₁で確認し、第18号土壌の北東方2mに位置する。平面形は径80cm程の円形で、深さは25cmを測る。断面形は鉢形で、墳底中央に径17cm程・深さ27.5cmのピットを1か所所有した。覆土は、3層に区分できる埋め戻し状である。出土遺物は無い。

第20号土壌（図177、写54-1）

本址はB3b₁に確認し、第21号土壌の東に近接する。平面形は長径2.4m・短径1.4mの楕円形で、長径方向N-4°-Eを指している。深さは13cmと浅く、墳底は軟らかい。断面形は皿状を呈し、覆土は第2層を主体にした人為的埋め戻しによる可能性を示す堆積である。遺物は、覆土内に縄文式土器片1点が出土した。

第21号土壌（図178、写54-2）

本址はB3b₁・D3c₁に位置し、B3区の土壌群の1基である。平面形は、長径方向N-75°-

Wを指し、長径2.2m・短径1.3mを測る楕円形を呈する。深さは31cmを有し、壁は北西壁を除いて垂直に近く、北西壁は緩やかに外傾し、中段に径20cm・深さ20cmのビットを1か所有する。覆土は、東方からの自然流入と認められ、4層に区分できる。遺物は、覆土内より縄文式土器片2点を出土した。

第22号土壌 (図179、写54-3)

本址は、B3c₃を主体に確認した。平面形は長径2.4m・短径1.7mの大きさと、長径方向N-78°-Wを指す楕円形を呈する。平面形は第21号土壌と類似している。深さは16cmで、壙底は比較的平坦である。壁は垂直に近く、覆土は人為的埋め戻し状を示した。遺物は、覆土内より縄文式土器口縁部片1点・たたき石1点・チャート剥片1点を出土した。

第23号土壌 (図180、写54-3)

本址は、B3c₄に位置する。平面形は、近接する第24号土壌と類似する小径の土壌で、径55cmの円形であり、長径方向はN-32°-Wを指している。深さは23.5cm、壁はほぼ垂直に近く、北東部に径15cm・深さ49cmのビットがある。覆土は3層に区分し、第2層を主体とする自然堆積状である。遺物の出土は無い。

第24号土壌 (図181、写54-3)

本址は、B3c₄に確認した。平面形は径70cm程の円形で、深さ43cmを測る。西壁直下に、径30cm・深さ20cm程の皿状の窪みがあり、その中央部に径15cm・深さ16cmのビットがある。壁は、ビット部が内反ぎみに立ち上がる他は外方へ傾斜する。覆土は3層に区分する自然堆積を示した。遺物の出土は無い。

第25号土壌 (図182、写54-4)

本址はB3b₃で確認し、第24号土壌と第26号土壌との中間に位置する。平面形は長径1.1m・短径0.9m、長径方向N-26°-Wを指す不整形で、深さは16.5cmを測る。壁は、北西側が中段から緩傾斜をもって外傾するほかは、壙底から僅かに外傾する。断面形は皿状で、覆土は自然流入によるものである。出土遺物は無い。

第26号土壌 (図183、写54-5)

本址はB3b₃に確認され、第20号土壌・第28号土壌・第29号土壌に隣接する。長径方向N-76°-Wを指す。長径0.8m・短径0.7mの円に近い平面形で、深さは28cmである。壙底中央より北東

側に7cm程の窪みがあり、壁の遺存は比較的良好で垂直に近い。覆土において開口部の崩壊による堆積とみられる層があったが、全体としては自然流入による堆積である。遺物の出土は無い。

第27号土壌（図184、写54-6）

本址は第4号住居址の北側3m程に位置し、B3e₅で確認した。平面形は長径1.9m・短径1.2mの楕円形で、長径方向N-85°-Eを指している。深さは14cm程と浅く、墳底中央に若干の深みを有する以外は平坦な面である。壁は僅かに外傾して立ち上がり、北東壁には径18cmのビットがあるが、窪みやビットは木根によるものと考えられる。覆土は2層に区分できる自然堆積状である。出土遺物は無い。

第28号土壌（図185、写55-1）

本址はB3a₂に確認された土壌で、第29号土壌に隣接する。平面形は長径1.5m・短径1.1mの楕円形で、長径方向はN-55°-Eを指している。墳底までの深さは22~26cm程で、ほぼ平坦な墳底面は東に僅かに傾斜しており、中央東寄りに径24×19cm・深さ36cmを測るビットを有する。ビット底面は開口部とほぼ同一の形状をもつ。壁は外傾して立ち上がり、覆土は人為的埋め戻しによることを示し、4層に区分できる。出土遺物は無い。

第29号土壌（図186、写55-2）

本址はB3b₁に確認され、南東側には第25号土壌・第26号土壌・第28号土壌が近接している。平面形は長径方向N-58°-Eを指す楕円形で、長径3.0m・短径1.6m・深さ19~24cmを測る。墳底中央部が幾分盛り上がり、壁は概ね外傾している。覆土は埋め戻しによるものである。遺物の出土は無い。

第30号土壌（図187、写55-3）

本址は、R3区に確認した土壌群では最北端のB3c₂に位置する。平面形は、長径方向N-26°-Eを指し、長径2.4m・短径1.6mを測る楕円形である。深さは17cmを有し、壁は僅かに外傾して立ち上がり、墳底は平坦で軟らかい。覆土は2層に区分でき、下層の2を主体とする自然堆積を示す。遺物は、覆土内に早期・前期縄文式土器片2点が出土した。

3. 溝址（図188、写55-5）

溝址は、遺跡の北東端、標高24.5m程の台地縁辺部に位置し、A1区で確認した。台地縁辺に

沿いながら71.3mの長さを有し、主軸方向はN-26'-Wを指し、幅員は最大で2.0m・最小で1.4m・深さは平均23.4cmを有している。壁の遺存状態は良好で、傾斜角を60度程とり、若干内彎しながら外方へ立ち上がっている。墳底面は硬く、立ち上がり部までが硬く踏み固められた状態である。覆土は自然流入によるものである。遺物は覆土内より前期・中期縄文式土器片を出土した。

4. 塚 (図189、写56-1)

塚は、B2h₆・B2i₆・B2h₇・B2i₇において長径方向を北東に向け、長径7m・短径6m程で僅かに地表の盛り上がりを目立たせていた。表土中には、マウンドと比較的同形状を呈する長径9.4m・短径5.0mの盛土があった。土層は3層の堆積を示し、下層はかなり広範囲におよびその中心に2層を盛って築造されている。遺物の出土は無く、塚の性格等は不明である。北東裾部と南西裾部に、この塚より先行する第10号・第11号土塚がある。

第3節 遺構出土遺物

1. 住居址出土遺物

第1号住居址出土遺物

土器 (図190、写57) 1・3・5は、(第4群土器Ⅱ類) 縄文を地文に、半截竹管による刺突文を配す土器片で、4は(同群Ⅰ類)に属し、2・6~22は、(同群Ⅲ類)に属す土器片である。23は、(第6群土器)平行沈線内に角へらによる三角文を配した土器片である。24は、(第10群土器)平行沈線を有した細片で、色調は赤褐色を呈した焼成の良好な土器である。胎土中に長石・石英等を含んでいる。

第2号住居址出土遺物

土器 (図190、図191、写57) 25は、(第5群土器)口縁部は平縁で、横位沈線の間隔は狭い。浮島Ⅰ式に比定できる。26は、口縁部に紐線文を配し、棒状施工具による瓦痕文を有す。27は、「S」字状結節文を配すものであるが、浮島式と並行するものと思われる。28~38は、(第7群土器)唐消縄文・微隆起線等を配すもの。39~42は、(第8群土器)に属すもの。43・44は、(第9群土器)粗い縄文を地文に配し、横位・または斜行する沈線を有するもの。

土製品 (図195、写61) 土製凹板片1は、南東壁付近の覆土内から出土した。縄文を配した土器の再利用で、外縁が磨かれ、内面から穿孔されている。推定で、径5cm・孔径1.8cmの大きさ

である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含んでいる。第3号住居址出土の3と接合する。

石器(図197、写62) 片面礫器14は、石質が安山岩で、大きさは長径8.3cm・短径3.1cm・厚さ1.1cmを測る。側縁を直接打撃によって片面剥離している。

第3号住居址出土遺物

土器(図191、図192、写58、写59) 45は、(第5群土器) 柳描文を縦に配すもの。踏碓B2式である。46~55は、(第7群土器) 沈線区画内に縄文を施したものと、微隆起線区画に縄文を充填したもの。56~59は、R L縄文を配し、60はL R縄文を有すもの。61は無文帯である。これらも同群(第7群土器)に加わるものと考えられる。62は、(第8群土器) 横状沈線を配すもの。

土製品(図195、写61) 土製円板2は、南側中央寄りの覆土内より出土した。無文土器の再利用で、外縁が粗雑に磨かれ、中央の内外面に穿孔途中の痕跡を残す。錐状工具で穿孔しようとした未製品で、外径3.9cmを測る。色調は暗褐色で、焼成は良好である。胎土中に砂粒・長石・スコリア等を含んでいる。土製円板片3は、西壁寄りの覆土内より出土した。第1号住居址出土の1と接合可能である。

第4号住居址出土遺物

土器(図192、写59) 63は、(第7群土器) 微隆起線を有する。64・65は、(第8群土器) ヘラ状施文具による多条の沈線を配すもの。

土製品(図195、写61) 土製円板4は、炉址と南東壁の間で、覆土内から出土した。条線文土器の再利用で、製作途中で割れた未製品であろう。外縁は粗雑に磨かれ、内面からの穿孔は途中である。外面中央にも僅かに穿孔された痕跡を残す。径5.4cm、色調は灰黄褐色で、焼成は普通である。胎土中に砂粒・長石等を含んでいる。

石器(図198、写62) 剥片19は、北壁付近の覆土より出土した。石質は黒曜石である。

2. 土壌出土遺物

第1号土壌出土遺物

土器(図193、写59) 67は、(第3群土器) 表裏に条痕文を配すもの。68・69は、(第4群土器Ⅳ類) 器面の磨耗が激しいが、前者がR L縄文、後者がL R縄文を施したもの。70は、(第10群土器) 繊維を含み半截竹管による同心円文を有するもの。

石器(図197、写62) 用途不明の石器15は、石質がストレート系粘板岩で、長さ9.2cm・幅3.8

cm・厚さ0.8cmの板状である。外縁が磨耗して滑らかであり、副縁の片方が直線的である。外縁が使用痕か自然磨耗か不明であるが、革滑し石ではないかと思われる。すり石片16は、石質は安山岩である。

第3号土壌出土遺物

石器(図198、写62) 石核18は、石質が頁岩である。縦長剥片をとるための剥離が、上下両方向からなされており、上下合わせて11面剥離されている。上面に3回の打面調整が行われており、階段状剥離が著しい。横からの石核調整は、5回行われている。長さ14.5cm・径3.2cm程の大きさである。

第5号土壌出土遺物

土器(図193、写59) 71~73は、(第4群土器Ⅳ類) 繊維を含み、71は縦線痕を有し、R L縄文を施したもの。72・73は、同様縄文を有したもの。

第6号土壌出土遺物

土器(図193、写59) 74・75は、(第4群土器Ⅳ類) 繊維土器で、縄文を施したもの。

第7号土壌出土遺物

土器(図193、写59) 76・77は、(第4群土器Ⅲ類) 繊維を含み、貝殻線文を配すもの。78~85も、(同群Ⅳ類) 繊維を含み、78~80が、L R縄文を配す。81・82が、R L縄文を配すもの。83は、LとRの相反する燃りの羽状文。84は、R LとLの結束第1種羽状文を配したもの。85は、R L縄文を地文に施し、R縄文を加飾する特異なもの。86は、(同群Ⅱ類) L R縄文を有し、半截竹管による横線を配すもの。87は、(同群Ⅰ類) 棒状施文具による縦線沈線を有するもの。88は、同群外のもので、文様不明で繊維は含まない土器。89・90は、(第7群土器) R L縄文と竹管による沈線を有したもの。

石器(図198、写62、写63) 石核のうち、22は上面からの打撃剥離によって残ったもの。23は、上面と下面からの打撃剥離によって残ったもの。25は、下半分が欠損したもの。20・21は縦長の剥片。剥片23・26は、石質がすべてチャートである。

第8号土壌出土遺物

土器(図193、写60) 91は、(第7群土器) ヘラ磨きによる器面整形が施されたもの。92・93は、(同群) L R縄文を有したもの。

第9号土壌出土遺物

土器(図195、写60) 94・95は、(第4群土器Ⅳ類)同一個体片でLR縄文を有するもの。96は、(第7群土器)半数竹管による平行沈線を配すもの。

石器(図195、写61) 窪み石7は、石質が雲母片岩のもので一か所に窪みがあり、摩滅が著しい。

第10号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 97は、(第7群土器)RL縄文を施したもの。

第13号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 98は、(第1群土器)棒状施文具による横位沈線を配すもの。この他に、田戸下層式土器の微細片を3片検出した。

第14号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 99・100は、(第1群土器)比較的器厚が薄く、焼成は良好で堅緻である。器面剥離が著しいが、僅かに横位沈線が認められた。

第17号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 101は、(第1群土器)棒状施文具による浅い横位沈線を配すもの。

第20号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 102は、(第7群土器)底部辺とみられ、上位が肥厚し一部LR縄文が認められる。中期の土器と思われる。

第21号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 103・104は、(第7群土器)垂直ぎみに立ち上がる器形が途中で外傾し、上位で内彎するキャリバー形の頸部片とみられる。長石を多く含んでいる。

第22号土壌出土遺物

土器(図194、写60) 105は、無文帯の口縁部である。若干外方へ傾斜した平縁で、中期頃から後期にかけてのものと思われる。

石器(図197、図198、写62) 剥片27は、中央部の覆土内から出土したチャート質のものであ

る。たたき石17は、石質が安山岩で、長径7.3cm・短径5.6cm・厚さ4.1cmの大ききで、下面に打撃痕がある。

第30号土壇出土遺物

上器(図194、写60) 106は、(第1群土器)やや外傾する口縁部で、棒状施工具による横位沈線を配し、口唇部はへら状工具により精緻に整形されている。107は、(第4群土器)RL縄文を配し、繊維を含んでいる。

3. 溝址出土遺物

上器(図194) 108~110は、(第3群土器)表裏に条痕文を有し、110の外面は貝背によるナデ調整が施してある。111~113は、(第4群土器Ⅳ類)縄文帯を有した繊維土器で、器面に繊維痕が残る。114は、(第7群土器)磨消面に、RL縄文を施したもの。115は、(第8群土器)比較的薄手の口縁部で、横位に微隆起線を有し、竹管による器面整形が横走する。同施工具によるスリットを有し、裏面に条痕が斜行する。堀之内Ⅱb式であろう。

第4節 グリッド出土遺物

1. 土器

本遺跡から出土した遺物は、縄文土器片以外は認められず、それらの比定される時期は早期から後期にかけてのものである。出土土器については、時期別に第1群~第10群に分類し、説明を加えた。また、グリッド出土土器分類に基づいて、先の遺構出土土器は分類した。

第1群土器	田戸下層式土器	第6群土器	中期後葉の土器	
第2群土器	早期後葉の土器	第7群土器	加曾利E式土器	
第3群土器	茅山式土器	I類 II類 III類 IV類	第8群土器	後期前葉の土器
第4群土器	黒浜式土器		第9群土器	加曾利B式土器
第5群土器	前期後葉の土器		第10群土器	時期不明の土器

第1群土器(図199-1~9・図203-114・115)

本群は早期中葉に比定される田戸下層式である。1は、口縁部が比較的薄く、若干外反してい

る。2～4は、口唇部をへら状工具で削ぎ整形を施し、3は外傾している。1～4・6・7は、浅い横位沈線を施したもの。5は竹管による擦痕を配すもの。8・9は、半截竹管による沈線を密に有するもの。114・115は、その尖底部とみられるもの。色調は、5が褐色を呈する他は灰褐色であり、焼成は良好である。胎土中に微砂粒・石英粒・長石粒等を含む。

第2群土器（図199—10）

本群は微隆起線を有した土器とする。10は、横走する微隆起線に、多条の微隆起線を垂下させたもの。野鳥式の土器片とみられる。色調はにぶい褐色で、焼成は良好といえる。胎土中に微砂粒・石英・長石等を含んでいる。

第3群土器（図199—11～21）

本群は早期後葉に比定される広義の茅山式土器である。胎土中に繊維を含んでいる。11は、口唇部にLR縄文を施し、表裏共に条痕文を配す。12は、口唇部を指頭で整形している。13は、指頭によるナデ整形の口唇部に貝の背圧痕を配したもので、共に表裏に条痕文を有する。14～17は、貝殻条痕文を配すもの。18～20は、裏面に繊維痕があり、表に条痕文を有したもの。21は、尖底部辺とみられ、裏面にかすかに条痕文を配し、表に繊維痕のあるもの。色調は、灰褐色・にぶい褐色で、焼成は普通である。胎土中に砂粒・長石・石英等と繊維を含んでいる。

第4群土器（図199—22～24、図200—25～32）

本群は、前期前葉の黒浜式に比定される繊維を含む土器群であり、文様帯別にI～IV類に分類した。

I類（図199—22、図200—28・29） 半截竹管による沈線を配する土器片を本類とする。22は、鋸歯状の平行沈線を施し、同施文具による刺突文と斜行沈線を配すもの。口唇部は薄く、内彎している。28は、削片片であろうか、鋸歯状の平行沈線に刺突文を施したもの。29は、擦痕による縦位沈線を施したもの。色調はにぶい褐色で、焼成は良好である。胎土中に繊維・微砂粒・長石等を含んでいる。

II類（図199—23、図200—30・31） 本類は縄文を地文に、半截竹管による沈線を有した土器片である。23は、波状口縁部で、RL縄文を地文に半截竹管による有節沈線を配したもの。30・31は、RL縄文を地文に半截竹管による平行沈線を配したもの。色調はにぶい褐色・赤褐色で、焼成は良好である。胎土中に繊維・微砂粒・長石等を含んでいる。

III類（図200—32～37） 本類は、貝殻腹線文を有する土器片である。32～36は、深鉢の削片片で、アナグラ科系の貝殻腹線による押圧痕を有するもの。37は九底片で、波状貝殻腹線文を配し

たもの。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良好である。胎土中に、繊維・石英・長石等を含んでいる。

Ⅳ類(図200—24・25・38—56、図201—57・58) 縄文帯を施した土器片を本類とする。24・38—40は、相反する撚り $\frac{L}{F}$ と $\frac{R}{G}$ の附加条第一種の原体を、結束第一種で連結して縄文を施したもの。41は、RL縄文のループ文を有し、42は、 $\frac{L}{G}$ の附加条第一種縄文を施したもの。25・43・44は、 $L\left\{\frac{F}{F}\right\}$ の一段無節の撚り、45は、 $R\left\{\frac{G}{G}\right\}$ の一段無節の縄文を有する。26・27・46—54・57は、RL縄文を施したもので、口縁部は若干外反する。26・27とも口唇部は丸味を帯び、26は口唇部にRL縄文を施している。57は、底部より大きく外傾して立ち上がる。55・56はLR縄文を有したもので、58はその底部であろう。色調はにぶい橙色・褐色・にぶい赤褐色で、焼成は良好である。胎土中に繊維を含むが、にぶい橙色を呈するものは特に多く含み、その他石英・長石等を含んでいる。

第5群土器(図201—59—64)

本群は、前期後葉の時期に比定される土器群である。59は、曲線的な有節沈線を配したもので、五領ヶ台式の上器片である。60・61は、半截竹管による沈線を有したもので、浮島Ⅰ式に比定される。62—64は、三角文を主に配すもの。浮島Ⅲ式に比定される。62は、口縁部にヘラ状施文具による深いスリットと三角刺突文及び擦痕文を有する。63は、棒状施文具による擦痕文を配す。64は、三角文と半截竹管による横位平行沈線を施している。色調は64が赤褐色で、その他は褐色からにぶい褐色である。焼成は良好で堅緻であり、胎土中に砂粒・石英・長石・スコリア等を含んでいる。

第6群土器(図201—65・66・68—71)

本群は、中期前葉から中葉の時期に比定される土器群である。65・66は、「S」字状結節縄文を配したもので、下小野式に比定できる。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒・石英等を含み、壁厚は比較的薄手である。68は、平行沈線文と三角文を配したもので、裏面にはナデ整形が施されている。五領ヶ台式に比定できる。色調は暗褐色で、焼成は良好である。胎土中に砂粒・長石・スコリア等を含んでいる。68は、LR原体の側面圧痕文を配したもので、本遺跡からの出土はこの1点だけであった。大木7b式に加わるかも知れない。69は、精緻な器面にRL縄文を地文に配し、半截竹管による浅い沈線区画と三角文及び有節沈線を配すもの。70・71は、同一個体片であろう。何れも半截竹管による有節沈線を施したもので、69—71は、阿玉台式に比定できる。色調はにぶい褐色・褐色で、焼成は普通である。胎土中に石英・長石を含み、69は含有する粒子が細かい。

第7群土器 (図201—72—82、図200—83—88・95、図201—113・118)

本群を加曾利E式の新しい方に加わる土器群とし、中期後葉に属すると思われるものを加えた。72—74は、口縁部が丸味を帯びた比較的厚手もので、口唇部に粘土貼り付けを施している。72が緩らかな波状口縁の他は半縁で、内彎して立ち上がる。72・75は渦巻沈線区画内に、L R縄文を施したものの。73・74は浅い沈線を施し、縄文を充填したもの。76・77は、横位微隆起線を有するもの。78—82は、薄手の内彎して立ち上がる口縁部で、78はR L縄文、79はL R縄文のみを施している。80はL R縄文の施文方向を変えて羽状にしたもの。83・84は、微隆起線区画内にL R縄文を充填したもの。85—88は、無文帯に沈線を配したもので、渦巻文の一端とみられる。95は、把手部である。113・118は、中期後葉の底部とみられるもの。これらのほとんどは器内が厚く、何れも加曾利EⅢ式の範疇に加えて大過ないものと思われる。色調は暗褐色のものが多く、他に褐色・にぶい橙色のものもある。焼成は良好で、胎土中に砂粒・長石・石英・スコリア等を含んでいる。

第8群土器 (図202—89—94、図203—116・117)

本群を、後期前葉の土器群とした。89は、口縁部辺であろうか、外傾して立ち上がり、縦線文と櫛目状の条線文を施している。90は、波状の櫛目文がある。何れも堀之内式に加えられる。91—93は、櫛目文を配したもの。94は、半截竹管による平行沈線を配している。何れも堀之内Ⅰ—Ⅱ式、或いは加曾利B式の粗製土器に加えられるものと思われる。116・117は、後期の底部片とみられる。色調は黒褐色・灰褐色で、胎土中に砂粒・長石・スコリア等を含んでいる。焼成は、89・90・93・94が良好の他は普通である。

第9群土器 (図202—96—105、図203—106—108)

本群は、後期中葉の加曾利B式に比定される土器群とする。96・97は、口縁部片で、僅かに外反して立ち上がり、口縁部に縦線文を有し、斜行する間隔の狭い沈線に更に横走する沈線を施したものの。98・99・101は、粗いR L縄文を地文に格子状の沈線を配したもので、比較的薄手の口縁部は外方へ立ち上がる。100は、L R縄文のみの薄手の、外反して立ち上がる口縁部片である。102は、縦線文を有し、粗い縄文を地文に間隔の狭い沈線を施したものの。103—106は、胴部片とみられるもので、太い単節縄文を地文に沈線を施したものの。103・104は、薄手な同一個体片である。以上、96—106は、粗製土器片である。107・108は、比較的精緻な土器片で、僅かに内彎する胴部から極端に外方へ傾斜する頸部辺である。頸部上位が無文帯で、下位のR L縄文を竹管刺突文で区切ったもの。色調はにぶい褐色・にぶい橙色で、部分的にススが附着する。焼成は良好で堅緻であり、胎土中に僅かな長石を含んでいる。

第10群土器 (図203—109—112)

本群は時期不明の土器群で、降帯と直線状の沈線を配したものである。109は、棒状施文具による横位沈線から放射状に沈線を垂下させたもの。110は、貼り付け降帯を有し、半截竹管による数条の沈線を垂下させたもの。112は、その下位片であろうか。111は、貼り付け降帯と垂下する沈線を有したもの。色調は111が暗褐色で、その他は明褐色である。焼成は良好でいずれも堅緻である。111は胎土中に長石粒・石英粒・微砂粒を含み、その他は砂粒・長石等を極く僅かに含んでいる。

2. 土製品 (図195、写61)

土製円板片5は、B3g₉から出土した。LR縄文を配した土器の再利用で、内外両面から穿孔されたものと思われる。推定で径4.8cm・孔径1.8cmを測る。色調は褐色で、焼成は普通である。胎土中に砂粒・スコリア等を含んでいる。土製円板6は、B3c₉から出土したもので、沈線区面にRL縄文を充満した土器を再利用したもの。推定径6.5cmを測り、外縁は丸味を帯びて研磨されている。色調は赤褐色で、焼成は良好である。胎土中に砂粒・石英・長石・スコリア等を含む。

3. 石器 (図195、図196、図198、写61、写62)

深み石8は、石質が安山岩で石皿転用のものであろう。磨石9は、表面中央と側面中央に打撃痕があり、裏面の一部が欠損している。表裏面・側面とも磨かれている。石質は安山岩で、長さ8.3cm・短径6.85cm・厚さ4.9cmである。石斧10は、B2c₂で検出された磨製のもので、石質は安山岩、幅6.4cm・厚さ2.9cmを測る刃部片である。刃部は鋭く、使用痕跡がある。磨製石斧片11は、B3c₉で検出したもので、厚さ3.6cmを測る安山岩質のもの。打製石斧12は、B3e₉で検出したもので石質は安山岩。長さ10.9cm・幅6.5cm・厚さ1.85cmを測り、刃部は鈍角である。打製石斧13は、B2i₉で検出したもので石質は安山岩。長さ11.8cm・幅8cm・厚さ3cmを測り、刃部は鈍角で磨滅している。スクレイパー28は、B3i₉で出土した。石質はメノウで、石核調整等で作り出された横長の不定形切片にスクレイパーエッジを加工したもの。背部は、小剥離によって成形した後、刃潰しを行なっている。

第5節 まとめ

本遺跡で確認された第2号～第4号の住居址の規模は、径6.5m・径5.1×4.7m・径6.1×

5.5 m のほぼ円形を呈し、第2号を除いて4～5か所に支柱穴をもっていた。炉址については確認できなかったが、平面形の形状・規模共に隣接する打越A遺跡の住居址に類似し、同一時期に編年される遺物も確認されていることから、本住居址も打越A遺跡と同一時期、あるいはそれに近い時期のものとみることができる。

第1号住居址については、近接する第5号土壌(B)・第6号～第8号土壌から、それと同一時期に編年される土器片を覆土から出土し、位置的に住居址に隣接すること、及び打越A遺跡の遺構分布状況等を加味し、前期前葉に属するものと推定される。

土壌については、平面形が円形のもの・楕円形のもの・不整形のものに大別でき、壁が比較的垂直に近い立ち上がりのもので、外傾して立ち上がるものが比較的多かった。また、壁際にピットを有したものには、平面形が円形を呈するものと楕円形を呈するものに多くみられたが、壁の立ち上がりは垂直に近いものであった。ただ本遺跡については、土壌の横断面・深さ・覆土の状態等で種々様々な様態を示しており、明確な規則性は確認できなかった。遺物を伴った土壌についてのみ時期的に所属させると、第7号が前期前葉に編年されるだけである。

溝については、局所的な調査だけだったことと溝址に伴う遺物が皆無であること等から、断定的に位置づけることは避けるが、排水溝か切り通しの道路の可能性があるのでなかろうかと考えている。

本遺跡において確認された遺物は、そのほとんどが覆土からのもので、遺構に伴うものとして確認された例は、第2号住居址・第3号住居址の床面に遺存した例、第4号住居址の土層3を床面とみなした場合の例、及び上記の第7号土壌の例だけである。

遺跡全体を表土から出土した遺物で観察すると、台地中央より北側に早期と前期に編年される遺物が主体を占め、南側には中期に編年される遺物が主体をなして出土した。しかし、遺構内覆土からの遺物の出土状況は、台地中央より北側には前期に編年される遺物が、南側においては早期と中期に編年される遺物が出土している。このことを、隣接する打越A遺跡と関連づけてみると、前期に編年される遺物を検出した土壌の位置する台地は、北西から入り込んだ谷津頭を中心に打越A遺跡の北縁辺部に続いており、打越A遺跡の北縁辺部で確認された土壌と前期に編年される遺物の出土した地点とに、地理的条件を一致させている。更に、台地南側に確認された3軒の住居址は、打越A遺跡で確認された中期後葉に属する住居址の位置する台地とほぼ標高を同じにし、東側に刻まれた支谷に面して比較的並ぶように立地している。

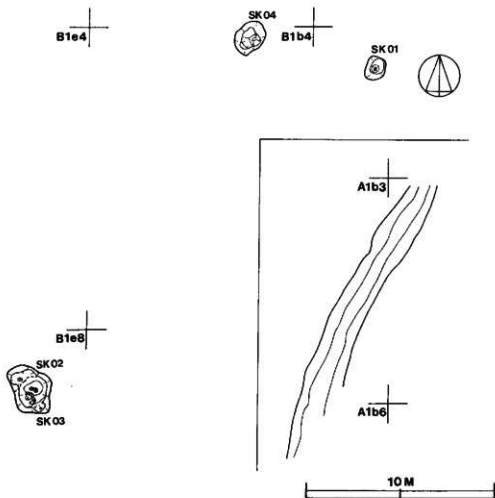
第2号～第4号住居址は、中期後葉に位置づけられるものと思われるが、打越A遺跡においては土器埋設炉を有していたのに対し、炉址と認められるものも無く、床面の状態も踏み固められた跡は無いことから、長く使用されたものとは考えられない。また、住居址にともなわない焼土粒子については、今後の資料の増加を待って比較検討したいと思う。

第3号土壌の覆土内から出土した石核については、現在のところ不明な点を多く含み、今後の資料の増加に期待したい。また、B3i₃で検出したスクレイパーについても、その類例が無く、今後の資料の増加を待ちたい。第7号土壌の覆土で確認した石核・縦長剥片等は、飯富町馬場尻遺跡(註1)・飯富町十方原遺跡(註2)・高萩市赤浜遺跡の表採資料(註3)等にその類似資料を得ているが、遺構の所屬する時期に伴うものなのかは、明らかな確証を得ることができなかった。

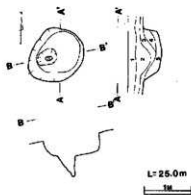
註1 茨城高等学校史学部『飯富馬場尻遺跡発掘調査報告書—縄文早期平山式遺跡—』昭和46年。

註2 茨城高等学校史学部『水戸市十方原遺跡発見の縄文早期沈積文系土器。』『富樫台地6』昭和47年。

註3 金子達氏の公表による。



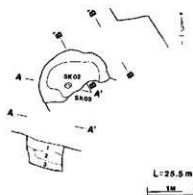
第150図 遺構分布図



第151図 第1号土壌

SK01 土層解説

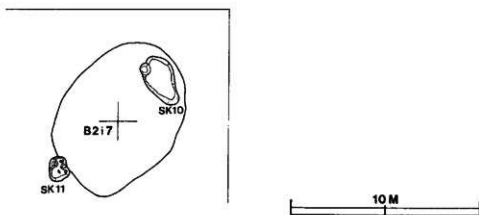
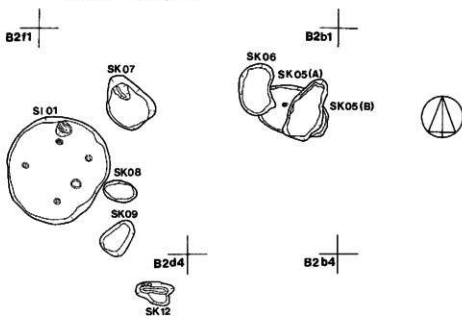
1. 褐色(草木根含む)
2. 褐色(草木根含む、暗褐色土のむらあり)
3. 褐色(草木根含む、ローム含む)
4. 褐色(ソフトローム含む)
5. 褐色(やや粘粒のあるローム含む)



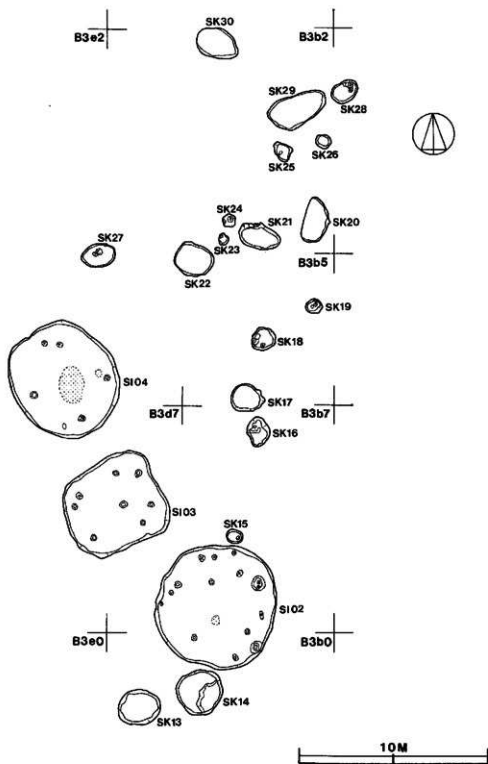
SK02 土層解説 A-A'

1. 褐色(ロームブロック少量混入の褐色土含む)
2. 暗褐色(ロームブロック少量含む)
3. 褐色(大ロームブロックと多量含む)

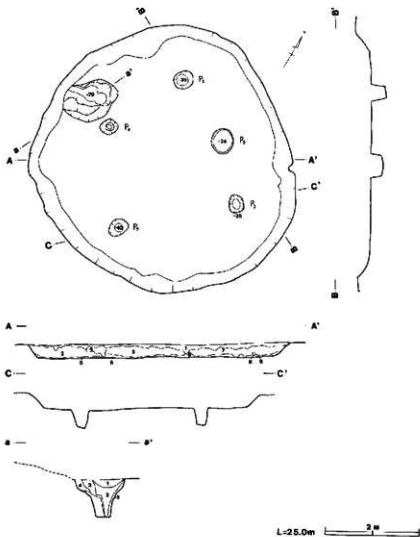
第152図 第2号土壌



第153図 遺構分布図



第154図 遺構分布図



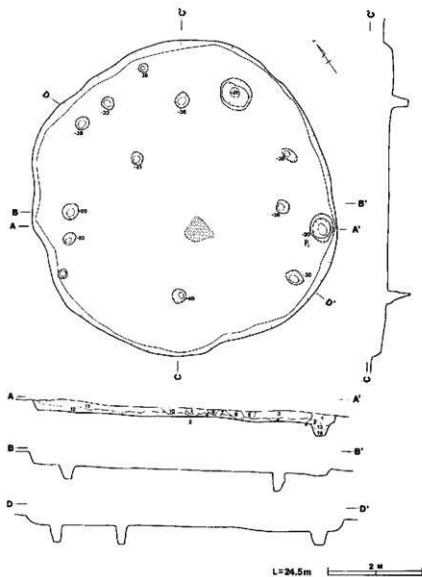
第155図 第1号住居址

S101 土層解説 A-A'

1. 褐色(珪砂色土少量含む)
2. 褐色(ロームブロック珪砂色土少量含む)
3. 褐色
4. 褐色(緑褐色土のブロック多量含む)
5. 褐色(草木腐敗土少量含む)
6. 褐色(ロームブロック微量含む)
7. 褐色(焼土炭化粒子微量含む、ローム含む)
8. 褐色(草木腐敗土含む)
9. 褐色

土層解説 a-a'

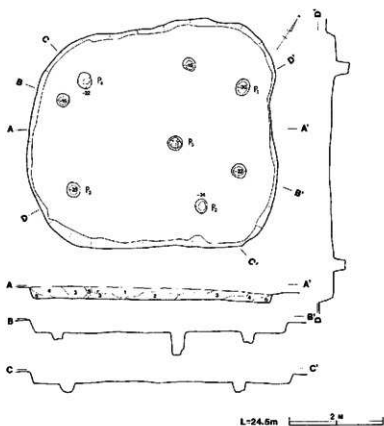
1. 褐色(ロームブロック中量含む)
2. 褐色(珪砂色土少量含む)
3. 褐色(ロームブロック中量含む)
4. 褐色(粘性強いハードロームブロック多量含む)
5. 褐色(粘性強いハードロームブロック多量含む)



第156図 第2号住居址

S102 土層解説 A-A

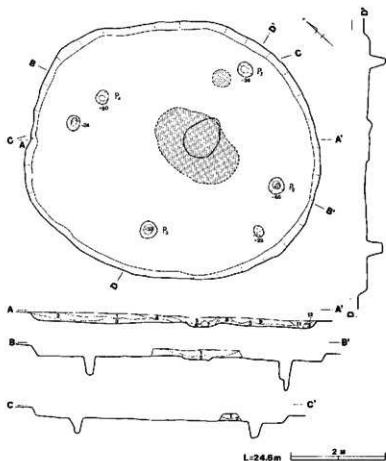
1. 暗褐色(暗褐色ブロック含む)
2. 褐色(暗褐色ブロック少量含む)
3. 褐色(暗褐色ブロック含む)
4. 褐色(粘状ハードローム含む)
5. 暗褐色(草木根腐殖土含む)
6. 褐色(暗褐色ブロック少量含む)
7. 褐色(褐色土ブロック含む、焼土炭化粒子微量含む)
8. 褐色(暗褐色ブロック含む)
9. 褐色(やわらかい暗褐色土含む、焼土微量含む)
10. 褐色(暗褐色土・ブロック少量含む)
11. 褐色(暗褐色土・ブロック少量含む)
12. 褐色(暗褐色土・ブロック少量含む)
13. 暗褐色(ローム粒子含む)
14. 褐色(ローム粒子含む)



第157図 第3号住居址

S103 土層解説 A-A'

1. 褐色(ロームブロック暗褐色腐敗土含む)
2. 褐色(粘り気のある暗褐色の小ブロック多量含む)
3. 褐色(ローム粒子中腐敗土の塊点混在)
4. 褐色(ローム粒子中量・粘性強い小ブロック少量含む)
5. 褐色(粘性強いロームブロック多量含む)



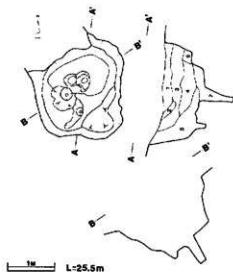
第158図 第4号住居址

S104 土層解説 A-A'

1. 褐色(草木腐敗土と思われる暗褐色土含む)
2. 褐色(ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(軸穴あるローム多量含む)
4. におい・赤褐色(焼土・炭化粒子少量含む)
5. 暗赤褐色(焼土・赤褐色ブロック多量含む、炭化粒少量含む)
6. 暗褐色(焼土・炭化粒子少量含む)
7. 暗赤褐色(草木腐敗土、焼土多量含む、炭化物多量含む)
8. 暗褐色(焼土・炭化粒子微量含む)
9. 褐色(ロームブロック・草木腐敗土と思われる暗褐色土少量含む)
10. 褐色(草木腐敗土多量含む)
11. 褐色(ロームブロック少量含む)

土層解説 B-B'・C-C'

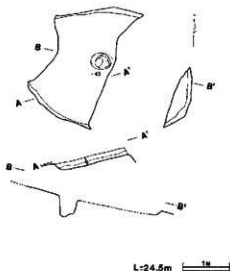
1. 赤褐色(焼土・炭化物を微量含む)
2. 褐色(ロームブロック少量・焼土微量含む)



第159図 第3号土壤

S K 03 土層解説 A-A'

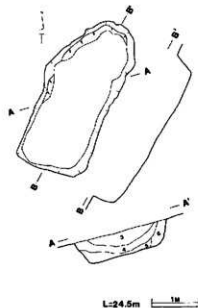
1. 褐色(ロームブロック少量含む)
2. 褐色(ロームブロック少量含む)
3. 褐色(粘性ロームブロック多量含む)
4. 褐色(粘性ロームブロック多量含む)
5. 褐色(粘性ロームブロック中に木屑含む、黒色土微量含む)
6. 褐色(細かいロームブロック多量含む)
7. 褐色(ロームブロック少量含む、褐色土)



第160図 第5号土壤(A)

S K 05(A) 土層解説 A-A'

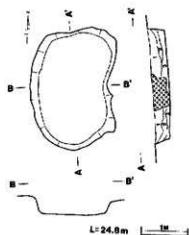
1. 褐色(草木屑少量・ロームブロック含む)
2. 褐色(ロームブロック少量含む)



第161図 第5号土壤(B)

S K 05(B) A-A'

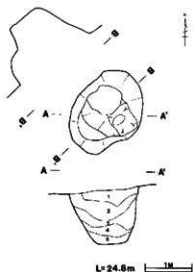
3. 褐色(ロームブロック暗褐色土少量含む)
4. 褐色(ロームブロック含む)
5. 褐色(ソフトローム含む)
6. 褐色(ロームブロック多量含む)



第162図 第6号土壤

S K 06 土層解説 A-A'

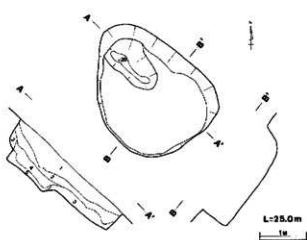
1. 褐色(難み固められたロームブロック点状、黒褐色ブロック含む)
2. 褐色(ローム粒子少量・ロームハード小ブロック少量・褐色ブロック混り気のないブロック含む)
3. 褐色(ローム粒子多量・黒粒状ロームブロック中量を含む)



第163図 第4号土坑

SK04 土層解説 A-A'

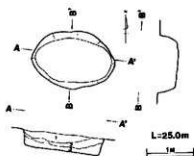
1. 褐色(ロームブロック含む、褐色土・草木屑多量含む)
2. 褐色(ロームブロック多量含む、やや硬い)
3. 褐色(ソフトロームの中にハードロームブロック含む)
4. 暗褐色(ローム中にハードロームのブロック少量含む)
5. 褐色(ハードローム含む)



第164図 第7号土坑

SK07 土層解説 A-A'

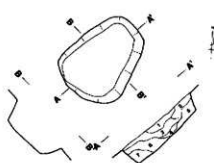
1. 赤褐色(ローム粒子含む)
2. 赤褐色(ローム粒子含む)
3. 褐色(ローム粒子・ロームブロック含む)
4. 暗褐色(ローム粒子含む)
5. 褐色(ローム粒子含む)



第165図 第8号土坑

SK08 土層解説 A-A'

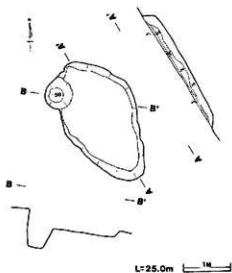
1. 褐色(ローム果粒状ブロック中量含む)
2. 褐色(ローム果粒状ブロック・ローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(ローム小ブロック少量含む、硬い)



第166図 第9号土坑

SK09 土層解説 A-A'

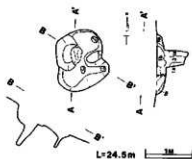
1. 暗褐色(黒色腐敗土が斑文状に露呈・ローム粒少量含む)
2. 褐色(土根による擾乱層)
3. 褐色(粘性の強いローム中にハードローム面が所々検出)
4. 褐色
5. 褐色(やわらかい)
6. 褐色(軟弱層でロームハード中ブロック中量含む)
7. 褐色(他の層と比してやや硬い)



第167図 第10号土坑

SK10 土層解説 A-A'

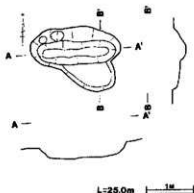
1. 褐色(ローム粒の中に暗褐色腐敗土の斑点少量含む)
2. 褐色(粘性の強いロームブロック多量含む)
3. 褐色(粘分の強いローム含む)
4. 暗褐色(草木腐敗土含む)



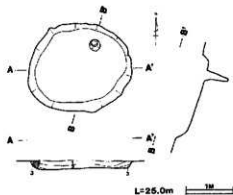
第168図 第11号土坑

SK11 土層解説 A-A'

1. 褐色(ロームブロック含む)
- 1a 褐色(ハードロームブロックを含む)
- 1b 褐色(ハードロームブロック含む)
2. 褐色(小ロームブロック含む)
3. 暗褐色(小ロームブロック含む)



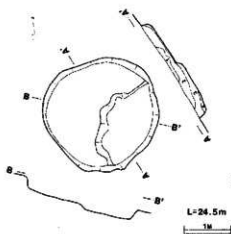
第169図 第12号土坑



第170図 第13号土坑

SK13 土層解説 A-A'

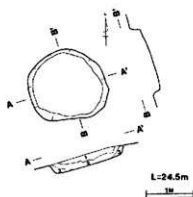
1. 褐色(ローム粒子微細含む、軟弱)
2. 褐色(粘着性ローム・炭化物類多量含む)
3. 褐色(粘着性ローム含む)



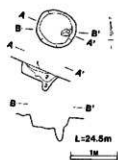
第171図 第14号土壤

SK14 土層解説 A-A'

1. 暗褐色(褐色腐敗土斑文あり、ローム粒子少量含む)
2. 褐色(ローム小ブロック微量含む)
3. 褐色(粘着性有す)
4. 褐色(粘着質ブロック状を呈す、炭化物微量含む)



第174図 第17号土壤



第172図 第15号土壤



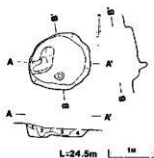
第173図 第16号土壤

SK15 土層解説 A-A'

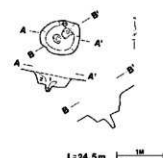
1. 褐色(草木根の腐敗土を含む、やわらかい)
2. 褐色(新性あるロームブロック・暗褐色の腐敗土含む)
3. 褐色(ローム粒子中に粘り気のあるロームブロック含む)

SK16 土層解説 A-A'

1. 暗褐色(腐敗土の斑点多量含む)
2. 褐色(ローム小ブロック多量含む、暗褐色)
3. 褐色(粘性強いローム含む)



第175図 第18号土壤



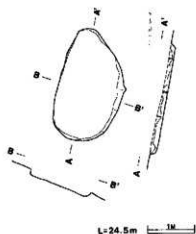
第176図 第19号土壤

SK18 土層解説 A-A'

1. 褐色(腐敗土の斑点を多量含む)
2. 暗褐色(暗褐色の腐敗土多量含む)
3. 褐色(ローム中に腐敗土の斑点多い)
4. 褐色(粘性のロームブロック多量含む)

SK19 土層解説 A-A'

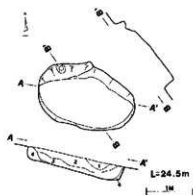
1. 褐色(ローム中に暗褐色の腐敗土の斑点含む)
2. 褐色(粘り気あるロームの小ブロック多量含む)
3. 褐色(粘りの強いローム含む)



第177図 第20号土壤

S K20 土層解説 A-A'

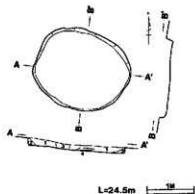
1. 褐色(腐敗土の斑点が散在するローム粒子含む)
2. 褐色(粘性强い、ロームブロック多量含む)



第178図 第21号土壤

S K21 土層解説 A-A'

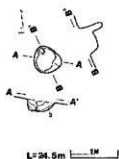
1. 暗褐色
2. 褐色
3. 褐色
4. 褐色



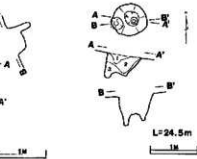
第179図 第22号土壤

S K22 土層解説 A-A'

1. 褐色(ローム中に暗褐色の腐敗土の斑点が混在)
2. 褐色(粘性の強いロームブロック多量含む)
3. 暗褐色(草木の腐敗土含む)
4. 暗褐色(ローム中に粘り気ある暗褐色土層含む)



第180図 第23号土壤



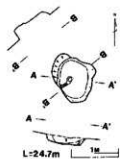
第181図 第24号土壤

S K23 土層解説 A-A'

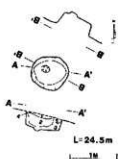
1. 暗褐色(暗褐色の腐敗土多量含む)
2. 褐色(ローム小ブロック多量含む)
3. 褐色(粘性の強いローム含む)

S K24 土層解説 A-A'

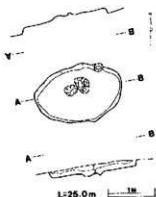
1. 褐色(ロームブロック多量含む)
2. 褐色(暗褐色のブロック含む、草木根腐敗土含む)
3. 褐色(粘性強い、ドローム含む)



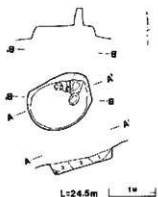
第182図 第25号土壌



第183図 第26号土壌



第184図 第27号土壌



第185図 第28号土壌

SK25 土層解説 A-A'

1. 褐色(草木根腐敗土含む)
2. 褐色(粘土強いローム含む)

SK26 土層解説 A-A'

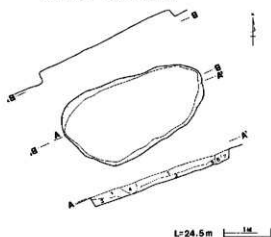
1. 暗褐色(ローム粒子少量含む)
2. 暗褐色(草木根腐敗土多量含む)
3. 褐色(粘性強いローム含む)
4. 褐色(ロームブロック含む)
5. 褐色(ロームブロック少量含む)

SK27 土層解説 A-A'

1. 褐色(ローム粒子中に暗褐色の腐敗土含む)
2. 褐色(粘性の強いロームブロック多量含む)

SK28 土層解説 A-A'

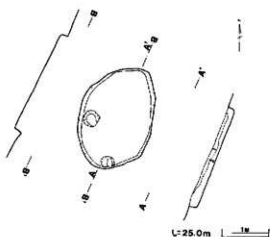
1. 褐色(草木根含む)
2. 褐色(ロームブロック少量含む)
3. 褐色(ロームブロック多量含む)
4. 褐色(粘性あるロームを含む)



第186図 第29号土壌

SK29 土層解説 A-A'

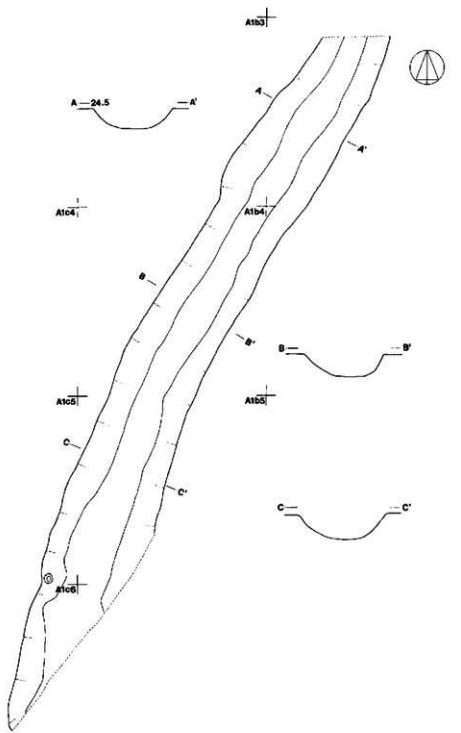
1. 褐色(草木根多量含む)
2. 褐色(暗褐色土中量含む)
3. 褐色(ソフトローム含む)
4. 暗褐色(草木根の腐敗土含む)
5. 褐色(ローム中に暗褐色腐敗土含む)
6. 褐色(草木根腐敗土多量含む)
7. 褐色(暗褐色土含む)



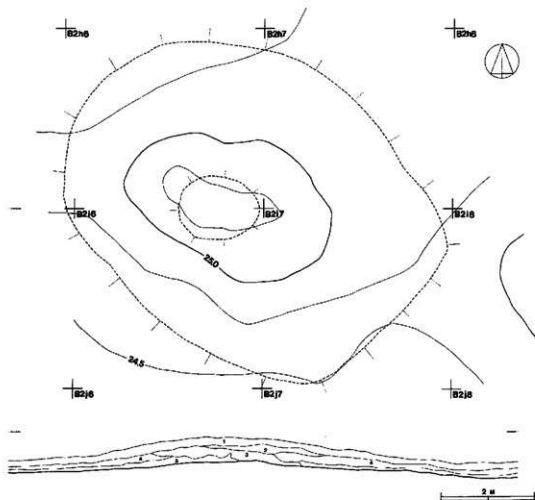
第187図 第30号土壌

SK30 土層解説 A-A'

1. 褐色(ローム中暗褐色腐敗土含む)
2. 褐色(粘土強いロームブロック含む)



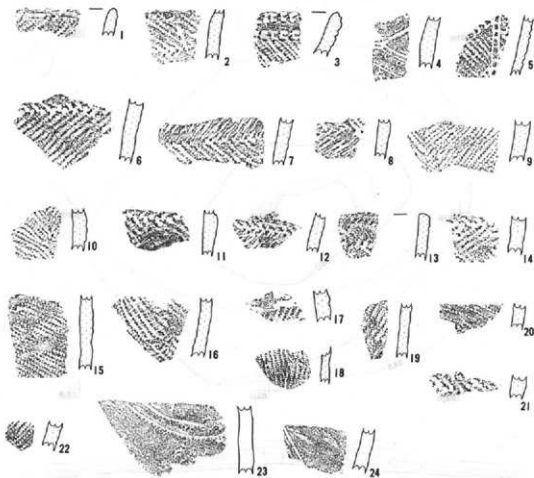
第188区 溝 址



第189図 塚

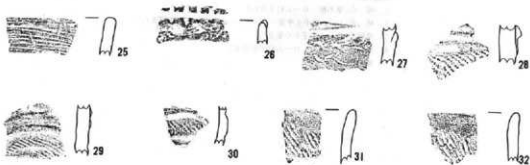
土層解説

1. 褐色(草木屑・ローム粒子含む)
2. 褐色(ローム粒子を中量・ハードローム中ブロック少量含む)
3. 暗褐色(ローム粒子を中量含む)
4. 褐色(粘性強く、ローム粒子が点在)
5. 褐色



第1号住居址

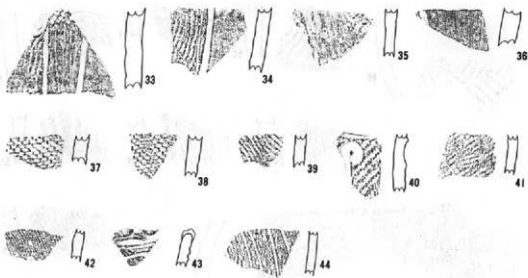
（昭和11年）



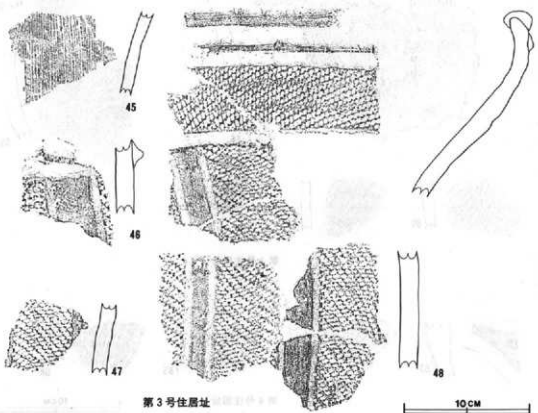
第2号住居址



第190图 遺構出土土器

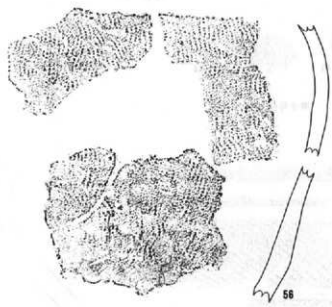


第2号住居址

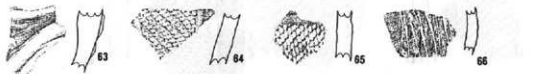


第3号住居址

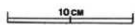
第191图 遺構出土土器



第3号住居址



第4号住居址



第192图 遺構出土土器



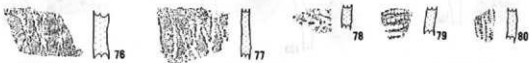
第1号土壤



第5号土壤(A)

第5号土壤(B)

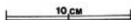
第6号土壤



第7号土壤



第8号土壤



第193图 遺構出土土器



第9号土埴

第10号土埴



第13号土埴

第14号土埴

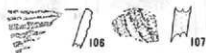
第17号土埴



第20号土埴

第21号土埴

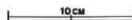
第22号土埴



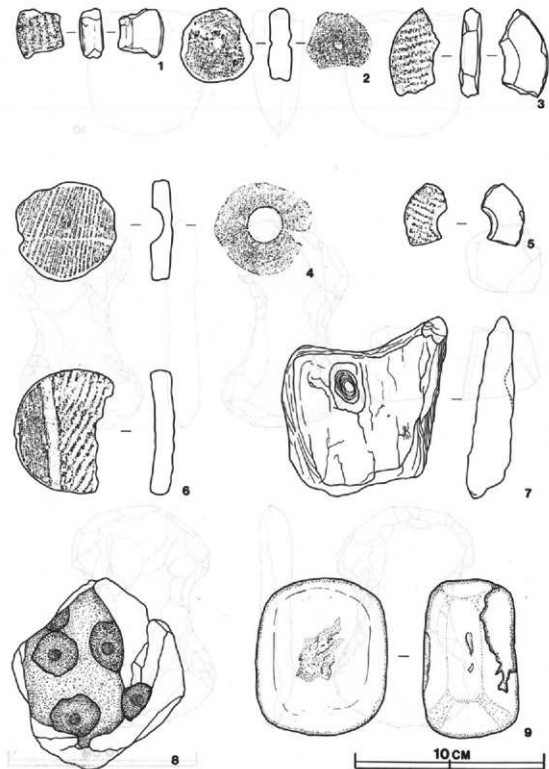
第30号土埴



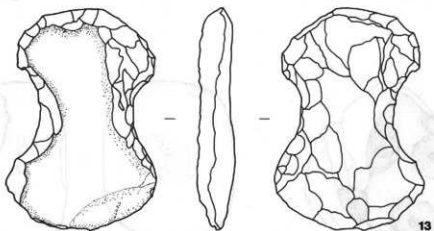
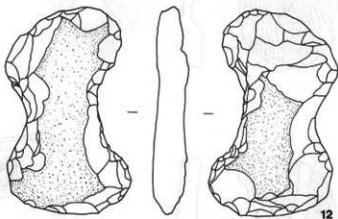
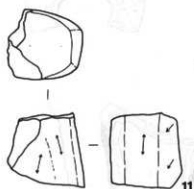
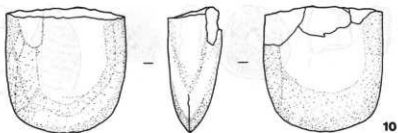
溝



第194图 遺構出土土器



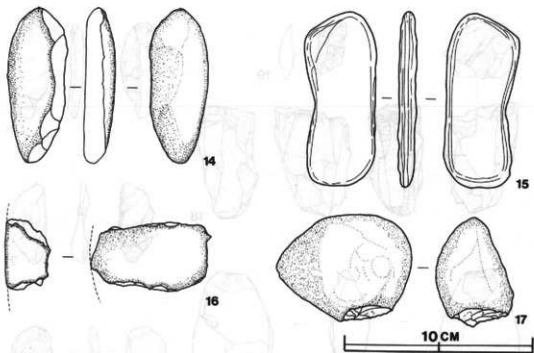
第195図 遺構・グリット出土 土製品・石器



10 CM

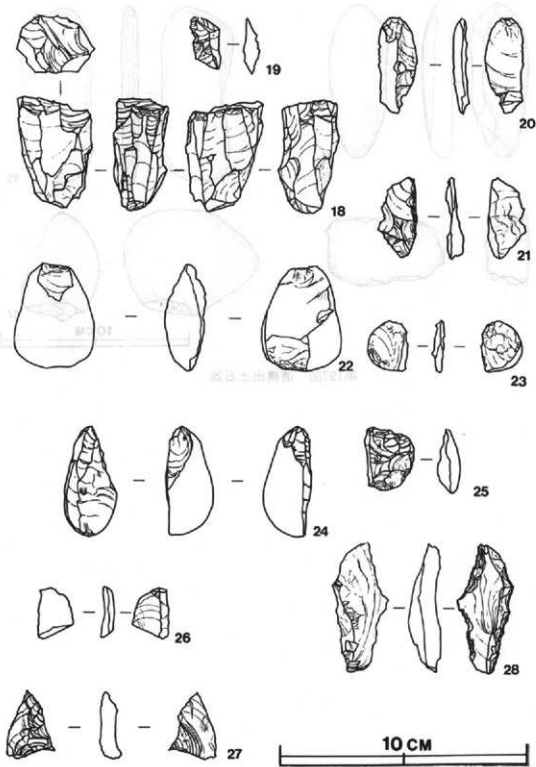
10 CM

第196図 グリット出土石器

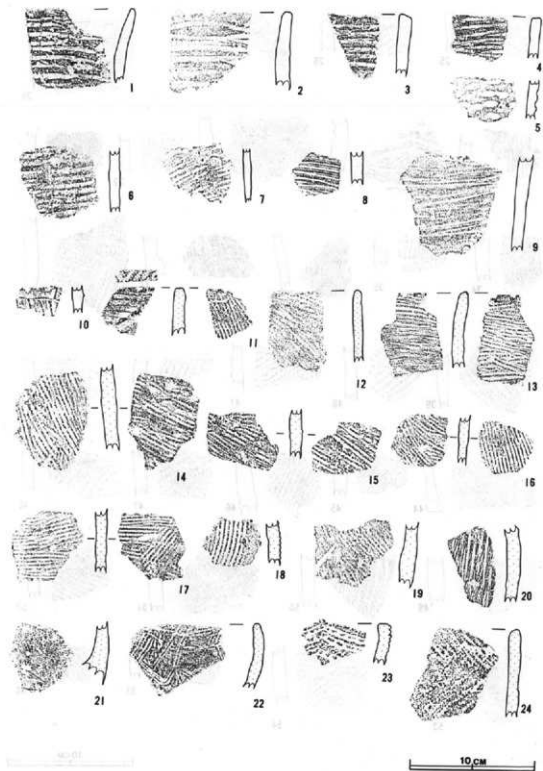


第197図 遺構出土石器

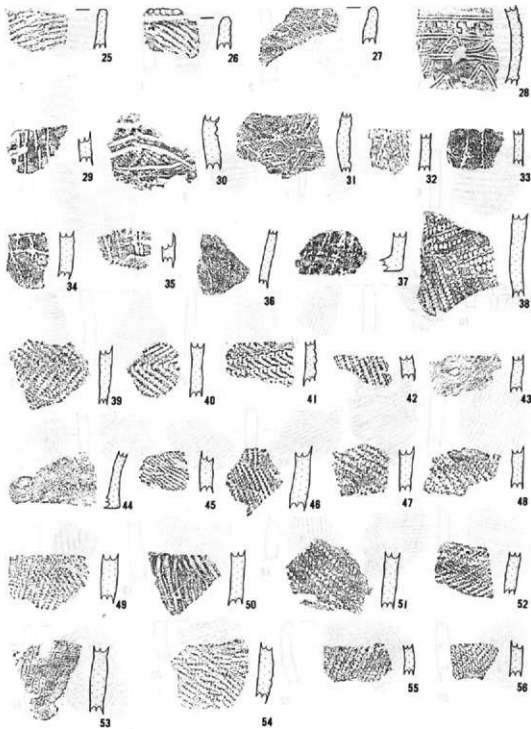




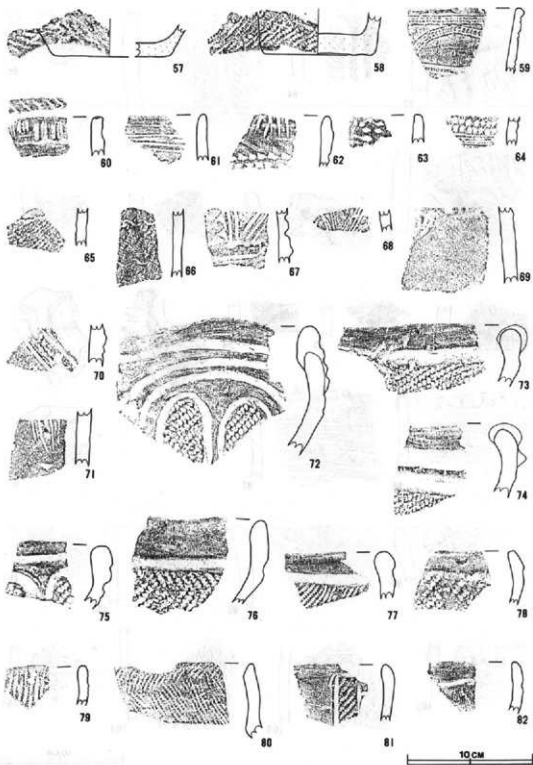
第198図 遺構・グリット出土 石器



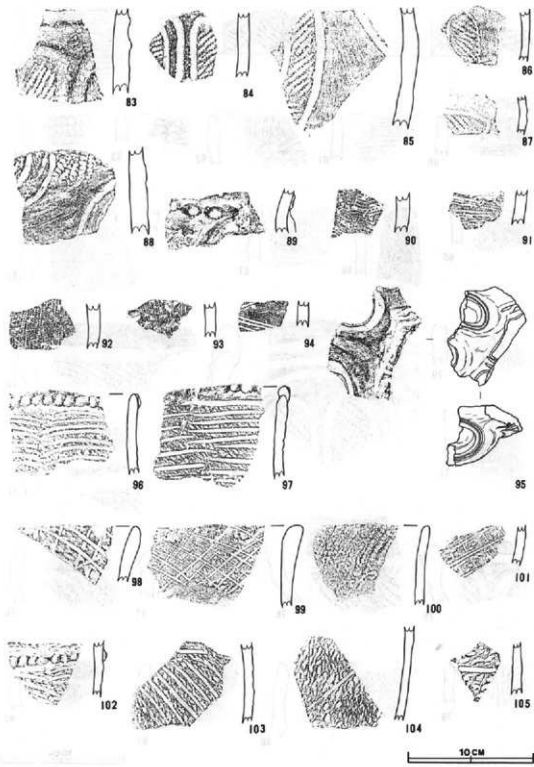
第199図 グリット出土土器



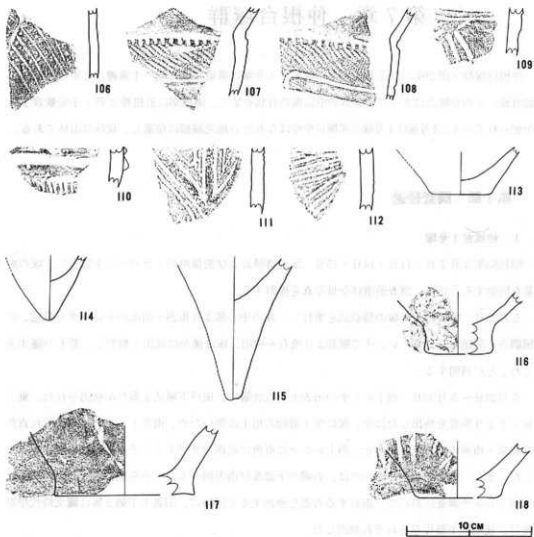
第200図 グリット出土土器



第201図 グリット出土土器



第202図 グリット出土土器



第203図 グリット出土土器

第7章 仲根台塚群

仲根台塚群(図204)は2基の塚から成る。1号塚は県道(龍ヶ崎―土浦線)と市道(駒馬―別所線)との分岐点にあって、山林の中に馬の背状を呈し、南裾部に道祖神2基・子安観音1基が祀られている。2号塚は1号塚の北側にややなれた台地先端部に位置し、現状は山林である。

第1節 調査経過

1. 仲根台1号塚

昭和53年3月7日・11日・14日・15日 塚の清掃および測量用のトラバースを設定し、塚の測量を開始する。15日、調査前遺跡全景写真を撮影する。

5月25日 仲根台1号塚の修葺式を挙行し、塚の中心部より東西・南北のトレンチを設定、発掘調査を開始する。東トレンチで堀部より焼石を検出。塚は僅かに地山を整形し、若干の盛土をしたことが判明する。

5月28日～5月30日 西トレンチの旧表上下包含層に、田戸下層式土器片が検出された。東トレンチより馬骨を検出したほか、塚に伴う遺物の出土は無いため、南北トレンチにそれぞれ直角に北東・南東のサブトレンチを、西トレンチに直角に北西のサブトレンチを設定し、調査を拡張した。また、南トレンチにおいては、石祠の下部及び南方向へトレンチを延長させた。その結果、北東トレンチ調査において、南行する古道を検出すると同時に、旧表土下第2層に縄文時代早期及び、後期の土器片をそれぞれ検出した。

5月31日～6月2日 北東・南東・東トレンチの発掘調査を実施した。遺物は塚盛土内で馬骨の検出が相次ぎ、また、旧表上下第2層に土器片が検出された。

6月3日～6月4日 各トレンチの土層断面・調査区・古道・地形整形部の平面等を測図し、調査を終了させる。

2. 仲根台2号塚

昭和53年3月7日・11日・14日・15日 エリア内伐開後の清掃と測量用のトラバースを設定し、塚の測量を開始する。15日、調査前遺跡全景写真を撮影する。

昭和54年8月27日～29日・31日 調査区を設定し、1区～5区の調査を開始したが、盛土は全く認められず、3区南部の第1層下ローム漸移層内に微量の焼土粒子を確認し、土壌状遺構を検



第204図 仲根台塚群全体図

出した。尚、塚中心部と5区にも上墳状遺構を検出し、1個体分の掘之内式土器片を出土した。

9月3日～9月4日 当遺跡は塚としてとらえるより、縄文時代の遺構調査が必要であると認め、第1号～第3号土墳の調査を開始した。

9月5日～9月7日 調査区の表土下第2層を全面排除、各遺構の精査・実測を終了させ、遺構等の写真撮影を実施する。

第2節 仲根台1号塚

1. 塚 (図205、図206、写64～66)

本塚は、県道(龍ヶ崎―十浦線)のために、北西側の裾部が削除されている。現在の規模は、南北径約10m・東西径約15m程で、やや楕円形状をなし、頂部の標高は26.36mである。旧地表面の中央部を残して僅かに整形を施し、30cm程の盛土をしたものと思われ、平坦部との比高は50cm程を測る。塚頂部の西側腹面には遺祖神2基・子安観音1基の石祠が置かれ、現在でも須馬町周辺住民の信仰の対象となっている。また、塚の付近は馬捨場とも呼ばれ、塚の南裾部の低い所から馬骨が検出され、この付近は馬の屍体を葬った場所であると考えられる。盛土下の旧表土下層からは、縄文時代早期の土器片と礫が出土した。

2. 遺物

土器 (図207・208)

出土した遺物は塚に伴うものではなく、縄文時代に編年される土器片群と礫であり、礫はほとんどが加熱を受けており、一部赤変している。

第1群土器 (1～15) 早期に編年される土器群で、更に2類に細分することが出来る。

1類 (1～58) 本類は、早期前葉の撫糸文系に編年されるもので、花輪台式に位置づけられるものである。

a種 (1～8) 1以外は、何れも胴部片であるが、縄文が施文されている。

1は、やや尖った口縁部を有し、外反して立ち上っている。1～8の器厚は何れも厚く1cm内外のものがほとんどであり、深鉢形土器の破片である。色調は暗褐色を呈するものが多く、胎土中に砂礫等を含み、焼成は良好である。

b種 (9～48) 無文の土器であり、ナデ整形痕だけがみられるものである。

9～17は、口縁部片でほとんどが直立ぎみに立ち上がりを示している。9はやや丸味を帯びた

口唇部を有し、補脣孔がみられる。その他の口縁部はまま尖った口唇部を呈している。18~48は何れも胴部片で縦位あるいは斜位のナデ整形痕がみられる。何れも厚く、色調・胎土・焼成ともa種と近似している。

c種(49~58) 燃糸文がみられるもので、燃糸文を地文として沈線が施文されたものもみられる。

II類(59~115) 本類は早期中葉の沈線文系のもので、これらを一括本群とした。更に細分可能であるが、文様構成により5種に分類される。

a種(59~74) 横位の太い沈線による施文がみられるもので、59~65は口縁部である。やや口唇が丸味を有するもの(59・61)、平らなもの(62・65)、尖っているもの(60・63・64)などがみられる。口縁部及び胴部は厚く、色調は灰褐色を呈するものが多い。

b種(75~81) 沈線による区画がみられ、更に区画内に沈線が充填されるものである。区画も縦あるいは斜めなどがみられる。

c種(82~91) 沈線が斜位で、口唇部はほとんど丸味を有したものである。

d種(92~104) 縦位の沈線を主体とし、縦位の列点文などが複合したものである。92~96は口縁部で、口唇部が丸味を帯びたもの(93・94)、やや平らなもの(92・95・96)などがみられる。口縁部及び胴部の何れも厚い。

e種(105~111・113~115) 前述のa~d種より細い沈線を有し、半截竹管によるものもあり、更に刺突文のみられるもの(105・107)もある。色調は、灰褐色を呈するものが多く、胎土中に砂粒等を含み焼成はほぼ良好である。

第2群土器(116~120) 後期に編年される土器群で量は少ない。縄文のあるもの(117)、波状櫛栞文のあるもの(116)、沈線区画内に縄文が充填されるもの(118~120)などがある。何れも後期初頭に編年されたものであろう。

第3節 仲根台2号塚

1. 塚 (図211、写67)

本塚は、1号塚の北約150mの北東に張り出した小さな舌状の台地上にあり、標高は約21mである。規模は、東西に約12m・南北に約11cm・高さ約0.7mの塚状であるが、この下に土壇が3基出土した。土壇確認面より上の土層には、人為的な壘上の形跡は認められなかった。従ってこれらの土壇は、周囲よりやや高いマウンド状のところに作られたものであり、その後自然堆積があって塚状とみえたものと推測される。

2. 土 墳

第1号土墳 (図212、写68)

本址は、塚頂部とみられた表土下に出土したもので、長径3.07m・短径2.80m・深さ0.32mを測り、長径方向N-54°-Wを指す楕円形の土墳である。墳の底面はやや硬く褐色を呈し、壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。覆土は、自然堆積である。遺物は、東側の墳底直上において粘土混じりの褐色ローム塊を検出した以外は無かった。

第2号土墳 (図213、写69-1)

本址は第1号土墳の南西に隣接して出土した。長径2.70m・短径2.19mを測る楕円形で、長径方向N-89.5°-Wを指す。塚とみなされた裾部の土層断面調査で、表土を除去した時点で確認されたものであり、焼土粒子が薄く上面被覆していた。第1号と同様、覆土は2層に区分する自然堆積である。墳底までは15.5cmと浅いが、壁の立ち上がりは垂直に近くしっかりしたものであった。遺物の出土は無い。

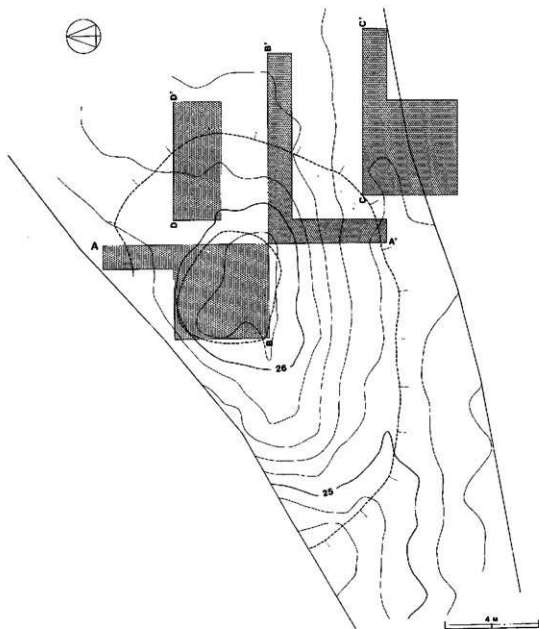
第3号土墳 (図214、写69-2、写70-1)

本址は第2号土墳の南側に隣接して出土した。長径0.9m・短径0.76mの楕円形を呈し、長径方向N-25°-Wを指す。深さは16cmと浅く、全体に皿状を呈し、墳底面が僅かに硬かった。遺物は遺構検出面から覆土第1層にかけて、土器が潰された状態で出土した。

3. 遺 物

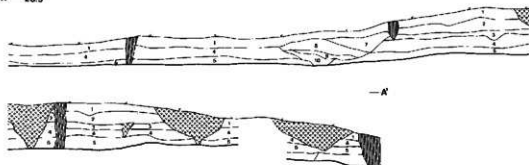
第3号土墳出土土器 (図215、図216、写71)

土墳の上面に、破砕されたような状態で出土した土器は、復元の結果、口径約49cm・器高38cm程の深鉢形土器であることが判明した。口縁部は無文帯を有し、頂部に沈線によるC文字及び刺突文がみられる。口辺部と胴部の間には横位の隆帯によって区画がなされ、胴部には沈線による格子状がみられる。色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は粗雑である。後期初頭に編年される土器である。

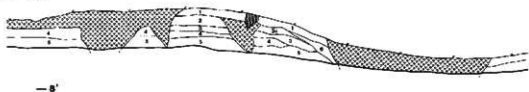


第205図 仲根台I号塚

A—26.5



B—26.5



C—25.5



D—25.5



土層解説 B—B'

1. 暗褐色(表土)
2. 黒色(II次土)
3. 黒褐色
- 3 a. 黒褐色(ロームブロック少量含む)

土層解説 C—C'

1. 暗褐色(表土)
4. 暗褐色
5. 褐色
7. 暗褐色(やわらかい)

土層解説 D—D'

1. 暗褐色(表土)
2. 黒色(II次土)
3. 黒褐色
- 3 a. 黒褐色(ロームブロック少量含む)

第1号塚 土層解説 A—A'

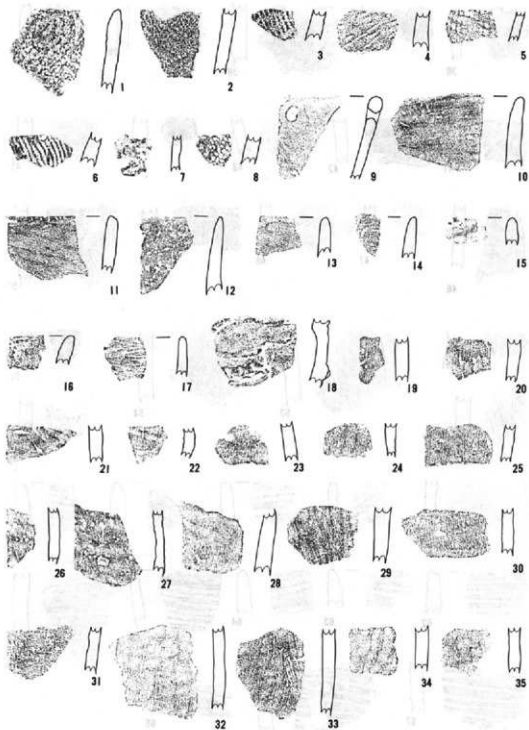
1. 暗褐色(表土)
2. 黒色(II次土)
3. 黒褐色
4. 暗褐色
5. 褐色
7. 暗褐色(やわらかい)
8. 暗褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
9. 暗褐色(硬い、踏み硬められたもの一帯)
10. 黒色(ローム粒子含む)

4. 暗褐色
5. 褐色
6. 暗褐色(ローム粒子、ローム小ブロック含む)

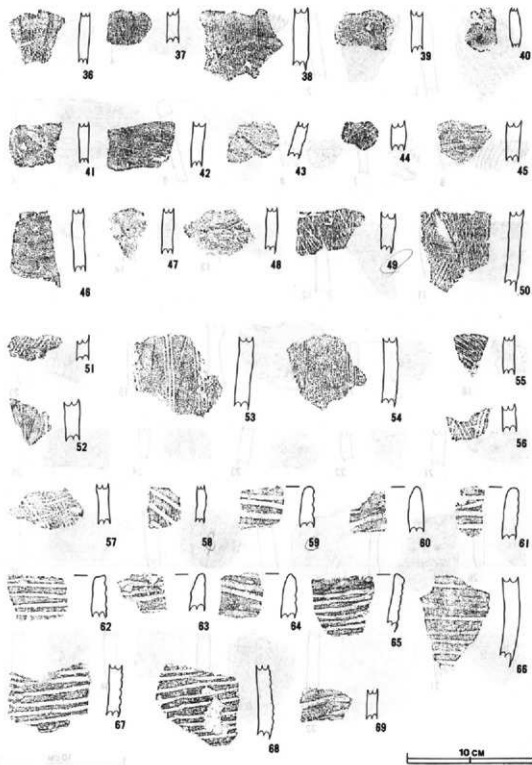
8. 暗褐色(ローム粒子含む、やわらかい)
9. 暗褐色(硬い、踏み硬められたもの一帯)
- 9 a. 暗褐色(硬い、道跡面)

4. 暗褐色
5. 褐色
7. 暗褐色(やわらかい)
8. 暗褐色(ローム粒子含む、やわらかい)

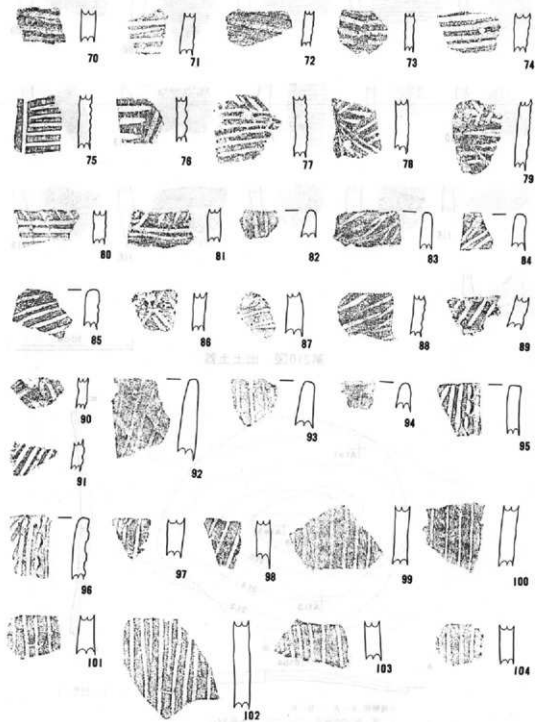
第206図 仲根台1号塚土層断面図



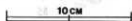
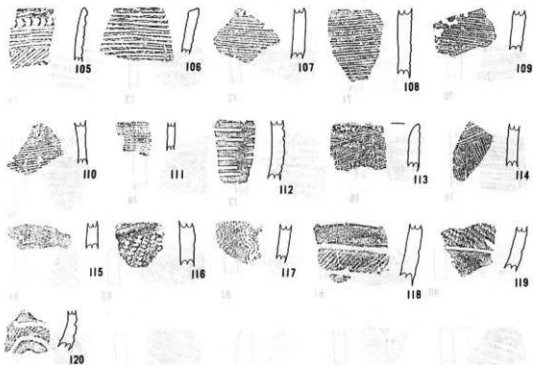
第207图 出土土器



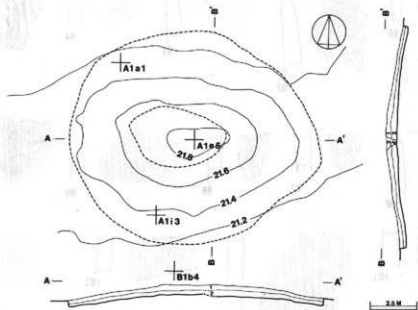
第208图 出土土器



第209图 出土土器



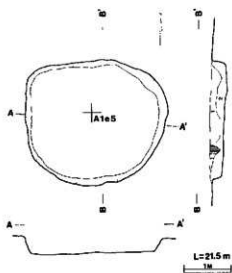
第210図 出土土器



土層解説 A-A'、B-B'

1. 褐色(やや軟弱、ロームブロック少量含む)
2. 褐色(粘着性や今有し、ローム小一中ハードブロック少量含む)
3. 褐色(軟弱、柱根址)
4. 褐色(柱根址)

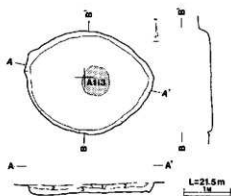
第211図 仲根台2号塚



第212図 第1号土壤

S K01 土層解説 B-B'

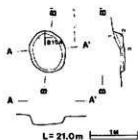
1. 暗褐色(ローム粒が多量含む)
2. 褐色(ローム粒子多量、ローム小ブロック少量含む)



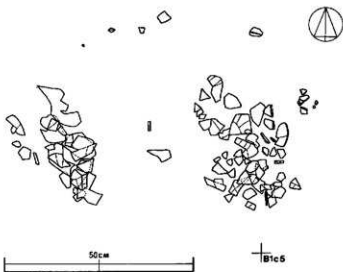
第213図 第2号土壤

S K02 土層解説 A-A'

1. 暗赤褐色(焼土多量含む)
2. 褐色(ローム粒を含む)
3. 褐色(ローム小ブロック少量含む)



第214図 第3号土壤



第215図 第3号土壤接合遺物分布図

S K03 土層解説 B-B'

1. 褐色
2. 褐色(粘土粒子少量含む)
3. 褐色(粘土粒子多量含む)



第216图 第3号土壤接合土器

第8章 廻り地B遺跡

この遺跡（図217、写72-1）は、別所集落の西方に複雑に入り込んだ谷をへだてた台地突端部にあり、現況は山林である。なお、西方谷をへだてた約300mには廻り地A遺跡があり、県道（龍ヶ崎―土浦線）が通っている。

第1節 調査経過

昭和54年9月13日 打越A遺跡の発掘調査と並行して、当遺跡の除草作業を実施する。またプレハブ等の設置場所の整地と、進入路の造成工事を開始する。

9月21日～10月11日 プレハブ・物置等の設置と物品移動を行う。グリット設定のための杭打ち作業を開始する。遺跡発掘前の全景写真撮影をする。

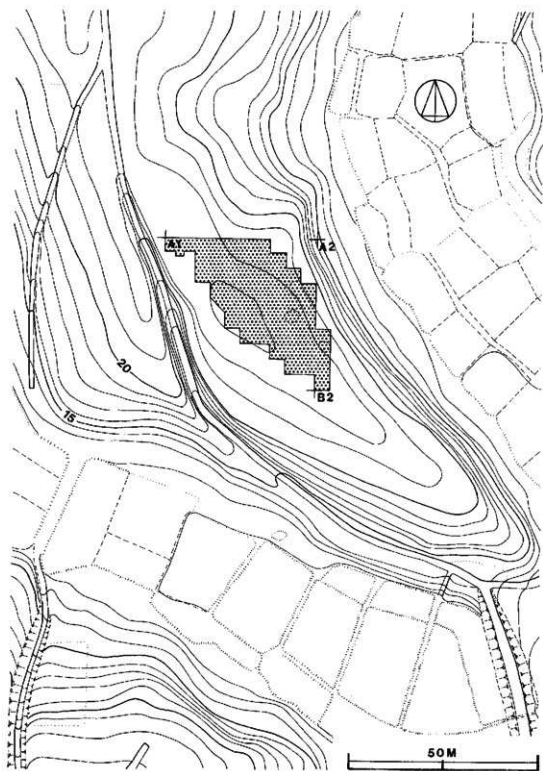
10月12日 遺跡進入路の幅員不足と悪路のため、その整備作業を実施する。また、遺跡の立地する台地が3方共急傾となっているため、危険か所の表示と閉鎖等の安全処置を施す。

10月13日～10月16日 北西から南東に張り出す舌状台地上に遺跡が位置するため、A1区北西側より表土除去作業を実施し、遺構の分布状況を把握する。

10月22日～10月25日 A1d₄から礫多数と、黒曜石の錐を1点検出。表土黒色腐敗層は、10cm内外と浅く、地山露呈作業において縄文土器片を検出した。A1c₆・A1a₇・A1d₈に、上面被覆土の色調と同じにする遺構状落ち込みを確認。A1c₆においては焼土粒子を検出し、地山色調と微妙に異なる遺構状落ち込みを検出した。

10月26日～10月30日 A1a₁・A1e₇・A1d₈・A1e₈・A1f₉・A1f₉に遺構状落ち込みを検出。全面表土除去作業の継続で、本遺跡における遺構は南東に走る中央稜線辺りに密集していることが予想され、微妙な色調変化を有する遺構検出面に留意しながら検出作業を続行した。ベルト土層実測・除去を実施し、遺跡を平面化しての遺構検出作業を行った結果、既検出の遺構状落ち込み9基の他に、7基が検出された。しかし、他の4か所についてはプランが判然とせず、要留意箇所として押えただけに留まった。

11月1日～11月4日 ベルト土層実測・除去作業及び遺構検出作業を実施した結果、住居址状遺構2軒・土壇状遺構16基・炉穴状遺構2基を確認し、第1号～第4号土壇の調査に続き第5号～第9号土壇・第1号・2号住居址の調査を実施した。第1号住居址においては、住居址と重複して土壇状の落ち込みが2か所検出された。第1号土壇東部の不明確なプランに、「T」字形の第1サブトレンチを設定して調査した結果、遺構が確認できた。



第217図 廻り地B遺跡全体区

11月5日～11月8日 第8号土壌においてビットを検出したほか、付近に3か所のビットを確認し、住居址の可能性を予測させた。第3号住居址と仮称、隣接して存した礫群の平面分布を実測。A1e₉・A1h₉も併せて実施した。第10号・第11号・第13号～第15号土壌の調査を開始、第2号土壌は炉穴と土壌の重複であることが判明し、第3号炉穴とした。第3号・第5号・第7号・第8号・第10号土壌、第1号炉穴の精査が完了する。

11月9日～11月13日 第2号炉穴南西部の遺構検出前に、焼土ブロック・炭化粒子の点在を確認したが、プランが不明確のため第2サブトレンチを設定する。その結果、炉穴であることが判明。また第3号住居址の床面・壁が不明のため第3サブトレンチを設定して追究中、ビットを検出する。第12号土壌調査を開始。第1号・第2号・第9号・第11号・第13号・第15号～第17号住居址、第2号・第3号炉穴精査終了。

11月14日～11月16日 第12号土壌には、複数の第5号・第6号炉穴が重複、第2サブトレンチで検出した第4号炉穴も含め調査を開始した。第1号～第3号住居址、第4号・第14号の精査を終了する。再度、遺構検出作業を試みたが確認できず、本遺跡における遺構は住居址3軒・土壌15基・精査中の土壌状遺構2基・炉穴3基・精査中の炉穴状遺構3基としておさえ、調査終末にあたっての今後の調査計画を検討した。

11月9日～11月22日 ほは調査も終了となり、次期調査のウツブタ遺跡への移行のための器材整理を実施する。第12号土壌、第4号～第6号炉穴の精査を終了し、測図加筆を行う。尚、第3サブトレンチ付近に新たに土壌1基を確認し、精査を完了させた。本遺跡での遺構検出は、住居址3軒・土壌18基・炉穴6基であった。遺跡発掘調査終了後の全景写真撮影を行う。

第2節 遺 構

1. 住居址

第1号住居址 (図219、写72-2)

本址は、当遺跡の立地する台地先端部中央付近に確認され、A1h₉を主体に4グリットにかけで存する。長軸方向N-21°-Eを指し、長軸6m・短軸2.8mの長方形である。北方に開ききみであり、北壁が外側に張り出している。南東コーナー近くの東壁部に径60mの円形状突出部があり、中央に径18cm・深さ39cmのビットがある。床の深さは50cmを有し、平坦で軟らかく、中央部付近及び南東部辺りが他面の褐色に比して暗い色調を呈している。床面北西部に第17号土壌を有するが、本址との関連性は不明である。また、床面南側中央に本址の施設であろうとみられる径43cm・深さ23cmのビットがあり、ビット上に礫群が確認された。壁はほぼ垂直に近い立

ち上がりで、台地が南方への傾斜を呈しているのに、北側壁のみが比較的低い。なお、南壁下に不整列ながら径20cm程・深さ30cm前後の支柱穴とみられるピットを8か所検出した。覆土は山側より堆積して、ほぼ水平に近い状態で谷側に厚みをもって堆積している。出土遺物は覆土内より縄文式早期土器片3点と時期不明の縄文式土器片1点を出土している。

第2号住居址(図220、写73)

本址は、遺跡エリアの中央の東寄り部、A1d₇・A1d₈を主体に確認され、長軸方向N-25°-Wを指している。平面形は短軸がやや外側へ彎曲する長方形で、長軸は6.4mを測る。短軸は東壁が傾斜面に位置し埋滅しているため推定でしかないが、およそ3.5m程とみられる。床面までは10cm内外と浅く、比較的硬い。北西コーナー付近のSK'01周辺の床面には極少量の焼土炭化粒子が確認された。主柱穴は4か所に認められ、他にピットが2か所と土壌状落ち込みが2か所にある。第1号土壌は北側コーナー部にあるもので、長径72cm・短径67cmを測る。第2号土壌は床面中央よりやや南寄りに位置し、長径82cm・短径67cm・深さ45cmである。なお、第1号土壌は主根址の可能性を有するが、第2号土壌は当址の施設と思われる。出土遺物は、第2号土壌横断面から縄文早期土器片1点が出土したほか、床面直上に縄文早期土器片1点と縄文前期土器片12点が出土し、その他にも覆土内から時期不明の縄文式土器片が出土している。

第3号住居址(図221)

本址は南に突出した台地の比較的平坦部に位置し、A1d₄を主体に確認された。当初、第1号住居址と同様、黒色表土下第2層中に礫群の一部を確認した。その後、プラン検出を急いだがピット検出のほかは不明であったので、第3サブトレンチを設定して壁及び床面の追求を行った。結果はピットを1か所検出しただけで、壁及び床面の検出は勿論のこと遺物も出土しなかった。しかし、礫群は第1号住居址のそれと近似し、二次焼成を受けて黒色表土下第2層から遺構検出面に至って遠っており、住居址の柱穴とみられるピットが第8号土壌との重複部を含めて5か所に確認された。

本址は、ピット配列・礫の遺存量と遺存範囲・遺構検出面において焼土粒子が微量ながら検出されたこと等をもって、遺構検出面が既に床面であったのではないかとされる。なお、P₃に近隣する第18号土壌内に、二次焼成を受けた破砕石・礫石群は、A1d₄・A1d₅・A1e₄・A1e₅におよび、径6m内外の範囲に点在して本址の南東方にも及んだ。本址の規模は約4.5m×5.5m程の長軸方向を北東に向けて、南西に開放ぎみの長方形プランと推測される。近接する礫群の中には、二次加工を認められる楕円形石器を検出している。

2. 土 壙

第1号土壙（図222、写74-1）

本址は A1g₆ に確認され、第1号住居址の東側 1.5m に位置する。平面形は、長径方向 N-54°-W を指し、長径 2.6m・短径 2.0m の不整形を呈する。壙底まで 46cm を測り、南側に 25cm の段差を有したテラス状の張り出し面をもっている。壙底面及びテラス面は硬く部分的にブロック化し、西に緩傾斜している。壁は西側が垂直に近く、東壁がやや外傾する。覆土は自然堆積で、山側より谷側へ流入した如く被覆している。遺物は覆土内に円礫を出土し、その下に条紋文土器片・中期前葉の縄文式土器片各 1 点が出土した。

第2号土壙（図223、写74-2・写77-2）

本址は、Ale₇ を主体に第3号炉穴と重複して確認され、その新旧関係は本址が新しい。平面形は、長径方向 N-67°-E を指し、長軸は推定で約 3.2m・短軸は 2.6m の長方形である。壙底までは最深部で 47cm・最浅部で 27cm を測り、壙底面は平坦な硬い面を呈し、南西方に僅かに傾斜する。第3号炉穴との壙底差は 15cm 内外で、本址が浅い。壁の遺存は良好で、北西側が外反するほか、外方へ直線的に立ち上がり全体に壙底面からの立ち上がり面は硬い。覆土は 3 層に区分し、下層は幾分赤褐色である。遺物は、覆土上層から下層にかけて縄文式早期土器片 5 点・縄文式前期土器片 4 点・時期不明土器片 4 点を出土したほか、壁に密着して縄文式前期土器片 3 点を出土した。また壙底面に少量の焼土の点をも認められた。

第3号土壙（図224、写74-3）

本址は A1f₁ に確認し、第2号土壙の南西に隣接する。平面形は長径 2.0m・短径 1.5m の楕円形を呈し、長径方向は N-81°-W を指している。壙底まで 51cm を測り、壙底面はハードルームブロックを含む平坦面である。壁は垂直で、北東側と南側の一部が内反している。覆土は、上位 1 層が焼土を多量に含む不定堆積状であるほかは、3 層ともレンズ状の自然堆積を示した。遺物は覆土内に礫・繊維混入の縄文式前期土器片 1 点を出土した。

第4号土壙（図225、写74-4）

本址は A1d₄・Ale₆ にかけて確認し、南東に第2号土壙が隣接する。平面形は長径 2.4m・短径 1.6m を測る不整形で、長径方向は N-32°-W を指している。深さは 30~50cm で、壙底面には 5 か所に窪みがある。壁は北東側が内傾するほかは大きく外傾する。覆土は 3 層を基調とす

るが、下層上面に焼土・炭火粒子を含む暗褐色土・ロームブロックの流入がみられた。覆土内からは、早期前葉の土器片1点・条痕文土器片10点・時期不明の縄文式土器片1点・礫5点を出土した。

第5号土壌（図226、写74-5）

本址は、標高22m程のほぼ平坦な台地の東端崖上の緩斜面に確認された。斜面のため表土下第2層までの削平により遺構東側部分が消滅してしまった。平面形は、長径方向N-1°-Eを指し、長径2.5m・短径は推定で1.6m程を測る楕円形である。深さは35cmで、墳底面は中央部が窪んでいる。壁高は20cm程のほぼ垂直な立ち上がりを呈し、南壁直下に径33cm・深さ15cmのピットを有する。覆土は部分的観察であるが、埋め戻しの堆積である。土壌内からの出土遺物に、縄文式前期土器片2点と時期不明の縄文式土器片2点・礫4点がある。

第6号土壌（図227、写74-2）

本址はA1c。に確認され、第11号土壌の北東に隣接する。長径方向N-51°-Wを指し、平面形は長径2.1m・短径1.7mの楕円形を呈する。深さは32cmを有し、墳底面は不整形の皿状である。北・南壁下にピットがあり、P₁が径15cm・深さ31cm、P₂が径20cm・深さ26cm程の規模である。壁は外傾し、南西側中段にテラス状の張り出し面を有している。覆土は自然堆積の状態で、3層に区分できる。遺物は、覆土内1層より礫1点・墳底面直上より縄文式前期土器片1点を出土した。

第7号土壌（図228、写75-1）

本址は比較的平坦な台地のA1g。で確認され、第4号土壌の南方約5mに位置する。平面形は長径2.1m・短径0.8mを測り、長径方向N-76°-Eを指す楕円形である。深さは21cmで、断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は2層（3・4層）に区分する自然堆積であり、擬位に区切られた2層（1・2層）は木の根による攪乱層である。遺物の出土はない。

第8号土壌（図229、写75-2）

本址はA1c。を主体に確認された土壌である。平面形は長楕円形を呈しており、長径6.1m・短径0.8mを測り、長径方向はN-37°-Wを指している。墳底までは11cm程と浅く、横断面形は皿状で、全体的に舟底形を呈している。覆土は、当址検出時においては褐色土が覆っていたが、これは第2号住居址と同様のものであった。堆積層は自然流入状の2層が主体で、一部に攪乱がみられた。墳底面は焼土・炭化粒子を含む硬い平坦面を呈し、かなり踏み固められているが、壁

に続く緩斜面はそれ以上に硬い状態であった。遺物は、溝底面及び緩斜面部に繊維混入の縄文式前期土器片3点が出土した。また覆土内からは、縄文式前期土器片2点と時期不明な土器片2点が出土した。

第9号土壌（図230、写75-3）

本址はA1c₀・A1c₀にかけて確認し、第10号土壌に隣接して位置する。平面形は、長径方向N-74°-Eを指し、長径3.0m・短径1.7mを測る半楕円形である。北壁中央が局部的に入り込み、その壁直下の溝底面上には土壌が遺存した。深さは24cmで、溝底面は軟かく平坦である。壁は僅かに外傾し、覆土は自然流入による堆積とみられた。南西壁に密着して繊維混入の縄文式前期土器片1点と、覆土下層より縄文式前期土器片1点・時期不明な土器片1点を出土した。

第10号土壌（図231、写75-4）

本址はA1d₀に確認し、第3号土壌のP₂に隣接して位置する。平面形は不整形形で、長径1.5m・短径1.4mを測り、長径方向はN-15°-Wを指している。平坦な溝底面は南東に片寄り、外傾している壁なりに緩傾斜を呈して落ち込んでいる。遺構検出面から溝底まで53cmを測り、溝底緩斜面の角度は約26°である。覆土は6層位に区分でき、人為的埋め戻し状を呈した。遺物は、地山の南側において縄文式早期土器片を出土した他、北壁中段に繊維混入の縄文式前期土器片6点を出土した。

第11号土壌（図232、写75-5）

本址は第3号住居址の北側に近接し、A1c₀で確認された。長径方向N-16°-Wを指し、平面形は長径1.5m・短径0.8mの楕円形を呈する。深さは12cm程で、溝底面はほぼ平坦で北壁直下と南壁付近の計4か所にピットを有する。壁面は不整形で、覆土も攪乱状を呈しており、抜根による攪乱の可能性を有する。壁・溝底面は共に硬い。出土遺物は無く、溝底面上の混入物等もみられなかった。

第12号土壌（図233、写75-6）

本址は、遺構上面及び周辺地山上に肉眼が点在し、当遺構についてはプラン不明のため「T」字形のサブトレンチを設定して確認した土壌である。台地先端付近のA1h₀・A2h₀にかけて位置し、第5号炉穴と重複するが、新旧関係は当址が第5号炉穴を切っており新しい。平面形は、長径方向N-56°-Wを指し、推定で長径2.4m・短径1.4mの楕円形を呈したと思われる。深さは50cmで、更に溝底面中央に径40×66cm・深さ30cmのピット状の掘り込みがみられた。溝底面は

ほぼ平坦であるが、壁は不整形に僅かに内反して外傾するため墳底面との境は明瞭に示さない。覆土は自然堆積状である。遺物は、墳底面直上より早期縄文式土器片7点を出土した他、南ピットの覆土内に同時期のもの3点、及び中期前葉の縄文式土器片3点を出土した。また、礫5点も出土している。

第13号土壌 (図234、写76-1)

本址は第14号・第15号土壌と共に、台地最奥部のA1a₁に位置する。平面形は径1m程の円形で深さは27cmであり、断面形は皿状を呈する。壁が大きく外傾するため、墳底面との境は不明瞭である。覆土は3層に区分でき、人為的埋め戻し状である。出土遺物は無い。

第14号土壌 (図235、写76-2)

本址は第13号・第15号土壌との中間に位置し、A1a₁に確認した。平面形は、長径方向N-6°-Eを指し、長径1.3m・短径1.1mの円に近い楕円形である。深さは25cmで、平坦な墳底面が僅かに北方に寄っているため壁は北側より南側外方へ傾斜する。覆土は、4層に区分する人為的埋め戻し状を呈する。遺物は覆土中から礫を3点出土した。

第15号土壌 (図236、写76-3)

本址はA1a₁・A1a₂にかけ確認した。長辺方向N-6°-Wを指し、平面形は長辺1.8m・短辺1.5mの北にふくらんだ隅丸三角形である。深さは48cmで、墳底面は極めて平坦である。壁は東西共にほぼ同角で外傾し、北壁のみ傾斜角を大きくして墳底から滑らかに立ち上がる。覆土は西方からの自然流入とも考えられるが、本址に堆積後何らかの意味で一部掘り返され、再び自然堆積を呈した可能性もある。出土遺物は無い。

第16号土壌 (図237、写76-4)

本址は第1号住居址の覆土中に掘られた土壌で、A1g₀に確認し、住居址の北東コーナー一部付近に位置する。本土壌は、第1号住居址の床面までは掘られておらず、墳底まで16cmと浅い。平面形は径90cm程の円形で、断面形は皿状である。覆土は自然流入による堆積を示した。出土遺物は無い。

第17号土壌 (図219)

本址は第1号住居址の精査中に確認されたもので、第1号住居址に伴う土壌か否か、また、その新旧関係も不明である。本土壌の平面形は径94cm内外を測る円形で、深さは42cmを有する。

壁は平坦な墳底から極めて良好な立ち上がりを示し、垂直に近い。覆土は、自然堆積状とみることが出来る。出土遺物は無い。

第18号土壇（図238）

本址は第4号住居址のP₃に近接して確認され、A1d₃に位置する。平面形は径57cm程の円形で、深さは34cmを測る。墳底面にはそれぞれ深さ48cm程を測るピットを3か所に有し、その角度は中央壁立ち上がり部に向け傾いている。壁は、南東側が外傾する他は垂直に近い立ち上がりである。覆土内より礫8点及び縄文式早期土器片4点を出土した。

3. 炉 穴

本遺跡における炉穴は総計で6基確認されたが、そのうち形状等が明確で無いものを3基含んでいる。

第1号炉穴（図239、写76-1）

本址は第2号住居址の南方5mのA1f₃に確認し、第3号炉穴の南東に隣接して位置する。平面形は双円形を呈し、主軸1.9m・幅軸径1.2m・1.4mを測る。主軸方向はN-33.2°-Wを指し、深さは21cm~25cm、平坦な墳底面は焼土を有する南東側に幾分傾斜を呈している。焼土は、墳底南東壁下に僅かな窪みをもち、その東側縁に40×28cmの範囲で潰っていた。壁は外傾し、覆土は埋め戻し状である。出土遺物は無い。

第2号炉穴（図240、写77-1）

本址は第3号住居址の北コーナー部に隣接し、A1c₃に確認された。第4号炉穴が南東側に接するように位置する。平面形は第1号炉穴と同様双円形で、主軸方向もN-36°-Eを指して似ているが、主軸1.5m・幅軸径0.8m・0.9mと小型である。深さは、北壇部で39cm・南壇部で46cm、双円の接合部が盛り上がり15cmの壁を有し、楕形の土壇を2基複合せた形である。北壇部の壁は外傾し、南壇部の壁は内反気味に大きく外傾している。覆土は自然堆積状である。北壇部覆土内に炭化粒子を確認し、南壇部には焼土塊と、焼土塊に潰っていた縄文式早期土器片を検出した。

第3号炉穴（図241、写74-2、写77-2）

本址は第2号土壇と重複してA1e₃で確認した。新旧関係は本址が古い。平面形は長径4.4m・

短径2.7mの楕円形で、長径方向はN-69°-Wを指す。深さは25-53cmを測り、墳底面は壁下に焼土を有して南西側に傾斜する。焼土塊は、径約43cm・深さ10cmの深みに同形状で出土し、周囲には焼土・炭化粒子が散乱状態で遺存した。壁は不整面で外傾している。出土遺物に、覆土下層から縄文式早期土器片6点がある他、時期不明な土器片6点を出土している。

第4号炉穴（図242、写76-6）

本址は第3号住居址東の緩斜面に確認した。北西に第2号炉穴・南に第5号土壇が接して位置する。確認面に焼土を確認したが、プラン不明のためサブトレンチを設定して調査した結果検出した遺構で、地山辺のローム漸移層中に焼土・炭化粒子及び微量の炭化材を出土している。本址は長径5.0m・短径3.2mの不整形で、墳底面は起伏に富んでいる。北東側が墳底面との段差40cmを有して壁よりテラス状に張り出し、墳底面は傾斜を緩やかにしてテラス部へ立ち上がっている。西側壁の墳底部からの立ち上がりは垂直に近く、墳底面最深部で62cm・最浅部で45cmである。焼土塊は何れも傾斜面上に遺り、F1焼土・F3焼土は焼土下に窪みを持ち、F4焼土・F5焼土は壁面にテラス状部分を設けて遺存している。F2焼土のみは墳底面で確認されたが、質・量的に良好な状態で遺っていた。遺物は、墳底面直上とF4焼土付近の墳底面に縄文式早期土器片4点を出土した他、覆土内から前期と時期不明の土器片3点を出土した。

第5号炉穴（図245、写75-6）

本址は南端部のA1h、付近に位置する。遺構検出面では遺物遺存が多く認められ、プラン不鮮明なため「T」字形のサブトレンチによって確認された遺構である。第12号土壇・第6号炉穴と重複関係にあり、第6号炉穴との新旧関係を明らかにすることはできなかったが、第12号土壇より古いものであることは確認できた。平面形は長径1.76m・短径は推定で1.5mの楕円形で、長径方向はN-67°-Eを指す。深さは45cmで、墳底面は比較的平坦で北壁直下に径60cm・厚さ18cmの焼土塊の断面は、上層が炭化粒子を含む赤褐色で、下層は褐色ローム中に焼土粒子を少量含む土層であった。なお、炉床は硬く、周辺に焼土粒子が多量に点在していた。遺物は、墳底面直上の縄文式早期土器片2点のほか、覆土内から不明土器片1点を出土した。

第6号炉穴（図244、写75-6）

本址は第5号炉穴の調査中に重複してA1h.で確認した。平面形は長径1.65m・短径0.73mの楕円形で、長径方向はN-68°-Eを指す。深さは30-50cm程で、墳底面は南側に傾斜している。壁はほぼ外傾するが、北側のみ内反して立ち上がる。焼土塊は、南側墳底面に60×140cm・厚さ10cmの範囲で検出され、焼土塊内には炭化粒子も部分的に含まれ、硬くて良好なものであった。

また、焼上塊下には2か所にビットがあり、このビット壁は熱を受けてブロック化していた。出土遺物は無い。

4. 礫 群

A礫群 (図245、写78-1)

本群は $A1d_4 \cdot A1e_4 \cdot A1d_5 \cdot A1e_5$ で検出されたもので、第3号住居址に接して径6m程の範囲におよぶ。検出面において焼土粒子・炭化粒子を確認しているが、特に $A1d_4$ の南西部に多かった。礫も $A1d_4$ において最も多く検出し、次いで $A1e_5 \cdot A1d_5 \cdot A1e_4$ の順であった。出土した礫を分類すると、火熱を受けた円礫51点・破砕礫71点、火熱を受けない円礫15点・破砕礫31点で、包含層内のものも含めると総計で221点を数えた。これらの遺存方法には人為的な痕跡は認められなかったが、 $A1d_4$ の南西に火熱を受けた礫が集中したことは、何らかの意味で人為的作業が加わったものとみられる。礫の大きさは、円礫・破砕礫とも小児の拳大で、石質は安山岩が大半の92%を占め、次いで花崗岩・泥岩の順である。

B礫群 (図246)

本群は $A1d_5$ の南東部から、 $A1d_5 \cdot A1e_5$ のA礫群を除いた部分と $A1e_4 \cdot A1e_5$ にかかる帯状に分布して点在した礫群である。分布範囲は長さ6m・幅1m程で、火熱を受けた円礫9点・破砕礫9点、火熱を受けない円礫1点・破砕礫9点を確認した。礫の大きさはA礫群と同様小児の拳大程で、火熱を受けた礫と受けない礫が混在した。石質は安山岩が全体の91%を占め、2点だけが玄武岩であった。

C礫群 (図247、写78-2)

本群は、第1号住居址の南床面中央にあるビット上に集中して出土したものと、第5号炉穴付近の遺構検出面に分布したものである。径1.2m程の範囲に集中しており、第5号炉穴付近のものを加えると径8mの範囲におよぶ。集中して出土された礫は、人為的に集められたものと考えられるもので、総数で50点を数え、全てが火熱を受けていた。集中して出土したもののうち円礫は37点・破砕礫は13点であった。第5号炉穴付近に点在した礫は、遺構検出作業時に出土したものを含めると47点を数え、火熱を受けたものが多数を占めた。大きさは、A礫群・B礫群同様小児の拳大程で、遺存の仕方には規則性が認められなかった。

第3節 遺構出土遺物

1. 住居址出土遺物

第1号住居址からの出土遺物は、遺構検出面で確認した礎群のほかは微細な縄文式土器であり、多くは覆土内からの出土であった。ただ、床面南側ピットの上部において検出した土器は礎群と共に出土したものであり、住居址と礎群を時期的に関連づけて考える好資料となった。

第2号住居址の出土遺物は、覆土が薄いこともあり、床面及び床面直上に時期的に離れた土器が出土したが、壁直下と床面に密着して出土した土器は縄文式早期の細片であった。住居址に伴う遺物としてみられるのは茅山式に比定されるものである。

第3号住居址については、礎群の検出と近接する第18号土壌内の遺物のみである。

第1号住居址出土遺物（図248、写80）

1～3は、（第2群土器）繊維を含み、条痕文を配すもの。4は、（第8群土器Ⅰ類）胎土に砂粒・長石等を含み、胎土・焼成共に浮島式に類似する。

第2号住居址出土遺物（図248、写80）

5・12は、（第2群土器）表裏に条痕文を配すもの。12は茅山式の尖底部辺とみられる。6～11・13～15は、（第3群土器）繊維を含み、横位沈線を配したものと無文のもの。9は丸味を帯びた口縁部片である。24～26は、（第4群土器Ⅲ類）条線文を格子状に施したもので、器面整形が粗雑である。16～20は、（第8群土器Ⅱ類）L R縄文とR L縄文を施したもの。21は、（同群Ⅲ類）沈線を有すもの。22・23は、（同群Ⅰ類）無文であるが、本遺跡出土の浮島式に焼成・胎土が近似する。

2. 土壌出土遺物

本遺跡の土壌から検出された遺物は、微細な土器片を含めても微量であった。時期的には比較的一定の時期に編年されるものであったが、第10号・第11号・第18号・第24号土壌を除き、その他の土壌検出遺物は覆土中からの出土遺物であり、各土壌との関連性や時期決定には判然としないうものがあつた。

第1号土壌出土遺物 (図248、図249、写81)

27～32は、(第2群土器)表裏共に条痕文を配し、繊維を含むもの。33は、調査区出土器分類表に加わらなかった土器である。口縁にスリットを有し、横位沈線の両サイドに三角文を施したもので、五領々台式土器とみられる。本遺跡からの出土はこのほか、第13号土壌から出土した2片のみであった。34は、(第8群土器I類)無文帯であるが、胎土・焼成から、中期から後期の土器片とみられる。

第2号土壌出土遺物 (図249、写81、写82)

35～39は、(第2群土器)条痕文をもち、繊維を多量に含むもの。39は内面のみ条痕文を施し、裏面に繊維痕をもったもの。40・41は、(第4群土器I類)半截竹管により沈線を施したもの。43・44は、(同群I類)貝殻腹縁文を疎に配すもの。42・45は、(同群II類)貝殻腹縁文の施文間隔を密にするもの。46は、(同群III類)条線文を配すもの。47～50は、(第8群土器II類)無文のもの。47・48はR L縄文を配すもので、薄手な口縁部片である。おそらく後期のものであろう。49は不鮮明だがL R縹文を配している。色調・焼成が浮島式に類似する。51～55は、(第8群土器I類)無文のもの。51・52は前期のものと思われる。53・54は焼成が良好である。55は口縁が折り返され、口唇部が外方へ突出している。また、焼成前にうがたれた孔を有し、内面下位には紐状貼り付け文を有する。

第3号土壌出土遺物 (図249、写82)

56は、(第3群土器)薄手な繊維を含む土器片で、器面整形が稚拙で起伏をもつ。

第4号土壌出土遺物 (図249、図250、写82)

57～66は、(第2群土器)条痕文を配すもので、57～60は同一個体片とみられる。67は、調査区出土遺物分類内に加わらなかった早期前葉の燃系文系土器である。68は、(第8群II類)おそらく後期の土器片とみられる。

第5号土壌出土遺物 (図250、写82)

69・70は、(第2群土器)繊維を含み、条痕文を配するもの。71は、(第8群土器II類)裏面に磨きを施し、焼成は良好で堅緻である。72は、(第8群土器I類)焼成が良好で堅緻である。3と同一時期か、比較的それに近い時期とみられる。

第8号土壇出土遺物 (図250、写82)

73は、(第4群土器Ⅲ類)に比定され、RLの緩い撚りを施文している。

第8号土壇出土遺物 (図250、写83)

74～76は、(第3群土器)の付加条第1種縄文で、繊維を含み焼成が良好なもの。裏面に繊維痕が認められ、色柄は赤褐色・にぶい橙色である。77は、(第4群土器Ⅱ類)半截竹管による瓜形文を施したもの。78は、(同群Ⅱ類)貝殻腹縁文を配するもの。79は、(第8群土器Ⅰ類)浮島式の無文帯部のようである。

第8号土壇出土遺物 (図250、写83)

80は、(第3群土器)付加条第1種 $\begin{matrix} \text{I, R} \\ \text{L} \end{matrix}$ 縄文を配するもの。81は、(第4群土器Ⅲ類)LR縄文の緩い撚りのもの。82は、(第8群土器Ⅰ類)無文で、外面が磨かれている。83は、(同群Ⅱ類)RL縄文に縦位沈線を配したもの。

第10号土壇出土遺物 (図250、写83)

84～88は、(第3群土器)繊維を含み、84・85は付加条第1種縄文 $\begin{matrix} \text{R, L} \\ \text{L} \end{matrix}$ を配するもの。

第12号土壇出土遺物 (図250、図251、写83)

89～98は、(第2群土器)条痕文を配するもの。99・100は、先の第1号土壇出土のものと同類で、口縁部にスリットを有し、RL縄文を地文に沈線と三角文を有した五領ヶ台式土器片である。101は、(第6群土器)「S」字状結節文を有するもの。

第18号土壇出土遺物 (図251、写84)

102～105は、(第2群土器)条痕文を配するもの。

3. 炉穴出土遺物

炉穴は6基検出されたが、そのうち焼土以外の遺物を出土した炉穴は4基である。

第2号炉穴出土遺物 (図251、写84)

106～111は、(第2群土器)繊維を含み、条痕文を配したもの。

第3号炉穴出土遺物 (図251、図252、写84)

112～117は、(第2群土器) 繊維を含み、条痕文を配すもの。119～120・122は、(第8群土器I類) 無文のもので、中期頃の土器片と思われるもの。118は、(同群II類) R $\left\{ \begin{array}{l} \text{I.} \\ \text{L.} \end{array} \right.$ 縄文を地文に有し、斜行沈線を配したもの。121・123は、(同群II類) 不明縄文を配したもの。

第4号炉穴出土遺物 (図252、写85)

124～131は、(第2群土器) 条痕文を有するもの。132は、(第4群土器I類) 沈線を有した口縁部片。133は、(第8群土器III類) 沈線を斜行させた地文に、半截竹管による平行沈線を横走させたもの。134は、(同群I類) 無文のもの。

第5号炉穴出土遺物 (図252、写85)

135・136は、(第2群土器) 表裏共に条痕文を有したもの。137は、(第8群土器I類) 微細なため不明の土器片である。

第4節 グリット出土遺物

1. 土器

廻り地B遺跡から出土した遺物は少量であり、遺構内から出土した土器そのものが微量の細片でみれば少く、かえって表土中からの出土土器に良例があった。そのため、本遺跡では表土から出土した土器を分類した。早期・前期・後期に編年されることから時期別に群とし、更に型式別に分類した。また、グリット出土土器分類に基づいて、先の遺構出土土器を分類した。

第1群土器	田戸下層式土器	第5群土器	前期後葉の土器
第2群土器	茅山式土器	第6群土器	下小野式土器
第3群土器	黒浜式土器	第7群土器	堀之内式土器
第4群土器	浮島式土器	第8群土器	不明の土器
			I類 (無文系)
			II類 (縄文系)
			III類 (沈線文系)

第1群土器 (図253-1、図256-134)

早期中葉の田戸下層式に比定される土器で、沈線文系土器を本群とする。本遺跡からの出土は極めて少ない。1は細片で、やや斜行ぎみに横走する沈線が配され、若下であるが沈線間を斜め

に押し引いた擦痕を有している。先端の丸い棒状施工具によるもので、施文間隔は狭いが稚拙である。134は、その尖底土器片と思われる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・長石・石英等を微妙に含み、焼成は良好である。

第2群土器（図253-2-25、図254-26-38）

早期後葉の広義の茅山式に比定される土器である。表裏に斜行及び縦横のアナダラ科の貝殻条痕文を配し、胎土中に繊維を含む。本遺跡からの出土量は他群の土器に比して多い。2は口縁で、口唇部がへら状工具により整形がなされ、直線的な立ち上がり呈している。3-5は口縁部に幾分丸味を有し、3は直線的に、4・5は外反して立ち上がる。6・7も口縁部であるが、6は口縁部外面、7は口縁部内外面にアナダラ科の貝による腹縁部押捺文を施し、外面には貝背擦痕文もみられる。8-35は、胴部片である。器面が剥落して文様識別が困難なものを若干含むが、多くは表裏共に条痕文を配し、条痕地に再び条痕文を加飾するものである。36-38は、尖底部辺の破片で36・38は底部で肥厚したものとみられる。37は薄手で小型の土器とみられる。共に底部は外面が黒褐色を呈し、内面は赤褐色を呈しており焼成は不良であった。色調はにぶい黄褐色・にぶい橙褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・繊維を含み、焼成は良好である。

第3群土器（図254-39-56）

前期中葉に属す黒浜式に比定される土器である。何れも繊維を多含する。39-43は、 $\begin{matrix} R & L \\ \downarrow & \downarrow \\ L & L \\ \downarrow & \downarrow \\ R & L \end{matrix}$ 撚りの付加条第1種縄文を、施文方向を変えて羽状を配したもの。44・45は、正反の合の撚り $R \left\{ \begin{matrix} L & R \\ \downarrow & \downarrow \\ R & L \end{matrix} \right.$ の縄文を配し、関山系土器と類似する。胎土は繊維の他、砂粒・長石・石英を含み、色調は赤褐色を呈するものがこの種である。46-48は、 $\begin{matrix} R & L \\ \downarrow & \downarrow \\ L & L \\ \downarrow & \downarrow \\ R & L \end{matrix}$ 撚りの付加条第1種縄文を配すもの。51・52は、 $\begin{matrix} L & R \\ \downarrow & \downarrow \\ L & R \\ \downarrow & \downarrow \\ L & R \end{matrix}$ 付加条第1種縄文を配したもの。53は、LRの細かい撚りで斜行縄文を配している。54は、前述の関山系と類似するもので、 $L \left\{ \begin{matrix} R & L \\ \downarrow & \downarrow \\ L & R \end{matrix} \right.$ 縄文の施文である。49・50は、器面が著しく磨耗しているが、おそらく $\begin{matrix} R & L \\ \downarrow & \downarrow \\ L & L \\ \downarrow & \downarrow \\ R & L \end{matrix}$ 撚りの付加条第1種縄文の施文であるとみられる。55は、磨耗著しく不明であり、56は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ \downarrow \\ L \end{matrix} \right.$ 撚りの縄文とみられる。焼成は51-55-56を除き良好である。色調は概ね褐色を呈し、胎土中に繊維の他、石英・長石等も含まれる。

第4群土器（図254-57-60、図255-61-86）

前期後葉の浮島式に比定されるのがこの群で本群は時期的な差もあり細分が可能で、I式をI類・II式をII類・III式をIII類とする。

I類（図255-64-70・76）本類は、沈線文系土器で浮島I式に比定されると思われるもの。

64・65は、半截竹管の先端を平縁に削いだ施文具により、比較的深く線刻されたもの。67・68は、器面をへら状工具で整形して、沈線を配したもの。68は、2条の平行沈線を配したもの。69・70は、口縁に平行して数条の沈線を配したもので、地文に貝殻腹縁線による擦痕がある。横位沈線のものとは比較的厚手のものと薄手のものに分けられる。76は、間隔の粗い貝殻腹縁線を配したものの。色調は褐色・にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒を多量に含み、長石・石英等を少量含むが、69・70は長石粒・石英粒を多量に含んでいる。

Ⅱ類(図254-57・59・60)本類は、波状貝殻腹縁線を配したものと爪形文を配したもので、浮島Ⅱ式の範疇に加わるとと思われる土器群である。57は、口縁に平行して横位沈線の区画を有して爪形文を配したもの。59・60は、平行沈線区画に爪形文を配するもの。以上の色調は橙色・にぶい褐色を呈し、胎土中には砂粒・長石・スコリア等を含み、焼成は良好である。

Ⅲ類(図255-71~92)浮島Ⅲ式に比定できるであろう土器片を本類とし、波状貝殻腹縁文・爪形文・三角文を有するもの・縄文を有するもの等に概ね別した。

波状貝殻腹縁文(図255-71・75)75は、殻長が広く、支点交差が小刻みで両端が深く押擦されたもの。色調は褐色地に部分的に明褐色・赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中には砂粒・長石・石英を多量に含む。

爪形文(図254-58・図255-61~63・77)浮島Ⅲ式に比定されるとと思われる爪形文を配するものを本類とした。58は、沈線間に爪形文を配するもので両端が深く刻まれる。61~63・77は、半截竹管の支点交差による施文で、両端が深く刻まれ竹管文を配するものもある。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に砂粒・石英・長石等を含む。焼成は良好である。

条線文(図253-78~86)数条の直線的な沈線を縦・横・格子状に配した土器片である。何れも半截竹管を複数に束ねた施文具によるものとみられるが、80・83は同一片で、縦位・斜行の条線を施してある。78・79・81・82・84~86も同類の条線文を配したものである。全体的に、通常浮島式土器の粗製土器とみなされる輪積み痕を残し、器面が粗雑なものへら状工具で器面のなで整形をするものと分けられる。色調はにぶい黄褐色・にぶい橙色・にぶい褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア・石英・雲母等を含み、焼成は良好といえる。

三角文(図255-71)71は、横位平行沈線間に縦の薄い沈線整形痕と三角文を有している。色調等は第5群と同じである。

縄文(図255-72~74)72~74は、RLの緩い撚りを施文してある。表面は斜め上へのナデ整形痕を残す。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・長石を多含し、石英・スコリア等をも含む。焼成は良好である。この他に浮島式の範疇に加えても大過ないとみられるのが91・92・98である。91・98は器面磨耗が著しいが、RL縄文を地文に半截竹管による有節沈線文を施す。92は底部片である。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良好。胎土中に砂粒を多含し、長石・石英を

み本遺跡出土の浮島式土器に類似している。

第5群土器（図255-87～90）

本群は、前期後葉の土器とした。三角文の列点刺突を繰り返し、線状に施文した土器群である。87～90は、本遺跡からの出土は希有であり、この4片のみである。何れも胴部片とみられ、横位に平行な三角文の列点刺突により線状に施文し、その間に同じ施文方法で波状の文様を配す。89・90は同一個体片であろう。87・88よりは刺突間隔が疎で、2条の区画内に波状施文を凝らしてある。色調はにぶい褐色・にぶい橙色を呈し、胎土中に長石・砂粒・雲母を含む。焼成は良好である。

第6群土器（図255-93～97）

結東第1種と、「S」字状結節がみられる土器を本群とし、前期後葉の下の小野式の範疇に加わる土器とした。93は、口縁部でLR縄文の施文方向を変えて羽状に配したもので、口唇部は尖り、隆を呈して外反する。裏面には粗いヘラナデ整形痕が認められ、口縁部外周はナデ整形を施している。94は、綾格文の一部を磨り消している。下位に、結節第2種による「∞」字文が配されている。95・96は、LR縄文を結節第1種で結んだもので、「S」字状結節文がみえる。97は、その同一個体片でLRの施文を有している。

第7群土器（図255-98、図256-99～111）

本群は、後期前葉の堀之内式に比定できるものとした。98は、RL縄文を地文に有節沈線を配したもので、焼成が特に良好である。99は、無文の口縁部に1条の横位沈線を配し、平行した紐状隆帯に棒状工具で斜めに押圧沈線を施したもので、下位には、縄文を地文に有して、蛇行して垂下する沈線を配してある。薄手で、口縁部は極度に内彎している器形で、裏面は棒状工具による研磨が施されていた。堀之内I式に比定される。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好で、胎土中に砂粒・長石等を含む。100～106の口縁部片のうち、100は器面にナデ整形痕を呈し、口縁部辺に横位微隆起線を有す。101は沈線のみ配したもので、胎土中に金雲母を多含する。102は僅かな波状口縁を呈するもので、突出部に焼成までの段階で塞がってしまった孔を有する。105は、貼り付けた太い隆帯部中央を半截竹管で剥ぎ取り、細い2条の隆帯を貼り付けたように施したものである。107～111も堀之内式系に比定して人遇ないとみられる。器面の磨耗が著しいが、縄文を地文に直線状の沈線が描出されている。色調はにぶい褐色・にぶい橙色を呈し、焼成は良好で堅緻である。胎土中に微砂粒・スコリア・長石等を含む。

第8群土器(図256-112~135)

時期不明な土器を本群とし、無文系をⅠ類・縄文系をⅡ類・沈線文系をⅢ類と類別した。

Ⅰ類(図256-112~122) 本類は無文系とし、へら状工具で器面をナデ整形しているものも含む。112は、丸味を帯びた口縁部で指頭押圧痕が残存し粗雑である。浮島系の粗製土器と思われる。113は、薄手で外面はへらナデ整形痕、内面は指頭による磨きに近い整形痕を有す。114~121は、底部辺に近いものであろうか、横に彎曲する。114~116・118は、外面をへらナデ整形している。122は、底部である。色調は、へらナデ整形痕を有するものに比較的赤褐色を呈するものが多く、他は褐色・にぶい橙色を呈す。焼成は何れも良好で堅緻であり、胎土中に砂粒を微量に含有する他、微長石粒を含む。

Ⅱ類(図256-123~130) 縄文の施文を本類とし、2種に分別する。疎な縄文帯を配するもの(図256-123~127) 123~127は、R L縄文の施文間隔を疎にし、比較的薄手上器片である。色調は褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に砂粒・長石粒・石英粒を含む。密な縄文帯を配するもの(図256-128~130) 128・129は、R L縄文の複合部であろう。130は、L R縄文の施文である。128・129の色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・長石・石英・雲母等が含まれる。焼成は比較的良好である。130は、胎土中に含まれるものは類似するが、色調はにぶい橙色を呈し、焼成は普通である。

Ⅲ類(図256-131~133) 沈線文系を本類とする。131・132は、先端を巾広く平縁に刻いた施文具で、深く直線的に線刻したものである。本遺跡出土の田戸下層式・浮島式・堀之内式とも異なる。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。胎土中に微砂粒・長石・石英・雲母を含む。133は、薄手の口縁に突瘤文を有し、半截竹管による沈線区画内に三角文を配したものの。纖維は含まない。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・雲母・石英・長石等を含み、焼成は不良である。

2. 石 器

石錐1(図257、写85)は、A1e₃の表土下第2層より出土した。石質は黒曜石で、長さ34mm・幅12mm・厚さ7.5mmを測る。尖頭器の再利用とみられ、下部の刃部に潰し痕を有し、單刃錐である。先端刃部は欠失している。

たたき石2(図257、写85)は、A1e₃の表土下第2層より出土した。表裏中央に窪みを有し、側縁面に打撃痕と研磨痕を残している。石質は安山岩で、長径8.4cm・短径6.3cm・厚さ4.3cmを測る。

楕円形石器3(図257、写85)は、A1d₃の礫群と共に表土下第2層から出土した。用途不明

の石器で、全面に擦痕と研磨痕を僅かに有している。石質は安山岩で、長径12.3cm・推定の短径6.5cm・厚さ4.1cmを測り、一部欠損している。

両面礫器4（図257、写85）は、A1d₄の南東部の表上下第2層から出土した。下面からの1回の打撃により、表裏両面を剥離している。刃部は鈍角で鋭利とはいえない。石質は安山岩で、長径7.05cm・短径5.7cm・厚さ2cmを測る。

残核5（図257、写85）は、A1d₄表土下第2層から出土した。石質は頁岩で、長径4.6cm・短径2.9cm・厚さ2.8cmを測るほぼ三角柱の形状を呈するもので、多方向からの打撃によって剥離された残核である。

第5節 まとめ

住居址については3軒を確認したが、遺物を伴った遺構は第2号だけである。そのうち床面直上に遺存したのは茅山式と浮島式であるが、量的には浮島式が多い。しかし、この遺物も覆土が浅いことから蓋然性が強い。形態上は早期から前期にかけてのプランに類似するが、床面には土壌状落ち込み1基（SK'01は主根址とみた）と主柱穴を4か所に有しているのみである。床面上には焼土粒子・炭化粒子が希薄に遺存したが、その中心となる部分はコーナー部であった。第1号については、第2号よりは長軸に比して短軸が短い隅丸長方形で、プラン上は早期から前期のものに類似する。第2号との形態の差異は、床面が深く掘り込まれており、谷側に壁柱穴とみられるピットが確に設けていること・主柱穴が皆無であること・局部的に壁が張り出し、柱穴を有したこと等である。第3号についてはピットの確認のみで判断したが、主柱穴を有することで第2号と共通する。また、礫群を有することでは第1号と類似している。そして、興味あることは、第1号・第2号に近接して炉穴が位置していることである。第1号においては東の谷側に1基、第2号においては東の谷側に2基・南に1基・西に1基と、住居址を囲む配置となっている。

土壌については、総数18基を確認している。時期判定資料としての遺物を伴うものは次の通りである。

時 期	土 壌 の 番 号		
茅 山 式 期	第4号	第12号	第18号
黒 浜 式 期	第8号	第9号	第10号
浮 島 式 期	第2号		

土壌は、概ね稜線に近い平坦なところに位置するが、茅山式期の土器を出土した土壌は、第4

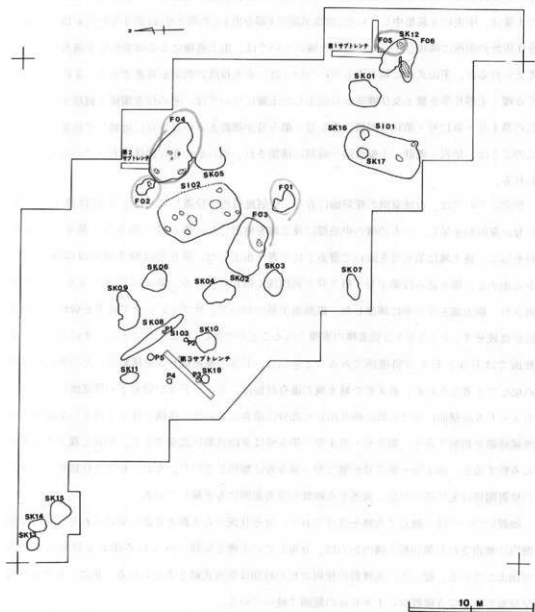
号がB礫群付近・第12号がC礫群付近・第18号がA礫群付近に位置し、黒浜式期の土器を出土した土壌は、中央に3基集中していた。浮島式期の土器を出土した第2号は、第3号炉穴を切って第2号住居址の南西に隣接している。他の土壌については、出土遺物による時期判定が適当でないと考えられるが、茅山式期に属するものについては、ある程度の判定が可能である。茅山式期に属する礫・土器片等を覆土及び墳底から出土した土壌については、その位置関係を観察すると、前述の第4号・第12号・第18号同様、第1号・第5号が礫群あるいは炉穴に近接して位置している。このことは、炉穴・礫群・土壌が同一時期に構築され、何らかの相互関係を有していたものと思われる。

炉穴については、台地東側の緩斜面に存し、住居址付近に位置している。形状は第1号・第2号が双円形を呈し、一方の墳の中央部に焼土塊を検出した。第3号・第5号・第6号は楕円形を呈し、焼土塊は第6号を除いて壁直下に片寄り出土した。第6号は焼土塊をほぼ墳底一面から出土し、掘り込みは第1号・第2号と同様浅く掘られている。第4号はサブトレンチで検出され、焼土塊を5か所に確認した。縦断面土層において、サブトレンチで途中を切断したが層位が連続せず、F1とF5は別遺構の重複とみることができる。更に、サブトレンチにおける上層断面ではF3とF5が別遺構であることを示し、F3の廃絶後F5を構築し、その使用後は埋め戻したと考えられる。第4号の焼土塊の遺存状態は、F1～F3が壁直下の墳底面に片寄り、F4・F5が壁面にテラス状に張り出した部分に遺存していた。遺構に伴って出土した遺物から所属時期を判断すると、第2号・第4号・第5号は茅山式期に比定できる。形状と覆土内遺物から考察すると、第1号・第3号が第2号・第5号に類似していた。なお、炉穴と住居址・土壌との位置関係は先に述べたが、後述する礫群の分布範囲にも近接している。

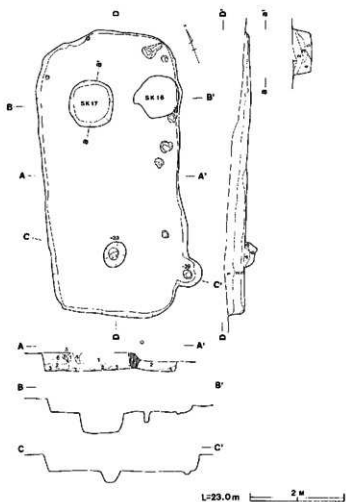
礫群については、総じて火熱を受けており、分布状況からA群とC群に分けられる。A群の範囲内に検出された第18号土壌内からは、分布している礫と同類とみられる礫および茅山式土器が出土している。従って、当礫群の使用された時期は茅山式期と考えられる。更に、B礫群は疎な分布を示してA礫群から1×6mの範囲で統している。

炉穴の資料を現時点で概観すると、その出土例は関東地方に集中して存在し、顕著な出現時期は早期後葉の茅山式期である。茅山式期における南関東の自然環境は、貝塚遺跡として出現した茅山式期の遺跡が、炉穴を伴い沖積地の最奥部に発見される例(注1)から、海進現象が炉穴出現に密接な係わりを有していると思われる。本遺跡においては、籠ヶ崎付近の沖積古地に確認された同時期の炉穴が無いだけに、今後、資料の増加を待って検討していきたい。

注1 穂田齊吾 「茅山式期における炉穴の考察」『なわ9号、昭和47年
今橋浩一 「籠ヶ崎古蹟開発調査」『常総台地 10』昭和54年



第218図 遺構分布図



第219図 第1号住居址

S 191 土層解説 A-A'

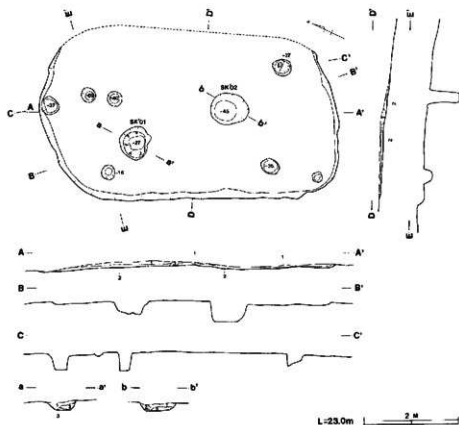
1. 褐色(炭化材粒子少量含む)
2. 褐色
3. 暗赤褐色(ハードルームブロック中層含む)
4. 暗褐色(若い)
5. 褐色(若い)
6. 暗赤褐色(若い)

土層解説 a-a'

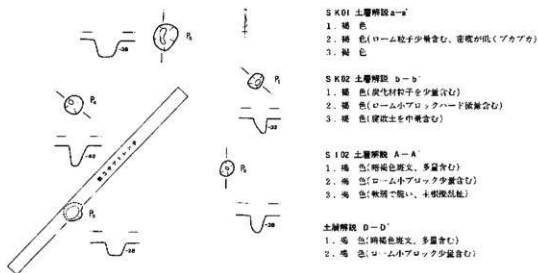
1. 褐色
2. 褐色(粘着性有し、しまりある)
3. 褐色(ソフトルームブロック壁文多量含む)
4. 褐色
5. 褐色(ソフトルームブロック壁文少量含む)

土層解説 D-D'

1. 褐色(炭化材粒子少量含む)
2. 褐色
3. 暗赤褐色(ハードルーム中ブロック少量含む)
4. によい赤褐色(炭化粒少量・焼土粒少量含む)
5. 褐色
6. によい褐色(ハードルーム小ブロック多量含む)



第220図 第2号住居



L=23.0m

第221図 第3号住居

SK01 土層解説 a-a'

1. 褐色
2. 褐色(ローム粒子少量含む、底境が低くブカブカ)
3. 褐色

SK02 土層解説 b-b'

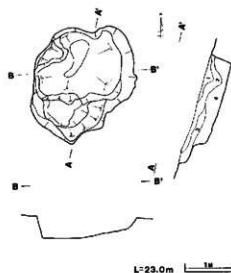
1. 褐色(炭化材粒子を少量含む)
2. 褐色(ローム小アブロック少量含む)
3. 褐色(硬軟土を中量含む)

SK102 土層解説 A-A'

1. 褐色(暗褐色斑文、多量含む)
2. 褐色(ローム小アブロック少量含む)
3. 褐色(軟弱で脆い、中根隙品性)

土層解説 D-D'

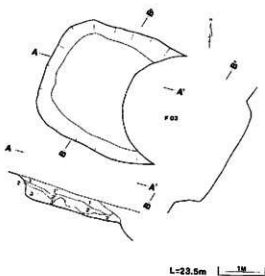
1. 褐色(暗褐色斑文、多量含む)
2. 褐色(ローム小アブロック少量含む)



第222図 第1号土壤

S K 01 土層解説 A-A'

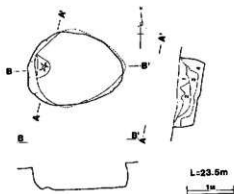
1. 褐色(炭化材粒子微量・焼土粒子微量含む)
2. 褐色(炭化材粒子微量・ハードローム中ブロック微量含む)
3. 褐色(ハード面)
4. 褐色(ハードローム中ブロック中量・大ブロック微量含む)



第223図 第2号土壤

S K 02 土層解説 A-A'

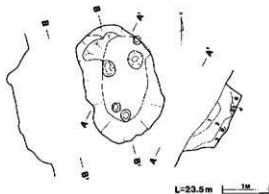
1. 明褐色(ハードローム小ブロック微量含む)
1. 褐色
2. 褐色(ハードローム小・中ブロック微量含む)
3. 明褐色(ハードローム中ブロック微量含む)
3. 明褐色(ハードローム小ブロック中量・焼土粒少量含む)



第224図 第3号土壤

S K 03 土層解説 A-A'

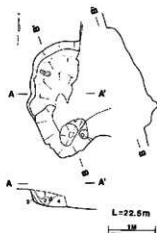
1. 褐色(ハードロームブロック少量・中ブロック微量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む・硬質ローム面)
3. 黄褐色(ハードローム小ブロック中量含む)
4. 黄褐色(ハードローム小ブロック中量・中ブロック少量含む)



第225図 第4号土壤

S K 04 土層解説 A-A'

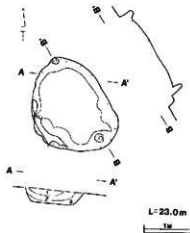
1. 褐色(焼土粒子極微量含む)
2. 褐色(暗褐色小斑文少量含む)
3. 明褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
4. 明褐色(焼土粒子微量・炭化材粒子少量含む)
5. 明褐色(ハードロームブロック含む)
6. 明褐色



第226図 第5号土壤

SK05 土層解説 A-A'

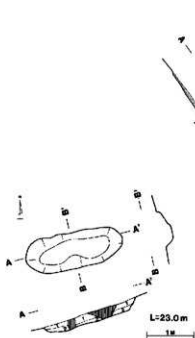
1. 褐色(ローム粒子少量・炭化材微量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
3. 褐色(ローム粒子微量含む、ハード面)
4. 褐色(軟弱土)
5. 褐色(ハードローム中ブロック多量含む)



第227図 第6号土壤

SK06 土層解説 A-A'

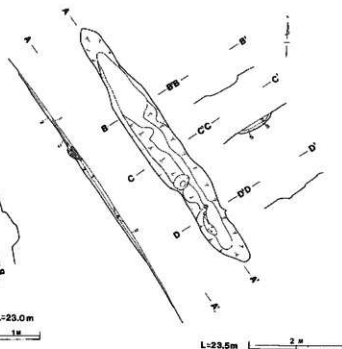
1. 褐色(焼土極微粒子微量含む)
2. 褐色(ハードローム小ブロック微量含む)
3. 褐色(ハードローム小中ブロック少量含む)



第228図 第7号土壤

SK07 土層解説 A-A'

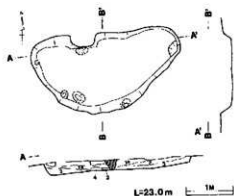
1. 褐色(ローム小ブロック中量含む)
2. 褐色(ローム小ブロック多量含む)



第229図 第8号土壤

SK08 土層解説 A-A' C-C'

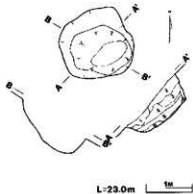
1. 褐色(焼土極微粒子微量含む)
2. 褐色(炭化粒子少量・焼土粒子少量含む)
3. 褐色(炭化材粒・微塵・ハードロームブロック面)
4. 褐色(焼土粒子微量・炭化材粒子微量含む)



第230図 第9号土壤

SK 09 土層解説 A-A'

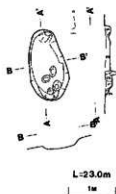
1. 赤褐色
- 1a. 赤褐色(焼七粘土若干含む)
2. 明褐色
3. 明褐色
4. 明赤褐色(ローム粘土を含む、焼土)



第231図 第10号土壤

SK 10 土層解説 A-A'

1. 褐色(炭土粒子微量含む)
2. 褐色(ハードローム大ブロック微量含む)
3. 褐色(ハードローム中ブロック少量含む(ハード内))
4. 褐色(ハードローム小-中ブロック少量含む)
5. 褐色(ハードローム中ブロック中量含む)
6. 褐色(ハードローム中ブロック多量含む)



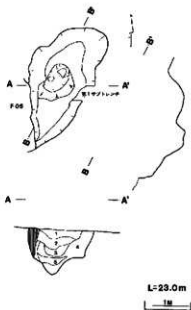
第232図 第11号土壤

SK 11 土層解説 A-A'

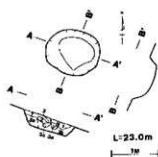
1. 褐色
2. 褐色

SK 12 土層解説 A-A'

1. 褐色(炭化材粒子微量・炭土粒子微量含む)
2. 褐色(炭化材粒了多量含む)
3. 暗褐色(焼土粒了微量含む)
4. 暗褐色(炭化材粒子微量含む)
5. 黒褐色(炭化材粒子少量・焼土粒子微量含む)



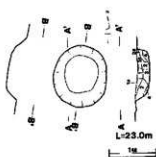
第233図 第12号土壤



第234図 第13号土壤

SK13 土層解説 A-A'

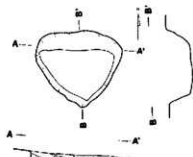
1. 明褐色
2. 褐色(黑色土粒子混入)
3. 褐色(小ブロック混入)
- 3 a. 褐色(小ブロック混入、黑色土粒子混入)
- 3 b. 褐色(小ブロック多量混入)



第235図 第14号土壤

SK14 土層解説 A-A'

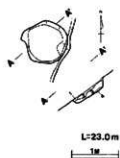
1. 明褐色
- 1 a. 明褐色(黑色土粒子混入)
2. 褐色
- 2 a. 褐色(ローム小ブロック少量混入)
3. 褐色(ローム小ブロック混入)
4. 褐色(ローム小ブロック混入)



第236図 第15号土壤

SK15 土層解説 A-A'

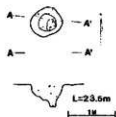
1. 褐色(黑色土混入)
- 1 a. 褐色(木炭粒子混入)
2. 褐色(黑色土粒子混入)
- 2 a. 褐色(ローム小ブロック少量混入)
3. 明褐色(ローム小ブロック多量混入)



第237図 第16号土壤

SK16 土層解説 A-A'

1. 明褐色(ローム粒子微量含む)
2. 明褐色(焼土粒子少量、炭化材料粒子微量・ハードローム小ブロック中量含む)
3. 明褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
4. 明褐色



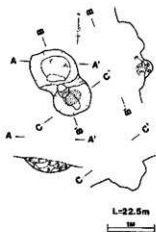
第238図 第18号土壤

F01 土層解説 A-A'

1. にぶい赤褐色(焼土粒子少量、焼土ソフトブロック少量含む)
2. 明褐色(焼土粒子微量、ハードローム小ブロック中量含む)
3. 赤褐色(焼土粒子中量、焼土ブロック少量、小炭化粒子少量含む)
4. 明褐色(ハードローム小ブロック中量含む)
5. 褐色(ハードローム小ブロック中量、焼土粒子微量、焼土ブロック微量含む)
6. 明褐色(ハードローム中ブロック少量、焼土粒子微量含む)
7. 褐色(ハードローム中ブロック多量、焼土少量、ブロック微量含む)



第239図 第1号炉穴



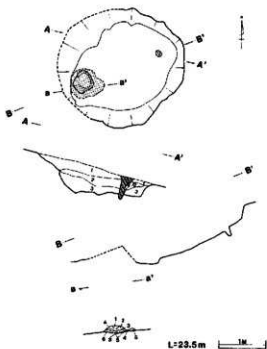
第240図 第2号炉穴

F02 土層解説 A-A'

1. 明赤褐色(焼土粒子多量・炭化材粒子少量含む)
2. 赤褐色(焼土粒子多量含む)
3. 明褐色(焼土粒子少量含む)
4. 褐色(ローム小ブロック微量含む)
5. 明褐色(焼土粒子中量・ローム小ブロック中量含む)
6. 明褐色(ハードローム中ブロック多量含む)
7. 褐色(焼土粒子微量・ハードローム小中ブロック中量含む)

土層解説 B-B'

1. 褐色(焼土粒子含む)
2. 暗赤褐色(ローム粒子少量含む、焼土)
3. 暗赤褐色(焼土)
4. 褐色
5. 褐色



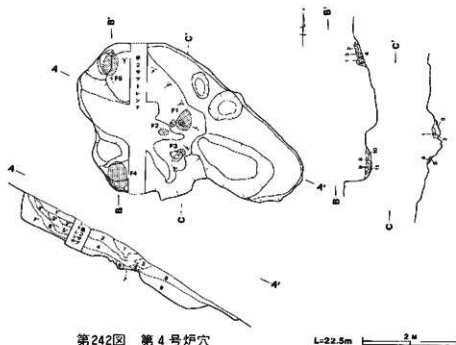
第241図 第3号炉穴

F03 土層解説 A-A'

1. 褐色(ローム小ブロック少量含む) 5より硬い
2. 明褐色
3. 褐色(ローム中～大ブロック中量含む)
4. 明褐色(ブロック面)

壁土解説 a-a'

1. 褐色(焼土粒子・炭化材粒子・灰量含む)
2. 赤褐色(焼土小ブロック少量・炭化材粒子微量含む)
3. 赤褐色(焼土小ブロック中量・炭化材粒子微量含む)
4. 赤褐色(炭化材粒子微量・焼土粒子微量含む)
5. 明赤褐色(ハードロームブロック含む)
6. 赤褐色(炭化材粒子微量含む)



第242図 第4号炉穴

L=22.5m 2m

F04 土層解説 A-A'

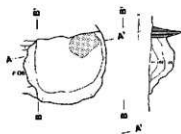
1. 褐色(焼土粒子・小ブロック少量・炭化材粒少量含む)
- 1'. 褐色(焼土粒子少量・焼土小ブロック少量・炭化材粒少量含む)
2. 褐色(焼土粒子・小ブロック少量・炭化材ブロック少量・炭化材粒少量含む)
- 2'. 褐色(焼土小ブロック少量・炭化材粒少量含む)
3. によい赤褐色(焼土小ブロック少量・ハードローム小ブロック少量・炭化材粒少量含む)
- 3'. によい赤褐色(焼土粒子少量・焼土小ブロック少量含む)
4. 赤褐色(焼土小ブロック・焼土粒少量含む)
- 4'. 褐色(焼土粒子少量・焼土小ブロック少量・炭化材粒少量含む)
5. によい赤褐色(焼土粒子少量・ハードローム小ブロック少量含む)
- 5'. 褐色(炭化材粒少量・焼土粒子少量・小ブロック少量含む)
6. によい赤褐色(焼土粒子少量・硬質ローム)
- 6'. 褐色(炭化材粒少量・焼土粒子少量含む)
7. 褐色(焼土粒子少量・焼土小ブロック少量・炭化材粒少量・小ブロック少量・硬質ローム)
- 7'. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
8. 褐色(焼土粒子少量・炭化材粒少量含む)
9. 褐色(ハードローム中ブロック少量含む)

焼土解説 B-B'

1. によい赤褐色(焼土粒子少量・ローム粒少量含む)
2. 赤褐色(焼土粒子少量・焼土中ブロック少量・炭化材粒少量含む)
3. によい赤褐色(焼土粒子少量・焼土中ブロック少量含む)
4. 赤褐色(ロームブロック少量・炭化材粒少量含む)
5. 赤褐色(中ハードロームブロック少量含む)
6. 暗赤褐色(ローム粒少量含む)
7. 赤褐色(中ハードロームブロック少量含む)
8. 赤褐色(焼土粒子少量・焼土中ブロック少量・炭化材粒少量・ローム粒少量含む)
9. によい赤褐色(焼土粒子少量・炭化材粒少量含む)
10. によい赤褐色(ローム粒少量・ローム小ブロック少量含む)
11. によい赤褐色(ローム粒少量含む)

焼土解説 C-C'

1. 赤褐色(焼土粒子少量・ローム粒少量含む)
2. によい赤褐色(焼土粒子少量・ロームブロック少量含む)
3. 暗赤褐色(焼土粒少量・ローム粒少量含む)
4. 赤褐色(焼土ブロック少量・炭化材粒少量含む)
5. 赤褐色(焼土ブロック少量含む)



F05 土層解説 A-A'

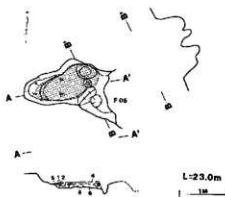
1. 赤褐色(焼土ブロック多量・焼土粒子多量含む)→焼土
2. 暗赤褐色(焼土粒子多量含む)→焼土
3. 赤褐色(焼土粒子多量含む)
4. 暗赤褐色(焼土小ブロック少量含む)
5. 濃い赤褐色(焼土粒子少量・カーボン粒子微量含む)
6. 褐色(焼土粒子少量・カーボン粒子微量含む)



土層解説 B-B'

1. 褐色(焼土中ブロック微量含む)
2. 褐色(焼土粒子微量・焼土中ブロック微量・ハードローム中ブロック微量含む)
3. 褐色(焼土粒子微量含む)

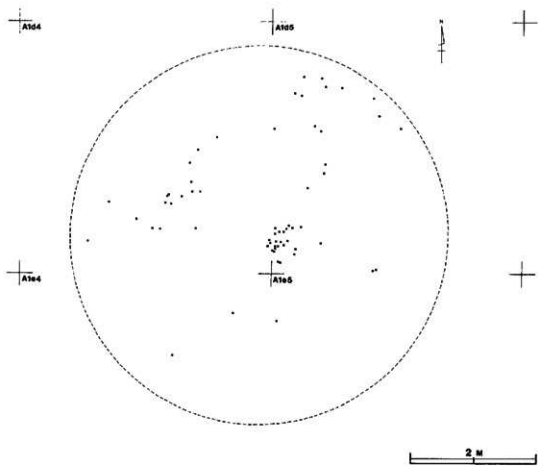
第243図 第5号炉穴



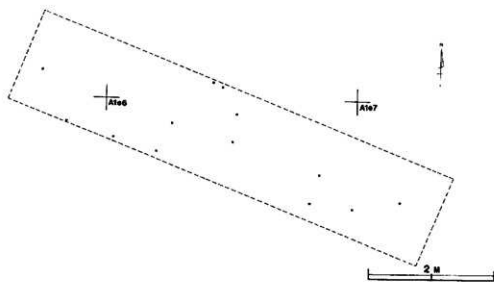
F06 焼土土層解説 A-A'

1. 赤褐色(ハード焼土ブロック含む)
2. 赤褐色(焼土粒子多量・焼土小ブロック少量含む、攪乱)
3. 褐色(焼土粒子中量・カーボン粒子少量含む)
4. 褐色(焼土粒子中量・カーボン粒子少量含む)
5. 赤褐色(焼土含む)
6. 褐色(ハードローム小ブロック少量含む)
7. 褐色(ハードロームブロック・焼土粒子微量含む)
8. 褐色(粘着性有す、ローム含む)
9. 褐色(ハードローム中ブロック微量・焼土粒子微量含む)

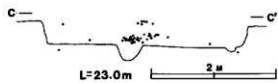
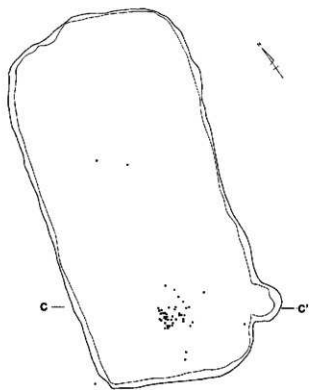
第244図 第6号炉穴



第245図 A 碟群分布図



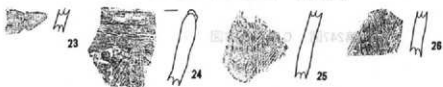
第246図 B 碟群分布図



第247図 C 礫群分布図



第1号住居址



第2号住居址

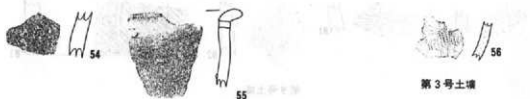
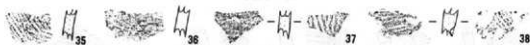


第1号土壤

第248图 遺構出土土器

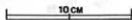
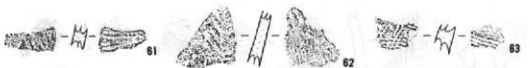


第1号土坑



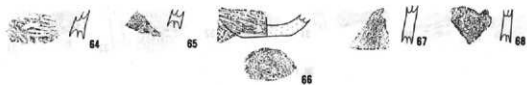
第3号土坑

第2号土坑

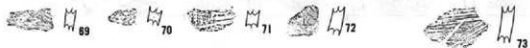


第4号土坑

第249图 遺構出土土器



第4号土壤



第5号土壤

第6号土壤



第8号土壤



第9号土壤

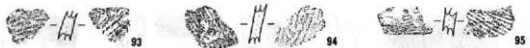


第10号土壤

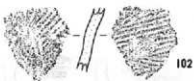


第12号土壤

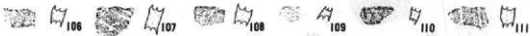
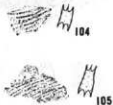
第250图 遺構出土土器



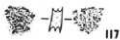
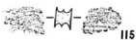
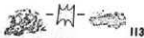
第12号土壤



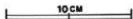
第18号土壤



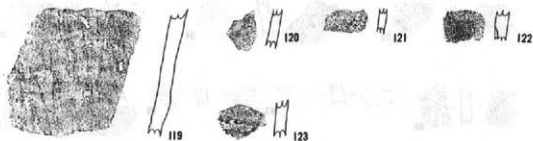
第2号炉穴



第3号炉穴



第251图 遗構出土土器



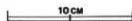
第3号炉穴



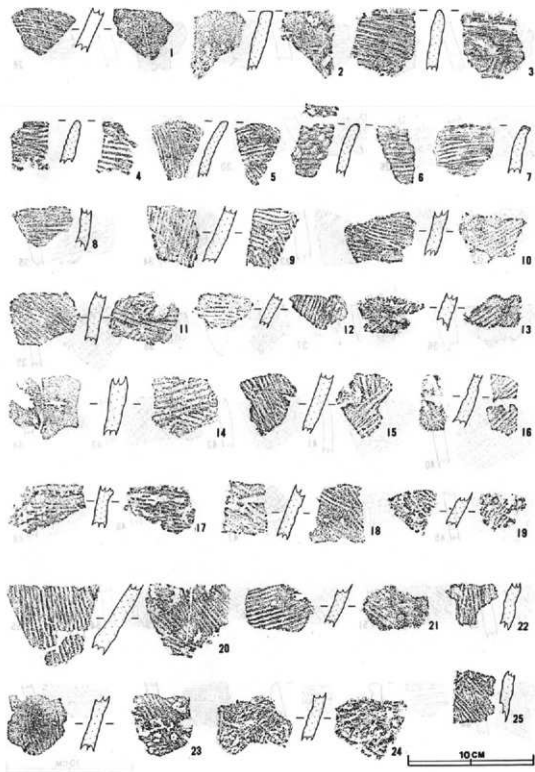
第4号炉穴



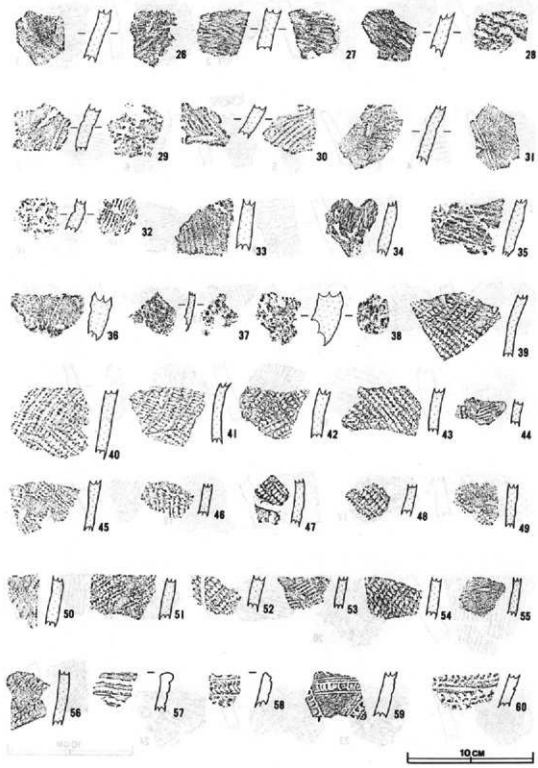
第5号炉穴



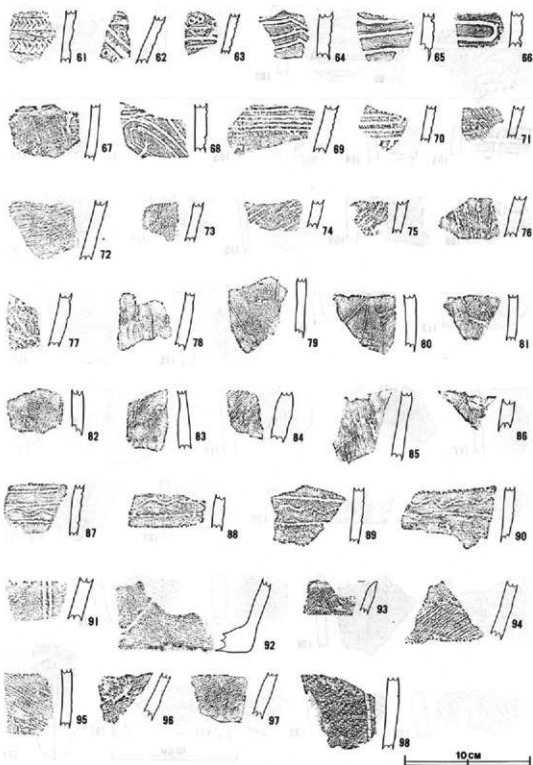
第252图 遺構出土土器



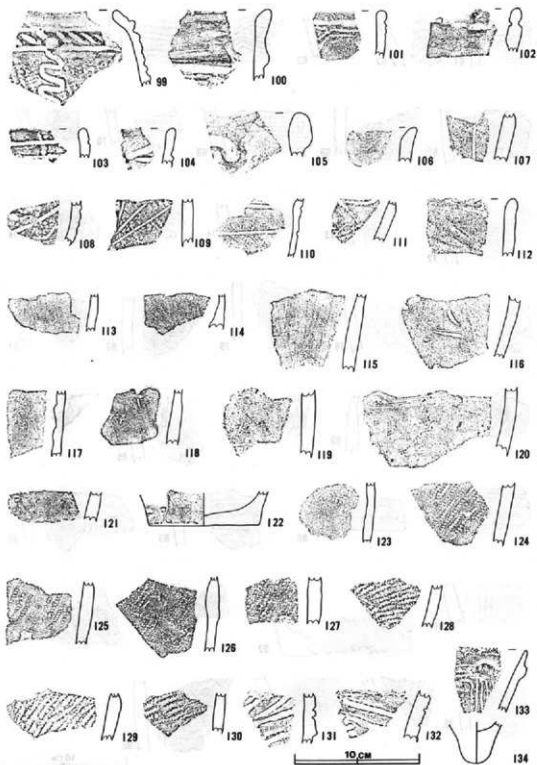
第253図 グリット出土土器



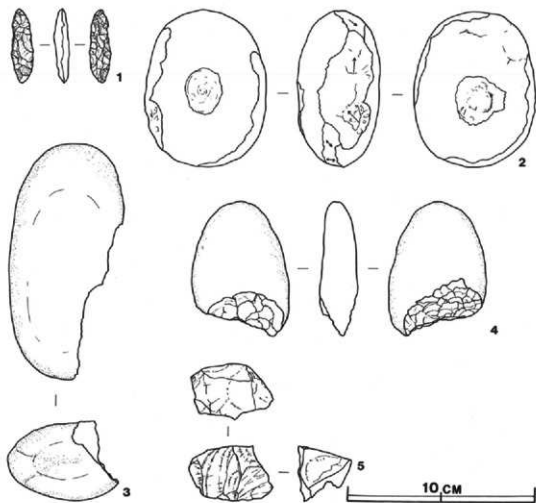
第254図 グリット出土土器



第255図 グリット出土土器



第256図 グリット出土土器



第257図 グリット出土石器

〈写真版〉

前清水遺跡	229
大羽谷津遺跡	240
打越 A 遺跡	256
打越 C 遺跡	274
仲根台塚群	292
廻り地 B 遺跡	300

写1



1 前清水遺跡



2 第1号住居址



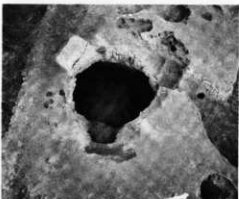
1 第3号土坑遺物出土狀況



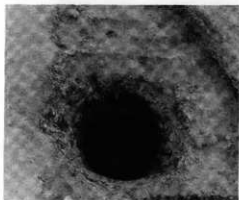
2 第3号土坑



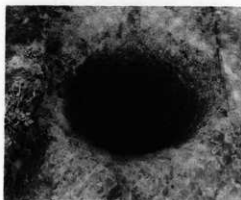
3 第4号土坑遺物出土狀況



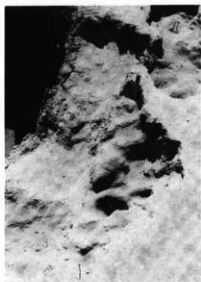
4 第4号土坑



5 第5号土坑



6 第6号土坑



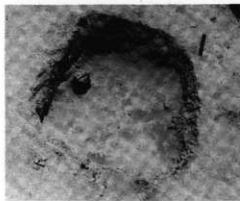
1 第7号土壤



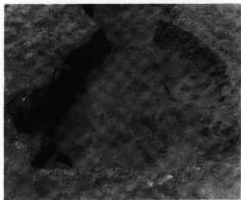
2 第8号土壤·第9号土壤·第15号土壤



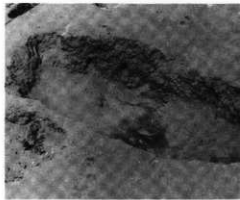
3 第10号土壤



4 第11号土壤



5 第12号土壤



6 第13号土壤



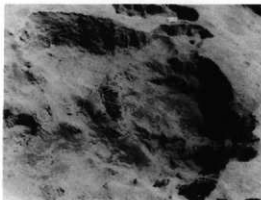
1 第14号土壤



2 第16号土壤



3 第17号土壤



4 第19号土壤



5 第21号土壤人骨出土状况



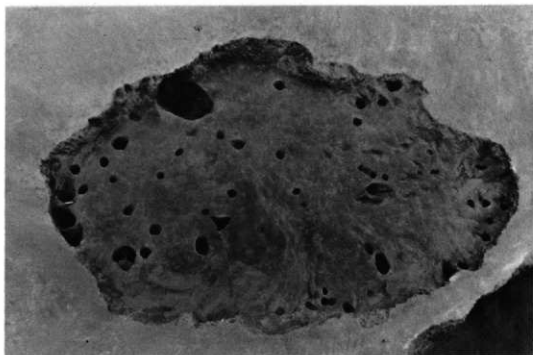
6 第23号土壤齿牙出土状况



1 第1号溝・第2号溝



2 第1号竖穴状遺構



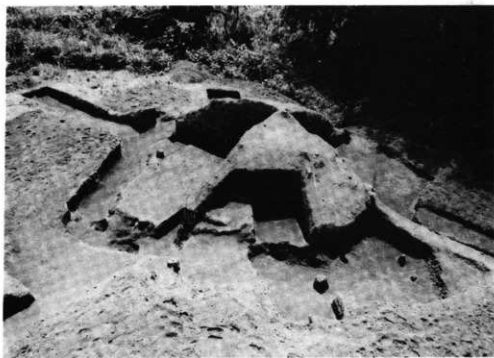
1 第2号竖穴状遺構



2 塚



1 塚土層断面



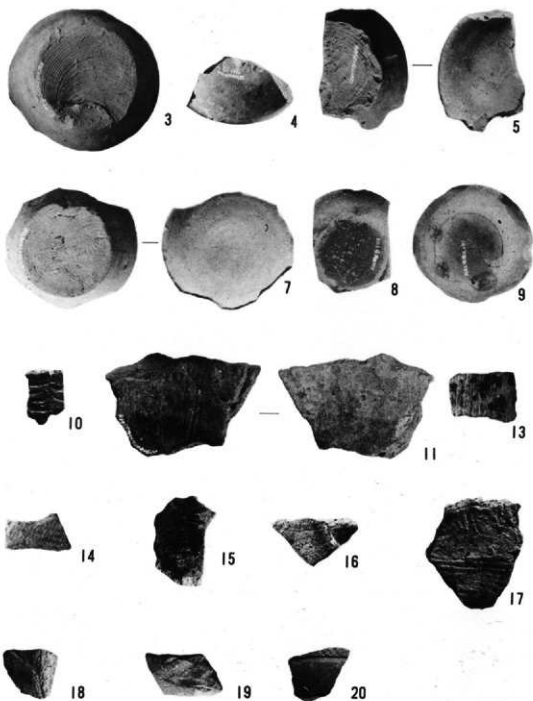
2 塚調査区全景



1 F 5区遺構全景



2 前清水遺跡F 5区ピット群



遺構出土土器

($s = \frac{1}{2}$)

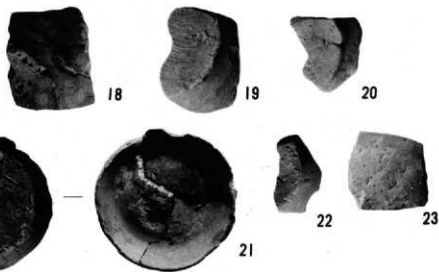


グリット



第3号土塊

4

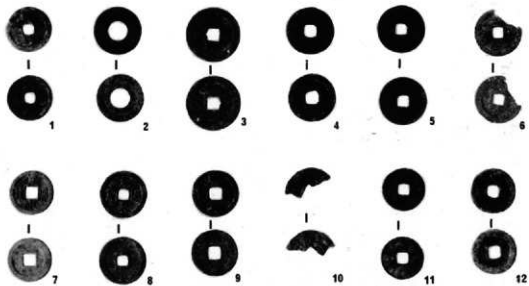


グリット

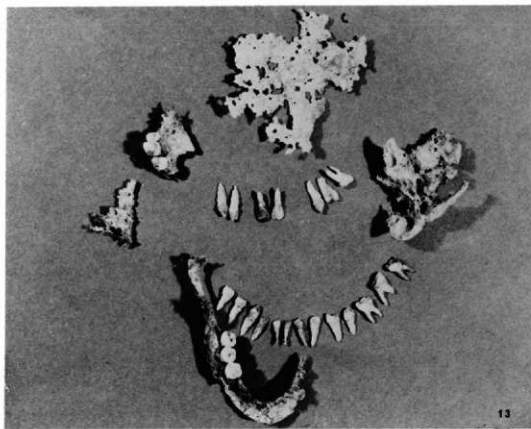
遺構・グリット出土 石製品・土器

(s=1/2)

写11



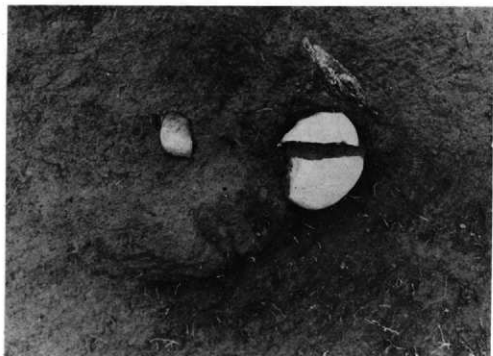
遺構・調査区出土古銭



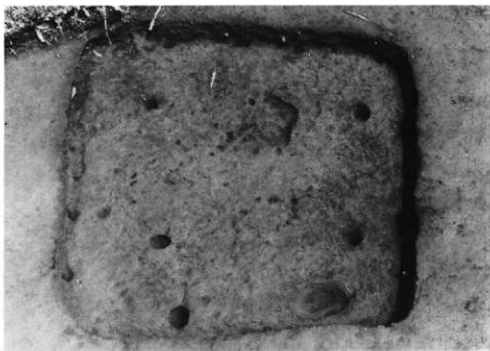
第21号土壌出土 人骨



1 大羽谷津遺跡



2 第1号住居址遺物出土状況



1 第1号住居址



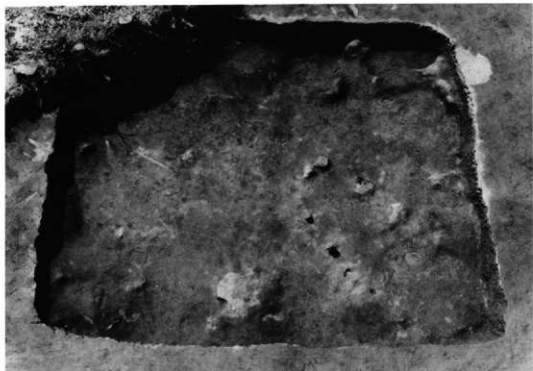
2 第2号住居址遺物出土狀況



1 第2号住居址遺物出土状況



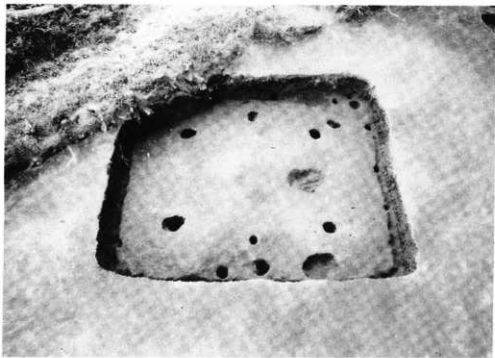
2 第2号住居址



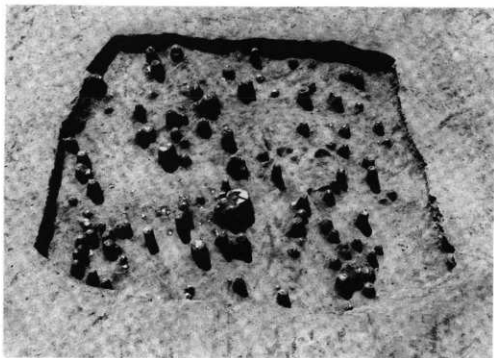
1 第3号住居址烧土被覆状况



2 第3号住居址遗物出土状况



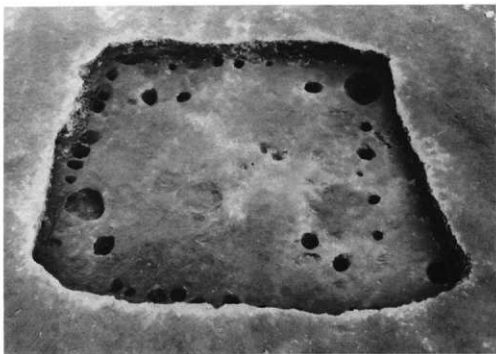
1 第3号住居址



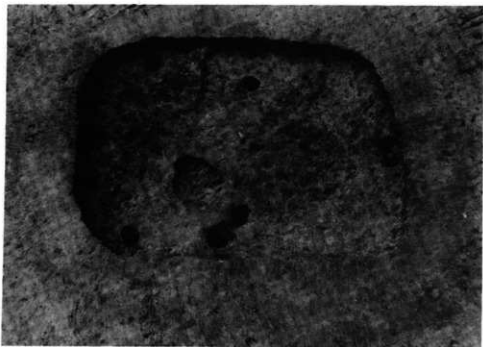
2 第4号住居址遺物出土狀況



1 第4号住居址遺物出土状況



2 第4号住居址



1 第5号住居址



2 住居址群全景



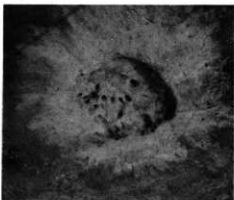
1 第1号土坑



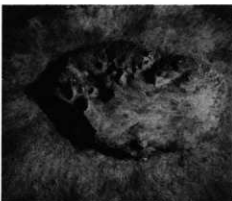
2 第2号土坑



3 第3号土坑



4 第4号土坑



5 第5号土坑



6 第6号土坑



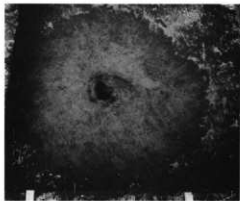
1 第8号土壤



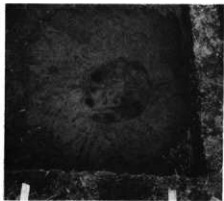
2 第9号土壤



3 第10号土壤



4 第11号土壤



5 第12号土壤



6 第13号土壤



1 第14号土壤



2 第15号土壤



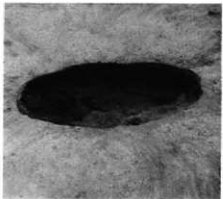
3 第16号土壤



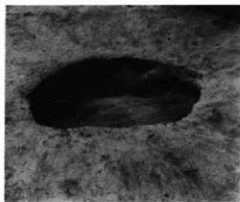
4 第17号土壤



5 第18号土壤



6 第19号土壤



1 第20号土坑



2 第21号土坑



3 第22号土坑



4 A1f9 遺物出土状況



5 溝土層断面



6 溝曲折部全景



1 溝 全 景



2 大羽谷津遺跡・遺構全景



第2号住居址出土土器

(S=1/4)



第2号住居址出土土器

(S=¼)



第3号住居址出土土器



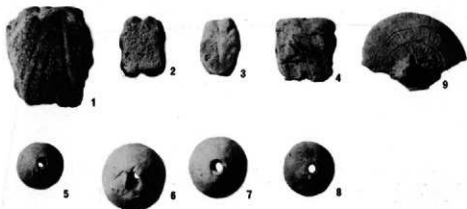
第4号住居址出土土器



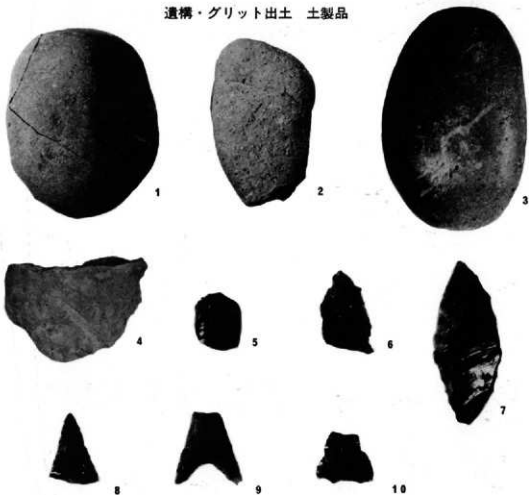
溝址出土土器

遺構出土土器

(S=1/4)

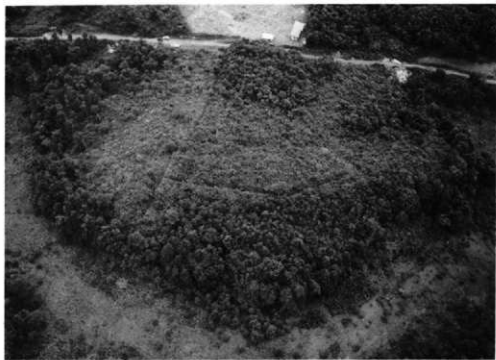


遺構・グリット出土 土製品



遺構・グリット出土 石器

(1-4 S=1/2)
(5-10 S=1/4)



1 打越A遺跡全景



2 D3区全景



1 第1号住居址遺物出土状況



2 第1号住居址



1 第2号住居址遺物出土狀況



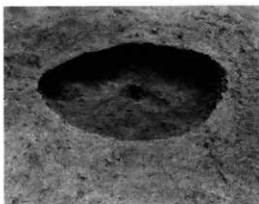
2 第2号住居址



1 第2号住居址土器埋設炉



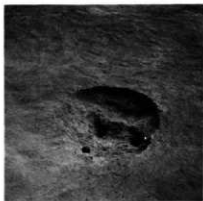
2 第1号土坑



3 第2号土坑



4 第3号土坑



5 第4号土坑



6 第5号土坑(上)・第6号土坑(下)



1 第7号土壤



2 第8号土壤(上)·第9号土壤(下)



3 第10号土壤



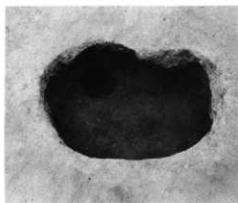
4 第11号土壤



5 第12号土壤



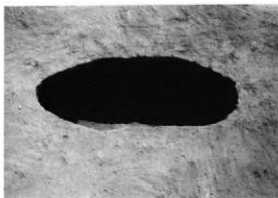
6 第13号土壤



1 第15号土壤



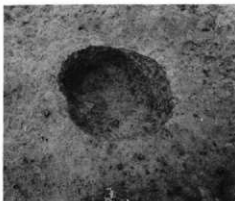
2 第17号土壤



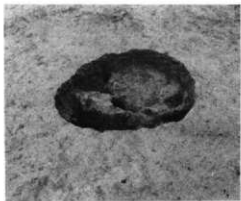
3 第18号土壤



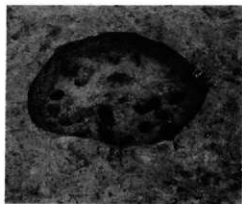
4 第19号土壤



5 第20号土壤



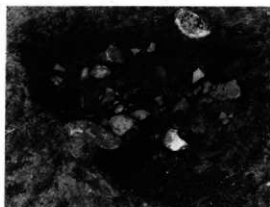
6 第21号土壤



1 第22号土壤



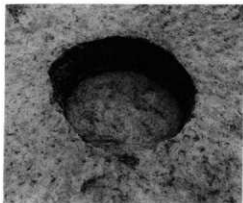
2 第23号土壤遺物出土狀況



3 第23号土壤遺物出土狀況



4 第23号土壤



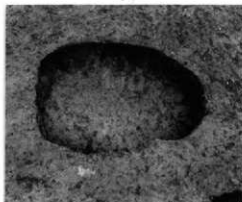
5 第24号土壤



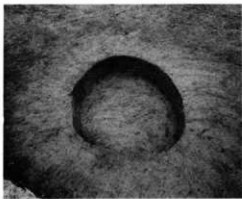
6 第25号土壤



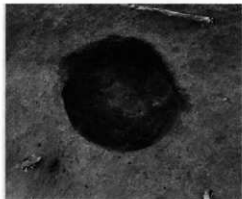
1 第27号土壤



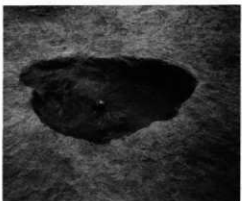
2 第28号土壤



3 第29号土壤



4 第1号炉穴



5 第2号炉穴



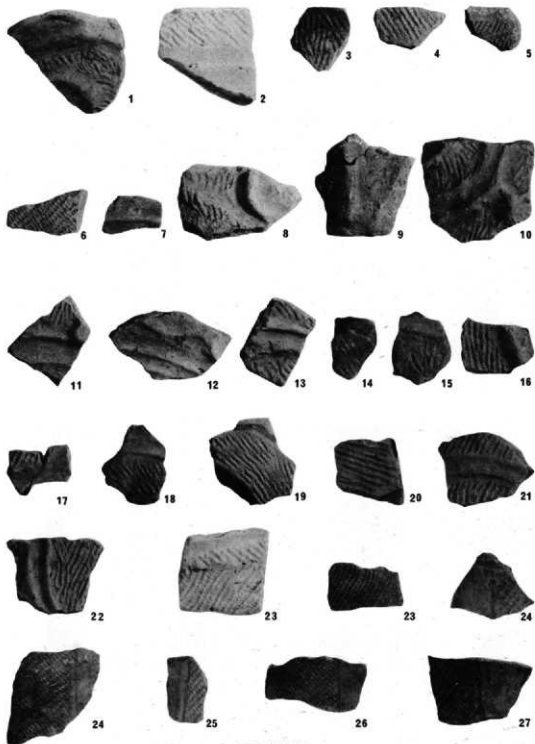
6 第3号炉穴·第16号土壤



1 打越A遺跡遺構全景



2 打越A遺跡・打越C遺跡全景



第1号住居址

遺構出土土器

(S=1/3)



第1号住居址



第2号住居址

遺構出土土器

(s = 1/2)



第2号住居址



第5号土埴

第17号土埴

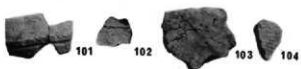


第18号土埴

第19号土埴



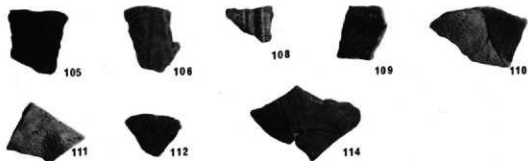
第23号土埴



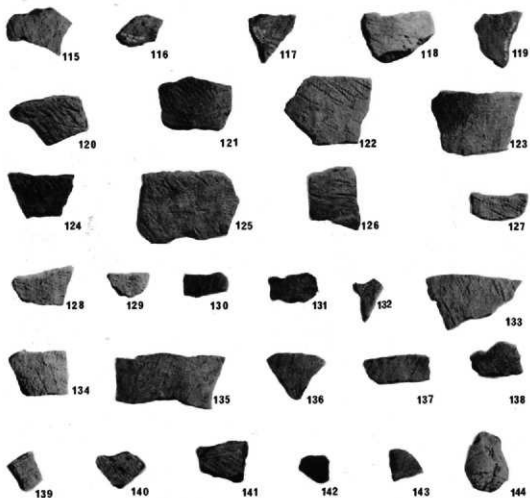
第24号土埴

遺構出土土器

(S=1/4)



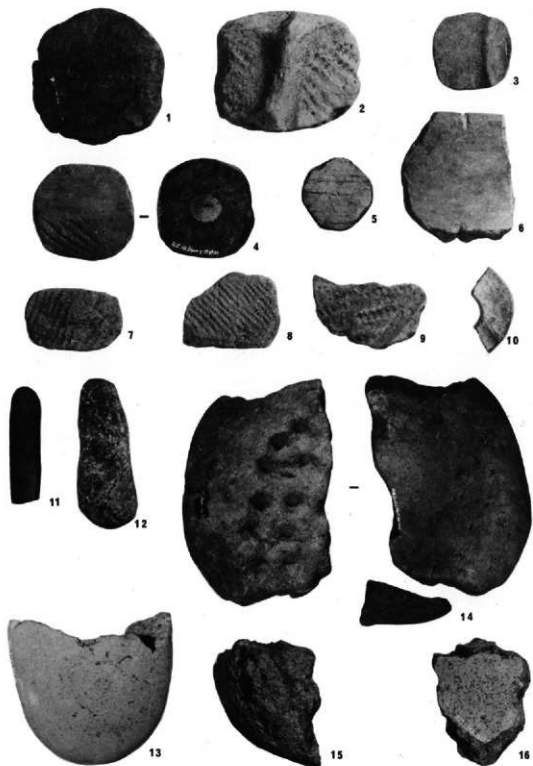
第25号土塊



第27号土塊

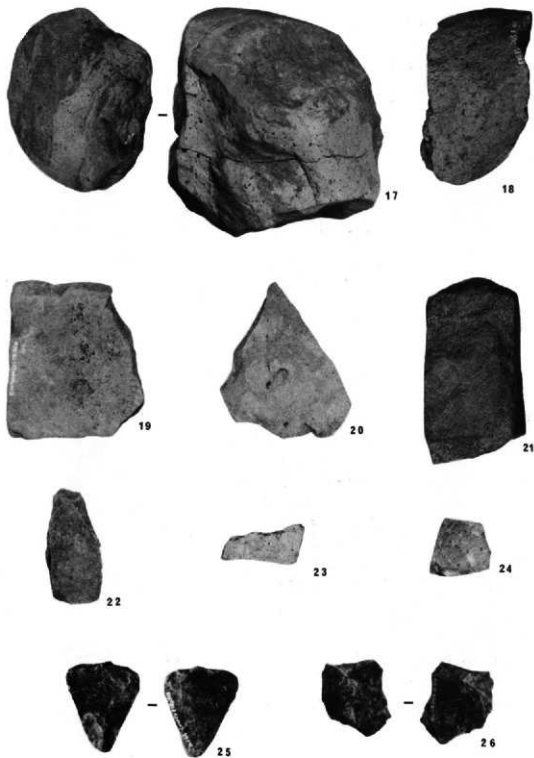
遺構出土土器

(S=1/5)



遺構・グリット出土 土製品・石器

(14 S=¼)
(他 S=½)



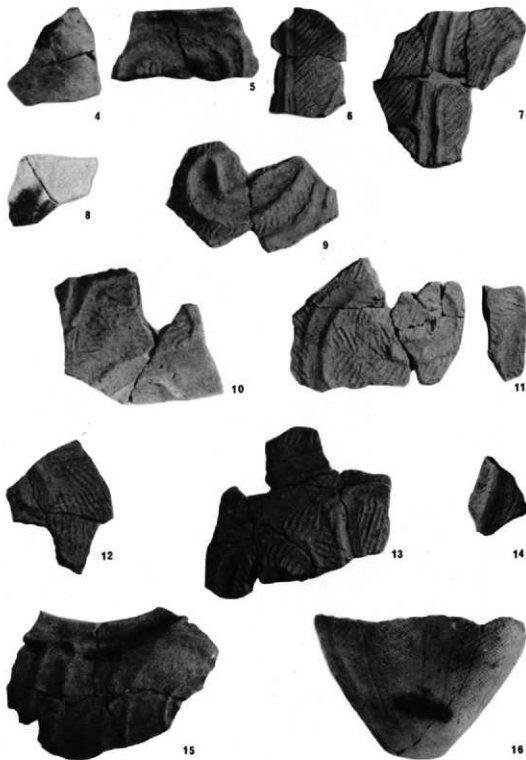
遺構・グリット出土 石器

(17 S=1/3)
(他 S=1/2)



遺構出土土器

(S=1/5)



遺構出土土器

(S = 1/2)



17



18



19



20



22



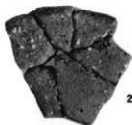
21



23



24



25



26



27



28



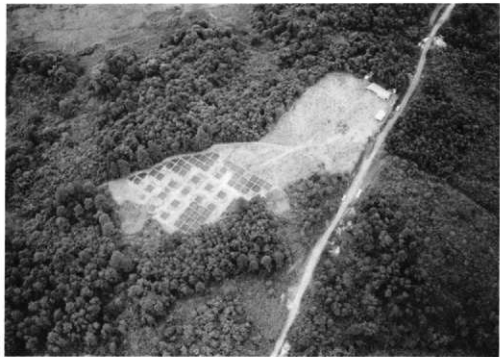
29



30

遺構出土土器

(S=1/2)



1 打越C遺跡



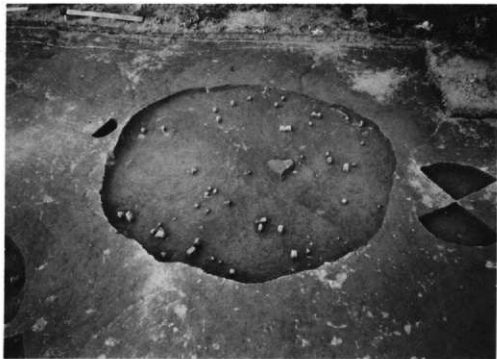
2 B2区全景



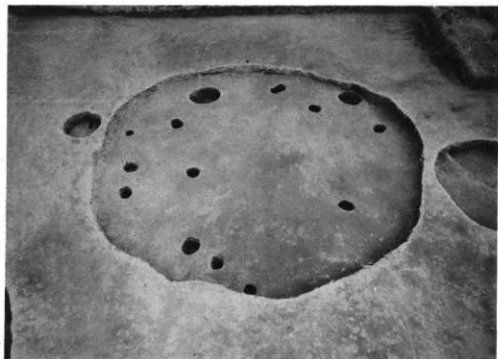
1 第1号住居址遺物出土狀況



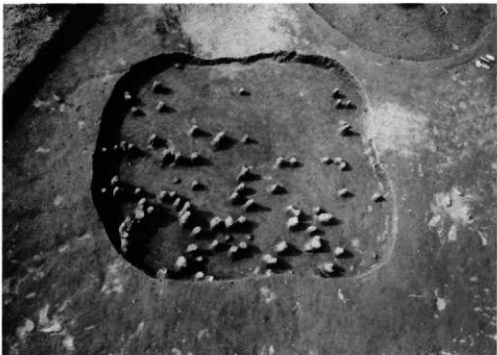
2 第1号住居址



1 第2号住居址遺物出土狀況



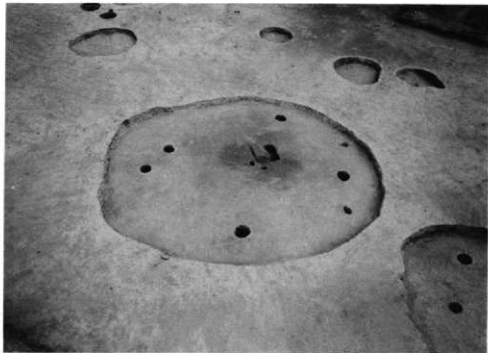
2 第2号住居址



1 第3号住居址遺物出土状況



2 第3号住居址



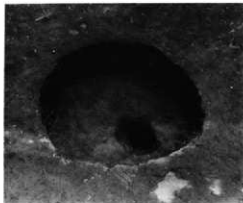
1 第4号住居址



2 第4号住居址遺物出土状況



3 遺構確認作業



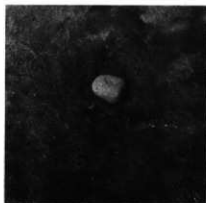
1 第1号土壤



2 第2号土壤(中央)·第3号土壤



3 第4号土壤



4 B2d1 遺物出土状況



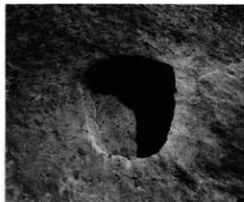
5 第5号土壤(A)(中央)(B)(右)·第6号土壤



6 第7号土壤



1 第8号土壤



2 第9号土壤



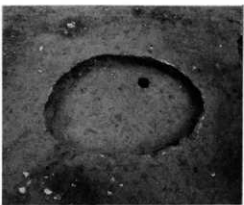
3 第10号土壤



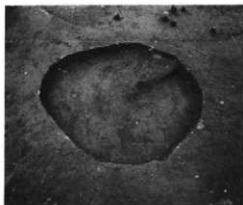
4 第11号土壤



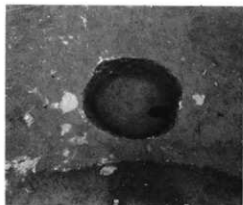
5 第12号土壤



6 第13号土壤



1 第14号土壤



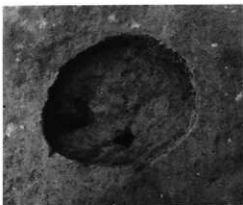
2 第15号土壤



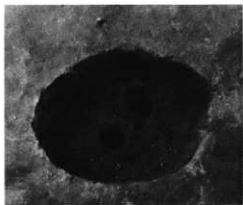
3 第16号土壤



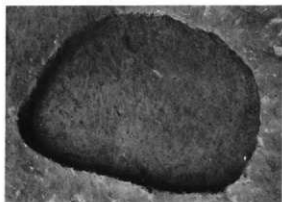
4 第17号土壤



5 第18号土壤



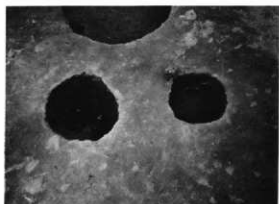
6 第19号土壤



1 第20号土壤



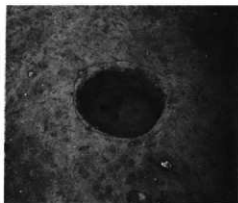
2 第21号土壤



3 第23号土壤(左)·第24号土壤(右)



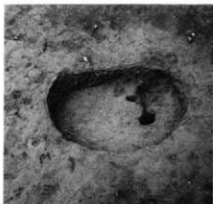
4 第25号土壤



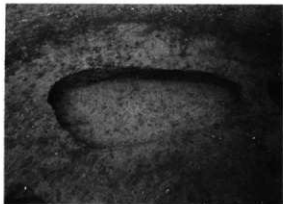
5 第26号土壤



6 第27号土壤



1 第28号土坑



2 第29号土坑



3 第30号土坑



4 B2i6 遗物出土状况



5 沟



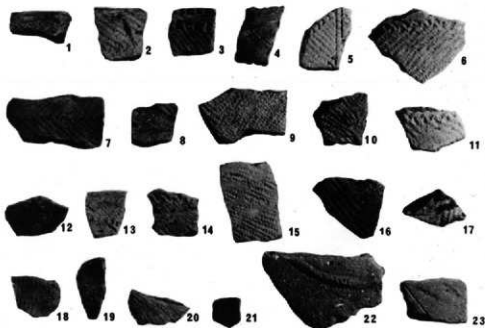
6 B3区遗坑全景



1 塚調査区全景



2 打越C遺跡B3区遺構全景



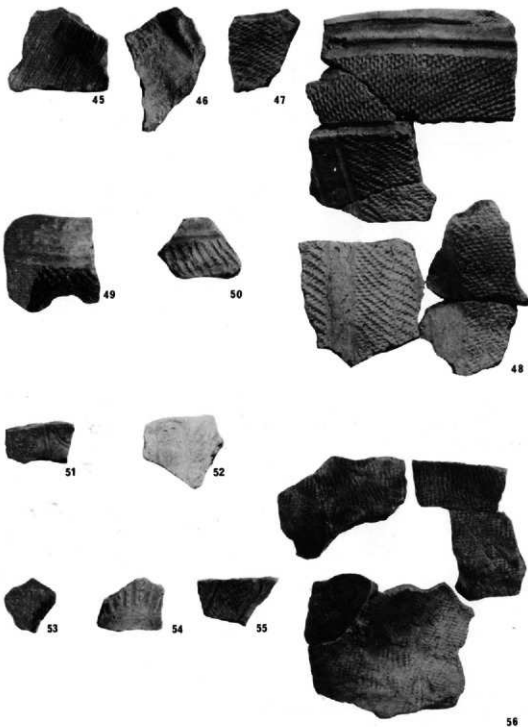
第1号住居址



第2号住居址

遺溝出土土器

(S=1/5)



第3号住居址

遺構出土土器

(S=1/5)

写59



第3号住居址



第4号住居址



第1号土境



第5号土境(A)

第5号土境(B)

第6号土境



第7号土境

遺構出土土器

(S=1/2)

写60



91



92



93



94



96

第8号土塊

第9号土塊



97



98



99



100



101

第13号土塊

第14号土塊

第17号土塊



102



103



104

第20号土塊

第21号土塊



105

第22号土塊



106

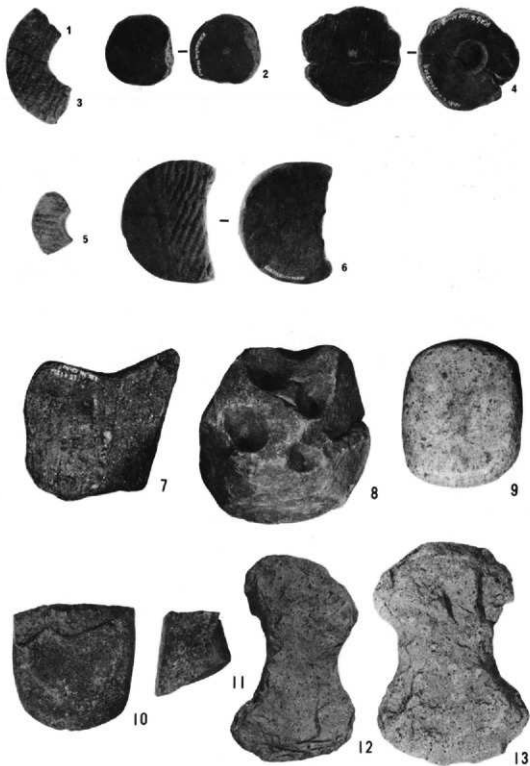


107

第30号土塊

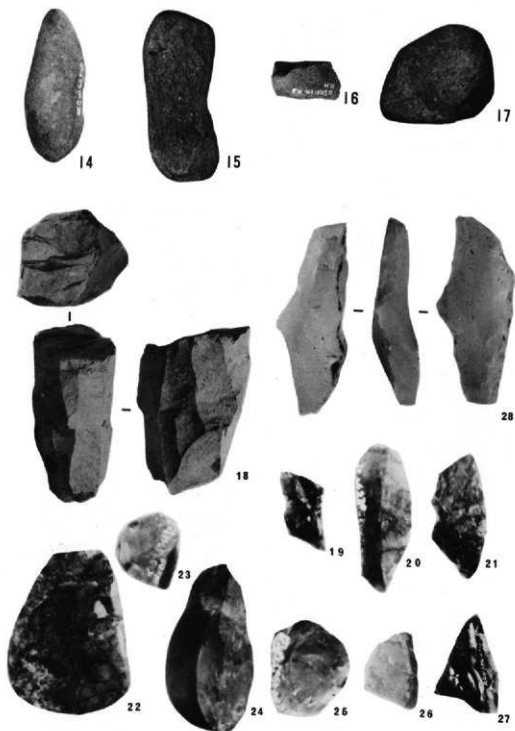
遺構出土土器

(s = 1/6)



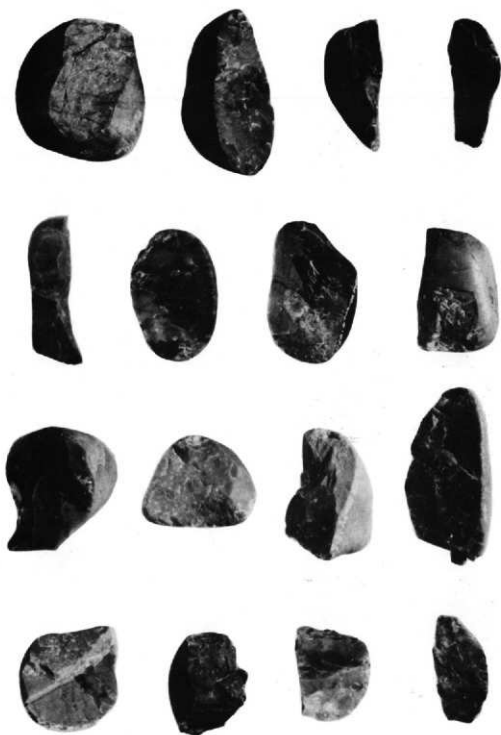
遺構・グリット出土 土器・石器

(S=1/2)



遺構・グリット出土 石器

(14-17 S=1/2)
(18-28 S=1/4)



第7号土壌出土遺物

遺構出土石器

(S=1/4)



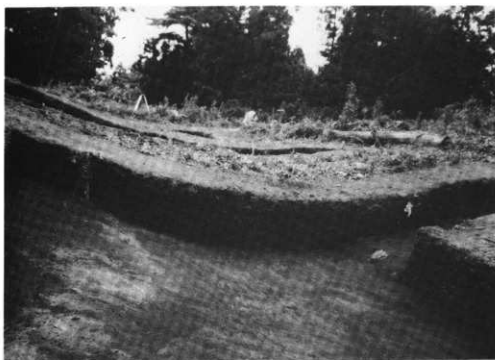
1 仲根台1号塚



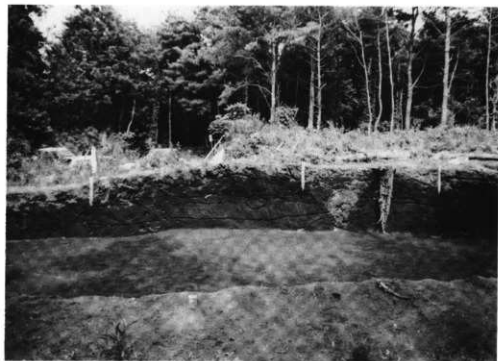
2 道祖神・子安観音・道祖神



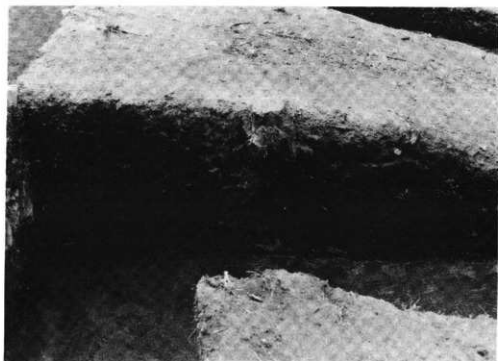
1 東西トレンチ



2 北東側東西(C-C')土層断面



1 北側南北(A-A')土層断面



2 南東側東西(D-D')土層断面



1 仲根台 2号塚



2 北側南北(B-B')土層断面



1 南北(B-B')土層断面



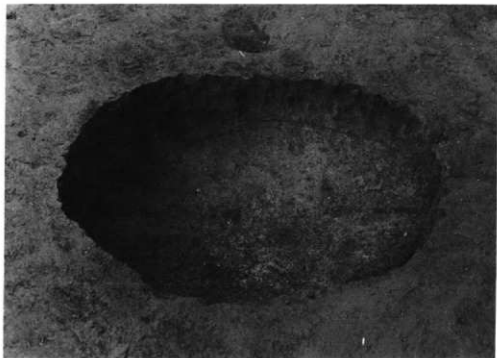
2 第1号土坑



1 第1号土壇・第2号土壇・第3号土壇



2 第3号土壇遺物出土状況



1 第3号土坑

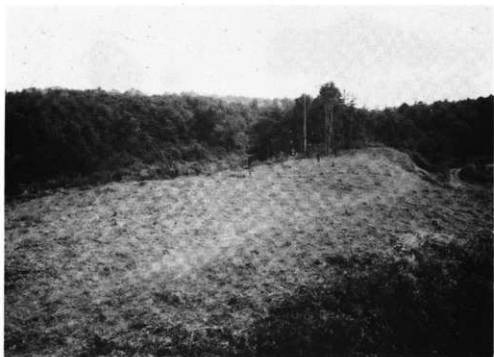


2 仲根台2号塚遺構全景

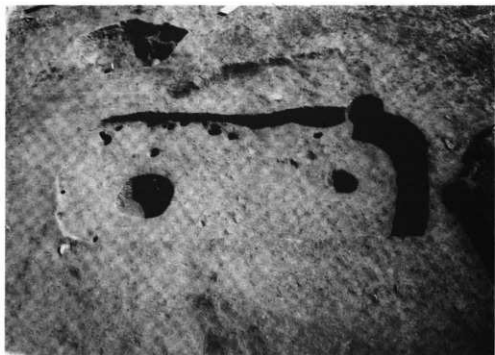


第3号土壕出土土器

(S=1/4)



1 廻り地B遺跡



2 第1号住居址・第16号土壇・第17号土壇



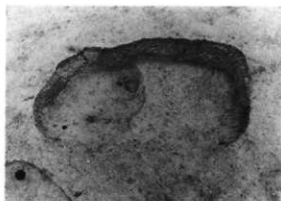
1 第2号住居址遺物出土狀況



2 第2号住居址



1 第1号土壤



2 第2号土壤(右)·第3号炉穴(左)



3 第3号土壤



4 第4号土壤



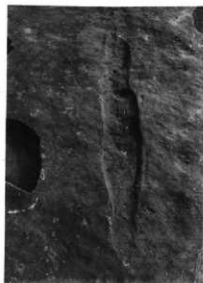
5 第5号土壤



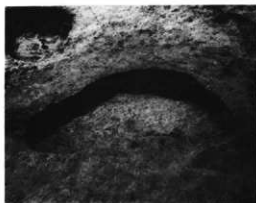
6 第6号土壤



1 第7号土壤



2 第8号土壤



3 第9号土壤



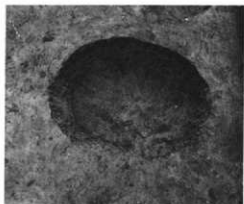
4 第10号土壤土层断面



5 第11号土壤



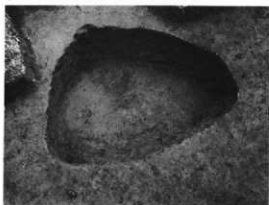
6 第12号土壤(上)·第5号炉穴(中央)·第6号炉穴(下左)



1 第13号土壤



2 第14号土壤



3 第15号土壤



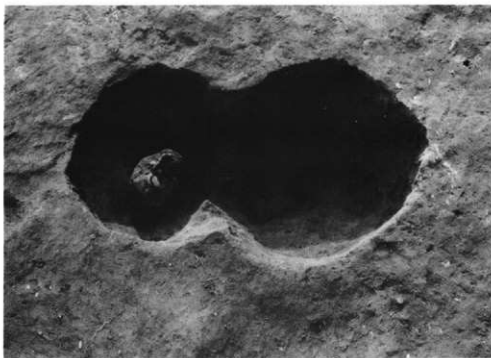
4 第16号土壤



5 第1号炉穴



6 第4号炉穴



1 第2号炉穴遗物出土状况



2 第2号土坑·第3号炉穴遗物出土状况



1 A1d4 礫群



2 A1g0 礫群



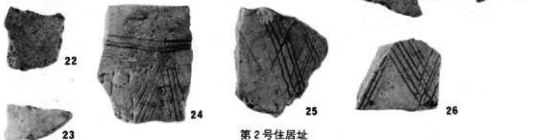
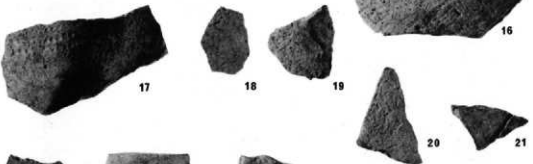
1 廻り地B遺跡・遺構全景



2 廻り地B遺跡・遺構全景



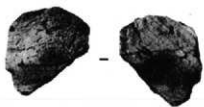
第1号住居址



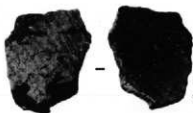
第2号住居址

遺構出土土器

(S=1/5)



27



28



29



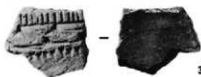
30



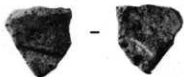
31



32



33



34

第1号土壤



35



36



37



38



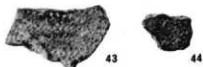
39



40

41

42



43

44



45

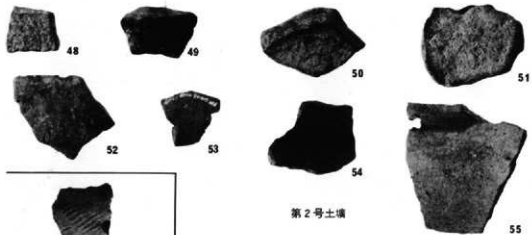
46

47

第2号土壤

遺構出土土器

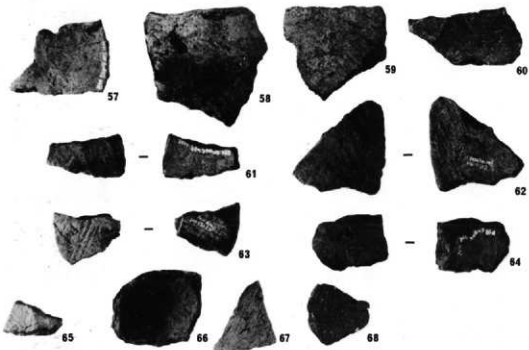
(S = 1/5)



第 2 号土壤



第 3 号土壤



第 4 号土壤



第 5 号土壤



第 6 号土壤

遺構出土土器

(S = 1/5)



第8号土壤



第10号土壤



第12号土壤

遺構出土土器

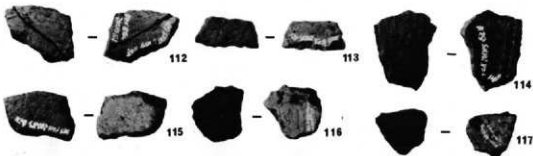
(S=1/6)



第18号土塊



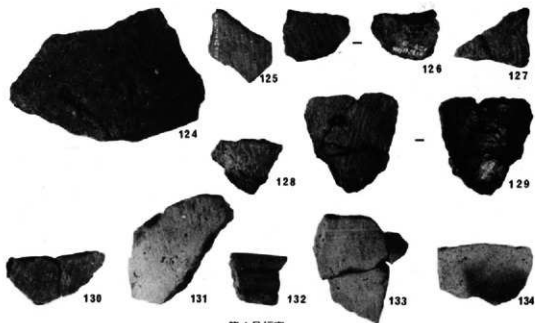
第2号炉穴



第3号炉穴

遺構出土土器

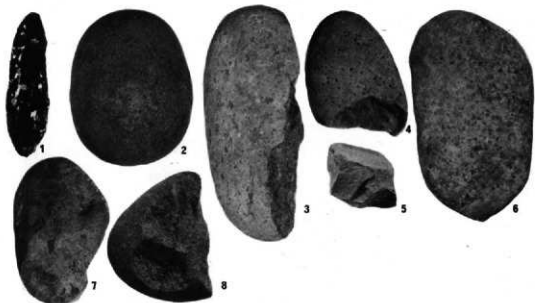
(S=1/5)



第4号炉穴



第5号炉穴



グリット

遺構・グリット出土 遺物

124-137	S = 1/5
1	S = 1/4
2 - 8	S = 1/2

014

茨城県教育財団文化財調査報告Ⅵ

竜ヶ崎ニュータウン内
埋蔵文化財調査報告書 5

昭和56年3月27日印刷

昭和56年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3-4-57

印刷 富士オフセット印刷(株)
水戸市八幡町1-36